

異世界のジョン・ドウ ～オールド・ハリ一卿にかけて～

?がらくた

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

異世界転移×ファンタジー×悪魔×昆虫×小説

裏切りと不法により、突如見舞われた不運、幸福な家庭と不幸な石動一家との対比、そして初恋の失恋。

度重なる絶望を味わい、生きる意義と気力を失った青年、石動祐（いするぎ・ゆう）は、悶々とした日々を過ごしていた。

空白にも似た日常を送る彼はある存在へ導かれ、現代でない何処かへと飛ばされる。

街中でふと瞼を開けると、そこには近代ヨーロッパを彷彿とさせる、異世界が広がっていた。

異世界に放り込まれた瞬間、頭に響いた

「石動、もっと楽しめよ」

という謎の声。

彼らに立ちはだかる「仮想派」に属する、神の加護を受けた戦士「スポンテナアス・ジエネレーションズ」。

オールド・ハリート魂の繋がったことへ関心を寄せる、魔界の大物である悪魔たち。

これは愛する家族のいない孤独で過酷な世界に抗い、元の世界へと戻るため、目的を共にする仲間と世界を渡り歩いていく——迷い人の冒険譚。

汝、神の実存を疑え——さすれば我ら悪魔が胸に燻る怒りの願い

を叶えよう

異世界転生、スキル等一切なし！

知名度低めの悪魔、魔物多数登場の超王道異世界転移ファンタジー！

以下、作者（？がらくた）からの注意書き

三人称一元視点の異世界転移もの小説です。

この小説はFC2ブログ、小説家になろう、ハーメルンに投稿されています。

## 目次

エピソード	殺意と憎悪の萌芽	1
第1話	異世界の迷い人	13
第2話	リングワンダリング	24
第3話	悪魔オールド・ハリ	30
第4話	悪魔との契約	40
第5話	クソ人間とクソ悪魔	51
第6話	闇の底、夏の思い出、小さな角のカブト	63
第7話	救われた命、奪われた命、いらぬ命	73
第8話	血と魂の契約、そして悪魔と人の違い	86
第9話	ヴォートウミラの穏やかな日々、悪魔の流儀	100
第10話	悪魔アモン、デモンズ・コマンダー、真理の大穴	108
第11話	死を視る少女、悪しき魂の禁足地	118
第12話	平田陽、直美の過去	127
第13話	不可視の神々、流浪の老神父	134
第14話	泥の悪魔、新たな出会い、ハリーとの奇妙な友情	143
第15話	巡り合う強者たち、災い呼ぶ迷い人	150
第16話	戦いの終結、新たなる謎	156
第17話	偽りの英雄、直美の呪い	164
第18話	真夜中の襲撃、インセクトウミレスの脅威	171
第19話	激闘の中に紡がれる絆	179
第20話	“普通の人間”と僕、鎧鉄の騎士、悪魔との	190
第21話	迷い人の救い	201
第22話	悪魔たちの狂宴、悪意の嘲笑	209
第23話	道徳の指針、新たな仲間	216

第24話	異なるが故の対立、武器に選ばれし者たち	227
第25話	悪魔掃討作戦	239
第26話	出逢いと別れ	248
第27話	占星勇士（アストロ・ブレイバー）と占札勇士（アルカナ・ブレイバー）	257
第28話	己の信念、新たな不和	267
第29話	魂の救済、それぞれの苦悩	276
第30話	阿鼻叫喚の夜	287
第31話	悪魔と王笏	295

## エピローグ 殺意と憎悪の萌芽

父は人格者だった。

朝から晩まで汗水垂らして働き、家族を養った。

子である姉や僕の文句もこぼさずに。

父は正しかった。

法と秩序を尊び、それを守ることが善なる社会を作るのだと、信じていたのだろう。

——だからこそ、あのクズは父を切り捨てた。

悪党にとって、悪人が蔓延る世こそ理想。

正義を体現する父のような人間は、目障りなのだ。

死でもつてしか罪を精算できない悪人が、いまだにのうのうと暮らしていると思うと、吐き気がする。

僕ら家族を苦しめたあの一家と、また遭うようなことがあれば、僕は——殺すのも厭わない——

「誕生日おめでとう、和（のどか）」

「もうこんなに大きくなって。母さんも嬉しいわ」

「うん、ありがとう。パパ、ママ」

何の変哲もない家族の団欒（だんらん）。

ささやかな幸福の一瞬。

だがしかしビニ袋を片手に持った少年は瞳を血走らせ、窓の外から家族を睨みつけていた。

（なんで、なんで、なんで！ 僕たちを地獄に墮とした人間が愉しそうにしてるんだ！）

荒々しく息が漏れ、憤怒を込めて握られた拳は血流が溜まり、胸に燦る炎の如し紅へと変色する。

憎悪が心を覆いつくすと、少年は押し返す時化の海のような、激情の狭間にいた。

殺人はいけないという常識など、言われずとも理解している。

だが生かしておくこと自体が罪な人間が存在し、罰が下らないのは確かだ。

神がアイツに痛みを与えないのなら、せめて人間の手で。  
意を決し、少年がドアノブを引くと

「急にどうしたの、祐くん?」

幼馴染の少女、和が彼を出迎え、少年に訊ねた。

瑞々しく艶やかな髪は、甲虫の外骨格の光沢を彷彿とさせた。

つぶらな瞳で慈しむように目を細め、彼を包み込む。

だが好意を寄せていた彼女でさえ、今は敵にしか見えなかった。

「白々しい知らない振りはやめろ、和。お前の親父のせいで、父さんは……一族郎党、絶望の淵へ墮としてやらないと、俺の気が済まないんだよっ!」

そうして少年は台所にあった包丁へ手を伸ばし、怯えた一家ににじり寄る。

殺してやると誓ったはずの右手はわなわなと震え、少年の良心が、完全に消えてはいないのを物語っていた。

「お、おい、祐くん。どうしてこんなことを……私たちと君たち一家は家族ぐるみの付き合い……本当の家族同然だったじゃないか。金に困っているのか。昔の好（よしみ）だ。私たちを助けてくれれば通報もしない。だから……」

「何が本当の家族だ、あれが家族にする仕打ちか! 金の問題じゃねえ! 今ここで首吊れよ、クソジジイ! 元はといえば、お前が元凶なんだからな!」

「そ、それはできない、家族がいるんだ。許してくれ……」

泣き落として懇願する姿に、少年の怒りは更に激しく燃え上がる。

父にも俺たち家族がいる。

家族が大事だとほざくなら、何故父の激昂を、失望を、痛みを理解してやれないんだ!

「そうかよ、だつたら直々に殺してやる!」

瞬時に沸騰した感情は、復讐相手の和の父親へ向けられた。

「きゃあああああ!」

……包丁を突き刺すと、耳をつんざく甲高い叫びが鼓膜を刺激した

刹那、意識は闇から現実に戻される。

「……ハアハア、夢か……」

荒々しく息を吐き、青年は布団から飛び起きた。

あり得たかもしれない未来が夢の中で、ありありと再現され、体に汗が滲む。

周囲を探すが、先ほどまで握っていたはずの包丁はなく、震えた掌にも血痕は見当たらない。

ようやく僕は、殺人をしていないのだと安堵した。

寝ても覚めても付いて回る、過去への憧憬。

根拠のない信頼も、数十年来の初恋も。

いつか刻が癒やしてくれると思っていた、色褪せた日々が、再び彩りを取り戻すことはなく。

壊れたものは二度と治りはしないのだから。

「シャワーでも浴びようか……いや、顔を洗おう」

時計の針は、朝8時を回っている。

ちょうど大人は職場に、子供は学校へ赴く時間だ。

顔を水で洗い、タオルで拭くと、鏡には生きながらにして死んだような、覇気のない顔が映る。

先ほどまで悪夢に苛まれていたせいだろう。

「……」

こういう時は、何かしらするに限る。

居間に向かうとPCの前に座り、タイマーを25分に設定する。

空腹感のある朝食前、食後に眠くなる前にあらかじめ用をこなすが、一日のルーティンだ。

朝、昼、晩の食事の用意。

家事や炊事。

小説や記事の執筆作業。

書物やネットからの情報収集。

世間からは職がないだけで暇人と罵られるが、時間はいくらあっても足りないくらいだ。

違いは職場に赴くか、大半がアパートの一室で完結するか。



ただそれだけでしかない。  
ピピッ、ピピピッ……没頭していると、いつの間にかタイマーが鳴り響く。

『西洋ファンタジーの世界観を深める悪魔学・黒魔術』、タイトルはこれくらいでいいかな。後は合間の時間にでも……』

独り言を呟きつつ、記事を保存し、作業を終わらせる。

やや面倒ではあるが、隙間の時間に残りは終わらせよう

日々日課をこなしていく内に短くなり、より効率的に作業を終えるのは、達成感があった。

誰かに認められずとも構わない。

自己満足でしかないが、いざとなれば支えるのは己のみ。

人に読まれようと読まれまいと、胸に誇りがあればいい。

まだ両親は眠っており、食事の用意はしないでよさそうだ。

誤字脱字はないか保存した記事をプレビューし、読み進めると

『時給1000円 未経験者歓迎！』

ネット広告に、仕事の募集が目に入る。

だが応募しようとは、微塵も思わない。

本当に掲載された通りの内容で就業できるのか。

いまさら社会に復帰したところで何になる。

薄給激務の労働者として働き、無職の怠け者よりも、生きるに値する”と、労働できない人間を嘲笑する世間から、僅かばかりの尊厳を与えられ。

はたしてそれが、幸福といえるのか。

1日の3分の1の時間を労働に費やし、無職として蔑まれる恐怖を原動力に、人生を終えていく。

そんなものが人間の幸福なのだろうか。

否、答えはNだ。

たとえ無職でなくなつたとして、また低賃金の労働者として踏み躪られるのが目に見えている。

自らを蔑む社会に貢献してやるほど、馬鹿らしいこともない。

加点方式でなく、減点方式の幸せに、どれほどの意味があるのだから

う。

絶対的な幸福が存在しないとしても、自ら不幸で舗装された道を進むほど、愚かではないつもりだ。

……そろそろ朝食にするとしよう。

人参、牛蒡、玉葱、じゃがいも、豚バラ肉。

一口大に刻んだ具を炊飯器に投入。

そして具材が浸るまで水を入れ、出汁の素を溶かし、早炊きする。

そして冷蔵庫からタッパーに保存した白米を取り出すと、電子レン

ジで温めた。

味噌や卵などをテーブルに集めていくと電子レンジがチンと鳴り、次いで早炊きが終わった。

味噌を溶かし、味の確認をして、青年は納得したように頷く。

肉汁や野菜の旨味、それらが溶け込んだ味噌は格別の味わいだ。

逸る気持ちを抑え、器に盛りつけ、テーブルに並べると、青年はまず豚汁に手をつける。

軽い気持ちで啜っただけなのに、一口、また一口と、食欲に従うがままに飲む。

都度口に掻き込む白米の甘みは、塩気をさらに引き立たせ、双方を高みに昇らせる。

人参やじゃがいもは口に入れた瞬間、ほろりと崩れ、食べたことさえ、幻のように思えた。

豚汁を食べ終え、米だけが残ると卵を割って掻き混ぜ、白米は黄金色に生まれ変わる。

そこにめんつゆを垂らし、米を一気に胃に流し込む。

「……………ごちそうさまでした」

豚汁にご飯だけとは質素だが、朝食は軽く満たされるくらいでちょうどいい。

働いていた頃は時間に追われ、ささやかな食事もままならなかった。

こんな幸福すら奪われるなら、働くのはごめんだ。  
膨れた腹を撫で一服すると、聞き慣れた声があった。

「おはよう、お味噌汁のいい匂いね」

「あ、おはよう。流石に料理の経験値では、母さんに負けるよ。ごはんは温めて」

挨拶すると、母は唐突に2枚のお札を僕に手渡した。

「髪が伸びたわね。家のことはいいから、切りにいってらっしゃい」

「いいよ、母さん。坊主にすれば散髪の無駄金もかからないし。節約できるところは、とことん切り詰めないと」

一度は断るも

「いいから。たまには羽根を休めてらっしゃいよ」

母は僕の手にしっかり握らせた。

いらぬ気を遣わせてしまい、申し訳なさが込み上げる。

とはいえ、せっかくの好意を無碍にするのも、人の道を反するだろう。

「昼頃にいくから足りないものがあれば、紙にメモしておいて。ついでに買ってくるよ」

「後でポイントカードと、現金を渡すから」

「ああ」

母はそういうとバックをまさぐる。

昔よりも小さくなった背中を眺めつつ、青年は母の味噌汁をよそうのだった。

数時間後

母に促され、僕は普段いかない、大型のスーパーへと向かう。

日曜でも休日でもなければ人気は少なく、広々としており、まるで自分だけの庭のようだ。

駅前という立地もあり、夕方になれば学生で溢れかえる。

それまでに用件は済ませてしまおう。

髪を切り終えた後、日用品をあらかた買い漁ると、トートバックはぎゅうぎゅうづめだ。

自転車のカゴに入るのだろうか。

せつかく買いい物にやってきたのだから、この際に足りないものは、購入しておきたい。

「……後は家電量販店にいけばいいのか」  
パソコンのマウスに必要な乾電池と、豆電球がリストに記載されている。

電気屋に立ち寄ると、ふらふらと散策し始めると、ゲームソフトが目についた。

最近では性能の向上に伴い、開発費が高騰し、ゲームソフトも新品は7000円は下らない。

値が張りすぎて、庶民に手の届く金額ではなかった。

自分に合えば1本で元は取れるが、面白そうだから、気になったから程度で買うのは、完全に博打。

庶民には、博打に金をかける余裕などないのだ。

(品揃えもよくないし、やっぱり中古が一番なんだよな。出しても1000円までだ)

一瞥した新作に背を向けると、母に頼まれた目的の品物を探し始めた。

そうし電気屋のテレビに、ふと企業のリストラの報道が映り込む。ただでさえ経済成長のない国だというのに、さらに気が滅入る。

しかし関わりもない他人の不幸で、仄暗い悦びに浸る自分がいるのも、また事実だった。

この中に少なからず、無職を嘲笑していた者がいるだろう。

働かざる者食うべからず。

無職に生きる価値はない。

生産性のない者は殺処分すべし。

ネットの世界で、うんざりするほど見かけた品性を疑う言葉。

今の今まで雇われぬ者へ、失業した者へ、精神を病んだ者へ。

罵詈雑言を浴びせかけ、排除してきた側の人間たちの、泣き面が目につかぶようだった。

自分の番がきて、クビになった連中は何を考えるのか。

企業への愚痴でもこぼすのだろうか？

だが

「無能はいらない」

というのが、無職者が求職すると相談した場合の常套句だ。企業もそう判断し、無能を切り捨てたに過ぎない。

馬鹿が吐き捨てた言葉通りの世界に、いったい何の不满があるというのだろうか？

失業者には仕事を選ぶなど蔑み、雇われないなら起業せよ、何もしないなら生きる価値がないと罵倒する。

生活保護を受ける人々には、不正受給と騒ぎ立てる。精神に異常をきたせば、甘えと罵る。

ネットの世界で、嫌というほど見かけた陰湿な行動。他ならぬ狭量で意地が悪く、冷酷な日本人の、理想の社会になっただけだというのに。

クビになったら自らの言葉に従って、生きるなり死ねばいいのに。——お前たちの望み通り、労働せぬ者が自死できる、美しい国になつてよかつたな。

ほらほら、どうした？

過労で自殺が横行する国で、どんな職業にでも就労してくれよ。自ら吐いた言葉に従って。

でないと生きるに値しないクズたちと、同列に扱われるぞ？  
無数の声なき声を踏み躪り、優越感を覚えてきた罪は、命で償う他ないのだ。

失業しようが同情する価値など、まるでないだろう。こいつらには死が相応しいのだから。

冷笑の眼差しを向けていると、突如として目玉がギョロリ……電子機器のモニターから巨大な瞳が、こちらを凝視してきたではないか。深い蒼の瞳はさながら深海の如し神秘と恐怖に満ちており、直視した瞬間、見た者を大海原に引き込まれてしまう。

視線を避けるために、あえて人のいない時間を選んだというのに。何故急に意味不明な映像に切り替わったのだ？

「……な、なんだよ。いきなり意味がわからない。ただの偶然に違い

ない。ハハツ」

理性で心のざわめきを抑えようと、言い聞かせるが如く繰り返すと、周囲に目を配る。

すると目の前のテレビのみならず、他のテレビやPCのディスプレイまでもが、目玉を映し出す。

「落ち着いて考えろ。こんな馬鹿みたいな状況が現実であり得るのか？」

電気屋のテレビは番組の垂れ流しだが、画面がどれも同じとは限らない。

PCのディスプレイは、起動時の画面のままが一般的はず。

全ての画面が目玉を映すような状況になることは、まずありえない。

そう、これは夢。

でなければ、非現実的な光景の説明がつかないのだ。

夢から覚めた夢を見て、まだ夢うつつ。

納得のいく理屈で、ほつと胸を撫で下ろすと

「偶然でも夢でもないさ、石動祐。こういう場合は痛みで教えてやるのがいいのかな？」

直接語りかけてきた直後、鈍痛に青年は表情を歪め、夢でないの思い知る。

声と同時に何者かが動かしただかのように、1つのテレビが落下したのだ。

先ほどの仮説は、すぐさま否定されてしまった。

それに何故、僕の名前を知っている？

これは脳の誤作動が引き起こした、幻想の世界だろうか。

だとしたら、我ながら悪趣味が過ぎるが。

「な、なんだ。姿を現せ」

青年が問いかけると

「自分の思い通りにいかないから、全てを投げ出してしまいたいとは。人間は身勝手極まりない。だがそれほどまでに、立身出世や現実逃避に拘るのも、理解できないでもないよ。人の子は能力なき者は万死に

値するという、自らの欲望と攻撃性のままに、地獄に等しい過酷な世界を作り上げたのだからね。クククツ……」

電子機器から垂れ流される声は返事すらせず、まくしたてる。

人間の悪意に理解を示すどころか、むしろ愉しむかのような態度は、とても善良な存在とは思えない。

しかし人間社会への見解については、僕も声の主と同意見だった。

人間など、ろくなものではない。

「まず誰だか名乗ってもらおうか。それで信頼を得ようなんて無理筋だろう」

「救いの神、とでもいおうか。なに、悪いようにはしないさ。現実には望した君にとっては、案外好条件な提案かもしれないよ？ 冷酷な人の世を捨てて、異世界への旅路へ」

「……は？」

自ら神を名乗るだけでも胡散臭いのに、異世界だと？

あまりに現実味がない話に、青年は首を傾げる。

その異世界とやらで、どんな世界が待ち受けるかは定かでないが、ここよりはマシなのかもしれない

だがしかし『はい、いきます』と即答できるほど、簡単に未練を捨てきれないのが人間というもの。

父母と姉を残し、勝手に消えるなどできない。

警戒心を解かずに無言を貫き通す青年に、救いの神と名乗る存在は言葉が続けた。

「案ずるな。異世界に辿り着いた暁には僅かばかりの生き抜く力を与えてやろう。だが君がどうなるか。特筆すべき事情がなければ、我々は関与しない。意思なき者に何も為せぬのは、異世界とて同じこと」

「折角の提案だが断るよ。他を当たってくれないか」

異世界など下らない。

くだらない妄想なら、さっさと終わってくれ。

青年が立ち去ろうと背を向けると

「ならば致し方あるまい。少々手荒い手段になるが……ブブ、アス……ト。この男を逃がさぬよう、協力を頼む」

仲間を呼び出すつもりのようにだ。

足りないものは、後で別の店で購入すればいい。

今は一刻も早く、この場から逃走を……後ろを確認しつつ、脇目も振らず逃げると、何かにぶつかる。

「す、すいませんー！」

謝ると同時に前を向くと——無数の目玉を持つ異形の怪物が、どこからともなく出現したではないか。

瞳孔の1つ1つが射抜くように彼を見遣ると、胸が締めつけられ、呼吸すらままならなくなる。

近寄る怪物に気がつき、青年は後退るも、いつの間にか横からも、後ろからも、化け物が彼を囲っていた。

もう逃げ場はない。

「人の子で最も強い感情。妬み、嫉み、憎しみ……そして殺意。即ち神々が作り給うた人間そのものが、欠陥だらけの害悪なのさ」

「大概にしたまえ、己から目を背けるのは。殺戮に溺れ、心を悪意と憎悪で満たすことこそ、貴殿の真なる願い。現に貴殿の家族を追い詰めた、につくき一家を殺してしまいたい。頭の中で、常々考えているのだろうか？」

「君にとつて、視線はこの上ない恐怖。逃れたいならば我々と契約する他ない。さあ、選択の刻だ」

取り囲む怪物は見下ろしながら、神が産み出した人の欠陥を。

そして青年が心に抱えた、後ろ暗い深淵の闇について言及する。

自らが神ならば、人間の欠点を悪し様に言うだろうか。

恐怖による異世界への強制転移が、神のやり口なのだろうか。

もしや彼らは神ではなく、神に敵愾心を燃やす存在……だとしても現時点で、対抗手段は……

「やめてくれ、勘弁してくれよ！ 夢なら覚めろよ、もう！」

「ならば誓え。我は汝の怒りの願いを叶えよう。その代わりに……を差し出すと」

「わかったよ、誓うよ！ だから、僕を見つめるのはやめろ！ この下らない人生を、さっさと終わらせてくれよ！」



こんなことが現実に起こり得るはずがない。

さっきのだって現実で何かが足に落ち、夢と偶然が重なったに決まっている。

妙に現実味のある夢だけれど、すぐに終わるはずだ。

謎の声に言われるがままに青年が叫ぶと、彼は世界から忽然と姿を消した。

生きた足跡を何一つ残さずに。

「軽く脅しただけで、今回の魂はすんなりと手に入ったな。この男は適合者か否か。善意と悪意が矛盾なく混在した、複雑怪奇な魂の持ち主が、どんな物語を紡ぐのか。観客席から見届けさせてもらうとしよう」

「異世界ヴォートウミラは、悪意に染まる魂を際限なく保管しておくための、いわば器。この男の魂に殺意と憎悪が足りねば、順次継ぎ足していけばいいだけの話だろう。もつとも精神がもたぬかもしれぬがな」

「器から人の子の罪が溢れば、神々はどれほど嘆くのだろうか。吠え面をかく姿が目には浮かぶ。救いなどないのだよ。どんな世界であろうとも。罪深き人の子を根絶やしにせぬ限り」

電子の海からは、現代の人間を俯瞰し観察する存在が、各々思い思いに語らう。

1人の青年の異世界ヴォートウミラでの冒険譚は、こうして幕を開けた。

## 第1話 異世界の迷い人

「……………は？」

青年が瞼を開けると、レンガ造りの建物が道の両側に並んでいた。地面には石畳の道が果てしなく続いて、路肩には果物や民芸品を売る人々が、石動青年に手招きする。

——彼らが何を言っているのか、さっぱりわからない。

いきなり訳の分からない場所に来てしまった石動は、心の動揺を落ち着かせるべく、冷静に頭の中を整理した。

「髪が伸びてるから、切っておいで」

と母親から促され、近所の大型スーパーで髪を切った。

髪を切ってもらう間、店員との無言の気まずい時間が、嫌に長く感じたのを覚えている。

そして電気屋に向かい、何を買うわけでもないのに、漠然と家電製品を眺めて……そこからの記憶が曖昧でハッキリしない。

記憶にモヤがかかったようで思い出そうとすると、頭がキリキリと痛むのだ。

いったい俺の身に、何が起こっているのか。

脳の処理が追いつかず、立ちつくしていると

「石動祐(いするぎ・ゆう)。元の世界でずいぶん苦しんだみたいだな。ヴォーテウミラ大陸は迷える君たちのための世界——一度きりの人生なんだ。もつと楽しめよ、石動」

透き通るような美声が頭に響いて、その謎は更に深まる。

この声の主が、自分をここに招いたというのだろうか。

何から何まで、不可解なことばかりだ。

(……………気でも狂ったのかな。ハハハ)

どうしようもなく苦笑していると、端正な顔立ちの自他に厳しいであろう性格のキツさが顔に現れた女性が、石動を睨みつけた。

艶やかな黒髪に革鎧、腰には剣を携えている。

——間合いに入ったら切られてしまう。

肌感覚で、彼女が危険なのが伝わってきた。

(……なんなんだ、この子は。関わりたくないし、目を合わせないようにしよう)

険しい表情をする女の子の迫力に圧倒され、石動はうつむきながら、見慣れない異世界をあてどなく彷徨う。

どこに向かうのか、どこに向かえばいいのかすらわからない。

今までの自分が送ってきた人生のようだ。

「……あ、すみません。お怪我はないですか」

目的もなく歩いていると、ふと肩がぶつかってしまふ。

やってしまった。

顔を上げると、そこにはさきほど石動を睨みつけた少女の姿があった。

「ちよつと、しっかり前を見て歩きなさいよ……つて、挙動不審な男じゃないの」

(君だって前方不注意だから、ぶつかったんだらう。悪いのは、お互い様なんじゃないか？ その言い方はないだらう)

喉まで出かけた不満を飲み込むと、その場を穩便に収めるべく、彼はひたすら謝り続ける。

「以後、気をつけます。すみませんでした。」

「もしかしてわざと?! ほんと最悪」

少女は苛立ちを隠そうともせず、言葉を続ける。

そういえば男性が女性だけを狙ってぶつかる事案を、耳にしたことがある。

とはいえ大半の男性は、わざとぶつかったのではなく、今のようになたまたまぶつかってしまっただけだらう。

しかし、わざとぶつかられたと認識するかは、ぶつかった相手次第だ。

「あんたみたいな男、存在自体が迷惑なのよ。なんで、あんたみたいなのが生きてるんでしょうね」

「……そうだね」

僧でもない自分は、霞を食べて生きている訳ではない。

無職の自分が生活していくには、金がかかる。

生きているだけで両親に、姉に、迷惑がかかる。

(……それは俺自身が一番よくわかってるんだよ。でも、どうしようもないんだよ)

彼女の八つ当たりにも、石動は心の中でしか言い返すことができなかった。

「好き放題、僕にイライラをぶつけて満足したかい。じゃあね」

石動が喋った時には、少女の姿は既になかった。

(……なんだったんだ。まあ、いいや。どうでもいい……)

視線を落とすと、GUILD CARDの英文字が刻まれた。

先ほどぶつかった衝撃で、彼女が落としたのか。

CARDの文字がカードだと理解したが、その前の単語がわからず、石動は眉間に皺を寄せた。

声に出せば、どんな言葉か把握できるかもしれない。

何度も何度も、カードに書かれた文字を読み上げてみた。

「グUILD、グUILD……ああ、ギルドカードって読むのか。どこかの組合に所属している証、社員証みたいなものかな」

得心した石動は頷くと

(性格がキツくて嫌な感じの子だったけど、失くして困ってるのかな……)

心の中で、名も知らぬ彼女に思いを馳せる。

見失う前に早く届けないと。

良心がそう訴えたが、その瞬間もう一人の自分が——悪魔が囁いた。

(……所詮は赤の他人。あの子が困っていようが俺にはどうでもいいことだ。しかも、いきなり罵倒してきたし)

辛辣に当たってきた人間に、親切にする必要などあるのだろうか。

さきほどの出来事が、まだ心でくすぶっていた。

「盗んだと思われるのも心外だし、彼女の元に届けてあげた方がいいか……」

ふと口にした言葉で、悪魔の誘惑に負けそうになった心が揺れ動く。

彼女を許したわけではないが、困っているなら助けてあげよう。

まだ彼女が近くにいてもかもしれないと周囲を見つめると、周囲の人々の口角が何故か不自然に吊り上がっていた。

石動と目が合うと、彼らはヒソヒソと内緒話をし始める。

(なんだ。俺を見て嗤ってるのか？ 違う、ただ談笑してるだけだ。そうだ。俺の頭はおかしくなんてない！)

理性で込み上げる不快感を抑えつけようとするも、胸の鼓動はどんどん激しくなっていく。

何を言っているのかは定かでないが突き刺さる視線に、まるで自分が責め立てられているかのように感じた石動は、恐怖のあまりその場を走り去った。

(……うう、怖い。いきなりこんな場所に来ちやうし、知らない子に罵られるし、俺が何をしたっていうんだ。夢なら覚めてくれ)

度重なる災難に彼は背中を丸めて、なるべく目立たぬように努めた。

再度ギルドカードを見返すと、隅に太陽と三日月を模したような、特徴的な模様があるのに気がつく。

周囲の看板を見渡しても、似たような模様は一切ない。

(……この模様が目印の施設を探せば、彼女がいるかもしれない。辺りを探してみよう。視線は無視だ、無視)

自分に言い聞かせながら、辺りを見渡す。

だが街の看板に、同じ模様は見つからない。

声のした方を向いてみると日本語を話す、金髪に黒エプロンのウエイトレスの少女を見かけた。

快活で人当たりがよさそうだが、腹の底で本性を隠しているのが人間だ。

おどおどした変な奴と、思われないか。

話しかけて陰口を叩かれないだろうか。

(でも、この機会を逃したら……他に日本語を話せる人がいないかもしれないし)

何度も何度も生唾を飲み込んで。

「え、ああ、その……ちよつといいですか」

「どうかしましたか？」

話しかけられた少女は嫌がる素振りも見せず、聞き返す。

どもつてしまったが急かされることも、笑われることもなく、安心して言葉を紡げた。

「お、落とし物を拾ったので本人に届けたくて。これを発行している場所、どこか知りませんか？」

「ああ、それ。冒険者ギルドの模様ですね。ギルドの場所はね、ずっとまつすぐに進むとありますよ。すごい特徴的だから、着いたら、まづ間違えないと思う」

落とし物を見せて訊ねると、その少女は快く応じてくれた。

見ず知らずの赤の他人の自分を助けてくれたことが、なんだか無性に嬉しく、胸がほのかに暖かくなっていく。

人間も捨てたものではない。

「忙しいところ、ありがとうございました。失礼します」

頭を下げて礼を言う

「いえいえ、お互い様ですよ。よかつたら、ウチの店をぐも鼻屑にく」  
眩しい笑顔を向けて接客する。

(いい人で助かったな。心の中でバカにしたのを反省しないと……お金が手に入ったら、ここで食事しよう)

目標が決まって、石動の体に少しだけ生きる活力が沸いた。

好きな雑誌やゲームの発売日。

そして今のような、誰かにいつか恩を返すため。

様々な理由で、死ぬのを先送りしてきた気がする。

こんな自分に親切な人もいるのだ。

(いつか恩返しを……いつかって、いつになるんだよ……)

自己嫌悪の感情に苛まれながら、石動は冒険者の組合に向かっていくのだった。

数分後

「なんじゃこりゃ」

冒険者ギルドを見た石動は、自分の目を疑った。

火が、水が、レンガの建物の出入口の宙を浮いていた。

火と水は、人が通ろうとする度に施設の利用者に近づいていき、冒険者を驚かせた。

まるで心があるかのようだ。

しかし何故か石動が通ろうとした際には、その火と水は、彼に近寄ろうとしなかった。

(……なんなんだろう、嫌われてるのかな。それとも他に理由が?)

疑問に感じたが、そんなことに時間を費やす暇はない。

足元はタイル張りで、滑りやすい。

出入り口近くの掲示板に貼られた羊皮紙には、凶悪そうな怪物や不可思議な植物の挿絵が描かれていた。

魔物を倒してほしい、採取してほしいという誰かからの依頼なのだろう。

甲冑を身につけた男性が、我先にと条件のよさそうな羊皮紙を手にとると、悪戯っぽく周りに微笑んで近くにいた人々をからかう。

「あれ、ない?! どこに落としたんだろ。もしかして連中に盗まれた?! 『仮想派』は本当にろくでもない連中ね!」

怒気を含ませた声が、冒険者ギルド内に響く。

心当たりはあるようだが、彼女の推理は残念ながら不正解だ。

「その君、落とし物かい?」

名も知らない少女に呼びかけると、彼女は石動の方を振り返る。

声の正体が先ほど罵声を浴びせた男だと気づくと、剣士の少女は威嚇する獣の如く歯茎を剥き出しにする。

「何よ、私を噛みにきたの? いい性格してるわね。私は恨みは忘れないの、それを覚えておきなさい」

「……違うよ。用件があつて追いかけてきたんだ。これ」

転ばぬようにゆっくり近づくと、カードを差し出す。

「あ、それ」

「ぶつかった時に落としたんだと思う。一応聞いておくけど、君の物

だよね?」

確認をすると、そっぽを向きながら彼女はカードをひったくる。そして

「……ありがとう。冒険者を続けていると、いろいろあってね。無関係なあなたに八つ当たってしまつて悪いと思つてるわ」

ゆつくりと心を込めて、石動に謝罪する。

「……そうなんだ」

態度は悪いが、案外根は悪い子ではないのかもしれない。

見た感じ二十歳前後の彼女が、冒険者で生計を立てられるのだろうか。

彼女が身につけた鎧は、小学生高学年の体重くらいの重量がありそうだし、腰の剣も玩具でないなら重いに違いない。

どこに、そんな力があるんだろう。

「反省してくれば、それでいいから。じゃ、俺はこれで帰るよ」

いきなり見ず知らずの場所に飛ばされて、帰る手段すらわからないのに、どこに帰るといふのか。

条件反射で返事した自分を自嘲する。

「もしかしてあなた、ここに来たばかりなの?」

「……」

嘘をついてもしようがない。

頷いて肯定すると

「なら、ギルドの受付で適正を調べてもらいなさい。結果によっては依頼を斡旋してくれるから。あとこれ」

そういうと英文字の上に日本語のルビが振られた紙の束を、ぶつきらぼうに手渡した。

どうやら英語を日本語に訳したものらしい。

この世界でも、共通言語は英語のようだ。

「文字がわからないと不便でしょう。私にはもう必要ないから、あなたにあげる」

「恩に切るよ。本当に何もわからなくて……」

「勘違いしないで、他人に借りを残すのは嫌なのよ。用事も済んだし



私は失礼するわ。じゃあね」

感謝の言葉も受け取ろうとせず、その場を立ち去る。

良くも悪くも感情をありのままぶつける、竹を割ったような性格の彼女と話すと、心に爽やかな風が吹いたような気がした。

「……名前を聞き忘れちゃったな。貸しができたのに」

手に持った紙を眺めて、石動が呟いた。

——彼女とはまた出会えそうな気がする。

彼女にばかり、構ってはいられない。

まずは自分のことをやろう。

「ええと、すみません。適正について調べてもらいたいのですが。言葉、わかりますか？」

「はいはい。了解です」

ゆるい話し方をする分厚いレンズの眼鏡をかけた、ローブを纏う女性が応答してくれた。

「では、ついてきてくださーい」

奥の部屋に案内されると、たいまつとなんの変哲もない鏡があるだけの空間に着いた。

「鏡の前に立ってくださいね。すぐ終わるので緊張しないで」

間延びした職員の声のお陰か、少しづつ肩の重荷が取れていった。

宗教的には火は真実を照らす、不浄を払うのだと聞いたことがある。

鏡は異世界の入口だったり、日本では天照大御神が天岩戸に籠った際、彼女を岩戸の外から出すのに使用されたり、不思議な話には事欠かない。

儀式的な意味合いとしては

“火が不浄を浄化して、鏡が穢れなき真実の心を映す”

といった所だろうか。

こういった儀式は、その地に根付いた風習と密接に繋がっていたりする。

本当に民族学というのは、奥が深い。

火を見つめていると、自然と心が安らいでくる。

色々と考察していると職員の仕事は

「悪魔、昆虫、破壊、混沌。なるほど、なるほど……石動さんは面白いですね。」

と、半笑いで喋り出す。

なんだか小馬鹿にされているような気がして、石動は顔を歪めた。

昆虫も昔のヨーロッパ——今の異世界のような国では、悪魔と扱われていた。

不穏な単語ばかりが並んでいるが、これらの言葉が適正に関係しているなら、適正をある程度は推察できそうだ。

(ソロモン72柱、ゴエティア、レメゲトン、ヌクテメロン、タロットカードの15番。黒魔術師や占い師か。いや、一神教の神々にとっては他の宗教の神々は全て悪魔か。考えれば考えるほどドツボにはまるな。結果が出るまでゆっくり待とう)

考えるのをやめようとしても、一度考えてしまうと、頭は悪魔のことで一杯になった。

そうこうしていると、あつという間に時間が過ぎていき、眼鏡の女性職員が口を開いた。

「結果ができましたよ。ええと、石動さんの適正は悪魔交渉ですね。おお、珍しいですね。すごいですね。」

「あ、あくまこうしよう?。」

驚きのあまり、棒読みで彼女に言われた言葉を反復する。

石動の頭上に疑問符と同時に浮かんだ、悪魔交渉の四文字。

職業の名前には聞こえない上、そもそも何の役に立つのかすら理解不能だ。

「ええと、それは具体的に何をするんですか?。」

「悪魔を呼び出す術者の代理人などをやる職業ですね。仕事の依頼自体は少ないですが高給な職業ですし、一部の物好きな方々から羨望の眼差しで見られますよ。」

「物好きな方?。」

「ええ。それはそれは物好きな方々から。」

素朴な疑問をぶつけると、受付の女性は含みを持たせた言い方で、

明言するのをはぐらかす。

創作に生かせないかと思ひ、六法全書のような悪魔の辞典を読み込んだ時期がある。

その経験があつたからこそ、悪魔交渉の適正なのか。

しかし本当に自分にもできる内容か、考えてしまう。

高給ということは、それだけ誰もやりたがらなかつたり、危険が伴う職業に違いない。

不安に駆られたが決定回避の法則といつて、選択肢が増えれば増えるほど迷いが生じると言われている。

(よくわからないけど……選択肢がこれしかないなら、悪魔と交渉するのが俺の生きる道なのかもしれない)

「まず意思疎通ができないと、どうにもならないのですが。依頼の際には、通訳してくれるような人を派遣してくれませんか？」

恥を忍んで訊ねた。

「大変申し上げにくいんですが、今の所は悪魔関連の依頼はないですね。すいません」

「……そうですか。無一文なんですけど、これからどうしたら」

髪を切るようにと母親から手渡され、余つた硬貨を握り締める。

無論こんな物が、異世界の通貨として使えるはずもない。

今の状況が遠くない未来を暗示しているようで、胸が痛くなる。

「それについては安心してください。冒険者をみすみす死なせるほど我が国、フィリウス・ディネ王国の人間は馬鹿ではありませんよ」

「……え」

「石動さんのような方のために、冒険者専用の宿屋を用意してあります。冒険者として登録をすると施設をご利用いただけるので、まずはギルドカードの発行をお願いします」

受付の女性に言われるがまま、手続きを済ませた。

剣士の彼女にギルドカードを渡していなければ、路頭に迷っていたのは想像に難くない。

それだけではない。

酒場で働く女性は親切に道案内をしてくれたし、受付の女性職員も

仕事とはいえ嫌がらずに接してくれた。

いつか彼女たちに、ほんの少しでも感謝の気持ちを返してあげられるだろうか。

人と人を繋ぐ奇妙な縁に救われたと、心の底から感じられた一日だった。

## 第2話 リングワンダリング

翌日

——目が覚めたら別の場所に、元の日本にいるかもしれない。そんな非現実じみた妄想をしながら眠りについたが、起きても天井は年季の入った黒ずんだ木の板のままだった。

いきなり知らない世界に飛ばされる方がよほど非現実的だが、今は異世界に飛んだという事実を受け入れる他なさそうだ。

(事実は小説より奇なり、とは、よく言ったものだな)

紹介された宿屋の部屋は、換気用の窓とベッド、一人分の机と椅子があるだけの狭い空間だ。

寝ることと勉強、読書くらいしかやれることはないが、言葉がわからず、暇潰しの読書すらままならない。

そのせいで退屈な時間に、将来のことばかり考えてしまい、寝るまで苦労した。

悪魔交渉を生かした依頼がないのなら、他の依頼をやればいい。その為にも、まず土地勘を掴まないと。

言語を学んだら、悪魔に関する書籍にも一通り目を通したい。やることはたくさんある。

焦燥感に心押し潰されそうになりながらも、一階に降りると、鈴が鳴って宿屋に誰かが訪問したのを知らせる。

「あ、昨日はありがとう」

「ああ、君は……」

「よかったわね、適正が見つかって。眼鏡のギルド職員エイプリルさんに聞いてきたの。様子が知りたくて。隣、いい?」

「暇でしよすがなくて、話し相手が欲しかったんだ。遠慮なくどうぞ」  
誰もいないのを確認した彼女が、横長のテーブルに荷物を置いて椅子に腰掛けると、甘い匂いが石動の鼻をくすぐる。

(……顔立ちの整った子だなあ。あんまり人を外見で判断したらダメだけど)

見惚れていると

「私はナオミ。正直のジキに、美術のビで」

彼女は自分の名前を名乗り出す。

「直美さんか。ええと、名前は？」

海外ならば、ファーストネームで呼び合うのは普通かもしれない。

しかし日本生まれ日本育ちの自分には、流石に初対面同然の彼女を下の名前で呼ぶのは抵抗があった。

ただ、そのつもりで苗字を聞いたのだが

「生き延びたければ、むやみに自分のフルネームを教えないこと。そして目立たないこと。『迷い人』を狙う悪党もいるから、細心の注意を払うこと。私の名前は教えたでしょ。あなたはなんていうの？」

彼女から、意外な答えが返ってくる。

ここでは名前を明かせない、特別な事情があるようだ。

しかし知らないことばかりの世界に有益な情報をくれる彼女と知り合えたのは、不幸中の幸いといえる。

なるべく怒らせぬよう気を遣って、親交を深めていかねば。

「自分は……祐だよ。しめすへんに右で」

「神の助け、か。猫の手も借りたい私にとっては、最高の名前ね」

「ええと、直の字がまつすぐな君に似合ってると思うよ。きつと立派な親御さんが、名付けてくれたんだらうね」

「名前を褒められるのって、ちよつとくすぐったいわね」

「僕もそう思ったよ」

軽く自己紹介と社交辞令を終えると、直美はこの世界について石動に説明した。

話によれば迷い人と呼ばれる人々は、何故かこの世界に流れついたのでという。

社会的な立場も肩書も異なる俺たちに共通するのは

「もつと楽しめよ」

の声を聞いたこと。

そしてこの世界、ヴォーテウミラ大陸に辿り着いたこと。

その2つだ。

何者かが悪意をもって、この世界に幽閉しているのか定かではないが、どっちみち薄気味が悪い話だ。

気まぐれで殺される可能性もなくはないのだから。

「……不気味だね。誰かが僕らを引きずりこんだのかな」

「わからない。でも、私はさつきと元の世界に帰るつもりよ。手掛かりもないけど」

「名称をつけないと、説明する際に困るよね。〴〵リングワンダリングの迷い人〴〵、なんてどうかかな」

「それって方向感覚が狂って、延々と同じ場所を周る現象だったわね。見通しの悪い森林で起こりやすいっていう。悪くないじゃない」

ヴォーテウミラに辿り着く、リングワンダリングの迷い人現象。

日本全土や全世界で起こった現象なのか。

それとも局地的な被害なのか。

彼女の被害状況を訊ねれば、場所の絞り込みができるかもしれないが、それはどこに住んでいるか個人情報聞き出すようなものだ。

もどかしいが、そういうのは親しくなってからでも遅くない。

(彼女から聞き出せる情報だけでも、しっかり頭に記憶しないと……)

石動は会話に口を挟まず、なるべく黙って相槌を打つ。

そうしていると、直美は神妙な面持ちでうつむきながら

「大丈夫かしら、誰にも見られてないわよね。私とはあまり関わらない方がいいわ。面倒な連中に追われてるから」

彼女は言った。

ギルドで何か心当たりがあるような口振りだったが、まさか面倒な連中とは、その人々のことだろうか。

「それは？」

「〴〵仮想派〴〵 スポンテニアス・ジエネレーションズ8の連中よ。この世界が仮想現実でも構わないって奴らだから、そう呼ばれてる。私はただ帰りたいだけなのに邪魔してくるの」

「そうなんだ。君も大変なんだね」

仮想派スポンテニアス・ジエネレーションズ8。

日本語に訳すと自然発生説を意味し、これは昆虫や動物が泥や霞か

ら生まれるとの説が、数々の研究で否定されるまでは信じられていたのに由来する。

ここで生きることが望むほどの絶望を、現実世界で味わったのだろうか。

そう考えると、仮想派に属する人たちを悪く言う気にはなれなかった。

元の世界に帰還する手段がないのなら、ヴォートウミラでの生活に適応する他ない。

ある意味で合理的な判断といえる。

「それより悪魔交渉って、どうなんでしょうね」

「高給な職業だって言われて、自分が一番びっくりしてるよ」

「悪魔と交渉する人間自体が少ないし、交渉の失敗や事故で命を落とす人々もいるの。冒険者なら“戦士”“魔術師”が安牌だしね。現代の公務員、みたいなものかしら。私は戦士と魔術師を合わせた“魔法戦士”で冒険者をやってるけど」

死ぬ危険性を示唆されて、石動はしきりに瞬きした。

「そうなのか、あんまりよくないんだ」

「いいじゃない。希少な職業なんだから、それだけあなたを必要とする人たちがいるってことよ」

力強い瞳で俺を見つめると、雄弁に彼女は語り続ける。

「それに努力を重ねて、後天的になりたい職業について話もあるわ。自分の可能性を殺すような発言は控えなさい」

「愚痴に付き合ってくれて、君はいい子だね」

「フン、陰気な人間が嫌いなだけよ」

憎まれ口を叩くと、プイツと顔を逸らす。

その持ち前のパワフルさで、今までも直美は困難を跳ね除けてきたのだろう。

自分にはないものを持つ彼女が、石動には少しだけ眩しく見えた。

「それに、あなたも私も迷い人——迷い人だからこそ成せることもあるのよ。ほら、これを殴ってみて」

そういうと直美は。鉄の盾を取り出して指差す。



そんな物を殴ったら、怪我をする。

急に何を言い出すのだろうか。

「あの。僕は現実で体を鍛えたりしてないし。物を殴るのは、抵抗があるんだけど」

「私だってそうよ。いいから殴ってみて」

直美は頑なな態度で、石動に強要する。

……彼女なりに考えあつてのことだろうか。

「怪我しちゃったら、ちゃんと責任を取ってよ？」

「ええ」

そういうと右の手で握り拳を作り、目を瞑って、盾に拳を振るう。手ごたえがなく、まるで何もない虚空を殴ったような感覚だ。

もしや感覚がないのは、痛覚がなくなるほどの大怪我をしているからなのか?!

おそろおそろる瞼を開けると——鉄の盾を石動の拳が貫いていた。

(え、は?! どういうこと?)

「……驚いた。今まで見た誰よりも強い力。これがあなたの……」

「ど、どうしてこんなパワーが?!」

鍛えてもいないのに、何故?!

石動が啞然としていると、直美は間髪入れずに話し始めた。

「外界からやってきた人間には、人それぞれ力が与えられるの。私もあなたと同等くらいの力を出せるわ。だから暑苦しい鎧も剣も難なく装備できるってわけ」

「なるほど。君と話せていろんな謎が氷解していったよ。ありがとう」

「最初にこのことに気がついた時は、私も今のあなたみたいな反応をしてたんでしょうね」

戸惑う彼を見つめ、直美はクスクスと笑う。

この力、誰から授かったのか。

だが自分に力を与えたのが、神だろうか悪魔だろうか——そんなことはどうでもよかった。

この力があれば、自分でも誰かの役になれるかもしれない。

「あのさ、しつかりものの君に僕は頼りなく見えるかもしれぬ」

「いきなりどうしたの？ 愚痴なら軽く聞き流すわよ。問題解決の行動以外、何の生産性もないから」

「それでも誰かのために……いや、他でもないナオミさんのためにカッコつけたいから。そんな理由じゃダメかな？」

そういうと直美は、困ったように眉を八の字にした。

賛成とも反対とも取れる反応に、石動は彼女を返答を黙って待つ。

「……仕方ないわね。悪い人ではなさそうだし、いいわよ。支度を済ませたら、さっさと冒険についてきなさい！ 私と同行するのなら、冒険者として物になってもらうわよ」

なかなか手厳しいことを言ってくる。

だが自分で決めた道だ。

「ハハ、よろしくお願いします」

「よろしく。その前に着替えを買いにいくわよ。迷い人だとバレたら面倒だからね。ヴォートウミラの冒険者として、一般的な服装を見繕ってあげる」

直美は石動の白Tシャツと黒の長ズボンに視線を移すと、まくしたてるように喋り始めた。

（お、女の子とショッピングか。母さんや姉ちゃんの買い物には付き合うけど、血の繋がりのない女の子とは初めてだし、緊張するなあ……）

「お、お金はどうすれば」

「後で返してもらえばいいわ、出世払って奴よ。期待してるわよ、ユウ。もし恩を忘れて踏み倒したら……わかってるわよね」

明るい口調と満面の笑みを浮かべつつも、直美はとつと準備を済ませると言いたげに腕組みをする。

有無を言わせない笑顔に気圧されて、迅速に準備を終えた石動と共に、二人はフィリウス・ディネ王国の散策に乗り出すのであった。

### 第3話 悪魔オールド・ハリー

数時間後

茶色の外套に茶のズボン、革のカバンと茶色一色に装いを新たにしたら石動は、直美と共に王国の側にある森へ狼狩りに訪れていた。

依頼の内容は王国の外で放し飼いにした家畜が食い殺されてしまうので退治してほしい、というものだ。

森に入ると石動は直美の指示通り、パンの切れ端を落としながら、彼女の跡を追いかける。

脇目も振らずに歩く直美に何とか歩調を合わせつつ、指定された場所付近になると、彼女に勧められるがまま購入した装備に目を遣った。

（これで本当に戦えるのかな。まあ、刃物と違って特別な訓練は必要なさそうだけど）

先端が鉤爪状になった杖。

丸形の木の盾。

クワガタの外骨格のような光沢を放つ革鎧。

彼女の武具と見比べると、あまりにも貧相で、防具として頼りない。

不安に駆られる石動の心配をよそに、直美は迷いない足取りで、ずんずんと森の奥に進んでいく。

一組の夫婦をリーダーにしたパツクと呼ばれる、群れを形成する狼が辺りを警戒していた。

数十匹の灰色の狼が一塊になって蠢く様子は、まるで時化（しけ）で荒れ狂う海の如く、石動の目に映る。

（う、あんなのに噛まれたらひとたまりもないぞ。狂犬病とか大丈夫なのか？）

「結構迫力があるね。本当に倒せるの？」

怯える彼の発言にも意を介さず、直美は歩みを止めない。

恐れがないのか、それとも勇気があるのか。

迷い人の力を事前に説明されても、彼女がただの普通の女の子にしか見えない石動は、その場に留まらせようとしてしまう。

「グルル……」

これ以上近づけば容赦しないぞ、とでもいうみたいに、狼は歯茎を剥き出しに威嚇した。

だが彼女が、その脅しに屈することはない

「水の精霊ウンディーネ。大いなる御力によって、我にニンプの加護を施したまえ」

唱えると彼女の背中から、まるで天使の羽根を形作るように、氷の結晶が顕現する。

剣を鞘から抜き、ごめんなさいと狼の群れに一謝りしてから

「ハアッ！」

そう叫ぶと同時に剣を振り回すと、群れはぐったりと横たわる。

狼の亡骸をじっくりと確認してみると、どうやら出血はしていないらしい。

(な、何が起こったんだ?)

恐る恐る触れると体中がびしょ濡れになっていて、石動は葬式で撫でた祖父の遺体の冷たさを想起してしまう。

あまりの疾さで視認できなかったものの、彼女が何かをしたのはまぎれもない事実らしい。

直美の神速の剣技と、あつけない狼の大量死を、石動はただ静観することしかできず

「な、直美さんはすごいなあ。頼もしい限りだよ」

労いの言葉をかけると、直美は不服そうに眉を寄せる。

「適正が悪魔交渉だけだから、元から期待はしてなかったけど。ここまで使い物にならないとはね」

「……う、スイマセン」

「ごめんとすいませんは、もう聞き飽きたわ。どうやったら魔物と戦えるか考えて」

一方的になじられて、彼は口を閉ざす。

反論すれば更に彼女を苛立たせるのは、火を見るより明らかだ。

「あんまり役に立たないようなら、同行自体をやめてもらうからそのつもりで。あなたを巻き込みたくないし、かばう余裕がある戦いばか

りじゃないから」

「……善処するよ」

厳しい一言一言が、胸に突き刺さる。

いくら肉体だけ強くなったとしても、心まですぐには変わらない。それに力の加減ができないと、いたずらに人や生き物を傷つけてしまう。

動物を手にかけて経験などない、大多数の善良な迷い人は、冒険者になるまで苦労しているだろう。

殺さない程度の力の加減と、戦いの立ち回りだけでも誰かから学べれば、だいぶ違うのだが。

「……誰かに師事できればいいんだけど」

そういつて直美に視線を送ると

「なんでも人に頼ろうとしない。私だって、そこまで暇じゃないのよ」

と、またもや彼女に叱られる。

「あ、独り言だよ。勘違いさせてごめん」

彼女が非協力的な以上、場数を踏んで慣れていくしかなさそう。動物の命を奪うのに適応するのが先か、それに慣れる前に愛想をつかさされるのが先か。

どちらにせよ苦難の道のりが待っている。

(……なんなんだ、この世界は)

溜息を吐くと、苦虫を噛み潰したような顔をして、直美は石動に目を遣る。

「勘弁してよ。私まで暗い人間になっちゃうじゃない」

「あ、うん。気をつけるよ」

「ダメね、私。一人の気楽さに慣れすぎたのかも」

彼女の愚痴を聞き流しつつ、道なりに進むとフィリウス・デイネ王国の城壁が目に入った。

王国へと続く道の草原には、雪が降り積もったかのように一面まっしろの花が咲き乱れる。

地上の楽園と言われたら信じてしまいそうなほど美しい光景に、二

人は思わず感嘆の声を漏らした。

「行きにも見たけど綺麗だね。これだけ綺麗だと、じっくり観賞したくなるよ」

「……そうね。ちよつとだけ休憩しましょうか」

「そうしようか」

そうして二人は小高い丘になった草原に座りこみ、暫しの間、休息を取ることにした。

暑くも寒くもない陽気が心地良く、バッグを置くと久々にゆっくりくつろいだ気分だった。

(……こんな景色、いつ以来だろうな)

石動が恍惚とした表情で辺りを眺めると、白の花卉に黄色の筒状花が特徴的な可憐な花が目に入る。

愛らしい見た目に似合わず、えもいわれぬ匂いを漂わせて、彼は顔をしかめる。

「それ、一癖ある匂いよね。私、苦手」

「腐敗臭でハエを呼ぶ、ラフレシアみたいな植物もいるし、不思議なことじゃないよ」

直美が鼻をつまんでぼやく姿が面白おかしく、石動は口元を手で隠し、笑み返す。

よくよく観察すると白と黒、茶色のまだら模様が特徴的な米粒のような小さな虫が、ひつついている。

彼は白の花と極小の昆虫に見覚えがあり

「マーガレットにヒメマルカツオブシムシ?」

それらの名前を口にする、横にいた直美は口をポカンと開きっぱなしにした。

「ええと、なにそれ? 昆虫はカブトムシ、クワガタ、ゴキブリ、カマキリ、トンボ、チョウチョくらいしか知らないんだけど?」

「幼虫は繊維を餌にする害虫として有名だね。でも成虫は花粉を食べる暮らすんだ。干してある衣類に産卵するから、気をつけないと」

「ふーん。虫の種類まで考えたことはなかったわ。一日を生きるのに精一杯で」

確かに現実世界に帰ることと比べれば、ヴオーテウミラの生態系の知識など、木の枝葉のようなものに過ぎない。

しかし枝葉がなければ、木は育たないのも真理。

双方の知識を十分に得てこそ、元の世界への辿り着く近道になる。(ヴオーテウミラ大陸は迷える君たちのための世界、か。あの言葉がヒントになるかも?)

脳裏にこびりついた声を心の中で反芻すると、憶測が確信に変わっていく。

「この世界でも地球と似た生態系が育まれているのかな。だったら、僕にも役に立てることがあるかも」

「どうかしら。でも自然にはあまり詳しくないから、あなたみたいな人がいると助かるわ。自分一人だと、どうしたって限界があるわね。人に偉そうに指図してる癖に知らないことばかり」

落ち込む彼女を見て、石動は考えた。

直美が魔法戦士の適正であるように、自分は悪魔交渉の適正を、あの儀式に見出された。

人それぞれの趣味嗜好が違うのは当たり前で、人それぞれの足りない部分を補い合うのが社会というものではないか、と。

「しょうがないよ、君は仮想派の人たちから追われているんだ。そんな状況になったら、僕でも人間不信にもなるだろうから」

と慰めると、さきほどの石動のように直美も溜息をこぼす。

彼女のことはあまりよく知らないが、らしくない。

自信家な彼女が、本当の彼女ではないのか。

「……気が立ってたのかも。依頼完了の手続きが済んだら、気分転換にパーツとやりましょうか!」

「あの、場所を指定していいかな? 君のカードを届けに行くのに、お世話になった店員の人がいて」

「いいわね。私もお礼が言いたいし、そこにしましょう」

何とか彼女の怒りを鎮められた。

石動がほっとしたのも、草むらがガサガサと揺れ動く。

風もないのに何故?

不自然な出来事に首を傾げると

「誰?!」

人の気配を感じた直美が音のした方に向かって咆哮し、急に立ち上がって身構えた。

「バレちまったか。さすがは氷の叛逆者(アイス・リベリオン)様。噂通り、おっかねえな。頭の後ろにも目エついてんのか」

直美の視線の虚空から、男の低い声がした。

その後透明な人の輪郭が浮かび上がると、徐々に顔に傷のある坊主頭の大男が姿を現す。

「野郎ども、狩りの時間だ」

「了解です、親分」

大男が叫ぶと頭にバンダナを巻く、短刀を手にした盗賊たちが、いつの間にか石動たちを取り囲んでいた。

彼らは勝ち誇ったような下卑た笑みで、石動たちを品定めするように眺める。

「誰からの命令? それを聞かせてくれたら、見逃してあげてもいいけど」

「へっへっへ、そいつは教えられねえな」

「どうせそこいらの小悪党か、仮想派の連中の差し金でしょ。いくらでもかかってきなさい。雑魚の相手は慣れてるから」

あくまでも強気な姿勢で、直美は対話を続けた。

強さに裏打ちされた自信であれ、虚勢であれ、この場面ならば彼女の対応が正しいだろう。

弱みを見せたら、足元を掬われる。

「生意気な女っすね、ダンナ。ああいうのを従順にさせるのがたまんないっすよ」

「あの女を生け捕りにしたら、テメーらにくれてやる。好きに使え」

「ひひ、さすがオヤビン」

(……下衆が)

盗賊の言動に眉を顰める石動の横で

「雑魚は口だけは達者ね。せつかくの気分が台無しよ。一瞬で片づけ



るから」

「ああ?! 女の方で調子こくんじゃねえ!」

一人の男が直美の挑発に乗って飛びかかる。

石動は危ない! と思わず声を上げそうになった。

だが勝負は彼女の予告通り、一瞬で片がつく。

直美は盗賊の攻撃をヒラリと躲すと、男の背後を袈裟斬りで切り捨てたのである。

「次の獲物はどいつ?」

「ヒツ、ヒイイ! 敵いつこねえ!」

「おい、テメーら! 時間稼ぎをしろって言ったろうがツ!」

勝負と呼ぶことすらおこがましい一方的な蹂躪を目のあたりにした盗賊の連中は、頭の命令を無視して、尻尾を巻いて逃げ出す。

しかし背を向けて無防備な隙を、彼女が見逃すはずもない。

地面に切っ先を突き刺すと、蜘蛛の子を散らす盗賊たちは、たちまち凍り付いた。

——これが氷の叛逆者と恐れられる力、なのか。

鳥が虫けらを喰い殺すかの如き、理不尽な暴力を、石動は固唾を飲んで見守る。

「口ほどにもない。さあ、吐きなさい。誰からの指示なの」

「か、勘弁してくれよ。言ったら殺されちまうよお……」

「ここで死ぬのが嫌なら、素直に応じることね」

盗賊の頭らしき男が泣き寝入りをするが、彼女は男に剣の切っ先を突きつけたまま、冷徹な表情を崩さない。

このままでは殺し合いに発展してしまう。

「……な、直美さん。とりあえず剣を降ろして」

石動が仲裁をしようと近づくと

「動くな!」

睨みつけられた彼は、彼女の覇気に気圧されて立ちすくむ。

下手に自分まで、敵と判断される。

それでも石動は彼女への説得を、そのまま続けた。

他ならぬ彼女のために。

「反撃するのはいい。でも、い、命まで奪ったらダメだよ」

「なんでこんな連中をかばうの。まさか、こいつらと繋がってたの?!」  
「違う、君に人殺しになってほしくはないんだ。ヴォートウミラで平気で人を殺したら、現実でも人の命を軽視するような子になっちゃう気がするんだよ。だから……そんな連中に手を下さないでくれ」

一分一秒を争う状況で、言葉を選ぶ余裕などない。  
とっさに頭に浮かんだ言葉で、説得を試みる。

「邪魔しないで。私は一刻も早く、元の世界に帰らないといけな  
いよ！ そのためなら、どんなことだってしてみせる！」

「そ、それが人殺しでもかい?!」

「ええ、その通りよ！ 競争に勝って、命を奪って、自分と敗者を比較して優越感に浸る。それが生きるつことですよ！」

涙ぐみながら叫ぶ彼女から

(ああ、そうだ。彼女だって迷い人だもんな)

現実に戻ろうという意志に隠された、相反する心を感じ取る。

何かに駆り立てられるかのように現実に戻ろうとしているのは、逃げた後に待ち受ける現実の辛さも、十分に理解しているからだ。

故人の人格を否定する、閉鎖的な学園や校則。

異分子を排除する、窮屈でつまらない人間関係。

レールから外れた人間を、決して許さない世間体。

そんなしがらみに嫌気が差して この娘もヴォートウミラに来たのかもしれないのに。

それでも彼女は、苦しみばかりの世界に戻ろうとしている。

(この連中はダメでも直美さんなら、きつと話せばわかる)

真剣な眼差しで石動と直美が見つめ合うと、坊主頭は不敵に

「ヒヒ、まだ終わりじゃねえ！ 俺たちにはとっておきの切り札があるのよ！」

そういうと男は黒い装丁に五芒星が描かれた、禍々しい妖気が漂わせる本を取り出す。

ヨーロッパでは、五芒星は悪魔を象徴する魔法陣。

あの男は悪魔を呼び出そうとしている!?

「ダメだ、正しい手順を踏まない！」

取り扱いを間違えば死に直結するのが、悪魔という存在だ。

「ハッ、もう遅エよ！」

男は魔法陣が描かれた羊皮紙に、脚を乗せると

「エロイムエツサイム、エロイムエツサイム……我、求め訴えたり」

悪魔召喚の詠唱をし始める。

「え、あ、悪魔?! そんなの存在するわけないわ。非科学的よ！」

悪魔という言葉が耳にした直美は半狂乱になりながら、訴える。

怖いものが苦手、なのだろうか。

冷静さを欠いた、今の彼女には頼れそうにない。

(悪魔を呼ばれる前に、何とかして止めないと。僕にそんなことができるのか。いや、できる——迷い人の力がある今なら！)

その時彼は、人は動くものを目で追う習性があるという話を思い出す。

悠長に荷物を取り出している暇はない。

僕はとつさに地面の花を摘み取ると、それを悪魔を呼び出そうとする悪党に思いきり投げつけた。

「ッ、いきなり何しやがる！」

怯んで取り乱した悪党に

「うおおおっ！」

彼はすかさず体当たりをかます。

すると体勢を崩した坊主頭から、あっさりと黒魔術の本の回収に成功した。

だが、肝心の悪魔の召還の仕方がわからない。

「ど、どうすればいい。どうすれば悪魔を元に……」

「おい、オレサマを呼び出したのはお前か」

何か打開策はないか。

まくしたてるように喋る石動の耳に、地を這うかのごとく低い声が届き、彼の全身に鳥肌が立つ。

見上げると二本の湾曲した角に、コウモリの如き大きな翼膜。

筋骨隆々とした黒い巨体に、矢印を彷彿とさせる尻尾。

人の身体など、いとも容易く両断してしまいそうな馬鹿でかい戦斧。

小説や本の挿絵、RPGゲームの中でしか見たことがないような悪魔が、俺の目の前に立っていたのだ。

「呼び出した貴様の願いを、3つ叶えてやる。願いを叶えたら対価として、貴様の魂を頂くとしよう」

悪魔は舌舐めずりをすると、不敵に微笑んだ。

緊張のあまり、彼が喋ることすらできずにいる最中

「おい。お前を呼び出したのは俺だ！ 契約は俺としろ！」  
と会話に割って入る。

悪魔は坊主頭の男の態度が、気に食わなかったのだろうか。

「ああん!?! 魂の契約を結ぶ最中だ、部外者は黙ってろ!」

次の瞬間、悪魔は手に持った斧で躊躇いもなく喉仏を切り裂いた。

坊主頭の首から、勢いよく血飛沫が飛び散る凄惨な光景に、石動の表情はみるみる青ざめていく。

「た、助けて、助けええええっ!」

絶叫を上げた男が首筋を抑えるも、血はとめどなく溢れてくる。

地面に落ちた芋虫の如く、男がしばらく身をよじらせていると、やがて苦悶の表情を浮かべたまま、ピクリとも動かなくなった。

——絶命したのだ。

(あ、悪魔! 本物の悪魔だ! な、なんて惨い……)

「冥土の土産に教えてやる。オレサマの名はオールド・ハリー。ありふれた名前の、原初の業火を操る悪魔だ」

こんな暴挙を許していいはずがない。

ハリーと名乗る悪魔が喋り終わると、石動は奥歯を噛み締めて、悪魔の顔を目に焼き付けた。

## 第4話 悪魔との契約

「さっさと願いを言えよ。でないとな殺しちまうぞ」

動揺する石動に促すと、ハリーは斧を首元に近づける。

金属のひんやりとした感触が首元に伝わると、青年は死を覚悟する。

(……こ、殺される。……までなのか)

眼を瞑って、彼は最後の刻を待つ。

だが、一向に首が刎ねられた感覚はない。

おそろおそろる瞼を開くと、眩い太陽の日差しが差し込んだ。

「その怯えよう、悪魔の召喚は初めてだな？ こいつ程度の魂なら殺して奪うまでもねえ。願いを3つ言い終えるまで、俺はテメーを地の底まで追いかける」

こいつはやると決めたら先ほど同様、容赦なく始末するはず。

そうしなかつたのだから、現状は殺すつもりがないのだろう。

(……なんとか首の皮一枚つながつたか。けれど願いは慎重にしないと。脅しに乗るな、俺)

下手に発言すると、それを願いの1つにカウントされてしまう。

そういう話は、山ほど見聞きした覚えがある。

不幸中の幸いで、今に至るまで一言も発していない。

逃げ出したくなる気持ちをこらえて、石動は汗でびしょ濡れの額を拭う。

冷静さを取り戻そうとふと横目で見ると、横たわった盗賊の頭や凍った男たちが視界に映る。

彼らに救いの手を差し伸べるべきか。

(……いや、無理だ。それを願ったら、自分たちの首を締めることになる)

この状況で他人を助けるほど、余裕などない。

まずは自分の身の安全を確保してから、この状況を切り抜けてから彼らのことを考えよう。

優先順位は自分と直美、その次に彼らでいい。

なら願いは1つ。

呼吸を整えた後、見上げると

「願いが決まったようだな」

見透かすようにハリーは呟く。

相手も人の魂を奪ってきたであろう悪魔。

一筋縄ではいかないだろうし、願いを増やせなんて願いには、キチンと対策をしているはずだ。

(悪魔交渉の適正。もしその才覚が眠っているなら、ここで開花させなければ。次はないんだから)

生唾を飲み込むと、頭で考え抜いた言葉を紡ぐ。

「まず僕たちの冒険への同行と、命令への絶対服従。これを約束してもらおう」

「クク、いいだろう。まずは1つ。オレサマの気が変わらない内に次の願いを言いな」

悪魔は石動の願いを快諾した。

まだ魂が奪われていないということは、今の願いは1つ目か2つ目のどちらかだ。

万が一、次が3つ目の願いだったならどうすべきか。

(念には念を入れた方がいいだろう。魂を取られない方法がないか。いや、絶対に叶えられない願いを言う選択肢も……)

「2つ目の願いは、天使と悪魔の和解だ。できるか」

「ああん?! 天使のクズ連中とオレたち悪魔は水と油。仲良くなんかできるわきゃねエだろがよ」

「そうか。この願い、悪魔には叶えるのが無理なようだな」

ほくそ笑む石動は歩み寄ると、啖呵を切る。

「3つの願いが叶えられないなら、魂はやれないな。魂をやる契約は果たされてない」

「ふざけたこと抜かしやがって。ここの連中、まとめてブチ殺してやる」

「もしそんなことをするなら、俺はお前に自死を要求する。術者の命令は絶対厳守、そうだろう?」

怒鳴り散らすハリーに、石動は毅然とした態度で反論した。

今まで青年に向けられていた刃は、石動の自死の命令によって、ハリーの首筋へ食い込んだ。

「……小賢しい真似しやがって。1つ目の誓約さえなけりや、オレサマが物理行使してたのによ。トサカにくる野郎だ」

両者一步も譲る気はなく暫くの間、沈黙が流れた。

(折れたら悪魔の思う壺だ。踏ん張れ)

無言の時間が流れた後、先に痺れを切らしたのは悪魔オールド・ハリーだった。

「ああっつ！ 人間つつうのは、どうしてこんなズルい奴ばっかりなんだっつ！ 今月の魂蒐集ノルマ、終わってねーのによ！」

喚きながら地団太を踏み、ハリーが憤る。

悪魔も人間同様、大変らしい。

苦笑いしつつ様子を見てみると、ハリーは石動の方に向き直った。

「ありふれた名前の悪魔、オールド・ハリー。これからよろしく」

「ケツ、仕方ねえ。悪魔にとつて契約は絶対だからな」

憎々しげに見下ろす悪魔に

「お前が殺した、その男は治せるか？」

そう訊ねると、悪魔は間髪入れずに会話を続ける。

「ああ、オメーの知り合いか？ 生憎オレサマは癒やしの魔法は使えないぜ。治してほしけりや、他の悪魔を呼ぶための生贄をよこしな。生きた雌鶏（めんどり）がありや、助けられる」

「違うさ、赤の他人だよ。それどころか、僕たちを殺そうとした連中さ」

石動が他人だと告げると、ハリーは面を食らったように眼をパチクリさせた。

信じられないといったげな表情だ。

自分を襲った赤の他人を助けるなんて、自分でもどうかしていると思う。

けれど何故か、助けてしまったのだ。

「他人だったら、くたばっても構わねエだろ。なんで助けようとした

？」

「人と悪魔は違うんだよ。キミには理解できないだろうがな」

「理解なんざしたくもねえよ。ロクに魔法も使えねえ下等生物のことなんかよ。まあ、契約中だけは同行してやるが」

ハリーはニタリと口角を吊り上げると、身体を揺らして彼を嘲笑う。

やはり悪魔は悪魔。

人とは相容れない存在なのだ。

契約でがんじがらめに縛らないと、いつかとんでもないことをしでかしそうだ。

(的確な命令で、悪魔を指示しなければ。悪魔交渉の適正を活かして)

とはいえ契約は終え、一件落着。

仲間の一員として、まずは彼女に挨拶をさせなければ。

「というわけだから、直美さん。今後はこの悪魔も冒険に連れていくよ」

「よろしくな、嬢ちゃん」

挨拶するハリーを一目見るや否や、ダンゴムシのように丸まった直美が

「ひいひい、そんなのが私の冒険についてくるの？ 早く捨ててきなさいー」

錯乱気味に喚く直美に、石動は小動物を甘やかすように、声を掛ける。

「まあ、落ち着いて。頭数は多い方が君と僕の目的が早く達成できるよ。だから怖くても我慢して」

幼少期に怖いものに、トラウマでもあるのだろうか。

それなら仕方ないが、ただ知識がないから、怖がっている可能性もある。

契約を済ませたこと。

悪魔は術者の自分に従うこと。

直美の嫌がる行動はさせないように命令できること。

冒険の戦力となること。



なんとか落ち着かせるべく、順を追って説明していった。

「お、怯えてなんかないわ。悪魔なんて存在するわけないんだからくっ！　じゅ、十字架……持っていない！　もう終わりよ〜！」

「魔法の存在も充分オカルトだと思うけど、魔法はよくて悪魔は受け入れられないんだ？」

「なんだ、この女は。オレサマは捨て犬かなんかだと思ってるのかよ……」

ハリーが呆れ気味に呟くとその一言がツボにハマリ、緊張が途切れ、石動は吹き出す。

その瞬間、青年はさっきまでの緊張が途切れたのを自覚する。

「なーに笑ってやがる？　気に入らねえな」

「いや、賑やかな旅になりそうだと思うって」

「ヘラヘラしてられるのも、今の内だけだ。オレサマはいつだって、お前を殺す機会を伺うからな」

ハリーはそういうと、斧を担いで石動を睨み据える。

本当に殺したいなら黙っていればいいのに、妙に律儀な奴だ。

この悪魔も直美と同じように、普段とは違う一面があるのだろうか。

「……そうか。人はいずれ死ぬ。早いか遅いか、それだけの違いだよ」

「ビビリ女と違って、こいつは肝が座りすぎだな。クソ、調子が狂うぜ……」

「ビビってないわよ!?　私をよく見なさい！　どこがビビリなのー！」

生まれたての小鹿のように脚をふるふる震わせて、直美は強がってみせた。

あまりに説得力のない発言に、石動とハリーは白い眼を向ける。

ただ直美が、このままでは困る。

まともに会話もできないし、ハリーが悪魔の姿では行く先々で悪目立ちしてしまう。

(……視線が僕にも集まるよなあ)

それは石動にとっても死活問題だ。

彼が思考を巡らすと、ある一つの解決策を思いつく。

人ならざる悪魔なら人の姿を模倣するのは、朝飯前だろうと。

「ハリー、別の姿になれるかい？　彼女が怖がるから頼むよ」

「悪魔だからな、お安い御用だぜ。エルフ、ドワーフ、ノーム、ワービー、スト……どんな種族の女にするかで、テメーの趣味が丸裸になっちゃうな？」

石動にハリーは軽口で嘲笑する。

そんなつもりはなかったのに。

苛ついた青年は、頬を膨らませて反撃する。

「人間の男の姿で頼むよ。少年でも青年でも老人でも、見た目は君の自由にしてくれ」

「ククク、後から女にしろつつつても、オレサマは願い下げだからな。眩しいだろうから、目エつぶつてな」

言われるがまま瞳を閉じようとした刹那、青年はカツと眼を見開いた。

この悪魔を完全に信用したわけではない。

念の為、釘を差しておこう。

「まさか眼を瞑った間に不意打ちしたりしないだろうな。ハリー、契約者の僕に嘘はつくなよ」

「……疑い深いねえ。そうでなきや、悪魔を従える資格はねえがよ。信じられないなら命令しな」

「オールド・ハリーに命じる。契約者の許諾なく、人を襲うことを禁ず」

言われるがまま命令をしてから、青年は安堵の溜息を漏らす。

命のやりとりは、まだ続いている。

正気がいつまで保てるだろう。

「おい、コラ。終わったぞ」

目を開くと逆立った金髪と三白眼の男が、僕の目の前に姿を現した。

190cmはあろう長身と筋肉質な体は悪魔の頃と変わりないが、体中に無数にある傷が、歴戦の猛者の雰囲気醸し出している。

厳ついが、王国を探せば普通にいそうな風貌の冒険者だ。

だが、どこか人ならざるもの特有のオーラを肌身で感じた。

ハリーがその場にいるだけで肌が痺れるような、そんな不快な感覚に見舞われるのだ。

「ククク、悪くねエ姿だ。人間共も、この見た目なら迂闊に近寄れないだろ」

「だろうね」

堅気の人間には見えない姿を見て、青年は心の底から同調する。

「あの人たち、大丈夫なのかな」

「大丈夫よ。あの氷、そのうち溶けるから。キツイお灸をすえないと、繰り返すでしょ」

確かに命を奪おうとした罪は報いる必要があるだろう。

「やられたらやり返すのが最適と、ゲーム理論でも証明されている。僕はそれ以上、追求しなかった。」

「ハリー、あの遺体をフィリウス・ディネ王国の教会まで運んでくれ」  
「あいよ」

ハリーに亡骸を持たせると、石動の元に直美が駆け寄った。

「もしかして蘇らせる気？ まあ、教会に持っていけば元通りになるだろうけど」

「蘇生させるかはともかく、このままは気が引けるし。やっぱり直美さんは嫌、だよね」

放置すれば、寝覚めが悪くなる。

だが復活させて、また襲ってくる可能性も0とはいえない。

彼女からしたら、たまったものではないだろう。

反対されるダメ元で聞いてみると

「……貴方がいうなら。でも、また襲われる可能性だってあるし、迷惑かけちゃう……」

伏し目がちに、申し訳なさそうに呟いた。

乗りかかった船だ。

いまさら彼女だけに、この悪党の命を背負わせる訳にもいかない。

「二度目は情けをかける必要なんてないよ。また襲われたら、この男をどうするか、君が好きにすればいい。僕は君の裁量に従う」

「……そうね。それまでには、結論を出すわ」

感情が昂っていたが、今はかなり落ち着いている。

この大陸に適応しすぎただけで、彼女自身は割りと平凡な女の子なのだろう。

「じゃ、いこうか。直美さん、ハリー」

そういうと石動は、堆く積まれた石の城壁へと向かう。

三步後ろを歩いて付いてくる直美に覇気はなく、危なっかしい。

だから今は、僕が代わりに彼女を先導しないとイケない。

王国へ戻る帰路ではハリーだけが静寂を破るように、文句をブツブツと言っていた。

男の遺体を送り届けた帰り道にて

帰り道に石動と直美は貰った報酬で、男の遺体を教会に預けた。

あの男が勝手に悪魔ハリーを呼び出して、勝手に亡くなった。

僕たちに非はない。

けれど人1人の命から解放され、肩の荷が下りたのか、直美の表情は少し晴れやかになったように見えた。

「直美さん。装備のお金の話なんだけど」

「大丈夫よ、装備代は天引きしたから。報酬は60Gだから残りは4

8G。はい、これ」

「あ、うん」

そういつて直美は報酬60Gを等分し、天引きして残った金貨12枚を手渡す。

何もしていないのだが、本当に貰っていいのだろうか。

罪悪感を感じながらも、お金がなければできないことは限られてくる。

僕はありがたく受け取ることにした。

「しつかりものだなあ。直美さんは。僕みたいな人間には、直美さんがついてくれないとダメだよ」

「これくらい普通でしょ。それよりお店に急ぎましょ。楽しみにして

るんだから」

お世話になった店員のいる飲食店に向かっていると、黒髪に黒いマントを羽織った剣士の少年が、すれ違いざまに話しかけてきた。

右腕には包帯を巻いており、痛々しい。

彼もリングワンダリングの迷い人なのだろうか。

「待ちな、その冴えない茶髪男」

「……えーと、それは僕のこと？ 何か用？」

いきなり失礼な物言いであつかつかかってくる彼に、石動は内心

(直美さんといい、この子といい、ここに來てから絡まれてばかりだな。やっぱり人と関わると、ろくなことがない)

文句を垂れ流しつつ、石動は適当に話に相槌を打った。

「俺にはお見通しだ。貴様が悪魔を付き従えていることをな」

「なんなのよ、この子。ちよつとおかしいんじゃない？ 貴方も黙ってないで、言い返したら？」

「フン、凶星のようだな。醜い女悪魔め」

「なんですつて！ こんの……クソガキ！」

当事者の石動が呆気に取りられる横で、何故か直美の方が少年に怒声を浴びせた。

本人を差し置いてヒートアップしていく口喧嘩を、石動は困惑しながら静観していた。

(直美さんの言う通り、ちよつと腹は立つけども)

いきなりバカにされれば、誰でも腹は立つ。

少しばかりからかっても、バチは当たるまい。

そう思い立ち、意地悪な質問を投げかけることにした。

「ねえ、僕ら3人の内の誰が悪魔かわかる？ 言いがかりでないなら、当てられるはずだよね」

無理難題を出してみると

「いいだろう、貴様らの挑戦を受けて立つ」

少年は威勢よく答えた。

本当にハリーの正体を見抜く悪魔を識別できる適性の持ち主なら、簡単に当てられるに違いない。

「あーん？　なんだ、このチンチクリン。オレサマに文句でもあんのかよ？」

ハリーがガンつけ、少年を威圧する。

ガタイがいい大男の脅しに萎縮しているのが不憫で、石動はハリーを宥める。

「まあ、落ち着いて。ハリー」

「クク、売られた喧嘩は全部買うぜ。今のオレサマは、腸が煮えくり返ってっからよ」

ハリーが血走った眼で少年を睨んではにかむと、口から犬歯のような鋭い歯を覗かせた。

悪魔としてはまともでも、人間なら正気ではない。

「えーと、そ、そう！　貴様とその女が悪魔だ！」

ビクビクしながら、少年が石動と直美の両名を指差す。

さすがのハリーといえど、街中で殺しはしない……はずだ。

となると、ハリーが悪魔だと見抜けなかったのだろう。

（あ、ハリーが悪魔だってわからないのか。ってことは、天使とか悪魔とかが好きな年頃なのかな。若気の至りだな。僕にもそんな時期があったよ）

納得した石動は

「ははは、ハズレだよ。それじゃあ失礼するよ」

そう言い残して、その場を去ろうとすると

「クツ、狡猾な悪魔め！　次こそは貴様の正体を暴いてやるからな！」

少年が叫び、一行は街の人々の視線を浴びた。

絡まれたのは自分たちなのに、まるでこちらが悪者扱いだ。

気がつくときシャワーを浴びた後のように、青年の体中は汗まみれになっていた。

——突き刺すような人の目が自分を責めている。

（……気分悪い。これだから雑踏は苦手なんだよ。本当に勘弁してくれよ）

気が気でなく、石動は

「子供なんだし、大目に見てあげよう。それよりは、早くあそこまで急

「ごうよ」

用件だけ告げると、目的の場所目掛けて駆け出した。

「ユウに免じて許してあげるけど、今度見かけたらタダじゃおかないわよー!」

「威勢のいいガキだな。夜道に気をつけるよ。もしかしたら、悪魔に出会っちゃまうかもしれないねえからな。ククツ」

## 第5話 クソ人間とクソ悪魔

数日後の夜にて

元の世界に戻るため、暗中模索の日々が始まった。依頼をこなしたヘトヘトの体で、王国の酒場で聞き耳を立てながら、実のない情報収集をするのは精神的に堪えた。

しかし直接聞き出せば、迷い人と疑いの目を向けられる可能性がある。

砂漠で砂金を探すという形容がピッタリな、地道な作業だ。

文句があっても、目的を達成するまで生き延びるため、ヴォートウミラで日銭を稼ぐ他ない。

一人でこんなことを続けていたのかと、石動は直美の精神的な強さに驚愕した。

「今はいないから率直に聞くけど。あいつのこと、無視していいの?」「いいさ。冒険の協力はしてくれるから」

ハリーはよほど人間が気に食わないのか、冒険を終えると同時に僕らから離れ、単独行動をした。

石動は彼を放っておいた。

逆上させたら、それこそ何をするかわからない。

あの悪魔も自分を出し抜くために、策を弄しているはずだ。

名ばかりの主従契約が、いつまで継続するのか。

対策を講じなければ。

(疲れたなあ。早く宿屋で寝たい)

酒場のカウンターに突っ伏した青年が、心の中で呟くと

「相変わらず手掛かりなしね。いつになったら終わるのよ! この生活は!」

横の直美は大声を張り上げる。

けれど叫びは、周りの雑音に掻き消されていた。

相当苛立ちが募っているらしいが、疲れた石動にとっては耳障りだ。としか感じなかった。



むやみに調べても埒があかない。

「粘るのはこれくらいにして、あそこにいかない？。先は長そうだし、気楽にいこうよ」

「……ホント、イライラする。成果もないし、今日は諦めましょうか」  
気分転換を提案すると、直美は渋々青年に従う。

情報収集を切り上げて行きつけの店となった『憩いの場：銀の皿』で、僕らは今後について話し合うことにした。

「ユウ、ナオミ、また来てくれたんだ。今は暇だからさ、いつでも呼んでね」

目的地に着くとブロンドの看板娘メラニーが、二人を出迎える。

彼女の笑顔は夜の闇の中でも、太陽の如く周囲を照らしていた。

店の中に入ると、テーブルの中心に置かれたランタンの灯だけを頼りに、メニュー表の文字に目を凝らす。

「私はステーキ3つとワインナー。あとサラダも追加で」

「僕はシカの串焼きとサラダと、あと蜂蜜酒（ミード）をお願いします」

「私はエールで」

「ハイハイ、すぐに用意しますね」

しばらく談笑をしていると、木製の深皿が直美の前に運ばれた。

特製ソースがかかった厚切りの肉の隅っこには、コーン、ニンジン、ブロッコリーといった、色とりどりの野菜が盛られている。

見た目はごく普通で、別段凝った料理ではない。

しかし、もうもうと立ち昇る湯気と香ばしい匂いが、その料理の旨さを物語っていた。

彼女は初めてここに訪れた際に食べた、このステーキの虜になってしまったようだ。

結局シンプルな料理ほど飽きがこず、何度も食べたくなるもの。

「あなたの注文した料理、遅いわね。お先にいただきます」

「うん、僕のことには気にせずどうぞ」

そういうと直美は肉料理を黙々と平らげていく。

メインディッシュを食べ終えた次は、ナイフを器用に扱い、フォークに乗せたコーンを口に運ぶ。

咀嚼する度にシャキシヤキと小気味良い音が聞こえ、視覚や嗅覚、味覚だけでなく、音感でも食事を楽しませてくれた。

「一日のシメはこれね〜」

唇についたソースを舌で舐め取り、ごくごくと喉を鳴らして、口の中のをエールと一緒に流し込む。

見ている気持ちのいい豪快な食いつぷりに、石動の相好が緩む。

彼女いわく中高は水泳部に所属していたが、ここまでの大食いではないとのこと。

これも迷い人になった影響なのかもしれない。

知らないものを解き明かしたくなるのは、人の性なのだろう。

いつしか迷い人という存在に、石動は興味が沸いていた。

「ご馳走さまでした……あまりジロジロ見ないで。食べにくいからさ」

「ご、ごめん。美味しそうに食べるなあって」

「残さず食べるのが食事を作ってくれた人と、食材への礼儀だもの」

ハンカチで口を拭き、直美はさも当然と言わんばかりに感情を込めずに主張する。

SNSに撮影した食べ物画像をupしたら、口につけず捨てる人間もいる飽食の時代にも、こんな娘もいるのか。

忘れてはいけない心構えに感心していると

「……謎の声を聞いただけってヒントじゃ、わかるはずないわよ」

食事を終えて退屈なのか、ナイフを指揮者のように振り回し、直美は呆けた顔でぼやいた。

確かにその情報だけを頼りに、この世界から脱出するのは困難を極めるだろう。

学もない自分に適切なアドバイスなどできるのかと考えつつも、石動は

「いや、直美さん。僕たちは、もう1つ貰ったものがあるはずだよ」

そういつて拳を握り締め、左手の盾を軽く殴ってみせた。

すると直美は掌を見つめ、周りに感づかれぬよう、ぼそりと囁く。

「……私にもあなたにもある、謎の力のことね。確かに共通点だわ」

「ただこの力、個人差があるね。僕は直美さんより力があるみたいけど、直美さんのように魔法は扱えないし」

この世界の新参者の自分にはわからないが、彼女には謎の力について、心当たりがあるかもしれない。

直美をまじまじと眺めて、石動は返事を待つ。

「SG8の連中は、確実に人間離れの力を持つてるわね。あいつらなら、何か知っているかも」

「敵対しているSG8の人たちと接触したら、聞いてみよう。やることがハッキリしてきたね」

とはいえ現実に戻りたい僕らと、SG8の利害は一致していない。彼女を是が非でも排除したい彼らが、この世界から脱出する情報を有していれば、とつくに直美との取引材料として利用しているだろう。

そうすれば彼女はヴォートウミラから解放され、SG8も誰にも邪魔されずに、ここにいつづけられるからだ。

推測の域を出ないが、SG8を調べるのは得策だとは到底思えなかった。

「あの連中が素直に話すとは思えない。私が無理矢理聞き出すしか……」

逸る気持ちを抑えられないのか、直美は物騒な発言をしだす。

感情的になったら、数日前の盗賊の頭が悪魔ハリーを呼び出したように隙を突かれ、惨事になりかねない。

石動は自分の頭にある思考を噛み砕いて説明すると、直美は口をへらの字にさせながらも怒りを収める。

どうやら納得してくれたようだ。

直美もハリーほどではないにしろ、直情的な部分がある。

SG8の刺客やハリーの暴走への注意、そして直美のご機嫌とり。日頃から心労が絶えないせいか、青年は長い溜息を吐いた。

「現時点では推測の域をでないけど、なかなか説得力ある話ね。私は暴走しがちだから、大局を見てくれるユウには感謝しないとね」

「そんな……僕はただ無気力というか。いちいち頭で考えるせいで腰

が重いというか」

「謙遜しなくていいわよ。冷静沈着なあなたに、私には成せないことを期待してるから」

彼女に褒められ、裏があるのではと疑う。

だが視点を変えたり、物事の捉えようによつては、短所も長所にもなり得るのだ。

(……だからって、僕は褒められた人間じゃないけど)

そう頭では理解していても、実感は沸かなかつた。

資本主義の国では、金に繋がるかが全てだ。

金(仕事)にならない趣味、他愛もない会話。

目に見えず、金を生み出さないものの価値など、ないに等しいとみなされる。

持たざる者の自分が、仮に元の世界から消えたとしても、社会に何ら影響はないだろう。

けれど直美や他の迷い人には、心配してくれる両親や友達もいるのかもしれない。

(そういう人たちが元の居場所に帰れたら、僕がここにきた意味もあるのかな……)

これから先、直美のように助けてくれる迷い人とも逢う。

蔑む人間のためでなく、良くしてくれる人々のためになら、石動は頑張れる気がした。

漠然とした帰りたいたい気持ちだが、よりハッキリとした形を成して行く。

心の中で決意を新たにし、僕と彼女はそれぞれの宿へ帰るのだつた。

宿屋へ向かう帰り道

大通りの外れにある石動が暮らす宿屋への道は、昼間の王国とは、まったく違う顔を出す。

路端にはトレンチコートを羽織る娼婦が何人も立ち、道行く屈強な

男たちに舐め回すような視線を送る。

そして羽振りのよさそうな男に狙いを定め、交渉をすると、一人また一人と夜の闇へと人々は消えていく。

彼女たちにとって、冒険者は得意客なのだろう。

しかし石動にとって、彼女らの存在は迷惑でしかなかった。

(……見世物じゃないんだ。勘弁してくれ)

さっさと通り抜けようと足を速めるも、彼の前に一人の女が立ちはだかった。

「I don't want to be alone tonight (今夜は独りにしないで)」

「いや、その……」

英語を話すやつれた娼婦はそういうと、胸元のはだけた真っ赤なドレスを見せつける。

目のやり場に困る服装に困惑した彼は、どうやり過ごそうかと頭の片隅で考えつつ、愛想笑いをした。

(……し、刺激が強いな。こういう経験はないし、どう断ろう?)

「Let's stay at the inn (宿に泊まりましょ?)」

娼婦は一方的に腕に抱きついた。

たわわに実った乳房が押しつけられ、石動の男の象徴が否が応にも反応してしまう。

フローラルな香水の匂いに鼻孔をくすぐられ、胸の鼓動は運動直後のように激しくなっていく。

このままなし崩し的に、彼女と……。

石動が場の雰囲気の流れに流されそうになると、もう片方の腕に抱き着いた女が、やつれた娼婦に睨みを利かせた。

「my darling (私の愛する男よ)」

女の迫力に気圧されたのか、娼婦は脱兎の如く逃走する。

「災難だったわね。ああいう時は無視しないと、つけあがるわよ」

「僕の言葉がわかるんですか?」

「ええ。よかったら、私とどう?」

彼女がいなければ、今頃はあの娼婦と宿を共にしていただろう。  
親切な彼女に恩義はある。

しかし、それとこれとは話が別だ。

「助けていただいてすいません。明日も忙しいので、そういうのはちよつと。後日再開したら、お礼でも」

「……そう。残念ね」

「ありがとうございます」

背中を向けて宿に向けて歩くと、足音がした。

まだ言いたいこともあるのか。

何事かと振り返ると、女は懐に忍ばせていた金属片を握り締めて、青年に駆け寄る。

(……えっ?)

頭が真っ白になった石動に、女はすかさず得物を突き刺す。

——殺される!

青年が死を確信した瞬間

「な、なんで! なんでよ!」

女の悲鳴にも似た叫びが、辺りに響いた。

何事かと石動は刺された背中にも目を向けた。

すると皮膚に突き刺さるはずだった刃物が、グニヤリと曲がっていたのだ。

(僕の迷い人の能力は、異常なパワーだけじゃなかったのか)

狼狽える娼婦に、石動が咄嗟に盾で女の額を強打すると、女は頭から倒れてしまう。

倒れた女は出血しており、素人目でもわかる、命にかかわる致命傷を負っていた。

(うわ、やっちゃった。大丈夫、なわけないよね。でも正当防衛だよね。問題ないよね)

とんでもないことをしでかした時、人というのは自分を納得させるものらしい。

昏倒させてしまったが、今は大人しくしてもらおう。

彼女を助けるにしても、まずは自らの安全を確保してからだ。

「もしやSG8の刺客？ 直美さんに協力したら容赦しない。警告のつもりなんだろうか」

独り言を言いながら辺りを見渡すと、ふと青年に悪寒が走る。

嫌な感覚を覚えた狭い路地には、燃えるような真紅の瞳が妖しく輝いていた。

間違いない、奴だ！

「クツクツク。人間には甘エから、人同士の殺し合いに発展すれば簡単に死ぬかと思ったのによ。案外冷酷なんだな、お前」

街娼が倒れた場所の近くから、聞き馴染みのある声が響いた。

その瞬間、石動は彼女がハリーの差し金であるのを悟る。

怒りに我を忘れた青年は、周囲の迷惑も顧みず、盛りのついた獣の如く咆哮した。

「ハリー、出てこい！ この人に何をした！」

「人つてのは欲深い。他人を蹴落とし、他人より幸せになりたがる生き物だ。だから簡単に操れんよ。悪魔の甘言にそそのかされる、愚かな女が悪いのさ」

悪びれる様子もなく、ハリーは言つてのける。

人の心を弄ぶ怪物に道理は通じない。

「僕は何をしたと聞いたんだ、質問に答えろといっている。余計な発言は慎め」

「この女、浮気性の男と付き合ってるらしくてな。恋敵の女を消してやる代わりに、お前を殺せって言ったら、喜んで協力してくれたぜえ？」

この娼婦を差し向けた悪魔は——こいつは自分を殺すつもりなのだ。

一挙手一投足を見逃さぬようにハリーを見据え、青年は悪魔への嫌悪感を押し殺す。

「もういい、お前の存在は不愉快だ。僕や直美さんの前に、2度と姿を見せるな。失せろ、悪魔オールド・ハリー」

「1つ目の契約が成立した以上、3つの願いを叶えるまでオレサマがオメーから離れることはねエ。魔界法の掟だ。たった1つの例外を

除いて、な」

「例外？」

含みを持たせた言い回しに、思わず石動は訊ねた。

それを待っていたと言わんばかりに、ハリーは大笑した。

「簡単な話だ。テメーがとつととくたばりやいいのよ。テメーが死ぬば、契約はなかったことになるからなあ！ ケーケツケ！」

その発言に、石動はまったく驚きはしなかった。

実に悪魔らしい考えだ。

気に食わない術者との契約は、術者自身を亡き者にすることで、魂を蒐集してきたのだろう。

「人間共の堕ちた魂を滅却せん、インフェルヌス！」

悪魔が呪文を詠唱すると、石動の周囲に火柱が上がる。

地獄の名を冠した魔法だけはある、その火は暖炉の種火のような小さな火ではない。

生きとし生けるもの全てに牙を？く、人間如きには制御しようもない、荒々しい焰そのものだった。

黒煙に視界を覆われた青年は咳き込み、この場を切り抜けるために思考を働かせる。

悪魔が人を襲わないよう命令したのに、なぜ炎を扱っている?!

(まさか、この炎。攻撃ではなく目眩ましか！)

気づいた時には時すでに遅し。

石動の頭上には翼膜を広げた悪魔が急降下すると、青年を持ち上げる。

「最後通告だ。ここで死ぬか、オレサマとの契約を解除するか。どちらか選択しな」

襲いかかつてきた娼婦は米粒のように。

こんな所から落とされたら、ひとたまりもない。

「死に場所も死に方も僕が決めることだ。それまでは契約を履行(りこう)してもらおう」

「クツクツク、ずいぶん強情じゃねえかよ。自分の状況わかってんのか。クソ人間。契約を解消するなら、命だけは助けてやってもいい



「ぜえ？」

「羽毛より軽い悪魔の言葉なんて、誰が信じるものか」

どうせ悪魔は俺を殺すつもりだ。

これは強がりではなく本心だ。

「悪魔の脅しに従わないのは、利口な判断だ。だがな、頭に血の昇ったオレサマには逆効果だぜ」

そういつてハリーは躊躇なく、空から彼を落とす。

まずい、このままでは落下死する。

「オールド・ハリー。僕を助ける、これは命令だ！」

「ああ、助けてやるよ。テメーが地面に堕ちた後に息がありやあなあ！」

悪魔は法や秩序の抜け道を探すもの。

——迂闊だった。

地面に落下しないように助ける、そう命令すれば命拾いしていたはずだ。

これは俺の落ち度だ。

だが、まだ希望はある。

（魔法がある世界だ。なら現実の物理法則を無視した、非現実的なことだって可能なはずだ。飛べ、空中を！）

魔術師の適正がなかった自分に、空を飛ぶ魔法が都合よく使えるのか。

そんな奇跡など起こるのだろうか。

一縷の望みをかけて願うと、体が一瞬だけフワリと浮いた……気がした。

だが、落下は止まらない。

（……………までか）

「ユウ!!!」

その時、直美の声がした。

（そうか。さっきの女の人の声と、僕の怒鳴り声を聞いて…………）

万策尽きて、どうしようもない。

直美さんを、彼女を信じよう。

青年が自分の命を彼女に委ねた瞬間、地面に墜落する。

「……契約が解消された気がしねえ。まだ息があるな。まさか迷い人か?! しぶとい野郎だ。まるで高い所から落ちてても、ピンピンしてるアリみてえだな」

ハリーは下卑た笑みを浮かべ、王国を眺めた。

空中を我が物顔で飛び回り、天に唾を吐くように火を吐くと、悪魔は空に浮かぶ満月と重なって、けたたましく笑う。

「手始めにフィリウス・ディネ王国を焦土と化すまで焼き尽くしてやるか。あいつを殺すわけじゃねえし、魔界法にも抵触しねえだろ。ま、王国の人間を皆殺しにする過程で、忌々しい術者もおちぬかもしれねえがなあ! ギャハハ!!」

天を仰ぐ青年は、死に直面しているにもかかわらず、不思議と冷静だった。

空に浮かぶ星々は綺麗なのだろうか? 気なことを思い浮かべられるくらいに。

だが視界が目薬を差した時のようにぼやけて、何も見えない。

呼吸をするだけであちこちが痛み、脂汗が滲む体には、夜の風が心地よい。

このままだと、あの世行きだ。

力を振り絞ろうと身動きすると、全身の神経という神経がそれを拒否し、青年は言葉にならない叫びで呻いた。

「ユウ、しっかりしなさい! 誰か、誰か彼を見て」

「大丈夫ですか。今、回復させます」

意識が遠のく中で直美と見知らぬ女の子の甲高い声、そして高笑いするハリーの叫びが響き渡る。

邪悪という言葉を体現したかのような悪魔の発言に、石動は嫌悪感を顕にした。

こいつは生かしておけない。

生かしておけば、王国の人々に危害が及ぶ。

エイプリルにメラニー、そして直美。

助けてもらった人々の顔が、走馬灯のように頭を駆け巡る。

(……人の痛みがわからない奴は、人を平気で傷つけられるんだな。人も悪魔も。だったら俺と、俺と同じ苦しみを味わえ！ この……クソ悪魔が！俺が死を迎える時には貴様も一緒に命を断て。悪魔オールド・ハリー！)

ハリーに呪詛の言葉を吐き捨て、彼の意識は底知れぬ深淵へと引きずり込まれていく。

死後の世界は花が咲き乱れているだとか、三途の川が流れているだとか、どこかで耳にしたことがある。

けれど実態はまるで違っていた。

——何もない虚無の世界だ。

花畑や川はおろか、過去に愛したおじいちゃんやおばあちゃんさえも存在しない、絶対的な無が僕に待ち受けていた。

(……俺は死ぬのか？ 母さん、父さん、姉ちゃん……何者にもなれなくて……ごめん……ダメなやつで……ごめん……)

最後を覚悟した彼は、家族への謝罪の言葉を胸に瞼を閉じる。

## 第6話 闇の底、夏の思い出、小さな角のカブト

闇の底に沈む意識を覚醒させたのは、うだるような蒸し暑さだった。

……ジージージー。

油で食べ物を揚げるような鳴き声という由来のアブラゼミが、やかましく求愛している。

同じゼミでもヒグラシと比べたら、風情もへつたくれもない。

夏の暑さで狂った男が殺人を犯す話を耳にしたことがあり、初めてそれを知った時は、そんな理由で人を殺すのかと驚愕した。

しかしクーラーの利いていない屋外で立っている今なら、その男の気持ちかわかる気がする。

このまま、ここにいたら気がおかしくなる。

瞼に垂れる汗を拭って視界に映ったのは、太陽の光さえ届かない曇天に覆われた、近代的な田舎町。

元の世界に帰ってきた？

青年は一瞬そう思った。

しかし、これもヴォートウミラで見る夢という気もする。

はたして、どちらが現実なのだろう。

それとも全てが幻なのか。

頭が混乱しそうだ。

小難しいことは後にして周囲に目をやると、見覚えのある集合団地が現れ、石動は息を？む。

「ここって、昔住んでた……」

引越す前に四人家族で暮らしていた、ツツジ団地。

ボロくて、階段を登るとあちこち蜘蛛の巣が張っている、廃墟のような不気味さを醸し出す、黒ずんだコンクリート製の集合団地だ。

そのこの4—1号が、僕たち家族の思い出の場所だった。

いい思い出も苦い経験も、ツツジ団地に全て詰まっていた。

春は団地の裏手の草むらで、シヨウリヨウバツタを追いかけた。

夏はカブトムシとゼミ探しで、木に食らいついた。

秋は生け垣に止まるノシメトンボの前で指を回し、首を傾げるトンボの仕草に頬を綻ばせた。

思えば春、夏、秋と巡る季節の殆どを、僕は昆虫たちと過ごしていた。

呆然と立ち尽くしていると、そこから一人の茶髪の少年と、若い母親が白のTシャツ一枚に短パンという軽装で飛び出してくる。

石動は我が目を疑った。

間違いない。

——子供の頃の自分と、若く澆刺とした母親の姿があったからだ。

「祐、虫取り楽しみだね。いっぱい取れるといいね」

「うん。でも一番大きい奴以外は自然に還してあげるんだ」

「祐は優しいね」

親子の何の気なしの会話。

こんな世間話も、遠い過去の出来事のように思えた。

高校を中退して以来、この程度の世間話をするのもどこか壁があったから。

(……母さん、今はどうしてるんだろう。僕がいなくなって、せいせいしたかな。世間に顔向けできない息子だもんな)

「……死ぬ前に見させられるのが、これか」

ヴォートウミラでは日々の暮らしに忙殺され、現実のことなど考える暇すらなかった。

幸か不幸か、母の姿を見ることになろうとは。

ふと呟いた瞬間、少年と目と目が合う。

(まずい、不審者だと勘違いされちゃうか?)

肝を冷やした青年は、体を硬直させる。

この場から離れるのが最善と理解はしていても、蛇に睨まれた蛙のように、動くに動けなかった。

…顔や体中から大粒の汗が噴き出す。

どう取り繕えば、この状況を切り抜けられる?

「あれっ、おかしいなく。誰かに見られてる感じがしたんだけど」

「そうなの？ 変な人についていったらダメよ」

「はい」

(……見えてないのか?)

とりあえず通報されずに済んだと、現実的な心配をした後、青年はほつと胸を撫で下ろす。

昔の僕の反応を見るに、意識だけが残っていて、肉体はヴォートウミラにあると考えるのが自然だろう。

ここは死後に見る、泡沫(うたかた)の夢のようなもの。

神の存在など信じてはいない青年も、慈悲くらいはあったのかと、その時ばかりは天に感謝した。

最後のひとときで、自らの死を受け入れることが叶うかもしれないと。

「……せつかくだし、二人の様子でも眺めてみるか」

特にやることもない青年は、既に二人の後を追う。

親子が向かう場所はわかっていて。

当時通学していた小学校のグラウンドの端っこには、クヌギの木が1本植えられていて、夏場は昆虫採集の穴場スポットなのだ。

石動の読み通り、母子は閉じた校門を乗り越えて、学校へと侵入していく。

「母さーん、こっちこっちー」

「待ってよ、祐」

子供の虫に対する熱意は、目を見張るものがある。

母親を置き去りにするほどの速さで、少年はクヌギに辿り着くと、木に蹴りを入れ続けた。

一見野蛮だが、こうすると効率よく昆虫が落ちるのだ。

木をねめつける視線はさながら、獲物に狙いをさだめる猛禽類のようだ。

地面に何かが落ちる度に、木の周辺の雑草に目を配る。

「祐、何かいた?」

「ゲエツ、カブトのメスだ。いらなーい」

「残念だったね。獲れるといいね」

そういうと少年は雑草に、昆虫を放り投げていく。  
子供というのは、残酷なことをするものだ。

ただ踏み潰したりしないだけ、まだ良心的なのかもしれない。

(こんなことしてたなあ、懐かしい)

「あつ、これは……ちよつと来て、祐」

思い出に浸っていると、母親が突拍子もない大声で少年を呼ぶ。

当然、青年の目も母に釘付けになる。

「ほら、祐の好きなカブトムシだよ」

近寄った少年に、母は角が半分ほどしかないカブトムシを得意げに見せびらかす。

カブトの角は敵を投げ飛ばすのに用いるのだが、ミニサイズの音叉のような角は、明らかに戦うのに適していない。

「やだやだ、もつと角が大きくて強そうな奴がいい！」

少し角の小さいカブトムシに納得がいかない少年は、駄々をこねた。

母親は眉間に皺を寄せ、幼い祐を叱りつける。

怒鳴られた少年は子供らしく頬を膨らませて、『自分は怒っているぞ』と、わざとらしくアピールしている。

「わがまま言わないの。角の大きな子も小さな子も自然を生き抜いた、立派なカブトムシなのよ。みんなカツコイイじゃない」

「えー、せっかく苦手な早起きしてきたんだから。ね、お願い。あと少し虫取りいいでしょ」

根負けした母はうつむいて溜息をつく。

何とかして言うことを聞いてもらわないと。

そんな母の心の声が漏れ出るかのような、溜息だった。

「もう一匹捕まえたら満足する？ 家に着いたらそうめんね」

渋々といった様子で、条件を提示する。

大人は忙しく、いつまでも虫取りに時間を割くわけにはいかない。

子供の意思をある程度尊重した、苦肉の策だ。

「毎日そうめん飽きたあー。たまには違うのが食べたい」

「いい加減にしてよ、もう」

口を開けば愚痴ばかりで、欲望に忠実な、よくいえば子供らしい子供だった。

今の自分はどうかろう。

大人らしい大人になれているだろうか。

自分が大きくなったら立派になると、未来を信じていた少年に恥じない男に。

(僕は落ちこぼれだし、いまさら普通の人間にはなれない。でも人の道から外れてないつもりだ。それだけは胸を張って誇れるよ)

無職は大量殺人を犯すから、その前に国や親が殺してしまえ。

人種差別する低学歴の連中と比較して、高学歴の人間はLGBTや環境問題に関心があり、差別などしない文化的で素晴らしい人格者だ。

恋愛できない人間は、人格に問題があるに違いないから性淘汰される。

同調圧力や偏見、罵倒を挙げればキリがない。

だが世の中を見渡せば、世間様から後ろ指を差されない、ろくでもない人間など腐るほどいる。

根拠のない世間と社会の常識に流されて、ビクビクしながら、普通の人になるよう努めるのが大人とは思いたくない。

けれど馬鹿で慢性的に無気力な僕には、くだらない世間を黙らせる知識もなければ、押しつけがましい常識を跳ね除けるだけの力もなかった。

ただ1つだけ言えるのは社会の爪弾きにされた人々が、世間と常識に従っても、一切の得がないということだけだ。

(立派な大人、か。たぶん正解なんでもものはないだろうけど)

答えない人生という名の道も、万人が平坦ではない。

富める者が富む。

つまり金持ちがさらに金持ちになるのが、資本主義の現実だ。

生まれながらに勝利を約束された人間もいれば、もがいても何者になることもできない人間だって数多くいるだろう。

僕は後者の人間。



そういう人間が世の中に文句を言ったところで甘え、自己責任と切り捨てられるのがオチだ。

自嘲する青年は

「祐、祐！ こっち向いて！ じゃくん、すごい捕まえちゃった！」  
少年に向けて放つ母親の言葉を耳にして、思わず声の方に視線を向けた。

(この子に言ったはずなのに……)

年不相応な無邪気さではしゃぐ母の、屈託のない笑顔など久々に見た。

その表情に、青年の胸は締めつけられた。

自分は母さんにとつて重荷だと、突きつけられた気がして。

「おおっ、すっげえ！」

母の手にした昆虫に少年は目を光らせる。

母親にばかり気を取られてしまっていた。

目をやると、甲冑を全身に身に纏ったかのような姿に、石動も目を奪われた。

赤茶色の光沢。

牡牛の力強い二本角を彷彿させるフォルムが特徴的な大きく湾曲したハサミ。

カブトムシと同じ子供たちの憧れ、ノコギリクワガタだ。

過去は悪魔と称された昆虫たちだが、僕には神の造形美にしか映らない。

悪魔と蔑まれた異教の神々や霊も、かつては天使だった。

単純な善悪二元論よりも、天使も悪魔も紙一重の存在だと、僕にはしっくり来る。

「うわ、すっげえカッコいいなあ。こいつとは大違いだよ」

「祐、もうそろそろ帰ろうね」

捕まえたクワガタを虫籠に入れ

「ちえっ。今度はもっと大きいのを捕まえるから」

少年は中にいたカブトムシに吐き捨てる。

不満げだったが角が小さかろうが、カブトムシはカブトムシ。

カブトムシはカツコイイのだ。

母親の言葉の中で反芻させ、少年は何とか自分を誤魔化しつつ、声を張り上げる。

「よーし、カブβ、クワα。帰ったらお前らも、ご飯の時間だぞ」

「もう名前つけたの？」

「知らないの？ カブβ、クワαは夕食王（ゆうげおう）の主人公、佐藤夕食の切り札モンスターなんだよ」

「夕食王のアニメやるの火曜日だから、ちゃんとビデオに録画しないとね」

虫かごに入れたカブトムシにつけた名を呼ぶと、勇み足で我が家へと向かった。

当時大流行していたカードゲームの、カードの名前から取った安直すぎる名前に、石動は吹き出す。

今は遊んでいないが、コンビニやゲームショップに赴けばカードが売買されており、繁盛しているらしい。

「日曜日、楽しみだね」

「うん。遊園地なんていつ以来だろ。日記に書くこと、たくさんしようっと」

「……あんまり親らしいこと、できないでごめんね」  
「？」

週末の予定を語らう少年と母親の背中を眺めて、石動は思いを馳せた。

少年は母を見上げるも、口をぽかんと開けていて、何が何だか理解できない様子だ。

決して裕福とはいえないが、人並みに遊ばせてやりたい。

貧しさを理由に、この子に苦勞をさせたくない。

そんな母親なりの苦悩が漏れ出るような一言が、歳を取ってわかった。

けれど苦しいと言いたくとも、それを悟らせまいとする大人のプライドだ。

物憂げに見下ろす眼差しを閉じ、口角を吊り上げると、表情を明る

く切り替えた。

痛々しい笑顔につられ、少年もニコリと微笑み返す。

幼い僕に母の苦悩など知る由もなく、母を救おうという気持ちは、さらさらなかったはずだ。

けれど少年の純朴さが、幾分か母の励みになっていたのではないか。

「ホントに子供だな、昔の僕は。もう少し利口だったら、まともに生きれたかもしれないのにね」

人知れず誰かの役に立っていて、社会というものは回っている。

小さな少年だったかつての僕も、社会の一員だったのだ。

今の僕はどうか。

卑屈で自分の殻に閉じこもり、実社会でもネットでも、不快な他人との関わりを断ってきた。

自分のような人間に当たりのきつい社会への、せめてもの抵抗だ。

（人生なんてなるようにしかならない。けど悪魔に殺されるなんて想像もしてなかったな。罰が当たったんだ）

死を願ったのは、一度や二度ではない。

僕以外にも、誰しも想像した経験はあるはずだ。

けれど、ヴォートウミラに招かれて僕は気づいたことがある。

盗賊に襲われた時。

ハリーと斧を向けられて、交渉をした一幕。

そして娼婦の女から刺され、悪魔に襲われた後、高所から落下させられた一部始終。

ヴォートウミラで死ぬことは、あまりにも簡単だった。

むしろ数多くの障害を乗り越え、生きる方が大変だったはずだ。

死にたいはずなのに生にしがみつき、死の直前を迎えても、なお活路を見出そうとする。

——僕は生きることには貪欲だったのだ。

生物界で例えるなら、僕はさっきのカブトムシ。

いかに戦わずにして、命を次代へつなぐ。

人は馬鹿にするだろうが、しかし小さな角のカブトムシには、彼な

りの生き様がある。

なりふり構わず生きようとするのが罪ではないはず。

どんなに蔑まれようとも、生きることが生物としての本分。

それでも自死を選ぶ人間は後を絶たない。

生と死の狭間で悩む唯一無二の存在である人間は、他の生物から見れば愚かな存在だ。

しかし、そんな矛盾が人を人たらしめているのかもしれない。

(うおっ、なんだ！)

突如、稲光が落ちたかのような閃光が走り、石動は瞬間的に瞼を閉じた。

すると

「……ユウ、死なないで」

「祐、随分こっちに來るのが早かったね。でもおじいちゃんやおばあちゃんと一緒なら、寂しくないだろう？」

どこからともなく直美の湿っぽい声と、老爺と老婆に名を呼ばれた。

待つのが生か死か定かではないが、どちらにせよ、ここにいられるのは最後のようだ。

僕が光差す方へと歩み始めると、次第におじいちゃんやおばあちゃんの掠れた声は遠のいていく。

一抹の寂しさを覚えた青年が振り返るも、そこには誰もいない。

かと思いきや、角の小さいカブトムシが彼を見送るみたいに、足元をうろついていた。

(カブβだ。改めて思えば、初めて生き物の死を知ったのは君のお陰だな)

「ついでに来てくれたんだ。ありがとう、もう大丈夫だよ。僕もいずれここに来るから、しばらくゆっくりしててね」

そういうと青年の言葉を理解したのか、闇に向かって飛んでいく。

今は亡きカブトムシに黙禱を捧げて、祐は闇の中で誓った。

(僕の命がまだ続くなら、ただ1つだけ願わせてくれ。立派でなくてもいい、噛まれてもいい。ただ……ただ僕が……僕に……)

ここにいても長くはない。  
青年が暗黒の世界に祈ると、体がふわりと宙を舞い、周りが騒がしくなっていくたのだった。

## 第7話 救われた命、奪われた命、いらぬ命

01 / 022023

「……………」

長い夢から覚めて目を開けると、何故か涙が溢れていた。

(母さん、おじいちゃん、おばあちゃん、カブβ……)

どうやら九死に一生を得たらしい。

大いなる意志がまだ死ぬなど、僕に言っているかのような奇跡。

もしかしたら天国の彼らが、僕を追い返したのかもしれない。

僕は皆に、命を救われた。

否、生き長らえてしまったといった方が正しいのか。

どちらに転ぶことも、ある程度覚悟していた。

しかし、生きてきて後悔ばかりの青年は、生を素直に喜べなかった。

(生きる価値、生きる意味、生を授かった者の使命。そんなキラキラしたもの、僕以外の誰かにやらせておけばいい。ここで生き抜く内にと  
うすべきか、どうしたいのか、勝手に答えがでるはずだ)

腹を括った青年が体を起こすと、高級そうな木製のチェストが目に入る。

ダンスでも踊れそうなほど広い部屋の足元には、マーガレットの花柄があしらわれたカーペットが彩りを添えていた。

僕の暮らす宿はもつと質素だ。

また見知らぬ土地に飛ばされたのかと辺りを確認すると、椅子に座った直美と視線が合う。

瞳は充血しており、紅に色づいた頬がかすかに濡れていた。

少し前まで、泣いていたのだろう。

「……無事だったのね、よかったわ。ここは私が宿泊してる宿屋よ。郊外の宿屋だと何かと不便だし、王国の大通りにある、こつちに運んだの」

直美は心配していた様子など微塵も感じさせないよう、気丈に振る舞う。

ベッドの隣には場違いな、藁が敷かれた庶民用のベッドが置かれて

いた。

僕が死の淵を彷徨う間、彼女がここで就寝していたのだ。

(……ベッドで僕を寝かせてくれたのか。心根は綺麗な子なんだろうな)

いきなり罵倒してきた女。

初めは悪印象しかなかった彼女に触れていく内に、多くの美点を知っていく。

「体調はよさそうだけど、いちおう診てもらいましょう。待っててね。今からあの子を呼んでくるから」

「？」

一方的にそういうと彼女は部屋から退出し

「目を開きました。とりあえず見に来てくださーい」

直美は大声で誰かを呼ぶ。

いったい何事だろうか。

きよとんとした様子で呆然としてみると、直美は小走りで駆けて部屋に戻ってきた。

身長の割に痩せている少女を引き連れて。

「怪我は治ったみたいなの。でも大事がないか、確かめてもらえろ？」

「ユウさん、怪我が快復したようで何よりです。治療の甲斐がありました。棒を近づけるので、痛みがあれば仰ってください」

茶色の法衣に身を包む少女は、何の変哲もない棒を僕の傷口にかざして喋り出す。

死に瀕していた際、おぼろげに聞こえた甲高い声の主は彼女のようだ。

彼女がいなければ、今頃自分は亡くなっていたのかと思うと、背筋が寒くなった。

「あの、貴方は……」

「英子といます。以後お見知りおきを」

「英子さん、はじめまして。治していただいて、ありがとうございます」

「……これが仕事ですから。報酬を貰えれば、どなたでも治療します」

丁寧な言葉遣いに品と育ちの良さを感じると同時に、人と親しくなるのを拒絶するかのような態度が印象に残る。

彼女も人間不信になるような経験をして、ヴォートウミラにきたのだろう。

けれど僕には、その距離感が心地よかった。

彼女になら、心に土足で踏み込まれる心配はない。

「痛みはないですか？」

「ええ、英子さんの腕がいいんでしようね」

「無理した様子でもなさそうですね。数日の間、休養を取れば問題なく復帰できるでしょう」

瞳を見つめられて石動は縮こまるが、青年を一見して調子を感じ取った英子は、彼を励ます一言をかけて微笑する。

カルテとPCばかり眺めて、人を一切見ない医者とは対称的だ。

健全な精神は、健全な肉体に宿れかし。

健康な人間に、必ずしも健全な精神が宿るとは限らないという皮肉だ。

(……人の命を預かる医者でも、皆がこうじゃないよな。こんな子に手当をしてもらえるなら、安心できる人も多そうだ)

ほつと息を落ち着けて、青年は診察を受ける。

治療中に真剣な面立ちの英子を観察していると、髪が所々痛んでいて、健康状態は良くなさそうに映った。

よけいなお節介かもしれないが、言わずにはいられず

「あの、ちゃんと食事を摂れていますか？ 僕に構わず、ご自愛ください」

自分の体調が優れないのに、人の心配などしないでいい。

まずは自分を優先すべきだ。

特に人を診るような人間ほど。

そう考え、英子自身をいたわるよう勧めたのだが

「……食べるも食べないも、あたしの勝手ですが。失礼します。用があれば隣室にどうぞ」

英子はそういつて部屋から出て行ってしまおう。



眉を八の字にして不満げな彼女に面食らい、彼はそれ以上何も言えなかった。

何が英子の逆鱗に触れたのか定かではないが、自分の不用意な発言で彼女を怒らせたのを理解した石動は

「……食欲がなかったのかな。コミュニケーションって難しいね」と愚痴をこぼす。

「もしかしたら月経だったのかも。あなたの発言には何も問題なかったと思うけど。心配してくれる相手に、あの言い方はないんじゃない?」

「そうかな。でも、あれくらいの娘は繊細な年頃だから。お説教もムカつくだろうし、あんまり口煩く言わないようにしないと」

「ま、あの子も迷い人だから。いろいろあるんですよ。地道に彼女について知っていけばいいわ」

日本で暮らしていた人間が、いきなりヴオートウミラに来たらストレスも溜まる。

現代人の僕らにはゲーム機器やスマホは単なる娯楽のための道具の域を超え、人によっては商売の道具としても扱っている。

文明に毒された僕らにとっては、この世界は厳しい。他人を思いやる余裕もなくなるのも当然だ。考えても仕方ない。

(後で謝らないと。それより『地道に彼女を知っていく』って、どういう意味なんだろう)

まるで、これから長い付き合いになるような口振りだ。

気になってしまい、訊ねると

「そうそう、あの娘もね。私たちの冒険に協力してもらおうことにしたの」

「え、急にどうしたの?」

何者も寄せつけない氷の叛逆者である彼女が、どういう風の吹き回しなのか。

呆氣に取られた青年に

「……あなたが生死を彷徨っている時、考えてたのよね。聞いてくれ

る？」

直美が真剣な面持ちで話し始めた。

彼女が自分の気持ち吐露するなど珍しい。

そんな直美に、石動は耳を傾けた。

「自分一人だけだったら、あの後に悪魔にやられてたかも。それに私の知らないことを、貴方は知ってるし。そうやって助け合いながら、人っていうのは生きてるのね」

いつも自信満々で喋る彼女らしからぬ、たどたどしい話し方に石動は面食らう。

自分でも感情の変化についていけないのか、心に感じたことを素直に話している。

石動は茶化したりせず、耳を傾けた。

「何よりあなたの台詞があつたから、人の道を踏み外さずにすんだ。あなたを信じてよかつたって思ったから。だから今度は、あの子のことも信じてみようかなって」

言い終わると直美は柔らかく微笑む。

僕との冒険で、多少なりとも心境の変化があつたのかもしれない。

その変化は水平線の向こうから太陽が昇るような、明るい兆しに感じた。

(直美さんは変わったな。僕も変わるかな)

「まあ、右も左もわからない僕を直美さんは助けてくれたんだ。お互い様だよ」

「そうね。この直美様に出会えたことに感謝なさい。あなたは頼りないから、私についてくればいいのよ。楽な道は進まないけどね。追いつくまで待っててあげる」

胸を張って威張る直美に、石動は困ったように笑う。

しかし彼女が頼もしい存在なのは事実だ。

手を差し出して握手を求める彼女の右手を握り締めると、冷たい手の体温が彼に伝わる。

20代前半の若い女子に触れた青年は

(……女の子の体って冷たいんだな)

と、素朴な感想を抱いた。

直美は何とも思っていないさそうだ。

(あ、あれ。言われるがまま応じたけど、結構とんでもないことをしてるのでは?)

異性だと思うと、妙に意識してしまい、石動は彼女の顔をまともに見られなかった。

茹でたタコの如く、顔が赤くなっていく。

「どうしたのよ、急に。熱でもあるの?」

「いや、別に。それより僕がいなくても平気だった?」

「ま、あなたはまだ冒険者として頼りないしね。普段通りに冒険して、普段通りに稼いできたわ」

心配した彼女が顔を覗き込んできて、石動は誤魔化すようにまくしたてた。

話題を変えると安堵したのか

「それだけ元気なら、すぐ復帰できそうね」

「はは、お陰さまで」

なんとか追及を免れる。

照れ隠しで視線を逸らし、ベッド横の机に目をやると、何やら羊皮紙が数枚置かれていた。

チラリと覗くと、日本語で文字が書かれている。

おそらく彼女の物だろう。

「それは何?」

「ああ、これ? 日記よ。いつ亡くなってもおかしくないし、今まであったことをまとめてるの。私の亡き後は、これをあなたたちに託すから。参考にしなさいよ」

彼女ほどの実力があれば、不安などないと思った。

けれど強い彼女も、僕らと同じ人間なのだ。

「この世界から脱出できるといいね。英子さんも含めた3人で」

「3人だけじゃないわよ。ヴォートウミラには帰りたい人が、もっているはず。その人達もまとめて、元の世界に帰してやるんだから。それがヴォートウミラに来た、私の宿命ね」

「そうだね。若くて覇気がある、君にしか成しえないことだ。立派だよ」

やる気に満ち満ちた直美を見て、石動は彼女を称賛する。

僕が呑気に寝ている間に、いい充電期間になったのだろう。

(……生き延びた僕には、何ができるのかな)

人間というのはじっとしていると、あれこれ考え事をしてしまう性分だ。

僕を刺した娼婦は、どうしているだろう。

そして悪魔に盗賊の親分は……。

両親や姉のだけでなく、ヴォートウミラで起きた様々なことが思い出された。

彼女に聞けば、わかるやもしれない。

「倒れた女の人がいいたはずだけど、どうなった？」

「あの後、大騒ぎになったからね。複数の癒し手に治療されて、すぐに元通りになったわ。何故かあなたのことをジロジロ見てたわね」

生きていたという事実には、石動の肩の荷が降りた。

不可抗力だったとはいえ、殺人鬼になるのは御免だ。

だがハリーに利用された被害者だと、同情する気は起きなかった。

また襲われないとも限らない。

今後一切僕と関わらずに、暮らしてくればそれでいいが。

「じゃあ、坊主頭の人は」

「教会に預けたから大丈夫でしょ。力の差は見せつけたから、私に歯向かうことはないだろうけど」

「これに懲りて、盗賊稼業から足を洗ってくれたらいいね。せつかく拾った命を、むぎむぎ捨てることのないように。僕もそれは肝に命じておこう」

「殺しにかかってきた相手にも甘いわね。ま、それが貴方らしきなんだろうけど」

「僕だって、どうでもいいって思ったよ。でも助けちゃったから、どこかで生きていてほしいんだ。僕の命もあの人の命も、同じ命だから」

現代では誰にでもある天賦の人権は、先人が勝ち得たもの。

それを自覚していないと、いつか自分にも牙を剥く。  
偽りのない気持ちを伝えると

「……いつまでも、その気持ちを忘れないで。私が道を間違えそうになったら、また正しい方へ導いてね。あの時そうしてくれたように。そろそろ冒険にいくわ。部屋は自由に使って」

まっすぐに見据える直美に、青年は口ごもる。

一人の人間を正しい方へ導く。

世間から疎まれ、常に自分がまともなのかと疑いの目を向けている僕のような人間に、普通の人でも難しいことができるのか。

ただ彼女の信頼を無碍（むげ）にするような発言も、僕にはできなかった。

（彼女の模範になれるような立派な人間じゃない。でも直美さんが騙されてる内だけは、善良な人間に見えるよう努めよう）

「言い忘れてた。早く復帰してよね。あなたと冒険するの楽しみなんだからさ」

部屋を立ち去ろうとした直美は、踵を返して云う。

気恥ずかしいのか、それだけ告げると、そそくさと出ていく。

弱った人間を看病する。

きつと多くの人が何の気なしにする、ただそれだけのことに、石動の胸がじんわりと暖かくなる。

（これから先もSG8に、悪魔に襲われるだろう。けど彼女と出会えてよかった。その気持ちだけは変わらない）

諸行無常、栄枯盛衰。

この世に不変なものはない。

案外人なんてものは、簡単なきつかけ1つで壊れたり、救われるものだ。

直美が変化したように、自分も変わるだろうか。

彼女に幻滅されない人間に

「……ハア、まだ眠い。冒険ができるようになるまでは、彼女の親切に甘えるとしようかな」

ヴォートウミラに来てからというもの、災難続きだ。

疲れが溜まっていたのか、彼は瞬く間に睡魔に襲われた。  
薄れゆく意識の中で

(僕はいい。でも未来ある彼女たちだけでもヴォートウミラから脱出させないと……そんな命の使い方なら、きつと後悔はしない)  
そう胸に誓い、眠りについたのだった。

一方その頃

教会の地下墓地。

王国内で命を落とした者の、幾多の人骨が積み重なった魂の安息の地。

そこで目覚めた禿頭の男は鼻が曲がりそうな異臭に、顔をしかめる。

「こ、こは」

「ハッ、ようやくお目覚めかよ。寝すぎだろ」

黒のローブをまとい、片手鎌を手にした少女は、ニタリと不敵な笑みを浮かべた。

腰からぶら下げたランタンが映し出された彼女は、まさしく死神そのもの。

命を刈り取る死神がもし実在するならば、案外こんな姿なのかもしれない。

「ア、アンタは……」

「あの女がまとめて凍らせてくれたお陰で、お前の大事なお仲間の回収が捗ったよ。いいから、ついてこい」

案内された先の人一人通るのがやつとの通路には、盗賊たちが無造作に並べられている。

少女が凍りづけになった盗賊たちを足蹴にすると

「やめろ、仲間には手エ出すな!」

男は激昂したが、それを遮って少女は男に怒鳴り散らした。

「偉そうに指図すんなよ。私に何か言うべきことがあるんじゃないのか。成功か失敗か正直に話せ。でない、こいつらがどうなるか

……」

一向に話を切り出さない坊主頭に、彼女は作戦が失敗したのを理解した様子だ。

黙り込む坊主頭に

「……おいおい、役に立たねーなあ。手段は問わないから、奴を殺せつて言ったよな。簡単な指示だろ？ まあ、いいや。最初（ハナ）から期待してねーしな」

両手に鎌を持った女は振り回し、歩み寄る。

——明確な殺意を持ち、それを隠そうともしていない。

男は少女が近づくと度々に、自らの死が間近に迫るのを肌で感じた。

「ひっ、悪魔を召喚したところを茶髪の男に邪魔されちまって……悪魔に殺されかけたんだ！ 頼む！ もう一度チャンスをくれ！」

どうにかして時間を稼がねば。

男が一生懸命まくしたてると、ぴたりと足を止める。

そして何かを考えているのか、上を見ながら呟いた。

「茶髪の男……ね。あの女が情に絆されるとは。そいつが付け入る隙になるかもな。こりゃ、いい情報だ」

「もう一度、もう一度チャンスをくれ、今度は絶対に息の根を……」

男は懇願するが、少女は顔色ひとつ変えない。

「要約するとあの女にやられて、茶髪の男に邪魔されて、悪魔に殺されかけたってことだろ。いい所なしじゃねえか。そんな奴がチャンスだあ？ 笑わせるなよ」

「次は、次こそはちゃんと策を練って……」

次があればと絶えず繰り返す男の言い訳に呆れた少女は、溜息をつくと男の言葉を遮る。

「お前、私から魔術書を渡されて満足しただろう？ 策つてのは蜘蛛の巣みてえに張り巡らせるもんだ。1つ2つ作戦を立てて、運よく成功するのは物語の中だけだぞ」

男を罵倒する、少女の弁舌が冴え渡る。

——このままいけば、待つのは死だ。

脚がガクガクと震え、男は何も言い返せなかった。

「もういらないよ、お前。利用価値ないから。口止めで殺しておくわ」  
鎌を持つ少女の気が変わらないのを察した坊主頭は、身震いする。  
戦うことでしか、生き残る道はない。

そう悟った男は

「ただで殺されるほど、俺だってお人好しじゃねえぞ！」

腰のナイフを取り出し、応戦する。

しかし恐怖からか手が震え、照準が定まらない。

「はいはい、すごいね。別にいいけどさ、抵抗するほど長く苦しむ  
ぜ」

鎌で短刀の突きをいなしつつ、あからさまに力を抜いた様子で、彼  
女は

「一回くらい当ててみるよ。雑魚の相手、ダルいわ」

あくびをして隙を見せたのを見逃さず

「模倣の神イミタ、我に世界と同化する術を授け給え。イミタテイオ」

と、不可視の魔術を唱えた。

2度3度瞬きすると、男は半透明になっていき、少女の5回目の瞬  
きで完全に周囲に溶け込んだ。

「どうだ。いくらアンタでも俺がどこにいるかはわからんだろう?!」

「アハハッ！ ゲスの卑怯者らしい魔法だな。お前にお似合いだ。あ  
と洗練されてねえ。アタシの仲間が透明になるまで、時間かからねえ  
ぞ?」

煽りも無視して、彼は地上を目指す。

命さえあれば何度でもやり直せる。

そう考えていたのだが

「組織の長が無能だと、下の人間が皺寄せがくる。お前みたいな奴を  
信頼した部下が可哀想だねえ。ま、長の器を見極められない馬鹿共な  
ら、死んでよかったかもなあ。いらない命だったってことだ」

歩みを止め、この場から逃げる。

それは部下の尊厳を冒瀆することに他ならない。

振り返った盗賊は腹を決めたのか、不可視の魔術を自ら解いた。

「卑怯者だと蔑まれるのは慣れてんだ。だが手下を馬鹿にされて逃げ



る頭目にや、何の価値もねえ」

「部下を愚弄されて腹が立ったのか。泣かせるねえ」

凍てついた薄ら笑いを浮かべて、心にもない台詞を吐き捨てる。

全くの無感情で人の生き死にを嘲笑う姿は、少女が生き抜いた環境の壮絶さを物語っていた。

男が口喧嘩に乗った意味を理解した少女は

「ああ、訂正するよ。馬鹿な頭目と同じで、力量の差もわからない連中だったってな。さっさとかかってこい。お前に構う時間ないんだよ」

「生かしておけねえのは俺も同じよ」

両者、臨戦態勢に入る。

戦闘が始まるも、二人は冷静に戦う距離を見定めていた。

近接武器を扱う以上、間合いに入れば、自分も攻撃される恐れがある。

下手に攻撃すれば一気に不利に陥り、地獄行きだ。

となれば、求められるのは一撃必殺。

両者の頭には、その文字が浮かんでいたことだろう。

睨み合いに痺れを切らした少女は

「罅があかねえな。面倒くせえ。テメーだけで勝手にやってろ」

頭を掻き乱し背を向けて、地上への階段へと歩み出す。

勝負にあるまじき行動に大男は驚愕し、目をぱちくりさせた。

何か勝算があつて、わざと隙を見せているのか？

頭では冷静に裏があると勘ぐる。

だが、この絶好の機会を見逃してしまえば勝ち目はない。

盗人が仕留めた！

勝利を確信した瞬間

「なっ……！」

背後から神に祈るように両腕を折り曲げる怪物が、姿を現す。

その怪物は彼の腕を捕らえると男の背中を、腕を、貪り食い始めた。

あまりの激痛に、男は気が狂ったように叫び、外の世界に助けを懇願した。

「アタシばかりに気を取られてたな。遺言があれば聞いてやろうか？

ま、あいつらもまとめて殺すし聞くだけけどな」  
ヘラヘラと嘲笑う彼女に、男は口から吐血しながらも、精一杯の強  
がりを見せる。

「へへへ、だーれがテメーになんか話すか。地獄に墜ちろ、クズ女！」  
「社会の落伍者が粹がるね。お前も私も似たようなもんだろ？ お前  
は不愉快だ。なるべく苦しむように殺してやるよ」

今まで傍若無人に振る舞った罪が、一身に男に降りかかる。  
当然の報いだ。

だがせめて、目の前の女には屈しない尊厳ある死を。

盗賊は次第に絶望的な状況に抵抗することもなくなり、微動だにし  
なくなつた瞬間、少女は男の死を悟る。

「死ぬ時はあつけねえな、人つてのは。こうなつたら人間、ただの肉の  
塊だ。ごくろう、もういいぞ」

少女が命令を下すと、怪物は放り投げた。

男の遺体を見下ろしながら、彼女は執拗に踏みつける。

男は息絶えて、返事はないにも関わらず。

目の前の男ではない誰かへの憎悪を、怒りをぶつけるかのような攻  
撃は、その後も彼女の気が済むまで繰り返された。

「馬鹿だな、お前。人つてのはな。テメーの都合が悪くなりや平気で  
裏切るんだよッ！ くだらねえもん見せつけやがって！ 苛々する  
！」

「盗人のクズの分際で友情ごっこかよ。いいご身分だな、オイ！」

「恵まれた連中が偉そうに、説教してきやがって。手前勝手なクソ親  
も、口だけの友情も、ウザい先公も全員くたばれ！ 全部いらねエん  
だよ！ オラッ！」

息を荒らげ、不平不満を吐露する。

数十分も経過すると気が晴れて、情緒が安定してきたのか

「茶髪の男について、姉御に報告しておかねえとな。あの女を始末す  
る駒が揃つたつてよ。喜んでくれっかな、あの人」

乱れた髪をかきあげ、少女は暗黒の世界から、地上の世界へと向か  
うのだった。

## 第8話 血と魂の契約、そして悪魔と人の違い

数日前の夜

「ユウ、しっかりとしなさい！ 誰か、誰か彼を看て」

「大丈夫ですか。今、回復させます」

（無様だな。悪魔を出し抜こうとした命知らずは、みんなこうなる運命なんだよ。悪魔を騙した罪は、テメーの命で償いな）

悪魔は息も絶え絶えな石動と彼を助けようと必死な少女二人を見下ろし、心の中で呟いた。

「死に場所も死に方も僕が決めることだ。それまでは契約を履行（りこう）してもらおう」

「羽毛より軽い悪魔の言葉なんて、誰が信じるものか」

石動が吐き捨てた台詞の数々を頭の中で反芻（はんすう）させ、悪魔は下卑た笑みを浮かべる。

崇高な理想も、青臭い正義感も——死んでしまえば全て無に帰す。

「下等生物の人間如きが偉そうに、オレサマに逆らいやがって。悪魔が現れた場所こそ、人の死に場所さ。貴様を守ろうとした、フィリウス・ディネ王国の儂く弱々しい命。ここで一掃してやるよ。人間共の堕ちた魂を滅却せん、インフェ……」

勝ちを確信したハリーが呪文を詠唱し、

「ググ、どうなって……やがる……！」

突然ハリーの体に激痛が走り、次の瞬間には悪魔が地べたで悶えていた。

夜の静寂を切り裂く悪魔の絶叫が周囲に響くと、何事かと辺りに人が集まってくる。

まずい、逃げなければ。

ユウの落ちた方を確認し、ナオミとふと目が合うと、暗闇の中で翡翠のように鮮やかに光る瞳が彼を睨みつけた。

どこに隠れようが逃しはしない。

万が一彼が亡くなるようなことになれば、全力で仇を討ってやる。そんな言葉が聞こえてきそうな、執念と気迫に溢れた眼気圧されて、ハリーは無心で匍匐前進（ほふくぜんしん）を繰り返す。

ハリーが通った道はナメクジが這った後のぬめりのように、おびただしい血の跡が石畳を濡らしていた。

「……ハア……ハア…… 人間に……気づかれねエうちに……早くこの場を……」

頼れるものは何もない。

悲鳴を上げる体に鞭を打ち、むりやり動く度に激痛が走る。

骨が軋み、口許からは蛇口を捻ったかの如く血が垂れ流される。

（……奴を落とした直後に墜落した。なんでだ、クソが……）

状況を整理すると、青年の顔が思い浮かぶ。

奴の息の音を止めるまで、不利な契約から解放されることはない。

奴さえ始末すれば、自由を謳歌できる。

そう考え、あの男を亡き者にした矢先に、こんな不運に見舞われるなど。

「……グ、意味がわからねえ。こんな……最後に……」

悪魔が恨み言をこぼし、瞳を閉じると

「ククツ、また人間に騙されたのか。魔界の落ちこぼれめ。貴様のような悪魔の面汚しは、私の視界から消えろ」

「何の取り柄もない悪魔、オールド・ハリー。脆弱な人間風情に負けるほど、知恵が回らんとはなア。一生人の奴隷がお似合いだぞ。ケケツ！」

自分を見下し蔑む声が、ハリーの脳内に響く。

死の前に見る走馬灯は、人を欺き、陥れてきた報いが死の間際に牙を剥く。

（オレサマの受けた屈辱、忘れもしねエ！ この恨み、晴らさずに死ぬるか！ 殺す殺すクロス……）

負の感情に支配された悪魔という存在にとって、絶望と憎悪、殺意は生きる糧。

激しい感情は心で混じり合い、悪魔を奮起させた。

「クソがあ、動け！ 動けよ！」

叫びながら、力任せに体を動かした。

だが、どうにもならない。

腕が持ち上がらず、立ち上がることもままならない。

ただ芋虫の如く、地べたを這うのが限界だ。

(ここまでなのか、チクショウ！)

悪魔が諦めかけた、その時だった。

瞬く間に傷口が閉じていくではないか。

「どこかの誰かに治癒された？ どうなってやがる」

何から何まで理解ができず、ハリーは狼狽した。

本来ならば喜ばしいはずだが契約を遵守し、厳守させる悪魔にとつ

て、契約以外で幸福が舞い降りるのは気味が悪いのである。

(なんだってんだ、代償はねエだろうな……)

常に人を騙す立場に身を置いた罰なのか。

盗人には他人が全員盗人に見えるように、悪魔には幸福をも疑ってかかる癖がついていた。

念のため体を伸ばしたり、捻ったりしてみても、特に痛みはない。

理由は定かでないが完治したようだ。

しかしハリーは治ったことよりも、何者が自分を治したのかに気を揉む。

「チツ、原因を突き止めねえと気が済まねえ。邪魔だ、どけッ！」

半狂乱になった悪魔は王国の大通りで、血眼になりながら探し始めた。

ハリーに怯えた民衆は、蜘蛛の子を散らすように逃げ惑う。

そんな彼にも物怖じせず、そばかすの少女は傷だらけの大男を宿屋へと誘った。

「お兄さん、ずいぶん焦ってるね？ 落とし物？ 夜中に歩いている

けど、泊まる宿はあるの？」

「ああ?! なんだ、テメー。馴れ馴れしく話かけてくんじゃねエ！」

凄んで、彼は少女に八つ当たる。

これで、この女も自分の元から離れるだろう。

だが

「お兄さん、悩みでもあるの？ 暇ができたら話し相手になつてあげようか。私、聞き上手って言われるんだ」

向けられた罵倒を華麗に聞き流し、少女はなおも食い下がる。

「……うぜえ。話しかけてくるなど言つただろ。消えろ」

「硬派だね。お金の心配はしないでいいよ。馬小屋に泊まるくらいで、金をせびるつもりないし」

少女は人懐っこく、ハリーの周りにまとわりつく。

自分のペースを崩さず、一方的に言いたいことをまくしたてる彼女に付き合っていると調子が狂った。

（自分中心なルシファア様を思い出すぜ。凶々しきは悪魔並みだな、こいつ）

どうすれば、この場を切り抜けられるのか。

悪魔が考えるも、答えはでなかった。

しかし納得させないと、延々付きまとわれるのは明白。

「ここ以外にもいろいろ見て回ってエんだ。泊まっても泊まらないで最後に寄る。だからよ、いい加減離れてくれや」

「うくん。なら、しょうがない。待つてまゝす」

間の抜けた返事をして、彼女は立ち去るハリーに手を振つて見送る。

「なんだ、意味わかんねえ。人つてのは悪魔以上におかしな生き物だぜ」

人という生き物の珍妙さは、長年嫌と言うほど見てきた。

神が作り上げたはずなのに矛盾の塊のような生き物、人間。

中でもユウという男は、とびきりの変人。

せつかく悪魔を呼び出したのに、願いを叶えてほしいとすら言わないではないか。

（あのバカさえ消せれば、晴れて自由の身だ）

ハリーは手当り次第に、冒険者らの治癒、蘇生を生業とする教会で青年を探し回った。

治癒にせよ、死亡したにせよ、担ぎ込まれる場所は教会だからだ。

しかし彼の姿は、どこにもない。

(どうなつてやがる、クソ！)

そうして夜が更けて悪魔は途方に暮れながらも、王国をくまなく探した。

それから数日が流れ、ふと大通りにある宿屋に視線を向けると、ハリーは我が目を疑った。

「久々の夜風だ。気持ちいいな」

「あ、あいつは……」

虚ろな瞳の陰気そうな男が窓を開けて風に当たり、気持ちよさそうに伸びている。

顔立ちは整ってはいるが、他者を寄せつけない陰鬱な雰囲気纏う青年。

忌々しい男を見間違えるはずもない。

(奴だ！ 奴がオレサマの復活に一枚噛んでいる！)

そう直感した悪魔は、石動の元へと飛んでいった。

開けっ放しの窓から様子を伺うと、ユウは寝台に座り、考え事をしているようだ。

怖がりな少女は病み上がりの彼を置いて、冒険をこなしているのか、部屋には石動祐一人。

(あのお嬢ちゃんの邪魔は入らねエ。奴を消す、またとない好機！)

悪魔は心の中でほくそ笑む。

すると彼はただならぬ邪気を察知したのか、ハリーの方を向いた。

視線があうと青年は一瞬狐につままれたような顔をするも、すぐに彼を睨みつけた。

ハリーも覚悟を決め、部屋の中に侵入する。

「よう、貴様と会うのも久々な気がするぜ。率直に聞かせ。オレサマに何をした」

「こつちが聞きたいくらいだ。何故お前が、また僕の前に」

望まぬ邂逅(かいこう)に、二人は不満をぶつけあう。

深く刻まれた皺に、筆舌に尽くし難い怒りに滲ませている。

数奇な運命の巡り合わせ。

何かの縁が再び彼らを引き合わせたのだ。

「見た所、どうやら完治したみてエだな。あれほどの大怪我を」

「こつちの方こそ、お前の傷が何故治っているのか聞きたい」

この男の口振りからして、傷を治したとは考えづらい。

となれば誰かが気まぐれで……？

（いや、それもねえな。何の対価も要求せずに助けるなんてありえねえ）

事実を積み重ねて悪魔は推理する。

しかし全ての可能性を考慮しても、自らを納得させる理屈はでてこない。

しばらく頭をフル回転させ理由を探ると、悪魔と術者を繋ぐ『血と魂の契約』を唐突に思い出す。

（……噂で聞いたことがあるが、肉体の感覚共有。奴が治療されたことで、オレサマの傷も癒えた。そう考えりや説明がつく）

「どうした。また僕を殺す企みでも考えているのか」

刺々しい口調で、石動は二の句を継いだ。

事実を伝えても得はないが

「どうやら貴様とオレサマは、同一の存在になっちまったらしい。互いの肉体の快樂、痛みを共有する体にな」

悪魔は事実を語る。

殺されかけた青年は、最初こそ悪魔の話など聞き入れなかった。

しかし、こうして悪魔が復活したという奇跡の前に、彼も現実を受け入れるしかない。

ハリーとの会話で現状を悟ったユウは  
「自分を殺そうとした悪魔と一緒にになったなんて。不愉快極まりないな」

「ケツ、オレサマの台詞だぜ。貴様はオレサマの主にふさわしくねえ」  
互いに罵詈雑言を浴びせ、憎み合う。

石動は殺されかけ、悪魔はただ働きをさせられた。

両者、相応に怒るだけの理由があった。

だが契約があるため、力関係は青年の方が上。



これ以上下手に出れば、死ぬまで利用され続けて、一生を終える。悪魔は石動にも臆さず、言葉を紡ぐ。

「とにかく俺の命令には服従してもらおう。悪魔に好き勝手されたら、たまったものじゃない」

「当たり前だろう。悪魔といえど術者には従……」

形だけの服従を示そうとすると、途端に口が開かなくなる。

そして契約に逆らう人間と悪魔に待ち受ける、契約の強制——魔界法の絶対の掟が彼に刃を向ける。

（う、嘘がつけん！ 奴がした命令がまだ有効らしい。でないと説明がつかねえ……）

歯を食いしばり、魔界の掟に抗おうとする。

だが彼の抵抗も虚しく、呼吸困難に陥ると目から涙が浮かぶ。

叫ぼうにも、言葉一つ発することもできないのでは、どうしようもない。

助けを呼ぶのすら不可能な状況に、ハリーはただただ心の中で祈る他なかった。

「どうした。また僕を殺す算段でも立てているのか」

苦しみのうち回るハリーにも、目の前の男は平然としていた。

契約を破ろうとした悪魔への罰は、彼には効力をもたらさないようだ。

（頼む、もう嘘はつかねえ……だから勘弁してくれ……）

今まで彼は、全てを自らの力で切り開いてきた。

悪魔から見下されても自らの使命を全うし、魂蒐集のノルマをこなしてきたのは、何よりの誇りだ。

そんな悪魔が柄にもなく天に願い、自らの罪を悔いると、痛みは嘘のように消えていく。

神などいない。

いたとしても不条理な試練を課すだけの、甚だ不快な存在だ。

いつからか誓ったはずの信念をも曲げ、ハリーは自分以外の何かに縋った。

「……ハアハア。た、助かったぜ」

窒息しかけた悪魔が乱れた呼吸を整えるも、石動は相も変らぬ冷徹な視線を投げかけ続ける。

たった一度の過ちでも、殺そうとした悪魔を警戒するのは無理からぬことだ。

何をしても訝しげに眉をひそめる彼に、だんだん腹が立ち

「何の演技だ。オールド・ハリー」

「うるせエ、いちいちムカつくんだよ！ テメーは！」

募る苛立ちをぶちまけると、ユウの視線はいつも以上に険しくなる。

ことあるごとに殺しにかかってきた悪魔が、今日はやけに大人しいこと自体、彼にとつては不思議だった。

「そうだ、それでいい。お前の本性は悪魔だ。お行儀よくしても、何か裏があるんだろう」

「へッ、品行方正気取りの人間様は言うことが違うねエ。致命傷を負えば、その時に嫌でもわかるだろ。オレサマの発言が正しかったってよ。なんなら今から試してみるかア〜？」

悪魔が嫌う、人の善意や純粹無垢な心。

それを否定するかのように、ハリーは石動を煽る。

しかし石動は悪魔の一言に得心したのか、うんうん頷く。

「確かに試せば、すぐにお前の言葉の真相がわかるな。悪魔の言葉が正しいか確かめてみるか。さてと……」

石動は窓に近寄るのを見て、悪魔は口を開きっぱなしにした。

ハリーの言葉が嘘か誠か。

ただそれだけの為に、自分の命を投げ捨てようとしている。

頭のネジが外れた、ぶっとんだ狂人。

この男はそうとしか形容しようがない。

「頭がイカれてんのか。そんなことしたら、お前までくたばるだろうが。そこまでオレサマが憎いか？ 自分の命を投げ捨てるほどに」

命惜しさというよりも、率直な感情が言葉になったというのが正しかった。

——否、死を躊躇わない目の前の男への恐怖が、ハリーにそう口

走らせた。

「お前が僕や身近な人に危害を及ぼすのなら、僕は身を投げる。それだけだ」

「……異常者が。悪魔を呼び出す人間ってのは、大抵どつか壊れてるもんだが、テメーほどのイカレ野郎は初めてだ」

「あいにく元居た世界で、そんな戯言は聞き慣れたんだ。社会の異端者と天から追放された異常者。そこまで違いはないと思うよ」

そういうと窓の方を見遣り、石動は窓に手をかける。

この男、また落下しようとしている。

——しかも今度は自らの意思で。

「おいバカ、やめろっ！」

それを見たハリーは、必死に呼びかけた。

身を乗り出した石動を力づくで取り押さえ、石動の顔を覗きこんだ刹那、悪魔は後ずさりする。

目を見開き、思い通りに動いた悪魔を見てほくそ笑む——青年の表情はまさに悪魔じみていた。

常軌を逸した行動に、ハリーの背筋は冷水をかけられたように冷えていく。

（自分の命すら、交渉材料の1つとしか捉えてないのか。あ、悪魔だ！

この男……！）

「悪魔といえど、自分の命は惜しいらしいな。よかったよ、それがわかって」

「……グ、グググッ！ クソがあ！ 悪魔であるオレサマをコケにしようがって！ 元に戻った暁には、貴様を八つ裂きにしてやるからなあ！ 覚悟しておけ！」

激昂するハリーにも、石動は動じない。

それどころか子供を宥めて落ち着かせるかの如く

「どちらか一方だけが、不利益を被る契約は理不尽だ。これでようやく対等な契約が結べたってことさ。そうだろ、ハリー。君が死んだら僕も地獄に墜ちてやる。一人では死なせない」

至って冷静な口調で対応する。

事務的で氷のように冷たい対応の石動につられ、悪魔の心も自然と穏やかになっていく。

思えば初めて出会った時は、ひどく怯えていた。

にも関わらず、人の命が関わると血相を変えて別人のようになる。

こういう人間には、力による脅しは通用しない。

心にある信念が根底から覆りでもしない限り、ずっと平行線のままだ。

「……わかったよ。オレサマは貴様との契約を全うする。だが、ただ1つ忠告しておくぞ」

「なんだ、いきなり」

「オレサマは魂を蒐集しないと、上手く力が引き出せねえんだよ。あんまりお行儀のいい生き方をオレサマに強制すると、冒険とやりに支障がでるぞ？」

疑うかのように睨む石動に、悪魔は苦い顔をした。

嘘でも真実でも疑われては、どうしようもない。

しかし嘘ばかりつく狼少年は最後に信用されず、見捨てられるように、日頃の行いが悪かったのだ。

悪魔は信用を得られていないのを承知で、話を続けた。

「?じゃねえぞ。テメーとの契約で真実を口走らないと、制裁を受ける体質になっちまった。魔界法はどんな悪魔も厳守しなけりやなんねエのさ」

「……俺が了承すれば、人の魂を蒐集してもいい。俺が死のうが他人にとつてどうでもいいように、俺にとつても赤の他人の魂なんて知ったことじゃない」

冷淡に吐き捨てる彼は、人の命にも魂にも、そして自分自身にも無関心なように映る。

無感動、無気力。

人によつては底知れぬ悪意を抱えた男と見えるだろう。

見る者の心象によつては姿を変える、万華鏡のような不思議な男、石動。

今のハリーには彼が恐ろしく見えるが、この男の他の面を知ってい

けば、自ずと真実の姿が見えてくるはずだ。

人間と冒険をするのは釈然としないが、全ては己の自由のため。「なら構わねエ。魂蒐集さえ容認するなら、今まで通りお前の冒険に協力してやるよ。ただ感覚の共有を治す方法を探すがな。止めるんじゃないねエぞ」

「別についてこなくてもいいよ。命の保障はできないけどね」

悪魔から目を逸らし、祐が呟くと

「嫌味な言い回しだぜ。ついていかなきゃ、アンタらが野垂れ死ぬ可能性が上がる。つまり選択肢なんてねエつてことじゃねえか」

男の身に危険が起きれば、待つのは死。

拒否権など、あつてないようなものだ。

(……主導権を握られている。下等生物の人間如きに！)

奥歯を噛み締めて悔しがるハリーが見据える。

悪魔が尊ぶ自由は誰かに服従したり、隷属しては成り立たない。

人間に生殺与奪の手綱を握られた今の状況は、悪魔が望む真の自由とは程遠いのだ。

「覚えていろ。悪魔を縛りつけると思うなよ。貴様を亡き者にして、オレサマは必ずや真の自由を取り返す！」

「郷に入っては郷に従え」という言葉が、僕の暮らす国にはある。冒険者として共に暮らすなら、悪魔の法より人の法を守ってもらおうぞ」

そう威圧する石動は有無を言わず、悪魔に告げた。

さきほどの一連のやりとりで、石動の狂気を垣間見たハリーは

(こいつは狂ってる、何をしでかすかわからん)

言葉に詰まって、何も言い返せなかった。

「とにかく普通の人間の振りをしてくれ。悪目立ちされると、僕たちは困るんだ。自分の命にも関わることだし、人間如きと共倒れなんて御免だろう?」

単に利害の一致で協力するだけ。

そう自らに言い聞かせて、ハリーは自分を鼓舞した。

「互いに協力しよう、それが互いの利益になる」

「ち、わかったよ」

石動に諭され、悪魔は腹を決める。  
どうせ逃げ場などない。

自分の与（あずか）りしらないところで死ぬなど、まっぴらごめん  
だ。

（それにしても狂った男が説く正義と法、ねエ。面白エ……）

単純な疑問と興味を抱いた悪魔は、青年に問う。

「聞きてえことがある。法だの倫理だの、馬鹿らしいと思わねえか。  
そんなもん守らされて得するのは、貴族みてえな権力者サマだけだ  
ろ」

一呼吸置いて、悪魔は続ける。

「貴族みてえな親から継いだ地位や金で偉そうにしてる特権階級は、  
全員ブチ殺したくなるだろ。そいつらほど自分は頑張ったと威張り  
散らすだよ」

「そんな弱肉強食を謳う金持ちが殺されようが、淘汰の結果さ。やり  
返した奴らは何も悪くねエ。奪い、犯し、食らう。それが人と悪魔の  
本質なんだからよ。法を逸脱した奴らこそ正しいのさ。悪魔の倫理  
ほど人の世に必要なものはねエ」

天から墜ちた悪魔は神々と貴族、庶民と悪魔を重ねているのだろ  
う。

既得権益を否定し、革命を賛美した。

不道徳に聞こえるが、無能な為政者（いせいしや）が殺されるのも、  
人類の歴史の1ページに脈々と刻まれている。

石動には思う所があったのだろう。

暫くして石動は、ハリーに自らの考えを話した。

「確かに金持ちが作ったルールは、金持ちだけが得をする。貧者が  
ルールに従っても利用され、使いものにならなくなれば捨てられるだ  
け。自分を犠牲にして、社会や企業に尽くす価値なんてないよ」

「つまりだ。君の言うことは概（おおむ）ね正しいよ。ハリー」

「あ？」

殺人すらも推奨する発言を肯定され、間の抜けた返事をしてしま  
う。

散々悪魔である自分を否定して、綺麗事を吐いてきた。

そんな目の前の男に言われ、ハリーは苦虫を噛み潰したような表情をし、ユウに詰め寄る。

「悪魔に理解を示すなら、何故オレサマを止める？ お前自身が傷つかなきゃ、他人なんざどうだっていいんだろ？」

「……なんでだろうね。よくわからないな。強いて言うなら、それが悪魔と人の違いなんだろうね」

「つくづくわけのわからん男だ。己の欲望と本能に従えば、オレサマと心を通わせることもできたらうに。残念だぜ。ククク……」

「……」

これ以上言葉を交わしても意味はないと、悟ったのだろう。

青年は口を閉じ、以降ハリーと喋ろうとはしなかった。

「オレサマは近くの宿屋の馬小屋で寝泊まりする。冒険の際は声をかけろ」

そう言い残すと、悪魔はそばかすの少女がいた宿屋に立ち寄った。

少女は主人を見つけた飼った犬の如く駆け寄ると、すぐさまハリーを枯草と家畜の糞尿の匂い漂う、馬小屋へと案内した。

巨体の馬が寝る場所だけあって、人間が一夜を過ごすのにも申し分ない広さだ。

(この臭いに慣れれば、だけどな)

悪魔は心の中で文句を漏らすも、口にはしなかった。

「あなたが無事でよかった。最近近所で男の人が負傷したり、治安が悪いから心配だったの。寒いだろうし、馬小屋の糞大増量中だよ」

「おう、ありがとよ。探してた奴は見つかった」

「ふくん。せっかく見つけたのに、暗い顔してるけど？」

悪魔が黙り込んだ後も、怪訝そうな少女は一方的に、自分や今日起こったことなどを喋っていた。

少女がいなくなった後、藁の敷かれた小屋に寝転ぶと、彼は人差し指に火を灯す。

地獄の業火を眺めて思い出される

『それが悪魔と人の違いなんだろうね』

石動の何気ない一言が、妙にハリーの頭にこびりついて離れない。人の言葉を介する悪魔にも、青年の言葉の真意は読み取れず이었다。

(知った風な口を聞きやがって。人間の貴様に、オレサマを理解できるはずがないだろう)

住む場所が違えば、肌の色も信仰する宗教も、価値観もまったく異なる。

ましてや人と悪魔が、分かり合えるはずもない。

石動への反感を強めつつ、ハリーの孤独の夜は過ぎていくのだった。



## 第9話 ヴオートウミラの穏やかな日々、悪魔の流儀

### 治療の翌日

「ふわあ、よく寝た。ああ……」

流石に付き合ってもいない男女が、1つの部屋に泊まるのはまずい。

ということで石動が目覚めた後、彼女は青年に部屋を譲り、別の部屋を借りた。

ふわふわした柔らかいベッドに包まれ、心地よく眠れた青年は、急いで旅の支度をする。

(忘れものはないかなあ)

腰にぶらさげるランタン。

中身がほぼない巾着袋。

携帯食料の乾パン。

もしもの時の塗るタイプの傷薬。

護身用の杖と防具。

替えの服を数セット。

これだけあれば充分だろう。

冒険の準備を済ませて扉を開けると、ぼったり出会った直美は呆れ顔で彼を見つめた。

「……寝癖すごいわよ。みつともないから髪型くらい整えて」

「そんなにひどいの？ 直美さんは大袈裟に言うから……本当だ！ これじゃウニンゲンだよ！ ガンガゼ男だよ！」

「……そういうのいいから髪をとかして。櫛、貸してあげるから」  
手鏡を手渡された彼は、自分を見る。

するとウニの棘のように逆立っているではないか。

あまり身嗜みに気を遣う方ではないが、これで外を出歩いたら、同行する二人が笑い者になってしまう。

直美の言う通り、櫛で髪を梳(す)いていると

「ウ、ウニンゲン！ ってユウさんじゃないですか」

顎を外した猫のような間抜け面をした英子が、石動に向かって叫ぶ。

初対面は怖いぐらいのしつかりものという印象で接しづらかった。けれど良くも悪くも年頃の少女らしい一面を見れて、正直彼は安堵する。

仲良くなれそうだと。

「おはよう、英子さん。ガンガゼと人間のハーフ、ユウだよ。今は針を捌いてる最中で危ないから近寄らないでね」

「はい。ユウさんって面白い方ですね」

「ただ、だらしなだけよ、英子さん。一緒に付き合う気持ちも考えて」

呆れた直美の横で、英子はニコニコと微笑む。

今の空気なら、昨日の不法法を許してくれるかもしれない。

石動は意を決して

「英子さん、昨日はすいませんでした。でも何故怒らせたのか理由がわからなくて。もし教えてもらったら、その話題はしませんから」  
そう切り出すと

「……いえ、私の方こそごめんなさい。心配していただいたのに、失礼でしたね」

理由は言わなかったが血が昇ってしまつて、うっかり漏らした言葉なのだろう。

思春期の子供は、少なからずこういう部分がある。

仲直りしたのを見計らい、直美は

「ま、二人が仲良くできそうだよ良かったわ。例の場所は距離があるし、ゆっくり近場を見て回りますよ」

周囲を散策しようと提案してくれた。

会ったばかりの英子と親密になる、またとない機会。

石動は直美の計らいに感謝しつつ、王国の大通りを見渡してみる。

指から火や水を出す、手品師のような人物。

ハープを弾き、唄で歴史を語り継ぐ吟遊詩人。

土地勘もなく言語もわからない青年にも、目に映る王国の人々は楽

しげで、こちらまで気分が乗ってくる。

「王国はどう？ 良くも悪くも刺激的でしょ」

「うん。多少は慣れたかな……いろいろあったけど、王国の人たちは嫌いじゃないよ」

「夜は危ないので出歩けないですけど。あれ、あのお店は」

そういうと英子は、一点を見つめる。

招き猫のような場違いな物に、五芒星のあちこちに星座の記号のよ  
うな模様があるタリスマン。

店先に置かれた品々に統一感はあるでなく、何の店かさっぱりだ。

しかし何かに惹かれたのか、英子は中の様子を覗き込む。

「直美さん、ここはどういうお店？」

「国内外から工芸品を取り寄せた土産店ね。興味があるなら見てみま  
しょうか」

「はい」

店内に進むと木製の棚の上に置かれた、クリスマスに飾るリースの  
ような、松ぼっくりとドングリの冠が目に入る。

英子がそれを頭に載せてみると、ピッタリとハマる。

「英子さん、これが気になってるの？」

「ええと、はい。どんぐりって可愛いですよね」

「可愛いものがお好きなんですネ」

値段はいくらくらいだろう。

巾着袋をまさぐるも、金貨2枚しか持ち合わせがなかった。

なけなしのお金を使ったら、冒険に必要な物資の調達もままならな  
くなる。

直美に借金がなければ、彼女に小物の1つくらい買ってあげたかつ  
たのだが。

困り果てた青年が、様子を伺っていると

「じゃ、買ってあげよっか。仲間になった記念ってことで」

「わあ、ありがとうございます。大切にしますね」

「よかったね、英子さん……一応聞くけど、ツケじゃないよね？」

「あ、当たり前じゃないの」

石動の問いに、直美の額から汗が垂れていた。

「何かあったんですか？」

「僕、直美さんに勝手に借金させられたんだ。今着てる装備一式」

「え、それはひどいですね」

「直美さんは怒らせない方がいいよ」

笑いながら昔話に花を咲かせると、直美はハリセンボンのように顔を膨らませた。

「ひ、人聞きが悪いわね！ 私が立て替えなかったら、あなたが困つたのよ！」

「まあ、そうなんだけど。成人した英子さんは、お金の管理はしっかりしてるでしょうけど」

「……ええつと、アタシ未成年ですよ？」

「言つてなかったけど、英子ちゃんはまだ高校生らしいわ」

驚きのあまり、石動は目薬を差した後のようにしきりに瞬きする。

これだけ落ち着いた娘が、未成年とは。

「てつきり直美さんと同じくらしいの歳かと。あ、ふ、老けてるつて意味じゃないですよ。年齢の割に落ち着いたお嬢さんだなんて……」

失言したと思い、石動は取り乱し、慌てて言葉を付け加える。

また喧嘩になったら、今度こそ取り返しがつかない。

声の上擦る石動がおかしかったのか、英子はクスクスと笑つていた。

「気にしてないですよ。褒められ慣れてないので、変な感じがします」

「ちなみに私は現役の大学生なの。英子さんは最年少なんだから、私たちに遠慮なく頼つてね」

「ご親切にありがとうございます」

直美に向けて、英子は頭を下げた。

まだ笑顔が硬く、ぎこちない。

ここで緊張をほぐせれば、一気に打ち解けられるかも。

「ホントに彼女は頼りになるんだ。困ったら直美さんをお願いしようね、英子さん。神様、仏様、直美様と唱えたら救われるよ」

開いた掌を擦り合わせ、神社で願い事でもするような仕草で、石動

は直美を拝む。

その冗談に英子は、口許を隠して上品に微笑んだ。

少しは距離を縮められたか。

石動もつられて笑った。

「あなたは私に頼らず、自分でやりなさいよ」

「えー、僕と英子さんと扱い変わらない？」

「あなたが一番年上なんだから、しっかりしなさいよ、まったく」

「……ハハハ、すいません」

「騒がしい人たちですね。でも仲良くできそうでした」

「普段はもうちょっと冷静なだけで。彼、無理して明るく振る舞っているのかもね」

直美の鋭い一言に、石動は愛想笑いをやめた。

人というのは案外見ているものだ。

バレているなら、誤魔化してもしょうがない。

「おっしゃる通りです。慣れないことはするもんじやないね」

「はしゃいだりするの、似合っていないわよ。ドンと構えてなさい。落ち着いたあなたがいると、気持ち引き締まるから」

「買っていただき、ありがとうございました」

「直美さん、ハリーを探しにいこう。戦力にはなるだろうし」

会計を済ませて店から出て、邪悪な悪魔の名を口にすると、直美の顔は途端に険しくなる。

快活で頼もしかった彼女の鬼気迫る面様に、英子は恐る恐る二人に訊ねた。

「あのく、アタシたちはどこに向かっているんでしょうか」

傷だらけの大男がいなかったかと、石動と直美は手当たり次第に宿屋に聞き回っていた。

仲間の彼女にはキチンと話すべきだ。

だが悪魔が仲間と耳にして、英子はどんな反応をするだろう。

それを考えると、迂闊な発言はできない。

「ええっと、悪魔みたいな奴を迎えにくんだよ。それでも僕とは切っても切れない関係なんだけど」

「ユウさんが悪魔みたいな方と、お友達なんですか？」

「友達というか戦友？ 運命共同体？」

石動の説明を、英子はぼかんとしながら聞いていた。

これだけの説明で納得しろという方が無理だ。

直接本人に会えば、どんな奴かはわかるはず。

道中に会話を挟みつつ、1軒また1軒と数をこなしていくと、やっと僕は手掛かりを掴んだ。

「すみません。人を探してるのですが」

「大変だね、どんな人なの？」

「傷だらけの高身長な男んだけど」

「あ、あの人かな。でも似たような男の人って、冒険者だと珍しくないから」

唯一話のできる直美が現地の住民に聞くも、反応は芳しくない。

もっと具体的な特徴を挙げれば、いるかないかハッキリする。

宿屋でも傍若無人に振る舞っているなら、こんな風に質問したらどうか。

「口も性格も人相も悪くて悪魔みたいな奴なんですけど、って訊ねてみて。流石に全て当てはまる奴は限られてるよ」

「いいわね、聞いてみましょうか」

「ひ、ひどい言い様ですね。お仲間のはずなのに」

英子は啞然としながら、直美と石動のやりとりを口に挟む。

直美が饒舌な英語で、少女に先ほどの石動の発言を伝えると

「あ、あの人か！ 私が親切にしてあげても、ずっとツンツンした態度なんですよね。可愛げがなくて困ってるんです。私の愛馬のサーテインみたいに、もっと可愛くしてください」

少女は心当たりがあるようでハリーへの愚痴をこぼしつつ、馬小屋を指差した。

「どうやら、あちらで寝泊まりしているらしい。」

「無茶難題を押しつけられたね。あいつを可愛くしろなんて無理だよ。仏の御石の鉢、蓬菜（ほうらい）の玉の枝、火鼠（かそ）の皮衣、龍の頸の玉、燕の子安貝を全部集める方がまだ楽なんじゃない？」

「可愛くないから困ってるって……不思議な方ですね、あの人」  
直美から少女の発言を翻訳してもらおうと、二人は思い思いに感想を漏らす。

「何で急にかぐや姫の出した難題を。ま、現代人の感覚とヴオートウミラで暮らす人の考えることは違うわよ」

少女に案内されるまま馬小屋に着くと、馬の糞尿の悪臭に鼻をつまむ。

ここに悪魔がいるのか。

傷がついた鎧を身に着けた稼ぎのよくなさそうな冒険者ばかりで、それらしき人物は見当たらないが……。

ちやうど入れ違ったのかもしれない。

気落ちした青年が溜め息をつく

「なんだア、その棒切れみたいなのはよ。オレサマを始末するための刺客かあ？ やられる前にやっちまっかっていいか、主サマよオ」

藁を藁虫のように被った悪魔はそこから顔を出すと、開口一番悪態をつく。

初対面の英子を見るや否や威圧するハリーに、彼女は石動の背中に隠れ、ガタガタと震え出した。

（高身長で、しっかりもののお嬢さんかと思ってたけど、こうしてみると小動物みたいだ。可愛いな）

それを見た青年は頬を緩め、彼女を眺めた。

「なっ、なんなんですか?! あの人は一」

「ごめんね、英子さん。柄が悪い奴で。僕から言っただけだから」

「え、大丈夫ですか。不良みたいだし、ユウさんが暴力振るわれるかも……」

不安げな英子を宥め、彼は前を向いた。

「失礼だよ、ハリー。僕らを治してくれた娘だ。悪魔っていうのは、恩人に礼儀知らずな態度を取るのかい？」

「……柄の悪いあなたを治した記憶はないですけど。それより藁が……」

英子は指摘すると、さらにハリーは怒鳴り散らす。

「あの女が藁大增量でくすとか抜かすから、オレサマがこんな目に……」

「なんだかよくわからないけど、たぶん君が悪いぞ。反省した方がいい」

「ハア?! 話も聞かずに悪者扱いかよ?!」

「ああ、君が悪い」

一方的に悪者と決めつける青年に、悪魔は激昂しながら言い返す。

「な、仲良しなんですか？ ユウさんとハリーさん。そうは見えないんですが?」

「……私に振られても困るんだけど。いがみあってるし、不仲なんじゃない。用は済んだし、いきましよう」

二人を咎めると少女に一礼して、さっさと宿屋を後にする。

彼女を追いかけた一行が王国の外を出て目的地へ向かう道すがら、英子が仲間となった経緯を直美が説明すると

「なるほど、命の恩人ってわけか。礼はいつておく。アンタに借りた恩は必ず返すからな。ちいと待っててくれや」

悪魔は悪魔らしくない言葉を吐いた。

「悪魔の癖に、妙に義理堅いな。英子さんに危害を加えたら承知しないぞ」

「借りを作るなんざ、悪魔はやらねエ。他人からの束縛は、悪魔の自由に反するからな」

今まではただの無法者だと思っていた悪魔オールド・ハリー。

そんな悪魔にも、悪魔なりの流儀があるようだ。

（人なんかより、人情に厚い一面もあるんだな。僕がこの悪魔を理解できる日が、いつかくるんだろうか）

辺り一面を銀世界のように染めるマーガレットの花畑を見つめながら、青年は悪魔の言葉に思いを馳せていた。



## 第10話 悪魔アモン、デモンズ・コマンダー、真理の大穴

無闇に探しても、ヴォートウミラから脱出する方法を探すのは困難だ。

一行は日くつきの土地に注目し、そこを重点的に調べることにした。

死者の魂眠る霊拝の地モルマス。

殺人、誘拐、盗人のねぐらなどなど、黒い噂の絶えないマレフィキウムの古城。

金にがめつい化け物に占拠されたという、テラ・ウルム鉱山。

悪魔や呪術の叡智が集結する魔女たちの秘境、ゼノス・トウルティイ。

そして僕らが拠点にしているフィリウス・ディネ王国にも、少なからず悪魔の目撃情報が報告されていた。

人知の及ばない土地にこそ、答えが眠っているやもしれない。

石動の案を、怖がりの直美は意外にもすんなり受け入れた。

直美も調べる必要があると頭で思いつつも、乗り気ではなかった。

だが青年や仲間が同行するならば、考えを改めたようだ。

(とはいえ直美さん、怖いものが苦手だからな。適度に緊張をほぐしてあげないと、戦力として計算できないな)

これから赴くのは霊拝の地モルマス。

王国から少し離れた墓地で、それだけなら普通の墓地だ。

しかし霊に取り憑かれる、あの世に導かれるなど真偽不明な噂が絶えず、日くの多い場所らしい。

「直美さん、本当に大丈夫なの？」

「心配は不要よ、もう決めたんだから……ねえ、あそこに誰かいない？」

水晶玉とお婆さん？」

そういつて直美は前方を指差す。

だが石動の瞳には、どこまでも同じ風景が続いている。

「いや、誰かいる？ わからないけど」

「そんなつまらない？ つかないわよ。もつと近寄ってみて」

指示通り指差す方へ暫く歩くと、確かにそれは老婆の姿をしていた。

椅子に座り、黒のテーブルクロスの上に水晶を置いた老婆が、辺鄙（へんぴ）な場所で商売をするとは考えづらい。

だとすれば、何故ここに？

のどかな花畑に人間が佇む不気味な風景に、一行は肝を冷やす。

「な、なんですかね。あの人」

「……避けて通る？」

「いや、別に変な人って決まったわけじゃ……」

人間の三人が言い合っている最中

「いいじゃねエか。あのババアが人でも化け物でも。オレサマに敵対するってんなら、ブチのめすだけよ」

立ち止まる石動らを置き去りにして、ハリーは巨大な斧片手に突き進む。

頼もしい足取りに鼓舞された三人は、彼につられて老婆に向かって歩いていく。

生唾を飲み込んで、石動は老婆に近寄っていった。

目深に被ったローブで表情が見えないのが、いつそう恐怖を煽る。

長身で威圧感のあるハリーが老婆の前を歩いても、微動だにしない。

やはり警戒しすぎなだけだ。

安心しきった青年が通り過ぎようすると

「おお、悪魔と魂が一体化しているな。面白い魂を持つ青年だよ」  
「?!」

黙って通り過ぎようとした瞬間、急に老婆が呼び止める。

戯言と聞き流すには、あまりにも的確に自分の現状をドンピシャで言い当てており、驚きのあまり声を出すことすらできなかった。

「あなた、何者!？」

「ほう、面白エ。やっぱり人間じゃねエな、アンタ。正体を現しな」

「……俺ほどの悪魔になると、魂が見えるんだよ。お前らの全く同じ魂が、ね」

「人じゃないのか?!」

ローブを脱ぎ捨てた悪魔は、一瞬にして腰を曲げた老婆から、中肉中背の黒の燕尾服姿になる。

みるからに危険な姿をしたハリーと違い、王国を歩いていてもおかしくない紳士然とした悪魔に、一行は呆気に取られる。

オールバックの白髪が特徴的な齡20歳前後の男の形をとると

「お待ちしておりました。お坊ちゃん、お嬢さん……なんてな」

悪魔は執事のように振る舞ってみせる。

いきなり老婆が成人した男になる光景に、英子は目を白黒させて現実が受け入れられない様子だ。

「俺の名は悪魔アモン。邪霊六座(じゃれいろくざ)のサタナキナ殿に仕える、三悪魔の一柱だ。よろしく頼むよ」

アモンとはフクロウの上半身に蛇の下半身の挿絵が有名な、高名な悪魔だ。

エジプト神話の神アメンとの繋がりが深く、アモン・ラーの名でも知られている。

「アンタ。コイツとオレサマの血と魂の契約について知ってそうだな」

「どうにかして、元に戻せませんか」

「お前ら、案外ウマがあうんじゃないか？ まるで同じ魂が2つ存在するように見えるぜ？」

アモンが無邪気に笑う側で、直美と英子は二人以上に取り乱していた。

「あ、ああああ悪魔と一体化って何よ！ そんなの聞いてないわよ、バカア!!」

「どういうことですか？ 悪魔って比喻なのかと思ってましたけど」

「話すと長くなるんだけど、聞いてくれる？」

面倒なことになった。

そう思いつつも、石動は笑いを噛み殺していた。

この世の終わりのような顔の直美に、笑いをこらえるのに精一杯だったのだ。

暫くして落ち着いてから青年は言葉を選びつつ、事のあらましを伝えていく。

「……と、いうわけなんだけど」

「なるほど。この悪魔さんとは、そういう因縁が……」

「なんでよりによって、あなたが口も性格も人相も悪い、こんな奴と……」

「嬢ちゃん、本人の前でよく言えるな」

「ユウもそう言ってたわよ」

「おい、ふざけんよ。後でシメるぞ、テメー」

（そもそも君が原因なんだけどな、僕が君を憎んだのは）

歯を剥き出しにして唸るハリーに、石動は何か言いたげなじとつとした目つきで、彼を見遣る。

「それより、ずいぶん落ち着いてますね。ハリーはこんなことになって驚いてましたけど。けっこう貴重な体験なんじゃないですか？」

「別に珍しいことじゃないからな。驚きはしないさ。少なくとも俺は何度も見た覚えがある。悪魔としての年季の違いだな」

何かを悟ったように二の句を継ぐアモンに、石動は訊ねた。

この状態を、何かを知っているかもしれない。

「こういうことって、結構あるんですか？」

「大方の想像はつくぜ。アンタ、悪魔に自分と同じ苦しみを味合わせたいって願ったろ」

心を見通すかのように、アモンは言い放つ。

（心を読まれた?! どうなってるんだ?）

啞然とした彼が口をポカンと開くと、その表情を見て、アモンはニヤリと口角を吊り上げる。

凶星だろ、と言いたげに。

「どっ、どうしてわかったの?」

「単純な話さ。時々いるんだよ。悪魔との契約でヤケクソになって、似たような願いをするやつが。そして一部の奴らは、悪魔と一体化す

るのさ」

「……」明察の通りです、あはは」

「笑いごとじゃねえよ。どうやったたら元に戻れるんだ、アモンさんよ」

ハリーは苛立った様子で貧乏揺すりをしつつ、答えを急ぐ。

だが

「元に戻す方法か。俺は知らないし、知っていても教えないな。それをネタに、アンタとその悪魔をこき使えそうだからな」

アモンは少年のような無邪気さで即答した。

嘘についても彼に得はなさそうなので、どうやらアモンは本当に元に戻す手段を知らないのだろう。

これ以上問い詰めるのは無駄と判断し、石動は

「いろいろ教えてくれてありがとう」

そう伝えると

「悪魔に礼を言うなんて、おかしなやつだ。だからこそデモンズ・コマンダーになるのかもな。人にも悪魔にも平等な態度、俺は嫌いじゃないが、他の連中にはしない方がいいぜ」

よくわからない言葉を用いて、青年に悪魔との関わり方について忠告する。

彼の口から出たデモンズ・コマンダーとはいったい。

「ええと、横文字はよくわからなくて。なんですか、それ？」

「悪魔と心通わせ指揮する者を、俺たちの間ではそう呼んでる。こう言えば理解できるか？」

「悪魔を指揮する者……ですか？」

「コイツがそんな器には見えませんが……本当なのか、アモンさんよ」  
ハリーが石動に疑いの目を向ける。

「君は勘違いしているかもしれないが、人というのは与えられた地位や肩書きで如何様にも変わるものだよ。覚えておくといい」

「そんなもんですかね？」

アモンに諭され、ハリーは口を尖らせる。

納得してはいないが上司であるアモンの台詞を、なんとか理解しようとして苦心しているのが見て取れた。

「誰もがデモンズ・コマンダーになれるわけじゃない。俺は結構、君を評価してるよ。石動。特別な奴だとね」

「……特別」

「特別な人間になりたいなんてのは、ありふれた感情だろう。それ故、他人には苦しみを理解されない孤独の覇道を進むかもしれないがな」  
誰にも理解されない苦しみ。

現実でもネットでも、無職というだけで見下され、蔑まれてきた。

犯罪者予備軍と罵倒してくる世間や社会が、敵のように見えた。

僕なりに人に理解されない苦渋は、散々味わったつもりだ。

「人は生まれた時から人は孤独。理解しようすることはできても、真に通じ合うのは不可能だよ」

「ずいぶん達観してるな。悪魔と共に歩む者よ。覚悟が決まったその時、再び俺と君を運命が巡り合わせるだろう。楽しみだ」

アモンは高らかに叫ぶと、天に両手を掲げる。

悪魔ハリーと契約を結び、悪魔アモンと遭遇した。

これからの冒険に幾多の悪魔の存在が関わると思うと、石動は暗雲立ち込める未来を憂いたくなった。

「ちなみに他にはどんな人がデモンズ・コマンダーに？」

「黒魔術に精通する者、知恵を追い求める者、社会を憎悪する者。これらに該当する人間はなりやすい。盲目的に神々の規範に従わない人間は、悪魔に等しいのさ」

「ようは反社会的な人間ってことですか？」

「超単純に要約すると、そうなるかもな。ま、それでも俺は歓迎するぜ。狡猾な悪魔ユウ。仲良くしようじゃないか」

そういうとアモンは、手を差し出す。

握手してくれ、ということだろうか。

「狡猾な悪魔って……」

「この前王国の少年が、アンタに言ってただろう？ 真似してみたんだ」

「……そういう言い方、バカにされてるみたいで不愉快なんですけど」

「ああ、悪かったな」

青年の言葉を、アモンは軽く受け流す。

「これからどうするんだ、アンタら」

「モルマスにいかうかと」

「そうか。俺も少しだけアンタに協力してやるよ。狡猾な悪魔を不快にさせた詫び代わりにな」

「モルマス、マレフィキウム、テラ・ウルム、ゼノス・トゥルティ、フィリウス・デイネ。曰くつきの場所巡りで、脱出の糸口が見つかればいいけど」

「おやおや、とっておきの場所を忘れてるぜ」

アモンは直美の発言に口を挟む。

悪魔の一言に眉間に皺を深く刻み、彼に詰め寄った。

「どこよ、そこは」

「……真理の大穴。この世界の本質に辿り着くために、迷い人が必ず訪れるであろう場所さ」

「それはどういう……」

その場所に訪れて、何があるのかもわからない。

けれども彼の言葉には、どこか真実味があった。

「さあね。俺の言葉を信用するか。それはアンタらが決めればいい。なんたって俺は悪魔だからな。あんまり鵜呑みにすると、足元掬われるかもよ」

「回りくどいわね、こっちは早く元の世界に帰りたいのよ。その真理の大穴って場所がそんなに重要なら、さつさと案内しなさいよ！もしだんまりを決め込むって言うなら、力づくで……」

軽薄な態度のアモンに腹が立ったのか、直美は剣の柄（つか）を握り締めた。

だがその瞬間、悪魔は彼女の手首を掴み、鞘から抜くのを阻止する。「野蛮だねえ。俺は何もしてないだろう。いきなり斬りかかろうとするなんて、どうかしてるんじゃないか？」

「クッ……」

直美は血管の筋が浮かび上がるほど、手に力を入れていた。

腕を震わせる彼女とは対照的にアモンは微動だにせず、彼女の反撃を容易く止めてしまった。

——力の差がありすぎる。

戦闘の素人の青年の目にも、実力の違いはハッキリしていた。

しかし直美は、諦めようとしないう。

「真理の大穴は死地と呼ばれてる。今の喧嘩っ早いお嬢さんの実力じゃ、いくつ命があっても足りないぜ」

嘲笑するかのような薄ら笑いで、アモンは二の句を継ぐ。

「止めはしないよ。君の魂は上質だ。悪魔にとっては最高の馳走になる。だから生き急ぐのも勝手にしな」

「それでも私は止まれないのよ！ 教えなさい、アモン！」

「……悪魔は気まぐれだ。今の君が五体満足で立っていられることに感謝するといい」

直美を生かしたのは、単に機嫌がよかったから。

その事実とヴォートウミラ脱出のスタートラインにも立てていない現実には、彼女は膝から崩れ落ちる。

「ま、悪いようにはしないさ。ユウと一時的に契約を結んでもいい。悪魔にとって契約というのは重要な意味を持つからね」

悪魔にとって、契約は術者に服従するのに等しい。

何の利益もない契約を受け入れる時点で、彼に僕らを陥れる気はないのだろう。

少なくとも今は。

「アモンからは敵対心が感じられない。なら争う理由もないはずだ。直美さん、頭を冷やした方がいいよ」

「君とは会話が手短かに済んで助かるよ。次は二人きりで、ゆっくり話したいものだね。ククク……」

強者特有の余裕とでも言おうか。

直美に襲われても取り乱す様子もなく、淡々としている。

彼の発言の真偽は不明だが、藁にもすがりたい自分たちには、従わざるを得ない。

掌で転がされる感覚というのは、こういうことをいうのかもしれない



い。

「私は早く帰らなきゃいけないのよ。そしてあの子に……！ あの子に……！」

「真理の大穴は負の感情が渦巻いている。君の見せかけの強がりはずぐにボロがでるよ」

直美の叫びに掻き消されるほど小さな声量で、アモンは彼女を戒める。

直美にとって、あの子がそれほど大事な存在だったのか。

石動は直美の過去に考えを過らせつつも、背中を丸めた彼女の肩を撫で、心労を労った。

「少し休息を取ってからモルマスにいこう。しっかりものの直美さんがいなかったら、僕たちの冒険は成り立たないしね」

「アタシは役に立たないかもですけど、力になれることがあったら言ってください！」

励まされた彼女は立ち上がり、仲間たちに目を向ける。

「ありがとう、ユウ、英子ちゃん。励ましてくれて」

「悩みがあるなら時間に余裕のある時にでも聞くとよ。他人の僕になら話しやすいかもだし。もちろん君がよければだけど」

「……ううん、いいわ。話したって、なんにもならないから。あの子のことは……」

「いい隣人に恵まれたな、ナオミ」

アモンは拍手しつつ、迷い人の友情を褒め称える。

「絆を深めた後でも遅くはない。一人の力で乗り越えられるほど、真理の大穴は甘い場所ではないよ」

「生き急ぐのも勝手にしななんて言ったのに、忠告するなんて、悪魔らしくない」

「その娘が君らの中で最も強いだろうか？ その子に先立たれて、貴重なたデモンズ・コマンダーに死なれでもしたら俺が困るんだ。さ、無為な時間を楽しもうじゃないか」

「ありがとう。直美さんを止めてくれて。暴走しがちだから、彼女は」  
「礼ならいいさ。俺は自らの目的と信念に基づき、行動したまで」

アモンは悪魔だ。

腹に一物かかえているのは間違いないだろう。

だが今は手を取り合い、協力できる。

青年はアモンに感謝を述べると、悪魔の隣を歩いていくのだった。

## 第11話 死を視る少女、悪しき魂の禁足地

王国の城壁の草原を西へ進むと、ぽつんと佇む霊拝の地モルマスの巨大な石碑が目に入る。

天涯孤独の死者やモルマスへの埋葬を望んだ者の遺体が、この地に送られる。

中でも目を惹いたのは石碑を包み込んで覆うような、網目模様が特徴的なドーム状の建造物だった。

迷い人が見たら、蜘蛛の巣や丸屋根を連想するだろう。

直美が言うには、これは糸を横したものらしい。

男女の縁を運命の赤い糸と形容したり、文豪の作品に蜘蛛の糸が登場するなど、人生や運命を糸に例えるのは世界各地にありふれた考えだ。

ギリシヤ神話では人の運命を司る三女神、クロト、ラケシス、アトロポスが存在している。

モルマスの建造物もヴォートウミラの神々に影響され、作られたのだろうか。

ここにはどんな文化や風習、風俗があるのかと、石動は知的好奇心をくすぐられていた。

「呪われたりしないでしょうね。も、もちろん信じてないけど！ オカルトなんて！ 科学で証明できないものなんて、この世にはないから！」

「言ってしまうえば、ただの墓地だ。特に怖いものはないはずだよ」「ならいいけど……」

「道中、魔物に遭わなくてよかったですね。あそこに骸骨が……」

英子が指差す方向を見るや否や、直美は雄叫びを上げる。

骸骨がレンガの建物のあちこちに立て掛けられ、こちらを凝視しているではないか。

怖がりな直美でなくとも、小心者なら逃げ出したくなるような光景を、石動と英子は呆然と眺める。

「ヒイヒイイツ!!! なんてこんな所にあるのよっ！」

「祭りや教会の装飾用かもしれない。世界にはそういう場所があるよね？」

「……ああ。セドレッツ納骨堂なんて有名よね。脅かさないでよ。心臓が止まるかと……」

冷静に分析した石動が、自らの考えを言葉にすると、彼女は普段の落ち着きを取り戻した。

表情がコロコロ変わって、見ている飽きない。

男児が好きな女の子にイタズラするような、加虐心をそそられた青年は、直美が安堵した刹那

「もちろん死者がひとりでに動いた可能性も。魔法のある世界だし……」

反応を見たいがために、わざと驚かす。

「ひゃあああああ、バカア！ ここから離れましよ、今すぐに！」

「直美さん、すっかり！ ユウさんもからかわないで！」

「ごめんごめん。でも何かしら意味があつて、ここにあるはずだ。それだけは心に留めておいてほしい。文化まで否定するのはダメだよ」  
「あ、あなたのせいでしょ！ ま、まあ、文化や歴史を否定するつもりはないわよ……怖いけど」

からかわれた直美は文句を言いながらも、彼の言葉を受け入れる。

日本のようにしめやかに故人を見送る国もあれば、メキシコのようにカラベラ（骸骨）を着飾り、祭りを楽しむなど、死生観は様々。

ただし残された者が死者を送り届け、故人と区切りをつける文化は、いっつこの時代でもあるのだ。

偉人でも悪人でもない、名もなき無数の人々が積み上げた歴史と文化に敬意を払いつつ、僕らはモルマスへと入る。

「ククク、落ち着く場所だぜ。恨み、妬み、憎しみ。人間共の邪悪な波動を感じる」

「非業の死を迎えた魂の狂想曲が心地よいな。この世から消滅させて、俺が楽にしてやろうか」

悪魔二人は物騒な発言をしながら、辺りを見渡す。

どうやら悪魔にとっては、居心地のいい場所のようだ。

今の所、悪事を働こうとする気配はなかった。  
なら別に好きにさせておけばいい。

視線を直美に戻すと、彼女は道端の噴水のあたりを凝視していた。  
彼女をじつと見てみると、直美の表情はみるみる内に顔が曇り出  
す。

そして次の瞬間

「なんでこんな場所に。もしかしてあなた……なの……返事して！」

唐突に直美は虚空に向かって叫び出す——まるで何かが見えて  
いるかのように。

何が起こったのだろう。

この場所が彼女に影響を及ぼしたのかもしれない。

土地勘とモルマスの知識がない青年は、側にいた知的な悪魔アモン  
に訊ねる。

「何か知っているかい？」

「モルマスではな、たまに視てしまう奴がいるのさ。死者の魂をな」

「つまり直美さんは亡くなった誰かを……」

「だろいな」

アモンとの会話を交わしていると、直美はその何かを一心不乱に追  
いかけていく。

否、僕らには彼女が突然走り出したようにしか見えないのだが、彼  
女には死者の魂が——今は亡き大事な人が視えているのだろう。

「逃げないで、謝らせて！ 私は陽（はる）、あなたを……！」

「な、直美さん！」

見失わないように息を切らして追いかけた青年は、直美を呼び止め  
た。

振り返った彼女は唇を噛み締めて、今にも泣き出しそうになるのを  
堪えている。

「私、あの子にどうしても……！」

「ここは魂の安息地らしい。つまり、その子はもういないんだよ。直  
美さん」

「……わかってるわよ」

呼び捨てで女の子の名を叫んでいたのを見るに、年齢の近い親しい友人が夭逝したのだらうと石動は察した。

そんな彼女に、祐は辛い現実を突きつけた。  
消え入りそうな小さな声に、いつもの自信はない。

「私が……殺したようなものだから！ だから許されるはずなんてないけど！　せめて、あの子に……」

感情の昂ぶった直美は、切れ切れに言葉を漏らす。

——彼女が人を殺した?!

勿論比喩なのだろうが、今は彼女と冷静に話したい。

「ええと、あのその……とりあえず休憩します？　なんだか疲れちゃって〜」

「英子さんの言う通り、少し休もうか」

石動が言葉に詰まると、英子がわざとらしく疲れたように振る舞う。

助け船を出した彼女に同調して、石動は屋台の近くにある椅子に座るよう促した。

「ええと……とりあえずお酒でもどうぞ。嫌なことを忘れさせてくれるかも」

「……」

何かを飲めば、気分が落ち着くかもしれない。

青年が酒の入った水筒を手渡すも、直美は黙り込んで言葉一つ口にしない。

気落ちする彼女を、どうすれば励ますことができるだろう。

とにかく悩みを聞かないと、相談に乗ることも不可能だ。

「僕の発言が正しければ、頷いてくれますか？」

石動が問いかけると首を縦に振る。

どうやら質問には応じてくれるようだ。

その後石動たちは、彼女の過去を知った。

直美とその子は、同じ高校に在学していた友達なこと。

気の強い彼女の数少ない理解者だったこと。

そして最後に自ら命を断ったこと。

同じ目的を持つ利害関係で協力する者同士で、僕らは互いに多くを語らない。

苦悩を相談して説教されて傷つくことも考えれば、打ち明ける相手は選ぶべきだ。

そもそも人に話して解決なんて悩みなら、ヴォートウミラにはやってこないだろう。

安易に同調しても、彼女のためにはならない。

かといって、更に苦しめるのも気が引けた。

「直美さん、君は納得いくまで自分を追い詰めた方がいい」

「……」

「ユ、ユウさん、そんな突き放した言い方しなくても」

石動の言葉を英子が遮ろうとするも意に介さず、彼は喋り続ける。

英子の発言は一理ある。

人の生き死にが関わるなら、もっと丁重に気を遣うべき問題だろう。

あまり解決を急ぐと、逆効果になる。

「それがその子への償いだし、直美さんが自分の悩みと折り合いをつけるのに、絶対に必要になる作業だよ。僕はそう思う」

「……そうかもね、あなたが正しいのかもね。もっと考えてみる。あの娘への償い方を」

彼女との信頼関係は、今までのやりとりでそれなりに築けたはず。

しかし直美の心の問題に踏み込むのは初めてだ。

初めはどうなることかと思ったが、芯の強い彼女ならいずれ自分なりの答えを出すだろう。

「お嬢ちゃんの過去は知らねエが……人が人を殺すのは当たり前だせ？ そんな深刻になんや」

ハリーの神経を逆撫でするような発言に、直美は彼に軽蔑混じりの眼差しを向ける。

目の前の悪魔は殺しを何とも思っていない。

石動が殺されかけたあの日の夜、悪魔という存在が人とは相容れない生物だと彼女は理解した。

「しつかりしないよね。ユウは頼りないし、英子さんにはいいとこ見せたいし。悪魔のそいつらは信用ならないし」

「……直美さんにはお世話になりっぱなしだね」

「ええ。本当にあなたはダメな人だからね」

直美は頬を両手で叩き、自らに喝を入れる。

冗談っぽく微笑む彼女の気丈さに、僕の方まで元気を貰えた気がした。

「店に悪いし、何かしら買っていきましようか」

「そうしましよう！」

「ハリーとアモンは席を見張っててくれ。君たちは何を食べたい？」

訊ねると

「オレサマは腹の足しになりゃいい。あと寒いから温まる食い物をあ  
るだけ買ってこいや」

「羊肉料理があれば、それにしてもらおう。なければ不要だ。人と  
違って、悪魔にとって食事は娯楽の1つに過ぎないからな」

「食べないでいいなら、ハリーは何でそんなに食い意地が張ってるん  
だ？」

「オレサマの勝手だろうが。さっさといけや」

注文を聞いた石動に罵倒を浴びせた。

旅に出てから時間がさほど経過していないため、ハリーとアモン以  
外の面々は、飲み物だけを注文する。

ウイスキーのような琥珀色の液体から発せられる、芳醇な匂いを嗅  
ぎ、青年は恍惚とした表情を浮かべる。

「……あなた、蜂蜜酒よく頼むわね」

「おじさんが甘い物好きだったらダメなの？」

言い返すと

「別にいいけど、ほどほどにしておきなさいよ。どんな食べ物でも、栄  
養が偏ると体に悪いからね」

諭すように優しく、彼女は石動に云う。

「……うん。でも水は貴重だし、お酒で水分補給するしかないから」

「私、まだ未成年なんですけど、お酒なんか飲んでいいんですかねえ



？」

酒をちびちび飲みながら、英子は二人を交互に見遣る。

命より世間の押しつけがましい道徳を優先する必要はないだろう。生きることに規程を尊ぶなどバカげている。

「林檎酒（シードル）なら度数も低いから、心配ならそれにしたらどうかな」

「そうなんですか。ありがとうございます」

「……結構あつたまるな。人間共の喰うメシも、なかなか悪くねエ」

「悪魔たるもの食事も楽しめよ。刹那の快楽に溺れるのが悪魔だろ」

こんがりと焼かれたイノブタの串焼き。

具材の原型がなくなるまで煮込まれたポターージュ。

一斤丸ごとのライ麦黒パン。

三角のチーズ。

テーブルの上に所狭しと並んだ庶民向けの料理に、青年は苦笑する。

見ているだけで胃がムカムカするほど大量の食べ物だが、香ばしい匂いは食欲を刺激してきて、石動は何度も唾を飲み込んだ。

感覚を共有しているからか、ハリーが食事をしている間、青年の体の芯はほかほかと温まる。

数十分後、綺麗に料理を平らげたハリーの酒樽のような腹を見て、一行が笑顔を取り戻すと心機一転、彼らはモルマスを調べ始める。

「ねえ、あそこは？」

「監視が厳重だから、あまりジロジロ見ないようにね。警戒されるわよ」

「ああ、そうだね」

見るなど言われると、気になってしまうのが人間らしい。心理学でいう、カリギュラ効果というものだ。

視線の先には数人のシスターが、コンクリート製の建物の前で通行の制限をしていた。

許可の降りた者には、盃に入った無色透明の液体をかけられている。

無数に積み重なる人骨で作られた扉の先には、何があるのか。眺めていると、一人のシスターが石動らの元に近づいてくる。

「何か御用ですか。見学の方は列に並んでお待ち下さいね」

「いえ、そういう訳では……」

「すっかり洗礼を受けていただきますよ。悪しき魂の持ち主は……連れていかれてしまいますから」

「どこへ？」

直美が真顔で訊ねると、修道女は無言で天を指差す。

あの世にいくとでもいうのか。

冗談ならば口許が緩みそうなものだが、能面のような無表情を崩さなかった。

石動の背筋に寒気が走る。

「……不気味ね」

「人さえいなけりや、コイツをブツ殺して無理矢理進むんだがなア」

「……ハリー、地面に這いつくばれ」

危険思想の悪魔に命令すると、ハリーはその瞬間地面に突っ伏した。

「いきなり何をしやがる！ 殺すぞ、テメー！」

「今の発言は看過できないからだ。お前なら実際やりかねないしな」

苛立ちを隠さない悪魔にも、毅然とした態度で応じる。

いきなりの大男の奇行に周囲は騒ぎ、一行に奇異の目を向ける。

（また悪目立ちしちゃったよ。こいつのせいだ）

「ケツ、テメーやりやがったな。いつか仕返しさせてやる！」

「うう、うるさい！ 僕も苦しいんだからおあいこだ！」

「……何やってるのよ。いい笑い者じゃない」

「なかなか面白い見世物だったぜ。ハリー、ユウ」

突き刺すような視線が痛々しく、青年は口ごもる。

（……こ、こなきやよかった。だから人混みは嫌いだ）

「何事ですか？ 死者の安寧を妨げるようなら、モルマスから出ていってもらいましょう」

「あなた方はここでお待ちを。どうしても通るといふなら、洗礼を受

けていただきます」

有無を言わず修道女たちは石動、ハリー、アモンの三人を睨み据える。

悪魔であるハリーとアモン、悪魔の魂を持つ石動を正確に邪悪なる存在として認識したようだ。

「しようがないよ。直美さんと英子ちゃん楽しんでおいで。直美さんは怖がりだから、ちゃんと隣に寄り添ってあげてね。責任重大だよ」

「は、はい！ が、頑張りましゅ」

「え、英子さん！ 幽霊とかが出たら、わわわわわ、私がやつつけるからあー！」

明らかに動揺している直美に、挙動不審になる英子。

墓地という場所が、彼女たちを精神的に恐怖させてしまうのだろう。

この二人を本当に、このまま進ませていいのか。

不安に駆られたが規則を守らねば、この場は穏便に済みそうになかった。

列に並ぶ彼女たちを見送ると、三人は誰からともなく雑談をし始めた。

「僕らは通してはくれないみたいだし、どうしよう」

「お高く止まった修道女様だ。腹も立たねエゼ。ただ待つのはゴメンだぜ。オレサマは」

「ユウ、ハリー、そうカツカするな……抜け道を探すのも楽しいものさ。俺たちは俺たちのやり方で侵入しようじゃないか……ククク……」

唇の両端を吊り上げ、何かを企むかの如く邪悪な微笑を浮かべる。

「何をやる気だ。アモン。人や建物を破壊するような案なら承知しないぞ」

「まあ、殺しだけはしないと約束するよ」

石動はアモンの案を、不安と期待の入り混じった心持ちで傾聴するのだった。

## 第12話 平田陽、直美の過去

「平田陽（ひらた・はる）です。肺の病気の影響で激しい運動はできませんが、皆さんと楽しい学園生活を送りたいと思っています。よろしくお願いします」

どこか品のある黒目の大きな少女が挨拶する横で、直美は頬杖をつきながら、彼女を見上げていた。

清楚な長い黒髪。

色白の肌。

おまけに病弱で、守ってあげたくなるような華奢な体。

彼女の特徴を並べていけば、男ウケする要素しかない薄幸の美女。

よく食べよく眠るスポーツ少女の自分とは、無縁の存在だろう。

「よろしくね。えっと、貴方の名前は？」

「ああ、私は向川直美ね。よろしく、陽さん」

自己紹介を終えて隣の席に座る陽に戸惑いながらも、直美は返事した。

入学から時が経ち、清掃係の皆と教室の掃除をしていた直美は眉間に皺を寄せていた。

真面目に掃除もせず、ふざけて箒を剣のように扱いながら、男子2人が遊んでいるからだ。

呆れた直美は無視して、自分の仕事に向き合っていたが箒でゴミを掃こうにも、不規則に動く男子を避けねばならなかった。

堪忍袋の緒が切れた直美は溜息を吐くと

「ねえ」

「なに、向川さん？」

「掃除の邪魔なんだけど。どいてよ」

「な、なんだよ！ 急にー！」

「じゃ、教室から出ていって」

言葉を選ばない直美と悪ふざけする渡辺は互いに譲らず、一触即発の雰囲気になりかけた。

そんな教室で陽は一人、場違いな笑顔を見せながら、二人に近寄っていく。

「なに、陽さん」

「直美ちゃん。ちよつと言いきすぎじゃない。でも渡辺くんが掃除の妨害したのは事実だから反省してね」

そういつて私を、あの子が咎める。

みんな仲良くなんて糞食らえだ。

ただ通う学校やクラスが同じというだけで、嫌いな人間と関わる必要もない。

ただ陰険な連中に目をつけられないよう、ある程度の処世術は身につけないといけないのも事実。

他人の間違いを正そうとするのは、相当勇気のいること。

生来の気の強さで、人を遠ざける私相手に言うのなら尚更だ。

それでも注意してくれた彼女の芯の強さに、直美は至らなさを素直に反省した。

「……陽さん、ありがとう。少し言い過ぎだし、あの男子にも後で謝っておくわ」

「ハルでいいよ、同級生なんだし」

ニコツと微笑むと名前の通り、陽だまりの中にいるように、私の体はじんわりと温まっていくな。

それからというもの、私たちは自然と距離を深めていった。

生まれつき彼女は病弱で、まともに学校に通えるようになったのは高校かららしい。

それを知った直美は、普通の高校生がやるような遊びを陽とたくさんやった。

学校帰りの買い食い、期末テスト前の勉強会。

部活終わりのカラオケ。

休みの日にはショッピングにもいって、高校生らしい生活を満喫した。

「ハア、喉ガラガラだよ」

「陽はカラオケ好きだよね、ホント」

「昔は止められてたの。でも唄うと生きてるって感じがして。健康にもいいみたいだし！」

瞳を輝かせて陽がいう。

ただ普通の日常を送っているだけだが、彼女にとっては普通が特別なのだ。

ここまで喜んでくれるなら、彼女を連れ回した甲斐があるというものだ。

「陽。私、こんな性格で人を遠ざけちゃうから。だから貴方と友達になれてよかった」

「私は抜けてるから。しっかりした直美ちゃんと一緒だと助かるよ」

「……そう？」

「あ、直美ちゃん照れてるう〜」

頬を緩ませた直美をからかうように、陽は頬をつつく。

「うるさい」

「すぐそうやって誤魔化すんだから〜。でも、そこが直美ちゃんの良い所だよね」

「もういくよ」

耳たぶを真っ赤にした直美は照れ隠しで、陽を置き去りにする早さで歩き出す。

彼女と過ごす毎日が楽しかった。

晴れの日は、なんだか一日明るく過ごせそうな気がした。

どんよりした曇り空も、彼女がいるだけで一筋の光が差し込むように感じた。

入学から、あつという間に卒業が近づいた3月の下旬

「直美ちゃん。私、志望校落ちちゃった」

「……え」

告げられた一言に、直美は困惑した。

彼女の発言が信じられなかった。

こういうと角が立つが、私も陽も勉強はできる方だ。

「また来年があるから。目標目指して、お互い頑張りましょうよ。予定の合う日でも一緒に遊びにいこう！ 今度の日曜空いてるからさ」

「ありがとう、直美ちゃんに相談してよかった」  
湿っぽいのが嫌いな直美は爽やかに彼女を励ますと、遊ぶ予定を決める。

落ち込む陽が元気になり、直美は思わず笑みをこぼす。  
私たちの友情はいつまでも続くと、漠然と思っていた。

しかし学業やレポートの提出など大学の生活に忙殺され、彼女に構う暇がなくなると、私は陽と遊ぶ回数が減っていった。

距離が離れれば、自然と疎遠になるのが人間関係というものらしい。

最初は陽からかかってくる電話に返事をしていたものの、月日が経過していくと彼女からの電話に対応するのも億劫になっていく。

（また陽からだ。ちゃんと返信しないと。でも今やったら勉強の邪魔になるかもだし……明日にしようかな）

つい自分に言い訳を重ね、私は陽との連絡を先延ばしにしている。

彼女にとって私は無二の友人なのかもしれない。

けれど私には——もう陽は必要ないということだ。

一方通行になった友情に、胸がチクリと痛む。

「ハア、ダメだな。陽は私の友達なのに」

部屋のベッドに寝そべり反省しながら、その日は就寝した。

それから数日後、私は無性に苛立っていた。

大学の講義を終えた後、ノートを片づけていると、男に媚びる女が流し目で嘲笑うようにこちらを見ていた。

集団で群れる人間というのは、気が大きくなるもの。

一人でいる人間を見下すようになる連中も数多くいる。

（大学って勉強する場所でしょうが！ なんなのよ、ムカつくわ！  
あんな向上心のない奴らに絶対負けない！）

怒りを溜め込みながた賃貸のアパートへの帰路につく道中、1通のメールが届いた。

陽からだ。

文章からでも育ちのよさがわかる砕けた敬語口調に、直美は一文字一文字ゆつくりと目を通す。

遠く離れた彼女の気持ちに、真摯に目を向けるために。

『直美ちゃん、元気にしてますか？』

最近是一緒に遊ぶ機会も減ったけれど、それだけ

直美ちゃんが頑張っているってことだね。

陰ながら応援してます。

P.S. 今まで電話で連絡をしてごめんなさい。

直美ちゃんの声がどうしても聞きたくて。

暇な時にでもお返事ください。

直美ちゃんの友達 平田陽より』

メールを読んで、直美の心は軽くなっていく。

陽は私を理解してくれている。

電話をしてくるのは少し困るが、しっかりと伝えなかつた私にも落ち度がある。

それに定期的に声を聞きたいのは、私だって一緒だ。

直美は感謝を伝えると、それから陽は私に勉強について訊ねるようになった。

私にも日々の生活があつて、陽にばかり構つてはいられない。

とはいえ陽との接点は現状、電話とメールだけだ。

彼女との縁を大事にしていきたい。

勉強もわかる範囲なら、真摯に応えてあげていたのだが

「この数式の解法は……陽、聴いてるの？」

「うーん、勉強しすぎたかなあ。ちよつと休憩。直美ちゃんは大学、楽

しいの。仲のいい男の子とかできた？」

勉強に身が入らないのか、彼女は度々雑談を挟もうとした。

せっかく陽が同じ後悔をしないよう、時間を割いて勉強を教えているのに。

陽とは別々の大学に進み、道を違えているとはいえ、友達だからこそ親身に協力しているのに。

私がいくら頑張つても、陽には気持ちなど通じていないのか。

彼女の呑気な態度に腹が立ち

「私に電話する時間があるなら受験勉強したら。だらけてると、また



落ちるわよ。遊ぶのもいいけど努力が足りないんじゃない？ もう切るからね」

募った苛立ちをありのままぶつけると

「……直美ちゃん、冷たくなつたよね」

「あ、陽……」

そう恨み言を言い残して、以降陽から連絡は途絶えた。

彼女も私の目に映らない所で、必死に頑張っているのだろう。

そう思い、直美自身も勉学に打ち込んでいた1年後、直美に陽の訃報が届く。

最初は何故、どうしてという感情が頭を支配していた。だが

（……私、酷いこと言つたな。あれが彼女を苦しめたのかな）

直美が何気なく吐いた言葉の責任に押し潰されるのに、そう時間はかからなかった。

受験に失敗した彼女を、私は心のどこかで見下していたのだろう。彼女なりの努力を否定する、恵まれた人間の上から目線の説教。

「直美ちゃん。ありがとうねえ。あの子の為に泣いてくれて。本当にいい友達ができて、陽も浮かばれるわ」

「……うう」

（違う、これは自分可愛さの涙……私はろくでもない人間なんです）  
葬式に呼ばれた直美は、大粒の涙を溢しながら、自らの行いを悔いた。

親交のあつた陽の両親に慰められても、勢いは止まらない。

本当に辛いのはお腹を痛め、手塩にかけて育てた両親だ。

なのに私が泣いてどうする。

陽の親に慰められる自分が情けなくなり、直美は下唇を噛みながら  
瞼を閉じる。

私はあの子に何をしてあげられたのか。

ただ追い詰めただけだ。

社会的に地位のない人間は徹底的に見下す。

現実でもネットでも、人の足りない所ばかり数えて粗探しに執念を

燃やす。

陰湿極まりない日本社会が彼女を死に追いやったのではない——  
—他ならぬ私が陽を殺したのだ。

最後に死への引き金を引いたのは、私だ。

(陽、ごめん、ごめんなさい！ 私が間違ってたの。もし許されるなら  
もう一度貴方に会いたい。会って貴方に謝りたい！ それが叶うなら  
私はどこにだって……！)

間もなく平田陽はカゲロウのように短い命を燃やし、家族や直美の  
元から旅立っていく。

骨が焼かれ、納骨される瞬間に

「直美ちゃんも、こっちにおいでよ」

彼女に呼ばれた気がして、直美が辺りを見渡すも、誰もいない。

それから数日後、直美はヴォートウミラ大陸へと迷い込んだ。

彼女の願いは奇しくも霊拝の地モルマスにて、成就するのだった。

## 第13話 不可視の神々、流浪の老神父

「ここだと少し目立つな。建物の裏手に回ろうか」

そういつてアモンは移動する。

黒ずんだ打ちっぱなしのコンクリートに青年は年季を感じつつ、アモンの背中を追う。

民衆が入口に集まっているお陰か、修道女たちの裏手への警戒が薄いようで、人は疎らだ。

「これからどうすんだ、アモンの兄貴」

「耳を貸せ、ハリー」

アモンがハリーに耳打ちすると、同時に青年の左耳に生暖かい吐息がかかり、石動は苦々しく笑う。

内緒話をしてから、悪魔たちは示し合わせたように見つめあい

「目を閉じておけ。姿を変えるからな」

彼にそう促した。

(何をやる気なんだ。あ、前にもハリーにこんなこと言われたっけ)

青年はハリーに、人間の姿になれと命令した際の場面を想起する。

気にはなりつつも言われるがまま瞳を閉じると、一瞬の静寂に包まれた後

「いいぞ」

声がして、青年は目を開いた。

するとハリーは鼻と頬に切り傷のある素行に問題のありそうな修道女に。

アモンは白髪 of 理知的な雰囲気漂う修道女へと変貌した。

以前ハリーは好みの見た目になれるといったが、ここまで人間と瓜二つになれるとは。

この姿で王国にいたら、人と区別がつかない。

改めて悪魔の変身能力に驚かされる石動であった。

「ケツ、忌々しい服装だ。悪魔が神々に仕える人間共の格好なんざ、しなくちやいけねエのかよ」

「どうだい、ユウ。なかなかのべっぴんだらう。惚れるなよ」

苛立つハリート、嫌がる素振りのないアモン。

お似合いの凸凹コンビだ。

「ハハハ、そうだね。本当に便利な能力だ。人間にはできない悪魔の芸当だよ」

「これなら侵入自体は容易い。関係者を装えばいいからな。誰も傷つけない方法だし、構わないだろう?」

「僕は変身できないからどうしよう。それに魂を見抜くあの人たちに通用しないんじゃない?」

「確かに厳重な警備で正面から侵入は難しいな。しかも魂を見抜く精鋭揃いだ。だが別にも入口がある」

そう言ってアモンはステンドグラス窓を指差す。

「もしかして……」

「そのままかの強行突破だ。窓を壊して侵入する」

彼によると内部は2階建てになっているらしく、そこからなら気づかれないとのこと。

ハリートの殺して進むほど野蛮ではないし、人は傷つけない。

しかし、こんなことをしていいのかと良心が咎めた。

「……音で気づかれるんじゃない。僕たちに注目が集まるよ」

「大きな音を立てている最中に俺たちが通れる大きさに破壊する。そうすりゃ案外バレないよ」

「な、なるほど」

石動は家族の見ていた報道番組で、見聞きしたことがあった。

泥棒というのは家人が掃除などで音を立てている最中に、ガラスを壊して住居に忍び込むと。

それを考えると、アモンの行動は理に適っている。

(いいのかなあ、こんなこととして。うーん)

石動の心の中で、善と悪がせめぎ合っていた。

現代なら建造物侵入罪、建造物損壊罪の罰が下される、立派な犯罪だ。

しかし直美と英子を放置していいのか。

治安も現代と比べれば、決していいとは言えない国だろう。

頼りない僕でも男が同伴していれば、悪党も手を出しにくいはずだ。

(モルマスの関係者の方々、すいません)

心の中で平謝りしつつ、僕はアモンの暴挙を見逃す。

「この後はどうするの?」

「モルマスではちようど今の時間帯に、聖歌の合唱が行われるのさ。そいつらが神々を賛美している間に、悪魔に好き勝手されるとは、神々に盲目的な信徒というのは実に無様だな」

アモンは聞き取るのがやつとの声量で吐き捨てる。

神から零落(れいらく)させられた悪魔である彼が、流し目で神の徒を見遣る姿に、青年は積年の恨みを感じ取った。

「そろそろだ」

「うん。準備しておくよ」

暫くすると赤いマントのようなものを着た、少年少女の聖歌隊が石畳を練り歩いて合唱する。

歌詞の内容こそ理解できなかったが聴いていると、日頃の疲れが抜けていく気がした。

音楽というのは万国共通の言語で、知らない歌でも良いものは自然と好きになってしまう。

観衆が拙いながらも声を合わせているのに見惚れ、ラツパが鳴った瞬間にアモンが躊躇なく握り拳で窓を殴ると、辺りにガラスの破片が飛び散る。

血こそ出ていないが人間が同じことをすれば、大怪我は免れない。

「大丈夫なの? 痛くない?」

「悪魔の中で最も強靱な俺の肉体なら、このガラス程度わけないさ。心配ありがとよ」

「よーし、これで中に入れるな。しっかり掴まれよ、主さま」

「落とさないでくれよ」

「わあってんよ」

ハリーは青年の脇を抱えて持ち上げ、ゆつくりと飛行する。

祐が建物の中に入って最初に目にした巨大なステンドグラスには、

僕の国でも見慣れたナナホシテントウの装飾が施されていた。

窓は3つあり、左から順に黒と黄が特徴的なフナムシのような幼虫が変態して、成虫になるまでの過程を現しているようだ。

ヨーロッパでは赤のマントをした聖母マリアの逸話が残され、日本においても漢字で天道虫と表記されたテントウムシは、空高くに飛ぶ様が太陽に向かって飛ぶのだと信じられていた。

更には農業害虫のアブラムシを駆除する益虫としての地位を確立しており、人類から比較的不快感を抱かれにくい昆虫だ。

「イミタ神、シグニフィカ神、メタモルフオシス神の御下に、ようこそお集まりになりました」

1階では集まった人々に感謝を述べ、シスターはテントウムシの窓を見つめていた。

神々への敬意を表す修道女の視線の先には、偶像も何もない。どうということだろう。

石動が呆然とシスターの説教に耳を傾けていると、アモンが通訳する。

「この大陸を統べる三神は不可視の存在とされています」

「秩序と模倣をもたらし、生命を完全なる存在へと到達させるイミタ神」

「中立と概念を表す、目に見えない存在の象徴シグニフィカ神」

「混沌と変身を司り、絶えず変化を繰り返すメタモルフオシス神」

「決まった形を持たない神々への敬意を払い、私たちの宗教では偶像崇拜を禁じています。宗派によってこの限りではありませんが」

シスターが黙るとアモンは息継ぎし、シスターの発言に備える。

「人間共にとつての神々の話らしいな。つまらねエから眠たくなってくらあ」

「そうかい、俺は結構楽しいけどな。紡がれた歴史というのは、知的好奇心をそそられるよ」

「だよね、アモン」

「気が合うな」

意気投合する石動とアモンに、ハリーは苦虫を噛み潰したように顔

をしかめた。

「来て損したな。やることやったら、とつとと帰ろうぜ」

欠伸をした悪魔の瞳から、大粒の涙が零れ落ちていく。

退屈な時間が長く感じるのは、人も悪魔も同じようだ。

親近感を覚えた青年は

「今日は歩いて疲れたし、直美さんたちと再会したら、モルマスの近くで宿を取れるか提案してみるよ」

「そうかい。お嬢ちゃんも精神的に参ってたしなア。オレサマとしてもありがたいぜ」

ハリーに説教が終わるまでは、我慢してもらおうことにした。

本来の目的は脱出の方法を探すことで、長居してもいい結果に繋がるとは限らない。

SG8の奇襲にも対応できるよう、ある程度余力を残しておくに越したことはないだろう。

「つたく、仕方ねエな。契約さえなけりや、トンズラしてたんだが」

心底つまらなそうに割れた窓から風景を眺めるハリーは、何かに気がつくとも目を白黒させる。

「おい、見ろよ！ お前ら！ ありやなんだ！」

ユウとアモンは彼の言う通り、窓から外を覗く。

ハリーの視線の先には、何かの大群が濁流の大波のように押し寄せてきていた。

頭がパニックで青年は自らの恐怖を誤魔化すように、あれこれまくしたてた。

「何がどうなってるんだ、これはなんなんだ。もう終わりだあ、早くここから逃げないと……」

「意味がわからねエ。だがオレサマに歯向かうなら、叩き潰すまでよ」

「資源豊かな王国ならともかく、モルマスが襲われるとは。化け物共の規模からして、賊の仕業でもないだろう。君たちは心当たりがあるかい？」

「直美さんはSG8という組織に狙われている。どこかの国がやったのでないなら可能性があるのは……」

石動はアモンに伝えると、アモンは納得したように頷く。

ただヴォートウミラでの争いに巻き込まれただけなら、まだいい。

しかし迷い人同士の戦闘で、無関係な人々を傷つけていいのか。

「なるほど。君たちが目的か。なら辻褄が合うな」

「民間人には危害のないようにしたい。やれるかな。ハリー、アモン」

「どうするかはテメーの好きにすりやいいがよ。オレサマは具体的に何をすりやいいんだ？」

ハリーに急かされて、石動は思考を巡らせる。

とにかく被害を出さずに、彼ら全員を助ける方法を……。

脳味噌を精一杯働かせて、最善の策を模索していた。

「とにかくモルマスの人間を誘導しないとイケない。だから指示を……」

「モタモタすんじゃないやねエ、間に合うのかよ！ 襲われちまうぞ！」

作戦を立てている途中、ハリーにしきりに怒号を浴びせられ、石動は苛立ちを募らせた。

（考えてる最中なんだ、静かにしててくれよ！）

心の中で言い返すと同時に、アモンが口走る。

「つまり誰かが奴らを足止めすればいい、と。そういうことだろ？」

「アモン、まさか……」

「時間稼ぎがてら、適当に暴れてくるよ。まずユウとハリーはあの女の子たちと合流して、いろいろ考えればいいさ。問題が解決したら、また落ち合おう」

アモンはそれだけ言い残して、その場を去る。

あの数にも物怖じしないのは、流石の上級悪魔といった所だ。

彼に任せておけば、しばらく時間稼ぎはできる。

「よかつたな、優柔不断な主サマよオ。次はどうする？」

ほつと胸を撫で下ろす横で、ハリーは嫌味つたらしく毒を吐いた。

だが口より手を動かすべき状況なのは確かだ。

「避難誘導はモルマスの修道女たちに任せて、た、戦える人を集めよう！ さすがにアモンだけに任せるわけにはいかない！ モルマスの戦士たちと、僕らも戦うぞ！」



「いいじゃねエか。オレサマは待つてたんだよ。血湧き肉躍る戦いを！」

危機的状況にも、特段怯えた様子がない好戦的なハリー。

頼もしい限りだが彼が傷つけば、自分も痛みを味わうことになる。

しかし逃げれば大勢の人間が血に塗れ、モルマスが地獄と化す。

戦闘の経験のない僕が戦っても、足手まといなだけ。

とにかく今は、大勢の人物にモルマスの危険を知らせなければ。

「誰か、戦える方はいませんか？ モルマスに化け物の群れが近づいてきていて……」

1階に勢いよく降りると、青年は脇目も振らず叫んだ。

だが都合よく日本語を理解してくれる人間などいるはずもなく、石動はうなだれる。

(……う、見られてる。僕の言葉は通じないんだ。こんなことしても無意味じゃないか)

注目が集まった恐怖に震えていると、筋骨隆々の体つきをした、白髪交じりの老翁が近寄ってくる。

袖の千切れた法衣の上にマントを羽織る老人は、ゆっくり肩に手を置く。

穏やかな眼差しに金属の籠手越しからでも、温かいぬくもりが伝わってくるようで、青年は不思議と心穏やかになっていった。

「My name is Juan. What is your name? (僕の名前はジュアン。君の名前は?)」

義務教育で習う簡単な英語なためか、青年もちゃんと意味を理解した。

僕に名前を聞いているようだ。

「My name is yuu (僕の名前は祐です)」

外国の人間と話したことなどない彼は、この発音で伝わるかと頭の片隅で考えつつ、おっかなびっくりで喋る。

「Are you sick? (具合でも悪いのか?)」

「……ハリー、なんとやっているのかわかる?」

「お前を心配してるみてエだぜ、このオッサン」

「今は一大事だ。さっきの僕の発言をこの人に伝えてくれ」

ハリーに指示すると、彼は老爺と会話をし始めた。

互いに発言をし終わると

「Gather with me, Omighty ones!

(力ある者よ、我に集え!)」

「Votumira, is facing an unprec  
dented crisis. (ヴォートウミラに未曾有の危機が訪れている)」

「Everyone who fights for their  
country is a hero here! (祖国のために戦う皆が、ここで英雄となるのだ!)」

老爺が辺りに向かって咆哮し、彼に同調するように周りの人間も騒ぎ出す。

その一体感は、まるでスポーツのフラインプレーで観客が絶叫し、球場全体が揺れるようだった。

ジュアンが不敵に口角の片側を吊り上げて笑うと同時に、屈強な男や弓矢を携えた耳長のエルフ、顎髭を生やした杖を持つ老人が、青年の周囲を取り囲む。

「ええと、僕なにかやっちゃった?」

「さっきのオッサン含め、こいつら全員化け物に立ち向かう冒険者なんだってよ。いいじゃねエか。血の気の多い奴は大好きだぜ。ヴォートウミラの連中に腰抜けはいねエらしいな」

「Fight with! (一緒に戦うぜ!)」

名も知らぬ冒険者の鍛え上げられた精悍な顔立ちに、石動は鼓舞された。

一人なら心細くて、立ち向かうことすらできなかつただろう。

しかし彼らが共に協力してくれるなら——臆病な僕でも戦えるかもしれない。

「とりあえず現場に向かいましょう! モルマスに危害がないように!」

「Yes, sir. (承知した)」

青年は冒険者と共に走り出す。  
ヴォートウミラの英雄と至る道へと突き進むように。

## 第14話 泥の悪魔、新たな出会い、ハリーとの奇妙な友情

結局僕は直美と英子に合流する間もなく、流されるままにモルマスを飛び出してしまった。

あの2人も、モルマスの異常事態に気がついていいるだろう。

彼女らなら、戦うなり避難誘導するなり、己のやるべきことに愚直に取り組むはずだ。

僕は僕なりにやれることをやるしかないのだ。

「虫けら共、皆殺しだ！」

ハリーが叫ぶと冒険者らも呼応するように、雄叫びを上げる。

空を覆い尽くさんばかりの軍勢の姿は、まさに悪魔アバドンが引き起こした蝗害の災厄。

生きとし生けるもの全てを喰らう——まさに泥の悪魔だ。

しかし化け物相手にも、不思議と歩みは止まらない。

歴戦の冒険者たちも、迷わず大群へと進んでいく。

やはり場数が違うのか、彼らに怯えた様子は微塵もなかった。

「I, m the best man in Votumira!

(俺がヴオートウミラーの男だ!)」

槍を手にした重鎧を装備した男が高らかに先陣を切り、化け物に風穴を開けると、泥の悪魔は土塊(つちくれ)へと還る。

「hahaha You're weak (ハハハ、弱っちな)」

想像していたより弱かったのか、男は大笑していた。

——不気味なほど、あっさりしすぎている。

これで本当に倒せたのか？

青年がまじまじと見つめていると、泥は再び機織虫(キリギリス)の姿へと変わる。

そして油断しきった隙だらけの男に、先ほどの泥の悪魔が顎を大きく開いて忍び寄った!

「危ない!」

青年が叫び、杖を思いきり振り回すと、機織虫の頭を叩く。

虫の首は容易くもげたが、首が胴体から離れた後も、生きたいと乞うように顎をしきりに動かして、哀愁を誘う。

「be saved! (助かった!)」

なんとか撃退はしたが、無尽蔵に沸く泥の昆虫に、僕は絶望していた。

根本から解決しないことには、こちらがジリ貧になるだけだ。

化け物呼び出したSG8の人間なら、対処を知っていそうだが、モルマスの勇敢な戦士たちにだけ化け物の駆除を任せてはおけない。

地道に1匹づつ化け物を始末して、数を減らしていくのが得策だろう。

戦いの最中に打開策を見つければ、よりベストだ。

「ククク、楽しいぜエ! ドラアツ!」

斧を振り回し、ハリーは次々に怪物の四肢を切断していく。

身動きの取れなくなった泥の虫は地べたを這いずり、獲物を求め彷徨った。

再生する泥の悪魔の体だが、完全に復活するまでは多少時間を要する。

これで、しばらくは戦わずに済む。

最初この悪魔と遭遇した際ほとんどない荒くれ者と感じたが、戦闘で味方になれば、これほど頼もしい存在もない。

「ぼーっと突っ立ってんじゃねエ! 戦わねエ臆病者は戦場にはいらねえんだよ!」

「あ、ああ、わかってるよ」

「Against all odds, we don't give in! (どんな困難にも俺たちは屈しない!)」

ハリーの叱咤と、場の雰囲気鼓舞された青年は、自分なりに泥の昆虫と対峙していった。

そして戦いの中で、泥の昆虫たちを分析していく。

バツタの特徴は群生相と呼ばれる、群れで行動するバツタと酷似していた。

バツタが密集して育った場合、脚が短く翅が長い群生相となるなどの変化が生じる。

濃厚なバツタが突如として、農産物や家を食い荒らす化け物と化すのは、世界的にも有名だ。

しかし地上にいるキリギリス型の泥の悪魔は、もっと厄介で、周りの冒険者たちも苦戦しているようだった。

一撃でも致命傷となりうる咬合力。

一気に距離を詰め、人間目掛けて飛びかかる瞬発力。

捕らえた獲物を離さない、前脚に生えた茨の如き無数の棘。

——喰らいつかれた瞬間、終わる。

直美の授かった力なら、全方位から襲われても対応できるだろうが、僕の力では180°を見るのが関の山。

後ろは諦めて、背後の冒険者たちに背中を預けよう。

「とにかく前に集中して倒す……ってあれ？」

順調に目の前の怪物を蹴散らしていると、杖をぶんぶん振り回した際に、青年は突然よろけてしまう。

(何が起きた?)

理由はすぐにわかった。

杖に泥が付着してしまい、その重みのせいで、思うように動かせなくなっていたのだ。

「クソ、厄介だな。倒せば倒すほど、追い詰められていくなんて」

危惧していた通り、長期戦になれば先に限界を迎えるのは僕らだ。

どうしたらいい。

手足を動かしつつ思考を巡らせるも、そうこうしている間にも、怪物は無限に再生を繰り返す。

そんなことに時間を割く余裕はなさそうだ。

「お困りのようだな。手を貸してやるよ」

「え? どこにいるの」

どこからともなく声が出て、青年は辺りを見渡す。

「アンタの横だよ。もっと下さ」

「え、あ……子供？」

目を落とすと、僕の身長の2/3ほどしかない体躯の小人が、いつの間にか真横にいた。

足音一つ立てず僕の近くに移動するとは、相当腕の立つ人物なのだろう。

他の衣服は新品のように綺麗なのに、首にはボロの布のマフラーを巻いているのが印象的で、石動はそれに視線を送る。

「子供だとう！ どこがガキに見えるんだ！ 言ってみろよ！ 俺はフェレペス族の立派な成人だ！」

(……そういう所だよ？ 子供って言われてムキになって感情的に怒るのが、子供っぽいんだよ？)

面倒ごとになりそうなので、青年は心の中で言い返す。

「えーつと、ごめん。小人がいるなんて知らなくて。悪気はないんだ。許してくれないかな」

「わかりやいんだよ。俺の名前はアシエル・F・フェアチャイルド。アンタ、辺境の島国『常世』出身だろ？ 同郷のよしみだ。感謝しろよ」

誠心誠意謝ると、彼もわかってくれたようで、なんとかその場は収まった。

「あ、ありがとう。実はそうなんだよ」

「パパは常世出身だけど、アシエルは違うでしょ。強がっちゃうんだから」

「うるせえよ、ウイヴィ。危なっかしいし、放っておけないだろ」

「私はウイツカ・ウイツカーズっていいいます。気軽にウイヴィって呼んで！」

モルフオチヨウの鮮やかな翅の妖精が飛び回り、小人をからかう。

彼が妖精と軽口を叩きつつ、泥の悪魔の首を跳ねると、戦場に一陣の風が吹いた。

足元に生えた草花の花弁は、アシエルが動いた刹那、瞬く間に散っていく。

軽い身のこなしに青年は惚れ惚れしながら、彼を見遣った。

それと今まで日本の言語が通じる経験が何度かあり、薄々気がつい

ていたが、世界のどこかに日本のような島国があるようだ。

素性を明かせない迷い人は、常世人らしく振る舞うべく、その国の情報収集もしておいた方がいいだろう。

「ふう、一仕事終わりっ」と

「すごいね、君は。小さい体なのに強いんだ」

「アンタが鈍臭いだけじゃないか。しっかりしてくれよ。ノロノロしてっつと、すぐ死んじまうぜ?」

「ええと、慣れてないから。戦うの」

「……アンタは幸せ者だな。人の血を見ずに済むなんてよ」

盗賊の少年は意味ありげにそう言うと、先ほどまで明るかった表情に影が差し込む。

ヴォートウミラに暮らす彼にも、様々な苦悩に苛まれて生きてきたのが想像できた。

ここに至るまで、彼はどれほど苦しんできたのだろう。

「ギーチョン。ギーチョン。チョンギース」

「……まだまだ元気らしいな。ゆっくり話す暇はなさそうだな」

「敵はぶっ飛ばすしかないよね。その前に、君の杖を元通りにしてあげる!」

妖精が呪文を唱えると、彼女の先から水が出てきて、泥は綺麗さっぱり洗い流された。

水に濡れた杖は太陽の光を反射して、油を塗った刀の如く光輝く。

「ありがとう」

「どういたしまして……ハアハア……」

ウィヴィと呼ばれる妖精は魔法を使った途端に、散歩した後の犬のように呼吸を荒らげる。

よほど力を使う魔法だったのか。

苦笑いしつつ、青年は彼らの様子を静観していた。

「無理すんなよ。お前、ろくに魔法使えねえし」

「アシエルは脳味噌まで小さいから、高貴な血筋の私と違って魔法なんて扱えないもんね」

「んだと! 脳味噌が小さいはともかく、身長は低くねえよ!」



(……脳味噌ちいさいって罵倒されるのはいいんだ)

小さい者同士のやりとりが微笑ましく、青年は笑みをこぼす。

互いに遠慮のない口撃を繰り返しているが、それでも本気で向き合っている証拠。

それだけ彼らの仲が親密なのだろう。

(……ッ！)

アシエルとウィヴィに気を取られている最中、青年は右腕を抑え、苦痛に顔を歪める。

痛烈な痛みの走った腕を見遣ると、だらだらと鮮血が垂れ流れている。

握力がなくなり、青年が地面に杖を落とすも生き延びるべく、冷静に現状を分析する。

(腕に噛まれた形跡はない！ 僕じゃなく、ハリーがやられたのか！)

アイツがピンチだ！)

「いきなりどうした?! どこから攻撃された?!」

「どうなってるの? とにかく、すぐに手当しなきゃね!」

「おい、どこいくんだ。コイツに治療してもらえって!」

静止を振り切って、僕はあてもなく駆けだす。

掠れてぼやけた視界を頼りに、青年は傷だらけの修道女を探そうと、あちこちに首を振る。

額から滝のように噴き出した汗を拭いながらも、血走った悪魔の目で辺りに注視すると、ハリーの腕にしがみつく泥のキリギリスの群れが視界に入った。

(あれを始末しないと……グッ……)

急いでそちらに向かおうとすると、地を這う悪魔の群れが目を光らせて、僕の周りを取り囲む。

早く死ぬ、死んでしまえ、そして餌になれ。

膝をついた青年は群がる化け物たちの声が聞こえてきた気がして、腹の底に溜まりに溜まった憎悪を露わにした。

(グダグダうるせえよ、こんな場所で野垂れ死んでたまるか。死に場所くらい選ばせろ!)

火事場の馬鹿力とでもいうのか。

立ち塞がる泥の悪魔を蹴り飛ばし、僕はハリーのいる目的の場所まで、走りながら向かった。

「ハリーから離れろ、化け物共！」

「ッ！」

ユウはバラの茎のような脚を掴むと、それを力任せに引きちぎる。掌に泥の棘が食い込み皮膚を貫くも、極度の興奮状態のせいか、不思議と痛みはない。

命さえあれば安いものだ。

数分前までいがみあっていたユウの手助けによほど驚いたのか、ハリーは暫く彼を見つめながら硬直していた。

「ハアハア……さつき助けたんだ……礼は言わねエ……ぞ……クソ人間……」

「……君が噛まれれば……僕が苦しむ……んだ……僕は自分のために……動いたまでだ……自分の弱さを……呪う……んだな……」

青年がハリーに言い返すと、石動の耳に届くように大きく舌打ちし、憎まれ口を叩く。

息を切らしながらも強がる彼の頑固さは、大したものだ。

「テメーに助けられるなんざ……焼きが回ったモンだ……とつとと目の前から消えろ……」

「僕の方こそ……自分を殺そうとしてきた悪魔なんて……どうでもいいのにな……」

互いに自分自身を守りたいがために、力を奮う。

ユウとハリーは、それだけの関係性だった。

しかし人である祐と悪魔のハリーに、いつしか奇妙な友情が産まれようとしていた。

## 第15話 巡り合う強者たち、災い呼ぶ迷い人

儂はヴォートウミラ大陸の荒くれ者共を置き去りにして、一足先に最前線へと向かう。

まだまだ若い者たちには負けられぬ。

それに天涯孤独の儂よりも、未来ある若人が生き残るべきだろう。老いぼれの意地が、儂を戦地に駆り立てた。

「ん、こんな場所に……人……ではないな」

老爺の視線の先に人影が見えた。

草原に佇む白髪の修道女は、いずれ溶けて消える雪の如き儂さすら感じる清楚で可憐な見た目とは裏腹に、おぞましいほどの実力を隠していた。

——悪魔だ。

それもサタンに次ぐ魔界のN02との呼び声高い、ルシファーに近い力を持つ精鋭。

憎悪や妬みといった負の感情を隠し、気配を消し、溶け込むのが抜群に上手い。

目にも止まらぬ身のこなし。

吐き出した火炎の、肌を焼くような熱気。

泥の悪魔共の肉体をまとめて貫く、強靱な拳。

どれをとっても一級品だ。

フィリウス・ディネ王国の一個師団が束になっても、勝てるかどうか分からない。

(何故これほどの悪魔がモルマスに?)

老爺は頭を働かせた。

しかし考えても答えはでてこない。

ジュアンは眉間に皺を深く刻み、警戒しつつ近寄っていく。

「驚いた。悪魔が人を守る為に戦うとは。何が目的なのだ」

悪魔に訊ねると

「俺はアモン。訳あって今は修道女をやらせてもらってるよ」

「先に名乗られてしまったか。悪魔相手といえど礼節を重んじるのが

儂の流儀。儂の名は……」

「言わなくてもわかるよ。どうせだから言い当てる。アンタはジュアン神父だろう。またの名を——悪魔狩りの悪魔」

何らかの能力を用いたのか、悪魔はニヤリと笑い、名をピタリと言いつける。

？をついても見抜かれてしまう、この悪魔には——老爺は戦慄した。

しかし動揺しては、悪魔の思う壺。

幸いなことにアモンは、泥の怪物に手一杯の様子だ。

老爺は深呼吸して、静かに精神を統一させた。

「数多の同胞を殺され、恨んでおるのか。それも当然」

「……どうだろうな。ここに来たのは有り難いお説教をするためじゃないだろう。手を貸しな」

「いいだろう」

人手が多いに越したことはない。

マントを脱ぐと握り拳を作り、腰を落として右手を突き出して構える。

ジュアンが泥の虫をジツと見据えていると命亡き器に囚われた、無数の昆虫たちの魂の悲鳴なき叫びに、心を痛めた。

どうやら何者かに操られているらしい。

死の安寧を妨げられ、意思なく暴れるよう指示された、心なき怪物。魂を弄ばれた彼らをここで殺してやるのが、せめてもの慈悲。

瞼を数刻閉じた後ゆっくり息を吐き出すと、老爺の体から白い光の球が、沸騰した水の泡のよう無数に放出される。

聖なる光に纏われたジュアンはアモンを睨み、彼に返事した。

「モルマス、ひいてはヴォートウミラの平和のため、貴殿に協力はする。しかし返答如何で容赦はできぬ。肝に命じておけ」

「ま、戦ってくれるなら何でもいいや。俺の邪魔をするなら亡骸が一つ増える。それだけの話さ」

「随分血の気が多い小童だのう。もう儂はみだりに戦うほど、若くはないというのに」

「アンタより遥かに長生きしてる俺をガキ扱いとはねえ。本当に今日はおかしな奴ばかりと会うな」

アモンは苦々しく微笑み、余裕綽々の態度を崩さない。

やはり魔界でも上位に君臨する悪魔は、凡百の悪魔とは一味違う。「貴殿といい、悪魔の魂を持つ青年といい、立て続けに悪魔に会うとは。不幸の予兆なのかもしれない」

「ユウと巡り合ったらしいな。あいつの頼みで、俺はここにいる」「随分あの青年に従順なようだな。単純な好意か。それとも何かの企みに彼を利用しようというのか？」

悪魔をねめつけて、一挙手一投足から不審な動きを探ろうと、老爺は目を細める。

だが悪魔の眉はピクリとも動かない。

(この程度の脅しに屈するほど弱くはない、か……)

「ご想像にお任せするよ。仮に神父様の考えが正しく、世界にとって最善の未来を選ぼうとも、俺の求める結果は変わらないからな」

「——未来視の能力。どこまで予測できるといなのだ」

「ゆりかごから棺に収まるまでの過去と未来さ。ちなみに、ここでアムタは死ぬよ」

「だとしても、儂のやることは変わらん。為すべき使命を果たせば本望。死は新たな始まり、未練はあるが寂しくはない」

古い先短い命だ。

せめて後進の捨て石となれば。

とうの昔に覚悟を決めていた老爺は、悪魔に吐き捨てると、アモンは腹を抱えて笑う。

(……儂に敵意がないのいいことに舐め腐りおつて)

嘲笑する悪魔に不快感を覚えながらも唇を噛み締めて、怒りを抑え込む。

昔なら即座に手が出て、一瞬でアモンに焼かれていたかもしれない。

そうせずに済んだのは年の功。

「動じないか、流石にこの程度の揺さぶりでは。歴戦の悪魔狩りとい

うだけのことはある。人間相手とはいえ、猛者には素直を敬意を払うよ」

「儂はもう悪魔狩りでも神父でもない。流浪の旅芸人。それ以上でもそれ以下でもない」

「ほう、アンタも迷い人とは。奴と会ったのにも合点がいった」

「……なるほど」

迷い人という台詞を耳にして、老爺は確信する。

「異世界より招かれし者。悪魔を引き連れ、大陸を混沌と破壊をもたらすであろう」

ある占い師が儂にそう言った。

当初は異世界というのは、渡来してきた常世人を指す言葉だと老爺は考えていた。

しかし各地を放浪する中で、ジュアンはまったく時代も文明も異なる人間が、意図せずヴォートウミラに訪れる事例が報告されていると耳にする。

にわかには信じ難いが、実際に迷い人らと会って話を聞いてみると、?をついているようには見えない。

異世界からの来訪者に、ヴォートウミラが滅ぼされる。

(あの予言が本当ならば、儂はあの男を倒さねばならん。しかし自分より他人を案ずる青年が、それほど危険だとは思えん——見定めねば、彼の魂が本当に悪に染まっているのかを)

「チー！ 鬱陶しいー！」

思案していると機織虫が飛びかかってきて、彼は咄嗟に拳で反撃する。

未来の事は未来に考えればいい。

でなければ拳に迷いが生じてしまう。

「爺さん、毫碌（もうろく）してるのか？」

「滅らさず口の悪魔が」

アモンに言い返すと、ジュアンは自分を取り戻す。

目の前の相手を倒すのみ。

「小賢しい虫けら共が鬱陶しいな。塵殺（おうさつ）するとしようか」

「右に同じく」

黒の修道服の背中の辺りから出た炎が、狼煙の如く天高く舞い上がる。

それと同時に青々としていた空は、夕闇を彷彿とする赤と黒に塗り潰されていく。

細長い炎はやがて蛇のような形へと変貌し、次々に空と陸でのさばる泥の虫けらを喰い殺していった。

空中から落下する溶岩の如き物体が、全て死骸とは。

「俺の炎は太陽の温度に等しい。まともに喰らえば——塵も残らない」

宣言通り大量に化け物を殺す悪魔の御業に、老爺は苦虫を噛み潰したように顔を歪める。

（おつかねえ悪魔だな。敵に回したら人間如きじゃどうしようもねえ）

「視力も衰え、一匹づつ始末するのは面倒になってきた所だ。儂も力を解放させてもらうとしよう！」

悪魔に負けじと叫ぶと彼の足元から、光の柱のようなものが顕現する。

ヴォートウミラも近年は近代化が著しく、神を信じる行為そのものに疑問を持つ者も少なくない。

しかしヴォートウミラ三神は、必ずや信徒の願いに応えてくれる。彼自身が信仰の生き証人そのものであった。

悪魔と元神父の老爺が文字通り化け物を一掃するが、生き残った数匹の飛蝗が、モルマスへと飛んでいく。

まるで大いなる意思に導かれるように。

「打ち漏らした敵はユウたちに任せよう。あいつらにも強くなってもらわないと困るからな。俺は一足先にモルマスへと帰らせてもらうよ」

「技の連発は老体に堪える。あとは若いもん次第だ」

静かに息を吐き、老爺は瞳を閉じる。

かつて神父だった職業病で、悪魔には市井の人間より慣れているつ

もりだった。

だが今までの悪魔とは、あまりに力の差がありすぎる。

この場に留まり彼と同行するだけでも、肌がヒリヒリと痺れ、脳が悪事を働くことに侵食されていく。

「おっと、その前にやることがあったな」

アモンは振り返ると燃えたぎる泥の亡骸に、手を合わせる。

老爺は我が目を疑い、何度も瞬きを繰り返した。

「悪魔が亡き者の為に祈るとは」

「何かおかしいかい？ 今の俺は敬虔（けいけん）でか弱い、ヴォー  
トウミラ三神の信徒なのだから」

「神に逆らう悪魔が抜かしよるわ。胡散臭い」

老爺は冗談なのか本心なのかわからない、アモンの発言の？ 臭さに苦言を呈する。

呆れたジュアンは八の字に眉を顰め、肩を竦める。

「だが礼をいう。あの哀れな魂たちを救うには、これしか方法がなかったのだ。おぬしがいなければ、人と泥の昆虫、双方に甚大な犠牲が出ていた」

「悪魔に感謝とは、とんだお人好しだ。アンタはあいつと……ユウとよく似てるな」

「なんだ、感謝されるのは苦手か？ 案外憂（う）い所があるじゃないか、アモン。ハハハハハハ！」

「このジジイ、いい性格してやがるな。アンタと話していると疲れるよ」

立ち去るアモンを見届けて、ジュアンは満面の笑顔で微笑んだ。

善行は悪人や悪魔がやろうが善行。

「アモン、ユウに伝えておけ。お節介なジジイが君を心配していると  
な」

「へいへい、わかったよ」

（迷える者ユウ、間違った道を進んでもいい。儂と共に迷おう。二人で迷えば一人では見えない景色が見えてくるはずだ）

ジュアンは心の中で青年に思いを馳せつつ外套を拾うと、また放浪の旅へと出るのだった。



## 第16話 戦いの終結、新たな謎

「Shit, there are too many of them! (クソツ、数が多すぎる!)」

「I will fight too. (僕も戦いますぞ)」

エルフの少女らしき人物はしかめっ面で愚痴を零すと、5、6本同時に矢をつがえ、一気に放つ。

彼女の腕は確かで百発百中で虫に命中するも、空を埋め尽くす軍勢の数を御するには、あまりにも手数が足りない。

杖を持つ老人も彼女と共に応戦するが、多勢に無勢。

怪物に食われるのも、時間の問題だった。

「Don't come! (来るなツ!)」

「Aaah! (ぎやあああ!)」

空中から飛来した飛蝗が、次々に人々へと噛みつくくと、異世界の冒険者らの断末魔が響いた。

戦場に倒れた無数の人々の血が、大地に染み込んでいく無情な光景に、押し殺していた恐怖心が湧き上がった。

(……む、む……い。ああなりたくない! 死に、死にたくない!)

文字やニュースで人の死は、連日耳にする。

生まれた頃には自衛隊が中東へ侵略し、近年でも戦争という過ちは、金持ちの利益のため繰り返されている。

数年前には棺桶に入った祖父と祖母を見送り、死を身近なものとして青年は認識していた——はずだった。

だが死の現実をまざまざと見せつけられた青年は、気が気でなかった。

このままだと自分もあなってしまう。

そんなのは嫌だ。

恐れ of 感情に脳内を支配された彼がその場で立ちすくみ、瞳をギョツと閉じると一筋の涙が頬を伝う。

「僕は……無力だ……」

青年が呟くと

「I, I'll cover for you, good luck.

(援護します、頑張ってください)」

そんな時に長髪の男が石動の後ろから声をかけた。

伸ばした手からは煌々と魔法陣が浮かび上がっており、何らかの魔法を施してくれたのを青年は理解する。

額から血を流しているのに関わらず、彼は歯を食いしばり、自分にヴォートウミラの命運を託す姿に祐は鼓舞された。

(みんな戦ってるんだぞ！ 逃げるのか、自分だけ?!)

心の中で向き合いながら、彼は貪食の軍勢を見据える。

勝てないかもしれない。

ここで死ぬかもしれない。

それでも期待に応えねば。

利き手の右腕は出血のせいで、思ったように拳が握れず

「クソ、こうなったら……」

一か八かに懸けてみるしかない。

ベルトで括りつけた左手の盾を叩きつけると、拍子抜けするほど簡単に虫の首が吹き飛んだ。

彼が何らかの強化をしてくれたのだと、青年は感謝する。

(……彼の心も拳に乗せるぞ！)

「……ハアハア、何とか戦えるな」

足を踏み込んで威力を出すために体を捻る度、電流が走ったような激痛に、青年は奥歯を噛み締めた。

痛みを誤魔化すように、彼は機織虫を無我夢中で戦闘不能にさせていく。

すると倒した泥の軀に、泥の悪魔たちが群がっていくのが見えた。

弱った泥の怪物に次々と化け物たちが噛みついていくと——泥の肉塊を食った体が徐々に膨れ上がっていく。

その姿は——まるで共食いだった。

(いきなりなんだ?!)

やがて化け物は一匹の巨大なキリギリスへと姿を変える。

ただでさえ厄介な怪物の巨大化を、みすみす許してしまった。

(く、こいつはヤバイ！ さっさと倒さないと！)

瞬時にそう判断し無策のまま突撃すると、前脚を鞭のようにしならせ、ユウを薙ぎ払う。

度重なる交戦で衰弱したお前程度、これで十分とでも言うような攻撃に、青年は悔しさを覚える。

(く、こいつ……)

「凶体が大きくなった分、強くなってるぞ！ 気をつけろよ、ハリー！」

「再生の次は合体だア?! 手を変え品を変え、厄介な化け物だな、キリがねエー！」

ハリーは咄嗟に斧で胴体を切り裂こうとした。

だが刃は肉体を切断することなく、途中で止まる。

最悪だ。

斧を引き抜くのに時間を浪費すれば、死が待っている。

それをハリー自身も肌で感じていたのか、金槌で釘を打つ要領で何度も何度も側面から蹴りを入れ、力技で泥の体を断つ。

「あ、ありが……」

「寝転がってねえで手工動かせ！ テメーだけならともかく、オレサマの命もかかってんだよ！」

「わかってるよ！」

ユウはハリーに叱咤され、再び戦い始めた。

応戦している最中にちらりと見遣ると、巨大化した機織虫もゆっくりではあるものの原型を取り戻していく。

周りの相手だけで精一杯なのに。

「……………(こ)までか」

絶望に打ちひしがれた瞬間、空が夕焼け空のように紅く染まる。

風に揺れる炎は、まるで天に向かって蛇が蛇行するかのようだ。

天に座す神々よ、今に見ている。

貴様らの寝首を搔くのは俺たちだ。

そう言わんばかりの炎に

「どうなってるんだ」

訳がわからず、青年は困惑する。  
だが、すぐに彼は察した。

—— 悪魔アモン。

適当に暴れてくると言った彼が、たった一人で泥の悪魔共を退けたのだ。

生まれたばかりの赤子の如く、甲高い鳴き声を上げる怪物の群れ。  
天から降り注ぐ溶岩のようなもの。

泣き叫び、助けを懇願する冒険者たち。

青年は、この世の地獄のような光景を呆然と眺める。

「兄貴が解決したみてエだな。格が違うわ、オレサマとは」  
時を同じくして、同様の結論に辿り着いたハリーが呟いた。

自信家に見える悪魔も落ち込むことはあるようだ。

「……僕たちが血塗れになって必死こいて戦っても、たった一匹の悪魔の足元にも届かないんだな」

「テメーの不甲斐なさに落ち込むのは、全部終わった後だ」

「……わかってるよ。言いだしつぺの僕だけ逃げ出すなんて、周りが許しても……僕が許さない！」

戦いはまだ続いているのだ。

文句を言いつつ立ち上がって周囲を確認すると、冒険者らの瞳に宿る闘志は燃え尽きていなかった。

ヴォートウミラに暮らす人々と違い、僕には国に対して愛着などない。

ただ余所者の僕を助け、自らも命を懸ける彼らの大事にする、純朴な王国の人々を守りたいと心から思った。

疲弊した青年は流れる汗を袖で拭う。

根本的な解決をしなければ、無限の命との終わりなき闘争が待っている。

「ハリー、魂を浄化する方法は知らないのか？」

「よりによってオレサマにそんなこと聞くのかよ！ 魂の清め方なら修道女サマにでも聞いてきな！」

腹立ちまぎれの悪魔の台詞に、石動まで怒りが込み上げてかた。

見た目だけ修道女でも、中身は悪魔。

聞いた自分が馬鹿だった。

とにかく動きを封じられればいいのだが……。

手をこまねいている間に巨大なキリギリスが、再び僕の前に立ちただかる。

(泥の体を動けなくする。つまり固めればいいのか)

泥を固めるにはどうすればいい?!

泥の固め方……そうか!

泥について思考を巡らせると、青年の脳裏にある点と点が線となる。

このままではジリ貧だ、試す価値はある。

天啓とすら感じた閃きに、石動はモルマスの冒険者らの命を委ねた。

「ハリー、炎をあつ魔物たちに使つて放て」

「そんなことして何になるんだ! あいつら、無限に蘇るんだぞ。無駄だろうが!」

「お願いだ、言う事を聞いてくれ!」

「勘弁してくれ、魔法を使う余力なんぞ残つちやいねエよ!」

「ハリー、頼む!」

何度も問答を繰り返すと、しつこく懇願する青年に根負けしたのか「……今だけテメーを信じてやらア! これで借りはチャラだ! オレサマたちは対等だといったのは、テメーなんだからよ!」

「ありがとう、ハリー!」

「いつもより詠唱に時間がかかる。その間に呪文を唱えるのを中断させないよう、気をつけて立ち回れよ!」

「了解!」

安請け合ひしてしまったがやれるのか。

——否、やるしかないだろう。

なるべく被弾を抑え、死なないように立ち回る。

やること自体はごくシンプル。

「我、原初の炎の顕現を望む者。炎の精霊サラマンダー。我が願いが

通じるのならば……」

(詠唱はまだ終わらないのか!? 早くしてくれ!)

復活した機織虫は青年へと一直線に向かってきた。

野生の勘で、ユウとハリーを危険だと判断しているのだろう。

もうヘトヘトで逃げる気力も残っていない。

「さあ、こつちだ!」

盾を構え、彼は攻撃に備えた。

当初こそそのまま受け止めるつもりだったのだが、ペンチのような顎をガチガチ噛み鳴らす姿を見て

(なにやってんだ、僕は! あんなの、まともに食らったら死ぬぞ!? 僕だけの命じゃない、不格好でも生き延びるんだ!)

そう判断を下した青年は、咄嗟に駆け出す。

しかし疲弊していたせいか、脚がふらついてよろめいた。

青年の頭上では人の死期を悟り死肉を貪り食う鴉の如く、飛蝗が飛び回る。

巨大化した泥のキリギリスと背後を見せた青年の距離は、徐々に縮まっていく。

裏目を引いてしまったか!

「ハリー、早く! 早くしてくれえ!!!」

「——人間共の堕ちた魂を滅却せん、インフェルヌス!」

死を覚悟した刹那、ハリーは呪文の詠唱に成功した。

空を飛び交う飛蝗はたちまちに灼けていき、地面へと墜落する。

「チョン……ギー……」

地上の機織虫はというと、焼けながらも必死に鳴いて、こちらへと前進してきた。

辺りは化け物退治に成功した歓喜に包まれるが、ただ一人青年だけは浮かれた気分になれなかった。

人を守る大義があるが、戦いは虚しい。

戦いの数だけ無念の死がある。

「やったな、主サマよう」

「ああ。泥でできた肉体だから火で熱せば固くなって、動きが止まる。

そう思ったんだ」

泥を熱して製造される陶器が作られる原理と説明すると、ハリーも納得したように頷く。

だが解決した矢先、彼の発言によって新たな疑問が浮かび上がった。

「ここにはエルフの射手や魔法使いの連中もいた。だが、そいつらの魔法では今みてエにはならなかった。いったい何がどうなってやがるんだ？」

「確かに。君の魔法だけが泥の昆虫たちに効いたのは不自然だな」

君の見間違いではと、切り捨てるのは簡単だ。

ハリーと彼らの違いとは何か。

魔法自体が同じ原理で発生しているなら、他に理由がありそうだが。

非常に興味深いのが、今は何も考える気力が沸かなかつた。

傷ついた体を癒したい。

次また泥の悪魔が襲ってきた時までには、原理を解明しておきたいが。

「確かにそうだ。でも解決したんだからいいじゃないか。今は治療と傷ついた人たちの運搬を優先しよう」

「まあ、お前の言う通りだがよ……しかし胡散臭エな。オレサマの方でも情報収集しておくか。お前も用心しておけよ」

「ああ、互いにな。僕らは二人で一人だし、足を引っ張らないよう善処しよう」

「それなりの戦いぶりだったぜ。単なる臆病者じゃねエとわかってよかった」

ハリーはそういうと、背を向けてモルマスへ歩き出す。

彼との出会いは成り行きに身を任せただけだ。

けれど流されて辿り着くのも悪くない。

「ほら、さっさと歩きやがれ」

「……うるさいな……傷に……響くだろ」

「見た目通り貧弱だな、お前」

「どうせなら……もつと静かな悪魔がよかつたな……」

「オレサマの台詞だぜ」

どちらが片方が亡くなれば、もう一人も道連れの不便な身体。

しかし望まぬ形で血と魂の契約を結んだとはいえ、戦いの間だけは彼と通じあえた気がした。

(認めたわけじゃない。けどだいぶ助けられたな、こいつに)

「You guys did a great job. (あなたたち、よく頑張ったわね)」

エルフの少女はユウの肩に手を置いて、努力を労う。

言語がわからず、どう返事すればいいのだろう。

迷った末、青年はめいっぱい微笑んで彼女を同じように労った。

その微笑に幾多の意味を込めて。

「……う、いたた。ムチャしすぎたかな」

犠牲者はたくさん出てしまったが、それでも自分なりに最善は尽くせたはず。

体の節々を微風に撫でられながら、青年はモルマスへと進んでいくのだった。



## 第17話 偽りの英雄、直美の呪い

焼け野原と化し、剥き出しになった大地には、横たわった遺体だけが残されていた。

ヴォートウミラ大陸は魔法のある世界。

まだ助かる見込みはある。

それに戦って散った高潔な魂を、野ざらしにするわけにはいかない。

青年は冷たい体を背負い、教会へと運んでいく。

運よく蘇生に成功した者。

魔法の失敗で灰になり、帰らぬ人間になった者。

それぞれに生と死の運命が下った。

戦いを終え、戦死した冒険者らに祈りを捧げていると、あつという間にモルマスに夜の帳が降りる。

英子は傷ついた人々の治療に当たり、直美は言語が通じない彼女の代わりに通訳を行っているようだ。

近くの宿で休息を取ろうと辺りを探していると、モルマスの冒険者らは、酒場でグラスを片手にどんちゃん騒ぎ。

共に戦った彼らは、ユウを頻りに誘った。

「Come here. Have a drink with me. (こっちへ来いよ。一緒に飲もうぜ)」

「Not without a monster-slaying hero. (化け物退治の英雄がいないと)」

猿のように顔を真っ赤にしながら、ユウを手招きする。

酒飲みは嫌いだ。

無口になる分には無害だが多弁になるタイプだと、自分の吐いた暴言を覚えていないのが質が悪い。

なるべく相手をしないか、さっさと酔い潰れてもらうのが得策だ。

それに今は休ませてほしい。

「ハリー、なるべく角が立たないように断りを入れてくれないか？」

「The wound is not fully healed

and requires rest. Another time.  
e. (傷が完治してねエから安静にしたいみてエだ。また今度な)「  
Hahaha, I got dumped. (ハハハ、フラレち  
まった)」

青年には意味はわからないが、肩を竦めておどけた冒険者を見て安堵する。

じゃれあう彼らを遠巻きから眺めつつ、青年は微笑んだ。

人間というのは群れると碌なことをやらないが、目的さえ同じなら大事を為せるのだ。

「If you need help, feel free to  
rely on me.」

「ハリー、なんと言ってるのかわかる?」

「困ったことがあれば気軽に頼れ、だだよ」

皆は自分を褒め称えてくれるが、それも協力あってこそ。

更には泥の悪魔の大半を始末したのは、悪魔アモンとジュアンと名乗る老人。

本来なら英雄と讃えられるべきは、あの2人だろう。

「ハリー、君はどうするんだ?」

「オレサマはここで楽しむぜ。辛気臭エテメーの顔を見てると酒が不味くなる。邪魔だから、さっさと消えな」

ハリーが吐き捨てると、石動は溜息を吐いた。

(嫌味な奴。見直した僕がバカだったな)

結局、彼は酒の席から抜け出す。

好意的に迎えてくれるのは嬉しいが、どうしたって人混みは苦手だ。

それにあの悪魔と、一緒の空間にいたくない。

少しだけ夜風で涼んでから、どこかで仮眠を取るとしよう。

「ユウ、ここにいたんだ」

酒場を後にすると、祐は直美とぼったり出くわす。

「あ、治療はようやく終わったんだね。お疲れ様」

「お疲れ様。それよりすごいわね、ずいぶん人気者じゃない。あなた

が昆虫の怪物を退けたんだって?」

「からかわないでよ。こつちに化け物が向かっていたけど、泥の昆虫に襲われなかった? 怪我はない?」

青年は何の気なしに彼女の顔を覗き込む。

すると直美はそっぽを向いた。

(せめて返事くらいしてくれればいいのに。感じ悪いなあ)

「ええ。私の事より、傷だらけで帰ってきた貴方こそ大丈夫なの?」

「まともに戦ったのは初めてだけど、なんとかなるもんだね。迷い人の力のお陰かな」

何とか生き延びたが、目の前で死を見せつけられると、流石に堪えた。

僕がああならない保証はないのだ。

死を望んだはずなのに、間近に迫った時は惨めたらしく生きようとした。

彼女に心配をかけまいと、青年は努めて明るく振る舞うが、痩せ我慢を察してか

「英子ちゃんから言われた通り、安静にしてなさいよ。どこをほつつきあるくつもり?」

と、直美さんは僕に注意した。

口煩くも感じるが、彼女なりに心配してくれているのがわかって悪い気はしない。

「英子ちゃんは?」

「治療が終わったら、すぐ部屋で寝ちやった。ゆつくり休ませてあげましょう。それより散歩に付き合ってもいい?」

「え、うん」

こうして僕ら二人は、夜のモルマスへと繰り出した。

王国とは違って夜は人の姿はなく、冒険者の少ない時なら、ゆつくりとした時間を満喫できそうだ。

酒場から離れると、靴が石畳を踏み鳴らす音しか入らなくなり、不思議と気持ちが落ち着いていた。

……カツカツカツ、カツカツカツ。

何を話すわけでもなく、無心で歩き続けていると

「え、あ、ど、どうしたの？」

突然に袖を掴まれて、祐は突拍子もない声を出す。

「ご、ごめんなさい。骸骨が怖くて、つい」

あちこちにあるランタンの灯りが、ぼんやりと彼女を照らす。

俯きがちに頬を緩め、照れと恥じらいの混じった彼女の顔には、少女らしからぬ色香が漂っていた。

胸の鼓動が早くなり、緊張した青年は普段以上に口数が減っていき、く。

話題に困って傷口を擦りながら直美を見遣ると、彼女は独り言のようになんか小さく呟いた。

「私、陽を思い出して戦うどころじゃなかった。英子さんは必死に治療してたのに。何の役にも立てなかった」

「……」

ふと横顔を見ると口をぎゅっと閉じて、彼女は前を見据える。

直美の言葉に青年は黙って耳を傾けた。

相当参っている様子だが、他人の僕にやれることは限られている。

よく不幸は立て続けに起こると言われるが、それは不幸に見舞われた際、明るい気持ちになれないのも関係しているだろう。

難しいだろうが気さえ持ち直せば、多少は気分が楽になる。

「普段から周りに言ってきた言葉に苦しめられるなんて、本当に滑稽よね」

「確かに直美さんからは、かなりキツイ台詞を言われた記憶があるね」

「そうね。周りから避けられるのも仕方ないわね」

正直な気持ちを吐露したつもりだが、それが刺さってしまったかもしれない。

「確かに直美さんを嫌う人は多いかもしれないけど。でも……でも……でも……」

僕は言葉に詰まった。

「でも何よ」

「でも僕はそれだけの理由で、直美さんと一緒にいるつもりはないよ。」

役に立つ立たないの二元論で人を語るほど、つまらないことはないし」

急かされた彼は頭の中で考えていたことを言い終えると、更に言葉を続ける。

「直美さんは自分に求める基準が高すぎるんじゃないの。それは苦しみしか産まないよ」

「でもー。あの娘の分まで私が頑張らないとー!」

直美の叫びが静寂を破った。

老人ならいつ逝つてもおかしくはないが、同じ年齢の友達なら話は別。

彼女はどんな気持ちを抱えているのだろう。

とにかく迂闊に発言するのは悪手。

重苦しい雰囲気気を紛らわせ、乗り切ることにした。

(彼女はマニーニ・ガメツイーナ。守銭奴の大学生。趣味は貯金とレアな硬貨を探すこと。あと水泳。あれ、水泳だけ普通じゃない？

水泳じゃなくて札幌プールにしようかな？ それっぽいし、ククツ……)

脳内で作り上げた自らの妄想に、思わず嘔き出す。

次の瞬間、突き刺すような視線を感じて直美の方を確認すると、彼女は般若の如き形相をしていた。

本人にバレたらどうしよう。

どうやって誤魔化そうかと、頭を働かせていた矢先

「ちよつと、変なこと考えてたでしょ!」

激怒する直美に取り乱した石動は

「かかかかか、考えてないよ! マニーニ・ガメツイーナさん! いや、直美さん!」

つい頭の中の妄想を言葉にしてしまう。

やばい!

どう取り繕うのが正解なんだろうか。

「誰よ、それ! 誰が金にがめついよ! あなたがだらしなないから、私がお金を管理してるのよ!」

「許して！ 珍しい硬貨、見つけたらあげるから！」

「そんなもの、いらな……プツ、アハハハ……ククツ……」

慌てた石動を見て、急に爆笑しだす。

「バカバカしくて怒る気もなくなっちゃった。マニーニ・ガメツイーナって、好きなものが珍しい硬貨なの？」

先ほどの空気が、幾分か和やかになるのを感じた。

これなら普通に話しても大丈夫そうだ。

「直美さんの笑った顔、珍しいね。いつも険しい表情だから」

「自分では怒ってないつもりだけど、周りの人にはそう見えてたんだ。陽に恥じない人間になろうとしてたけれど、彼女の存在を呪いみたいに感じてたかも。本当にありがとう」

「現実ですれ違っても、僕らはお互い気にも止めなかったはずだ。けどヴォートウミラで出逢って、こうして協力してるのは運命なんだと思うよ」

「随分ロマンチストね。他の娘にも言ってきたでしょ、その台詞」

確かに臭い台詞だったかもしれない。

口説いたつもりはないし、そもそも異性と付き合った経験すらないのだが。

（うわあ、やっちゃったかな。変に受け取られたらどうしよう。彼女がいらないと言葉がわからないし、警戒されて別々になったら困るなあ）

「ちよつと楽になったかも。あなたに聞いてもらえてよかった」

「溜め込んで爆発しちゃうより、人に話した方がいいよ」

「脱出はいつになるかわからないしね。それまでは支え合いましよっね」

心にもない慰めに、彼女は無垢な幼女のようににはにかむ。

悩みを相談しない男が悩みを人に話せといつても、説得力などないのに。

この世界で英雄と慕われても、現実社会から存在を否定される人間である事実は変わらない。

向上心の塊のような彼女に本当の僕を知られたら、幻滅されてしま

う。

青年は何気なく星々を見上げると、無数の天体が黒いラメみたいに光っていた。

人は亡くなったら星になると言われるが、僕が死んだら彼女は夜空のちっぽけな輝きに、僕を見出してくれるだろうか。

泣いてくれるだろうか。

もし僕に思いを馳せてくれるならば、彼女の為に死ぬのも悪くない。

微笑む彼女とは対照的に、心に暗い影を落とす男は口角を吊り上げて、真つ当な人間を演じてみせた。

## 第18話 真夜中の襲撃、インセクトウミレスの脅威

「……うう、気持ち悪い。アイツめ、酒に飲まれたな?」

吐き気を催した青年は窓を開けると、ハリーに恨み言を呟いた。  
契約の悪影響とでもいうべきか。

悪魔の体の不調も、自分にもろに影響を与えるのが最悪だ。

モルマスの化け物退治の件は王国にも伝わっているらしく、戻った  
ら王国から直々に褒章が得られるとのこと。

僕が全ての泥の悪魔を倒した訳ではないが、冒険の協力をしてもら  
えるなら、脱出の一助となるだろう。

とにかく失礼のないようにしなければ。

その為にも、眠って休みを取らないといけないというのに。

「ギース、チョン。チョンギース」

溜息を吐くと、どこからともなく途切れ途切れに聞こえてくる。

幻聴だろうか。

耳をすますと始末したはずの化け物の鳴き声が、また鼓膜に響い  
た。

戦場帰りの兵隊は心的外傷後ストレス障害、俗にいうPTSDを発  
症することが多いという。

もし僕もそうなら、戦いへの恐れと生物としての本能が、病気とい  
う形で命を守ろうとしてくれていたのだ。

「……疲れてるんだなあ、寝よう」

体を伸ばすと、痺れるような痛みが襲った。

天井を見上げながら、包帯を巻いた右手で握り拳を作るも、上手く  
力が入らない。

まだ完全には体が完治していないようだ。

適度な睡眠は万能薬。

こういう時ほど無理してでも休まないと、体に毒だ。

(俺は眠いんだ。さっさと寝させてくれよ、俺)

瞳を閉じて眠りにつこうとする。

だが頭は元気そのもので、あれこれ考えてしまう。



両親と姉ちゃんは、何をしているだろう。

袖を摘んできた直美が年相応で愛らしかった。

彼氏はいるのか。

無駄に敵を作らない為にも、王国の偉い人間に失礼のないよう、付け焼き刃でも礼儀を身につけないと。

混沌とした頭の中に時折ギース、ギース、ギース、チョンギース。

キリギリスの鳴き声がして、苛々が止まらない。

「……うるさい、うるさい！ ああ、眠れない。どうしよう」

もう完全に目が覚めてしまった。

無理に寝ようとすること自体が不健全だ。

自然に眠れるようになるまで、何かしていよう。

といっても、暇潰しの手段もない。

そんな時だった。

……ギシギシギシギシ。

何者かが廊下を踏みしめているのがわかって

「え……」

青年は思わず呟いた。

夜遅くに誰が？

背筋にぞくりと悪寒が走り、彼は反射的に生唾を飲み込んだ。

宿泊客が、ただ用を足そうとしているだけならばいいが。

青年が音に全神経を集中させていると、ガチャ……。

ドアノブが回されて、彼は驚きのあまり飛び上がりそうになった。

いや、落ち着け。

直美や英子が、自分に何かを伝えようとしているのかもしれない。

でも、もし扉越しの人物が他人だったら？

恐ろしい考えが過るも、呼吸を整えると、頭は冷静になった。

どちらの可能性も捨て切れない。

僕は立て掛けた杖と盾を手にとると、布団の中に隠す。

仲間の二人やハリーなら、武器はそのまま使わずに済む。

だが敵なら、すぐに対応できるようにしておきたい。

ドアノブが回されてから扉が開くまでは、時間にして数秒だった。

ろう。

だが彼にはやけに長く感じた。

「ギースチョン、ギースチョン。ギツチョンギツチョン。ここで合ってるんスカね〜」

部屋の扉が開け放たれるや否や、ギリギリスの鳴き声の正体はやかましく叫ぶ。

(う、うっさ?!)

狸寝入りした石動は、甲高い声の主を確認する。

すると棘のついた小手と靴を身に着けた、緑髪に茶のメツシユが特徴的な少年が一人、寝台の横へと移動した。

そして少年は掛け布団に手を伸ばすと、突然めくりだした。

何をするつもりだ?!

もしや武器を隠したのがバレたか!?

目を瞑り息を殺して平静を装うが、口から心臓が飛び出そうなほど、青年は気が動転していた。

だが予想に反して、少年はまじまじと彼を眺めだす。

「うんうん、ターゲットはこの人で合ってるツスよね〜。んじや、気づかれない内にブツ倒すツスよ〜」

今だ、タイミングはここのしかない!

腕を振り上げた少年の脇腹に、青年は蹴りを食らわせた。

「うお、起きてたツスカ? なかなか策士ツスね!」

隙をついた攻撃は、クリーンヒットする。

だが寝ながらの体勢では、思ったように力が出せない。

吹き飛ばされた少年は体を壁に打ちつけるも、目立った傷はなかった。

「だ、大丈夫?」

「別に体は無事ツスよ。襲った相手に相当なお人好しツスね」

起き上がった少年は、更に言葉を続ける。

「やっぱ俺には隠密活動は向いてないツスね。あの人からの指示だから従うツスけど」

「日本語?! 君は迷い人なのか、SG8の子か? 誰かに命令された

のか？」

「ご名答ツス。恨みはないツスけど、ここでやられてくださいツス」

そんなことより何故、僕のいる場所がわかったのだろう。

疑問が浮かぶも、今はそれを熟考する余裕などない。

「なるべく苦しませないように倒すツス。あの世にいつても許してくださいツスよ！」

「ヒッー！」

頭に拳が飛んできて、青年は反射的に頭を抱えてうずくまる。

するとパリンとガラスの割れる音がして、窓を叩き割る威力に唾然とした。

(おいおい、こんなの喰らったらただじゃ済まないぞ!?)

肌寒いくらいの夜だというのに、首筋を冷や汗が伝う。

この体勢だと、少年の蹴りをまともに受ける。

攻撃の格好の餌食だ。

「ビビったスか？」

ニヤついた少年が青年に訪ねた。

余裕な態度にムカついて、祐は無防備な腹に頭突きをかます。

「うわ、また不意打ちスか。ふ、踏んだり蹴ったりツス〜！」

やはりダメージはさほどなさそうだが、少年は今回の奇襲にも対応できず怯む。

戦いに慣れていないのだろうか。

ならば、勝機はあるかもしれない。

「ちよこまか動くツスね！」

戦うならば武器や道具は必須だ。

そしてここから出なければ、延々と狭い空間で攻防を繰り返すことになる。

祐はそそくさと布団に隠した道具一式とカバンを手に取ると、少年に視線を戻す。

「丸腰の人間だし、部屋の中だと加減しちゃうツス。狙いはアンタだけ。さっさと片付けるツス」

「……」

目的は僕だけのようだ。

正直、意味がわからない。

邪魔さえしてこなければ、僕も直美さんも彼らと戦う理由すらないのだから。

(ここで戦うのは不利だ、飛び降りるしかない!!!)

宿泊した部屋は2階。

大丈夫、死ぬような高さではないはずだ。

青年は自分に言い聞かせ、身を乗り出すと考えもせず——否、恐怖に飲まれぬよう敢えて思考を止めて飛び降りた。

地面に着地するほんの一瞬、彼は体がふわりと浮く錯覚を覚えた。ハリーに殺されかけた時にも、こんなことがあった。

「武器と防具、道具を確保しつつ広い場所に逃げる。敵ながらいいい判断ツス」

青年が考えている最中、少年は窓から顔を出し、石動を見下ろすと大きく口元を歪ませる。

「でも動きやすくなるのは、こつちも一緒ツスよ」

「?!」

少年は祐と同じように飛び降りて着地すると、問いかける。

「その様子だとインセクトウミレスの力は、まだ覚醒してないんスカ？ 宝の持ち腐れツスね。ま、倒すのに都合ツスけどね」

「イ、インセクトウミ……？ おい、君。日本人なんだから日本語以外喋ったら駄目だろう!!!」

アホな発言に少年は呆れたのか舌打ちして、彼の言葉を遮った。

「インセクトウミレスツス。めちやくちやなこと言ってくるツスね。おじさんとふざけてる暇はないツス——インセクトウミレス解放！」

少年が叫ぶと、彼の姿がみるみると変化していく。

頭の頭頂部から伸びた、触覚を彷彿とさせる毛。

昆虫の顎を模したかのようなマスク。

お尻の辺りからは細長い産卵管の如きものが出現しており、青年は顔を強張らせる。

……いったいこれは?!

泥の悪魔を倒して弱った自分を狙う、あまりにも的確な夜襲。

インセクトウミレスという、聞き慣れない単語。

そして少年の様変わり。

訳が分からないことの連続で、頭が真つ白だ。

けれど今すべきことは、少年を止めること。

青年は盾を腕に固定しようとするが周囲は暗く、思うように装備ができない。

「……明かりがあれば。とにかく離れよう」

ランタンが飾られた施設の前まで移動すると、灯火には無数の昆虫たちが群がっている。

月明かりを頼りに飛ぶ虫と、光を頼りにしてきた青年。

目的こそ違えど、生きるのに必死なのは一緒だ。

「早く、早くしないとー!」

息を荒らげ、青年は2本のベルトに腕を通す。

そして盾の裏面にある持ち手を、しっかりと握り締めた。

自らの命を盾へと託すように。

「ハア、間に合っ……」

「準備は済んだツスか? 無抵抗な相手を罫る趣味はないツスからね。準備が整うまで待つツスよ」

安堵の声を漏らすと、少年が背後に立っていた。

いつの間に?!

振り返ると、少年は半円を描くように腕を振り回す。

青年は咄嗟に盾で攻撃を受け止めようとした。

だが遠心力を利用した彼の一撃は容易く盾を貫通し——左腕に突き刺さった。

「うぐうぐ?!」

痛みのみならず、祐は咄嗟に腕を抑える。

どうすれば、この場を切り抜けられるか。

戦いを有利に進められるか。

痛覚が冷静な判断の邪魔をして、さらなる悲劇を生む。

「痛そうッスね、ボディがお留守ッスよ！ さっきのお返しッス」  
その隙を少年は見過ごさない。

少年の蹴りが祐の腹を掠めた刹那、彼の視界がグニヤリと揺れた。  
「普通の人間なら即死ッス。頑丈な迷い人の体に感謝することッス  
ね。もう聞こえてないかもッスけど」

「……ゲホッ……僕……これで……全部……終わり……」  
「まだ息があるんスね」

強い衝撃で吹き飛ばされた青年は天を仰いだ。

口の中には鉄の匂いが充満し、咳き込む度におびただしい血で胃の  
中が満たされていく。

体を動かそうにも、腕も脚もろくに動かないのでは、戦うのは不可  
能だ。

このまま死ぬのか。

朦朧とした意識の中で

(もがけばもがくほど苦しむつてのに……生きるのも楽じゃないよ  
な)

青年は心の中で愚痴を零した。

死ねば全て無になるというのに。

喜びよりも悲しみや苦しみの方が多い世界で、何故生きようとする  
？

ようやく願いが叶うのだ。

「バイバイッス」

少年が拳を振り上げると、全てを諦めた青年はゆつくりと目を閉  
じ、暗闇に意識を委ねた。

だが、一向に死んだ気配はない。

底なしの闇に飲まれかけた青年を覚醒させたのは、顔に滴り落ちる  
何者かの血。

「ったくよオ。最悪の寝覚めだぜ。いい気分だったのによオ……」

頭を抱えた悪魔が血塗れになりながら、斧で少年の痛恨の一発を防  
いでいたのだ。

「報告にあつた悪魔ッスね。フラフラッスけど、大丈夫ッスか？」

「おい、坊主。今のオレサマは気が立ってるんだよ……ちよつとばかり殺し合いでもして、オレサマの昂ぶりを収めてくれや」

眼前の敵を目を細めて、悪魔は怒りを露わにして咆哮した。

嘲笑するような笑みの少年も、ハリーの狂気に気圧されたのか、苦虫を噛み潰したように顔をしかめる。

これから始まる死闘の激しさを物語るように、灯火に集まった虫も忙しく羽ばたき、両者の戦いの行く末を見守るのだった。

## 第19話 激闘の中に紡がれる絆

「立ちやがれ、クソツタレ。野垂れ死ぬならテメーだけでくたばれや」  
「……………う、うう」

傷だらけの悪魔は、苛立ちを青年にぶつける。

叱咤された石動は奥歯を噛み締め、ハリーからの暴言に心の中で反抗していた。

具合が悪い時に怒鳴られても、苛立ちが募るだけ。

(うるさいな、わかってるんだよ。できたらやってるよ！)

眉間に青筋を浮かべつつ、青年は何とか踏ん張った。

陸に打ち上げられた魚のように体を動かすも、最悪の状況は打破できそうもない。

「ち、仕方ねエか。召喚だ！ 来な、レッサーデーモン！」

悪魔がそういうと、山羊の頭と蝙蝠の翼を持つ化け物が出現した。

デーモンと呼ばれているのだから、おそらく悪魔だろう。

呼び出して何をするつもりだ？

もしや亡き者にしようとしているのか!?

だが今の自分には、ハリーを止める術がない。

「なんスか、その悪魔。アンタより弱そうスけど。頭数だけ増えても怖くないス」

「安心しな。オレサマと貴様の命のやりとりに、コイツは首を突っ込まねエ。貴様の首を刎ねるのは、オレサマのメインディッシュだからなア」

ハリーが少年と話していると、召喚された悪魔が石動とジリジリと距離を詰めてきた。

開いた口からは餌を前にした獣のように、だらだらと涎を垂らして。

「こ、殺される?!」

「ヒ、や、やめろ！ 何をするつもりだ！」

僕を殺せば、あの悪魔も死ぬ。

それは理解しているはずだ。



しかし、奴の考えは理解できない。

いざとなれば自死も厭わず、僕を殺す可能性も……。

「ウガガガ、ウワアウ！」

「ひゃああぁー！」

怯えた石動は目を瞑り、恐怖から目を背ける。

しかし何をしようとするのか、気になってしょうがないのも事実。うっすら開けた祐の瞳には、悪魔の掌から現れた魔法陣の光が差し込む。

トドメをさそうとしているのだろうか。

諦めの境地に至った青年が自らの過去に思いを馳せると、体の痛みが若干だが引いてきた。

傷口に視線をやると、徐々にはあるが、開いた傷が塞がっていく。まさか治してくれたとは。

「あ、ありがとう。治癒の魔法を使ってくれたんだな。てっきり殺されるかと思ったよ」

「ウ、ウガアアウ。ヴヴウ」

悪魔は恥ずかしそうに頭を手で搔くと、青年も思わず口を綻ばせた。

人語を解するだけの知性はあるようだが、ハリーと違って会話までは不可能のようだ。

再度礼を告げると照れ隠しなのか、叫び声を上げることすらせず、ふっと消え去った。

まるで悪魔など元から存在しなかったかの如く、目の前には夜の濃い闇が広がっている。

石動は立ち上がるとハリーの横に並び、少年をジッと見据えた。

ここから反撃の狼煙を上げてやる。

「さて第2ラウンドだ。今度は雑魚一人じゃねエぞ」

「誰が雑魚だ！ 変な事はさせないからな」

「事実だろうがよ、グダグダうるせエな。モヤシ野郎。オレサマの後に続けよ」

「ハリー、冷静に戦況を読むんだ。じゃないと太刀打ちできないぞ」

「ハン、テメーの指図は受けねエよ！ クソガキ、今の内に遺言を考えておけよ！ いくぜエ、デモリツシャー（Demolisher）！」

彼を倒すには、互いの意思疎通が必要不可欠。

だがハリーは青年の声に耳を傾ける事なく、無為無策で突っ走っていく。

瞬間、触覚を彷彿とさせる少年が毛がピクリと反応した。

「ふーん、なるほどス」

「ああん？ 恐怖で脚が竦んだかア？」

昆虫にとつては触覚は非常に重要な器官だ。

食べ物の匂いや異性が放つフェロモンの感知、空間の認識など様々な機能が備わっており、昆虫が地球の支配者として君臨するのに欠かせない要素の1つといえる。

あの触覚らしき毛にも、そのような働きがあるのだろうか。

だとすれば毛をどうにかすれば、彼を攻略する糸口になるやもしれない。

攻勢に出たハリーは斧を振り回し、ひたすらに突き進む。

だが少年には、次に悪魔が何をするかを理解しているらしい。

地面を蹴り上げ空高く舞うと、ハリーの頭上を飛び越えたのだった。

キリギリスなどが属する直翅目特有の跳躍力。

ヒットアンドアウェイが重要な近接戦で最適な、かなり厄介になりそうな能力だ。

「わかりやすい直線的な攻撃ツスね。当てる気あるんスか」

「余裕ぶりやがって……！」

「実際、余裕スからね。威勢だけよくても全然怖くないス」

「これならどうだ、オラアアッ！」

ハリーは武骨な斧を引き摺りつつ、無我夢中に走る。

当たれば遠心力を利用して、一気に致命的な傷を与えられる。

謎の力の加護があるとはいえ、あの大きな刃の馬鹿でかい斧で両断されたら、ひとたまりもないだろう。

「貴様を殺した暁には、魂を喰らってやる。オレサマの一部となるのを光栄に思えよ！」

「だ、か、ら！ それじゃ俺は捉えられないツスよ。下らないお遊びもここまでにするツス」

ハリーが斧で一閃すると少年は月へと跳び上がり、攻撃は空を切る。

そしてハリーの無防備な背を足蹴にした。

青年にも衝撃が走ると、彼の体は前に傾く。

何とか転ばないよう地面に手をつこうとしたが、酩酊していたせいだろうか。

あるいはおびただしい出血のせいか。

足元がふらついた彼を支えるものは何一つなく、うつ伏せになってしまう。

(これじゃ格好の餌食だ、早く体勢を……)

体を起こそうとした時、青年は闇夜の中で薄気味悪く微笑む少年から見下ろされているのに気がつく。

刹那、顎を模したマスクは昆虫が捕らえた獲物を咀嚼するように左右に開閉する。

本人に悪気はないだろうが、真夜中にこんな化け物に遭遇したら、誰だって卒倒するだろう。

むしろ気を失わない僕は、よく持ち堪えている方だ。

「ほらほら、俺の敵はあの悪魔だけじゃないツスよ！」

「う、うわっ！」

一発即死の頭に向かって拳を振り下ろさんと、青筋が浮かぶほど腕に力を込める少年に、青年は言葉にならない悲鳴を漏らした。

彼の拳の破壊力は盾を壊され、嫌と言うほど思い知った。

少年を無力化する方法は、反撃の手段は……そんなことを熟考する余裕などない。

祐は真横に転がって間一髪回避するも、石畳の石片が頬を掠め、戦々恐々とした。

「悪運強いツスね。なら、これはどうツスか！」

少年が間髪入れて手を伸ばすと、祐は細い右腕をガツチリと掴まれる。

少年が顎を前腕に近づけると——く、喰われる?!  
青年は恐怖した。

咄嗟に少年に殴りかかるが、彼は一切動じなかった。

インセクトウミレスという謎の力が覚醒していたら、解決は可能なのかもしれない。

だが今の自分には、どうしようもない。

「おい」

地を這う響きに思わず生唾を飲む。

少年を威圧するハリーの燃え盛る焰の如き瞳は、完全に常軌を逸していた。

月明かりに照らされた破壊の刃は妖しい光を帯びており、祐の背筋がゾツと寒くなる。

——あれが振り下ろされたら、僕の腕ごと吹き飛ぶと。

「ガキ。そいつに手エ出したら、その首刎ねるぞ」

「なんスか……って正気スか?!」

振り返った少年が背後にいたハリーを見上げると、素っ頓狂な声を上げた。

驚いていたのは、彼だけではない。

僕ごと殺そうというのかと、祐も気が気でなかった。

「イカれてるツスね。確か肉体の感覚を共有してるはずツスけど。死なばもろともって奴ツスか?」

「死の自由を侵されるならば、名誉の戦死を選ぶ。矮小な人間の貴様に悪魔の誇りは理解できまい。墜ちた魂ほど純粹で高潔だということな」

「……理解する気もないツスよ。アンタの価値観は、アンタが大事にすりゃいいんスから」

「遺言だと受け取っておくぜ!」

狂気の一裂きが少年と祐に襲いかかる。

避ける、ということなのだろうか。

少年は姿が見えなくなるほど、高くジャンプした。

祐は即座に転がり難を逃れるも、すぐさま着地した少年に手痛い蹴りを貰う。

血こそ出ていないが激痛に脇腹を抱え、青年は苦しみもがく。

「ぐ、ああ……」

「おい……テメー、本当に使えねエな……」

「なあんだ、連携も取れてないじゃないスカ。警戒して損したツス。最大の敵は無能な味方って諺、知ってるスカ？」

「……ググ……殺すぞ、テメエ!!!」

「単なる事実ツス。無能な働き者と何もしない馬鹿の凸凹大馬鹿コンビツスよ」

青年はふらふらになりながらも立ち上がるとカバンに向かい、軟膏を脇に塗りつけてすぐさま処置を施した。

風邪の時に頭に貼る冷却シートのように、薬品特有のスースーする感覚と異様な冷たさが、祐を癒やす。

横のハリーは煽りに、猿のように顔中を皺だらけにしている。

安い挑発に乗り、冷静さを欠いてしまえば思う壺。

逆に調子に乗った子供の足元を掬うのは、容易いだろう。

優越感に浸っているのも今の内だけだと、青年は薄ら笑いで二人の言い争いを静観する。

「アイツ、ムカつくな。脳漿(のうしよう)ぶちまけられてエか、小僧」

「野蛮すぎるだろ。ま、やり返したいのは同感だ」

下手に声をかけたら、こちらにまで怒りが飛び火しそうで、まさしく火に油だ。

だが裏を返せば言葉を選びさえすれば、彼を止めるのに協力してくれるはず。

「ハリー、あの子に一泡吹かせてやろう。その為に君の力を貸してくれ」

「フン、不愉快だが貴様の提案を飲んでやる。策を用いなきゃ、奴の苦痛に歪む顔が見れそうにねエからな」

(単純な奴。ま、この場では味方と考えて問題ないだろうけど)

祐は爪先立ちして背伸びし、彼に耳打ちする。

「作戦はゴニョゴニョ……」

「なるほどねエ、試す価値はあるな。あのガキを弱らせてから殺すたあ、テメーも悪趣味だな。ククク……」

「殺さないよ、人間き悪いな」

「敵の前で作戦会議ツスカあ。ま、いいスけど」

寝そべる少年はあくびをして、祐とハリーの話し合いを窺っている。

絶対に負けるはずがない。

力の差を見せつけた少年の余裕な態度から、青年の耳にはそんな言葉が聞こえた気がした。

確かに今まで攻撃をことごとく避けられている。

しくじれば、更に状況が悪くなるかもしれない。

「10分働いたら15分休むのが、俺のポリシーツス。無駄な事にインセクトウミレスの力を浪費すんのは、嫌ツスからね」

「なんだ、あの野郎。隙を見せても襲ってこなかったぞ」

「さあ？ ま、助かったね。やるぞ、ハリー」

「クク、貴様を八つ裂きにしてやるぜ！ 人間共の堕ちた魂を滅却せん、インフェルヌス！」

悪魔が詠唱すると、前方に燃え盛る炎が出現する。

蛇の如く細長い火は、建物と建物の間を這うように少年に向かっていく。

「報告にあつた炎の魔法ツスね。そんなの想定内ツス！」

彼はまたしても、空を舞う。

だが彼の武器である跳躍力を使うというのは、こちらも想定内だ。確かに空には逃げれば、人では太刀打ちしようがない。

しかし言い換えれば受け身を取れない空中は——少年が最も隙を晒した瞬間！

飛んでいる間なら、いくらすばしっこい彼でも、自由気ままに動くことは不可能だ。

「受け取りな、少年」

「なっ、なんのつもりスか?!」

祐は手に抱えたカバンを投げつけた。

少年は中に危険物が入っている可能性を危惧したのか。

投擲物を建物の屋根に目掛けて投げた。

ああされたら、再び荷物を回収しに行くには時間がかかる。

なかなかどうして頭が切れる。

しかし着地までに、考える暇さえ与えなければ充分だ。

「喰らえ、機くん!」

「そうはいかないツス!」

アメフトの体当たりのように、石動は少年に体当たりをかまそうと突っ込んでいく。

しかし少年はそれを見越してか指を組み、両手を振り下ろした。

石動は攻撃を確認すると、すぐに立ち止まった。

そもそも青年の狙いは、最初から機少年そのものではなかったのだ。

「——誰がオメー自身を狙ってるつつったよ? とんだ間抜けだな」

「なっ」

少年の意識の外にいたハリーが間合いを詰め、斧で右の触覚を切り捨てた。

切られた触覚のような毛は、地面に這い出たミミズみたいにひとりでに動いており、気味悪く感じた青年はただただ笑うしかなかった。

兎に角これで大幅に弱体化するはずだ。

苦虫を噛み潰したように顔を引き攣らせる少年に、もう余裕の二文字はない。

「さっきみてエにヘラヘラしてろや。オレサマがお前の代わりに笑ってやろうか? ワーッハッハッハ! ざまあねエ」

「性格悪いな、キミ」

ハリーの言動に呆れつつも、心の中で彼を称えた。

「正直舐めてたツス。俺は機（はた）ツス」

「あ、自己紹介どうも。僕は祐といます」

「これまで何人殺してきたと思ってる。これから逝く小僧の名前なんざ、いちいち覚えてられるかよ」

「……手を抜いて勝てる相手じゃなさそうツスね。奥の手を使うツスよ！ カツティング・ヤーン (Cutting yam)、出番ツス」  
そうめんの糸を彷彿とさせる細い糸を取り出した。

あれを使つて何をしようというのか。

武器にも防具にも、ましてや治療にも利用はできそうにないが。

青年は餌を貰う金魚の如く、ぽかんと口を開けて少年を眺めていた。

「頭の毛がもげて狂っちゃったかア、クソガキ」

「確かめてみればわかることツス。もしかして怖いんスカ？」

「面白エ……！ デモリツシャーのサビにしてやるから覚悟しろや」

一触即発の雰囲気、祐は我を忘れて少年へと駆ける。

ハリーだけに戦わせれば、先ほどの二の舞になる。

「ハリー、触覚が抜けて弱っている今が好機だ。連携しよう」

「ケツ、うるせエな。テメーから先にブチのめしてやろうかあ?！」

「頭を冷やすんだ。彼は強いぞ、また土をつけられたいのか？」

「……チ、わかったよ」

泥の悪魔との戦いを経て、多少は信頼してもらえたのだろうか。

ハリーは澁々了承してくれた。

「この期に及んで、よそ見ツスカ？」

少年の放つ糸が、ハリーの手首に絡まる。

ただの糸に見えるが、何か企みがある。

なんとかしなければと、ハリーに直感が告げていたのだろう。

ハリーが糸を引き千切ろうと無理に引っ張ると、糸は肌に食い込み、血がボタボタと流れた。

それと同時に魂の繋がった二人は、苦悶の表情を浮かべた。

「戦えなくしてやるツスよ！」

「ハリー、糸をどうにかしろ！」

「どうにかつて、どうするんだよ！ コラ」

「このままやられたらいいツスよ。戦闘不能になれば戦う必要もな



いッスから」

苛立つハリーに、少年は残酷な一言を投げかけた。

思えば泥の悪魔の討伐と先ほどの悪魔召喚など、彼には助けられればかりいた。

殺されかけたのを恨んでいないといえは嘘になるが、今度は自分が彼に手を差し伸べる番だろう。

「待ってる、助けてやるからな！」

「アンタらの手、まとめて切り落としてやるッスよ！」

祐は駆けると、自ら掌に糸を絡ませる。

見た目とは裏腹に強靱な繊維で、力任せに手繰り寄せると骨が軋む感覚を覚えた。

青年は足で踏みつけ、何とか無理やり糸をたるませる。

足裏には皮膚を裂く痛烈な痛みが襲い、こうしていられるのも限界があると悟った。

早く、なるべく早くしなないと！

「おい、何してやがる。オレサマへの情けのつもりか！」

「そんなんじゃない！ 大丈夫だ。勝算はある！」

石動は脇目も振らずに、糸同士をこすりあわせた。

すると、まるで魔法のように糸が切断される。

何事かと驚く少年は

「い、糸が！ どうなってるんスカ！」

悲鳴を上げるかの如く叫んでいた。

「あのガキ、なんてもん隠してやがる。さっさと戦闘不能にしてやりやよかつたぜ」

「……強いな。糸は糸同士の摩擦熱で切れるから捕らえられたら、今みたいに自力で逃げるんだぞ。糸を扱う間は隙だらけみたいだから、それが反撃のチャンスになりそうだな」

「おう、助かった。その調子でオレサマの腰巾着、頼むわ」

「無策で突っ走るなよな、まったく」

「す、隙ありッス！」

「ハリー！」

「うつせエな。ま、今だけは従ってやらア！」

少年が飛び跳ねた瞬間に祐が天を指すと悪魔が翼膜を広げ、上空で機少年を迎え打つ。

さきほどまでなかった統率の取れた行動に、少年は目を白黒させた。

「な、なんなんスカ？ 不仲だったのに、急に連携が……不仲だったように見えたのは演技スカ？」

「ふっぎけんな、テメー！ こんな奴と仲がいい訳ねエだろが！」

「人も悪魔も同じだ。最初から完璧な関係なんてないだろう。きつとこれから互いを知っていくんだよ、僕たちは」

そう言い返すと、機少年は眉を顰める。

まだ夜は明けない。

その夜長は己の命と誇り、居場所を賭けた争いがまだまだ続くことを予期させたのだった。

## 第20話 “普通の人間”と僕、鎗鉄の騎士、悪魔との

「思いの他、手こずったツス。でも、ここからが本番ツスよ！」  
機少年はまた糸を再度取り出した。

しかも今度は3、4本同時に。

数が多い分、さつきとは異なる攻撃でこちらを翻弄してきそうだと。

「まだあの糸を隠し持っていやがったのか。しつげエな」

「目の色が違う。簡単に逃してはくれなさそうだと。簡単に捕まるなよ」

「……忠告は受け取っておくぜ。オメーも気をつけろ」

「油断はしないツス。あの人の指示通り、確実に始末するツスよ」

無闇に飛ばせば空中からハリーに迎撃されるのは、織り込み済みだろう。

無意味な攻めを繰り返すほど、少年は愚かではない。

機少年はじっくり間合いを詰めてくる。

こちらも別の作戦を練らねば。

「ハリー、どう迎え打つ?！」

青年は前方を見据えつつ問うが、肝心の悪魔は彼の意図を掴めず、前を向いた。

刹那、ハリーの太ももにカッティング・ヤーンがぐるぐると巻きつく。

切断する糸という名の通り、出血多量で死に至る場所に絡めば、容易に命を断ち切るだろう。

ユウが先ほど摩擦熱で糸を切ったのを真似しようと、手を伸ばす。

だがハリーの悪あがきを嘲笑うが如く、すかさず2本目の糸が腕を締め上げた。

感覚を共有しているせいか、痛みで体が動かない。

「ヒヒ、勝ちツスか?」

「ぐ、小賢しいガキが」

「ハリー、君には糸を熱する力があるだろう。それを使え！」

「じゃあねエな。人間共の堕ちた魂を滅却せん、インフェルヌス！」

魔法を唱えると2人の周囲に黒煙がもうもうと立ち上がり、視界が不鮮明になる。

どこから攻撃がやってくる?!

首を左右に振ると、青年目掛けて拳が飛ぶ。

まさかここまで、計算していた?!

こちらの行動の先読みと、勝機を見逃さない判断力。

やはり実戦経験は彼の方が上だ。

後ろによるめくと、すかさず少年がユウの隙を突く。

(あれ、えっ?!)

気がつくとも機は青年に抱きつき、首筋に肉を切断する顎を押しつけた。

いつ食い千切られてもおかしくない。

箆手の棘が肌に食い込み、抵抗すればするほど、深く突き刺さる。

思い返すと、僕は何の恩も返せなかった。

両親にも姉にも、直美さん、英子さん、エイプリルさん、モルマスの冒険者たち——そして目の前の悪魔にも。

そう思い至ると、自然に謝罪の言葉が出てしまう。

「ごめん、ハリー。僕の命はここまでみただ。やり残したことや後悔、いろいろあるだろう。でも共に死んでくれ」

「おい、協力してコイツをぶっ倒すんじゃないのか!　今まで何とかしてきたじゃねエか!」

諦めた青年に、ハリーは怒号を浴びせた。

それは死への怒りというよりも、生への渴望から発せられた言葉のように思えた。

生命力に溢れた台詞に、石動は困惑する。

生きていく自信も気力もないが、死ぬのは苦しく怖い。

そんな後ろ向きの生を歩んできた彼に、悪魔の生への執着が理解できなかつた。

(どうして生にしがみつこうとするんだ?　意味がわからない。どつ

ちみち、もう終わりなんだよ)

心の中で毒づくくと、溜息を漏らす。

「……どうしろっていうんだよ。この状況で」

「ふざけるな！ 自分の命を自分で見捨てたら、誰がテメーの骨を拾うんだよ！ 生き延びる道を模索しろよ、脆弱な人間が！」

独立独歩。

自らの利益を追求し、自らの為だけに戦う彼らしい発言だ。

青年は自分の持たない強さがある悪魔に、改めて恐怖と畏怖を抱いた。

「1つだけ聞きたいんですけど、なんでおじさんは頑なにSG8に入らないんですか。現実が嫌になってここに来たんスよね？ だったら……」

仲間に入れと問われているのか。

青年は

「僕らの脱出を妨害した挙げ句、殺すことも厭わない。思想、信条、道義心。人それぞれ違って当たり前だ！ 異質なものを排除し、自分たちだけを特別だと勘違いする傲慢。意地の悪い連中の集まりがSG8と言う組織だ。端的に言えば、君らのやり方が気に入らない」  
殺されかけても、毅然とした態度を取る。

SG8について時間に余裕がある時は、常日頃から考えていたからこそ、すんなりと言葉が紡がれた。

「頑固ツスね。自分の利益になるなら、組織がどれだけ腐っていいようがどうでもいいツスよ」

「腐った組織にいれば、己の身も滅ぼすよ」

「だから、それでもいいんスよ。ろくでもない現実から離れられれば」  
「……世間のろくでもなさなんて、僕は君以上に知ってるつもりさ」

親切で優しい国民性と嘯(うそぶ)きながら、同胞が生活保護を受給すれば、*「普通の人間」*による総叩きが始まる。

犯罪が起きれば無敵の人、ジョーカーなどと囃し立て、被害者には自己責任とバッシングのお祭り騒ぎ。

犯罪者と家族には、自らは事件に無関係な癖に執拗な罵倒を繰り返

し、二歩歩けば口汚く罵った事実すら忘れる、ニワトリ未満の記憶力。犯罪が起これば正義を気取った「普通の人間」があれこれ喚き散らす、本心では同胞の死を喜び、話題の種として消化したいだけなのが、日本人という醜い民族だ。

かといって世を変えようと、政治に入れ込む価値があるかも疑問だった。

選挙の候補は世襲の無能ばかりで、どんぐりの背比べ。

右派は徴兵を声高に叫ぶが、自分と身内だけは特別扱いしてほしい、甘ったれた「普通の人間」。

左派は移民、LGBT、SDGsなど立派な言葉を口にするが、それに関する諸問題は無視した、無責任な「普通の人間」。

この甘ったれた人間と無責任人間は普段いがみあうが、ネオリベリズムで貧者や無職に自己責任を唱える時だけは「普通の人間」として連帯できる。

そして何千、何万という自殺が起ころうが無関心な、一般庶民という「普通の人間」。

不登校やいじめられた側を嘲笑う、強く正しい「普通の人間」。

欠陥だらけのシステムにも文句を一つ言わず、社会から排除された人々を叩きのめす「普通の人間」。

税金を払えない無職や生活保護受給者に憤り、被害者意識を募らせるが、企業や金持ちの脱税は無視する「普通の人間」。

ただ生きていくだけで嫌われ、殺されていく昆虫よりも醜い「普通の人間」が、元の世界には多すぎる。

やはり政治家や政治思想はおろか、国にも社会にも帰属意識を持つ価値はない。

僕には世間というのが、醜悪な怪物に思えてならなかった。

一人一人は弱つちいのに群れて気を大きくした「普通の人間」の、常識という薄っぺらい言葉が、凶器の如く感じられた。

疑問を持つ僕の方が異常者なのかもしれないと、自らの頭を疑い、精神医学に関わる本を読み漁ったりもした。

だが何よりも、そんな他人や世間という激流に逆らえず、かといっ

て流れに適應もできない、何者にもなれない自分が大嫌いだった。

「普通の人間」になるのは不愉快とはいえ、生きるには金だけは絶対必要で、学のない人間に労働の選択肢などない。

無職を馬鹿にはするが、犯罪を犯す反社会的勢力には必要悪といって肯定するのが「普通の人間」。

「普通の人間」は、衆愚は金と暴力に屈する。

金さえあれば社会不適合者の方から、「普通の人間」と関わるのなど、お断りだろう。

同じ国に生まれたというだけで、「普通の人間」と同一視されるのは腹が立つ。

だが世の中を静観し、時には冷笑するだけの僕も、結局「普通の人間」と大差ない「普通の人間」なのだろう。

あの醜悪な社会は、なるべくしてなったのだ。

「普通の人間」の悪意と無能によって。

(綺麗な終わり方にはならなかったな。僕らしいといえば、僕らしいか。ハハ)

自嘲したように笑うと、どこからともなく声がした。

勘違いかと思いつき、瞳を閉じると、より鮮明に透き通るような美声が脳を揺さぶる。

「おやおや、大変だ。適者生存、弱肉強食の理に導かれ、この結末に至ったのか。どちらにせよ死の運命から逃れられなかった弱い命は淘汰される……と割り切れるほど、人間強くないわな。どうだい、力が欲しくはないかい？」

「こ、この声は?! ヴォートウミラにやってきた時の……!」

「ああ、如何にも俺が君をヴォートウミラに招待した張本人。君に1つ聞いていいかい。石動祐、与えられた力をどう使う?」

間違いない、これはヴォートウミラにやってきた際に耳にした声の主と同じだ。

この主はいったい何が目的なのだろう。

鬼が出るか蛇が出るか。

どちらにせよ、いい結果には繋がらなさそうだ。

「ずいぶん俺たちのことを悪く言うツスね。おじさん、正義かなんかのつもりツスか？ 今更流行らないツスよ。熱血主人公は」

「正義だと?! そんな言葉、反吐が出る!」

根も葉もない噂を鵜呑みにした、誰かを叩く「正義」。

企業やクラスの為と宣い、自分の気に入らない他人に難癖をつけて排除する「正義」。

敵対国を悪辣に描き、自国の国民を洗脳して、金持ちの利益の為に戦場に送る「正義」。

歴史を振り返れば「正義」を気取った虐殺など、枚挙に暇がない。正義だと自分を正当化するクズほど、無責任な馬鹿もいないだろう。

「正義だなんだと喚く連中は、大抵ろくでもないだろ?! 正義も悪も、孤独(ひとり)で勝手にやればいい。それとも君はひとりぼっちじゃ、正しさすら貫けないのか? 行動に伴う責任も取れないのか?」

「善悪なんて、どうだっていいんすよ!」

「正義だなんだと最初に口にしたのは君だ。自分の行動に、他人は関係ない」

少年と語らうと青年の中で今までは曖昧だった感情が、明瞭になっていく。

己の善悪が道徳と行動の羅針盤。

それ以外には従う気もないのだと。

「……願いが決まったよ」

「……だ、誰と話してるスか? あ、頭おかしいんスか?!」

「僕は僕の良心と善意に従い行動する。他人には理解されずとも構わない!」

「力を手にした者というのは、破滅したり狂うもの。いいだろう……君の信念がどこまで貫けるか、せいぜい楽しませてくれよ。力を望むなら唱えればいい——インセクトウミレス、とね」

ユウは躊躇いを覚えた。

理解不能な謎の存在から、無償で与えられる力はないだろう。

何かしらの代償があるに違いない。



甘い言葉を囁くのなんて、大抵は詐欺師か悪魔と、相場が決まっている。

もし神だとしたら死に瀕した状況を見計らい、契約を半ば強要させるやり口が悪質だ。

(……唱えたら、もう引き返せない気がする)

悪い予感がしたが、猶予は残されていない。

何よりも自らの人生を血で染めようとする少年を、このままにしてはおけない。

「間違った道を歩む少年を正す力をくれ、インセクトウミレス！」

「う、うわっ！」

眩い光に包まれた少年は目を瞑り、ユウから距離を置く。

次の瞬間、茶色の鎧を全身に纏う青年が立っていた。

まさに鎧鉄の騎士とでも言うべき様相を呈する青年に、少年は怯えた様子で苦い顔を見せる。

「ど、土壇場で目覚めたんスか?! インセクトウミレスが! そ、そんな……しくじったツス」

「おい、お前。いったい何を……いや、その姿を見りやわかる。ガキと同じ存在になったってことか」

「あ、あの人が言ってたツス。羽化したての昆虫は一番御しやすいって。これからが本当の戦いツス！」

機少年は蛇が蛇行みたいに飛び跳ね、ユウに向かってくる。

気迫の込めた少年が全力を出しているのは、一目で理解した。

だが不思議と恐れはない。

この鎧鉄に宿る魂が、青年に無限の力を与えてくれた。

「ごめん、機くん。力を手加減できそうにない——だから、どうか全力を耐えてくれ」

拳を振り上げて放った一撃は少年の体を掠める。

殴った際に骨が碎ける感触がして、青年は思わず顔をしかめた。

耳をつんざく悲鳴が上がると罪悪感に駆られ、少年の顔をまともに見られなかった。

「う、まだまだ……」

フラフラと歩いた少年は、まだ戦意を喪失していない。それほどまでに現実の生活に失望しているのか。

あるいはあの人と呼ばれるSG8のボスが、よほど恐ろしいのか。健闘もむなしく倒れ込む瞬間、ユウは前のめりになった少年を受け止める。

「……な、なんで俺を……敵ツスよ……」

「敵も味方も関係ないよ。盗賊に襲われた時、ある娘に人を殺すなどいったんだ。その子は僕の言葉を信じてくれた。僕がそれを守らないんじや、彼女に示しがつかない」

自らと直美に課した不殺という道徳の鎖。

ヴォートウミラで冒険者として生きる上で、大きな足枷になるのは分かりきっていた。

敵意を剥き出しにしてきた相手にまで、慈悲を向けるのは難しい。だが僕らの命は、元の世界に戻っても続いていく。

それを考えたら、安いものだろう。

しかし、無関係な人々に危害を及ぼした責任は果たしてもらわねば。

「今日、冒険者の人々がたくさん亡くなった。君が首謀者だろう。SG8という組織の人間に、良心はないのか？」

「え？」

「僕を亡き者にしようと思ったのはいい。でもモルマスの冒険者たちが何人も亡くなった！生き残った人達も今も怪我や怪物の悪夢に苦しんでる！彼らに何の罪がある！体の傷を癒やしても、心まで元には、元には……！」

「……し、知らないツス。俺はモルマスへの攻撃を指示してないツス……そもそも俺は泥の昆虫を生み出す魔法なんて……」

「とぼけるな！そんな言い訳、信じられるか！」

「……」

頭に血が昇り、咄嗟に言い返すと

「大丈夫かよ、冷静になれ。そのガキにや、まだ利用価値があるからな」

悪魔が横から口を挟む。

ハリーの言う通り、確かに冷静さを欠いていた。

彼がやったという証拠はないのに決めつけてしまった。

モルマスへの泥の悪魔の襲撃から、間髪入れずに夜襲を仕掛ける。

あまりに計画的かつ非道な行為。

そして僕たちを襲う動機も充分と、S G 8の面々の仕業である可能性が高いというだけだ。

(……逆に言えば証拠はそれだけ。決めつけるには、不十分な気がするな)

けれども、暫定有罪で裁いていいのだろうか。

彼には聞きたいことが山ほどあり、人道的にも合理的にも、この少年を生かすメリットは大きい。

尋問に素直に答えてくれる保証はないが、たとえ敵であつても、少年の良心を信じたい気持ち、心の片隅にあるのは事実。

青年の心が傾きかけていた時

「なんだア、敵対する組織の情報も吐かねエか。もう生かしておく意味ねエな、小僧」

「ひ、ひいー」

「オレサマとこいつを殺そうとしたガキが、命乞いだと？ 笑わせるんじゃないねエ。損得を天秤にかけりや、殺す以外の選択肢がねエだろ」

ハリーが向かって歩いていくのを見て

「させないぞ、ハリー。そんなことは……」

青年は覆いかぶさると、身を挺して少年を守った。

肝心の少年は何が何だかわからず、放心している。

今まで戦いを繰り返してきた相手がかばってきたのが、信じられないと言いたげな面持ちだ。

悪魔は怒り心頭といった様子で、全身をわなわなと震わせる。

眉間には血管が浮かび上がるほど、激高していた。

「言ってる意味がわかってんのか?! 生かしておいたら、また殺しにくんぞ、そいつらは！」

「承知の上だ、そんなもの！ それでも彼をやらせはしない！」

「どけ、お前がよくてもオレサマの気が済まねェんだ！」

冷静な判断を下すなら、彼を殺害するという選択肢も、俎上に上げるべきだ。

ヴオートウミラで生まれ生きてきた人間ならば、そういうシビアな決断をできただろう。

だが僕は現代で育った人間。

憲兵に引き渡せば極刑もあり得るし、かといって自らの手で命を簡単に奪えるほど非情にはなりきれなかった。

「チツ、ぎげやがって。甘ちゃんが、つくづく合わねェな、オレサマとお前は」

石畳、骸骨、壁掛けのランタン。

苛立ちを隠さず周りの物に当たり散らす、ハリーは二人には何もしない。

ユウに攻撃すれば自らも痛みを味わうのだから、当たり前ではあるが。

「機くん、大丈夫だよ。君を殺させはしないから」

「は、はいッス……」

「オレサマはガキに死の自由を侵されるならば、名誉の戦死を選ぶと、悪魔の誇りを語ったな。覚えているか」

少年に呟くと、悪魔が青年に問う。

こくりと頷くと、ハリーは更に言葉を続けた。

「なら人間のお前は人間の善意を信じ、人間の過ちを犯せば正し、人間を身を挺して守ることが信念なんだろう——ならば脆弱な人間共を守り抜いてみせろ。オレサマは骨のある奴は好きだ。魔法の素養もねェ、弱つちい人間だとしてもな」

そう言い残すと、ハリーはその場を去る。

青年は悪魔の背に向かって

「いいのか。僕も君も、この子を生かして後悔するかもしれないよ」  
訊ねると

「まあ、いいさ。今日は泥の虫けらとガキに2連勝して、気分がいいからな。ユウと心の広いオレサマに免じてテメーを見逃してやるよ。

感謝しな」

「ハリー、名前を……」

今までお前、テメーとしか呼んでこなかった粗暴な悪魔が、祐は目をぱちくりさせた。

彼の心境の変化は定かではないが、僕の何かを悪魔が気に入ったのだろう。

「名を呼ぶに値すると感じたから名で呼んだ。そんだけだ。そのガキを見てつと腹が立つ。とつとと教会にでも連れていけや」

戦いを終えると、ハリーは何処かに歩み出す。

「な、なんで……助けてくれたんスか……？」

「ハハ、僕にも……わかんないかな？ 強いていえば……自分の気持ちに従ったんだ」

「……な、なんスか……それ……」

「とにかく傷を治そう。見つかる前にここを出ていくんだよ。えーつと、塗り薬は」

そういうと青年は、先ほどカバンを投げてしまったのに頭を抱えた。

道具屋の営業時間ではない。

英子はまだ起きているだろうか。

彼女には悪いが、急患の僕らを診てもらおう。

「最近仲間になった女の子がいてさ。回復魔法が得意な娘だから、君も治してもらえるよ」

「……そうツスか、行きましようツス」

神妙な面持ちをした機少年は青年に促されるがまま、英子の元へ向かう。

その間、彼は何かを言いたげに祐の顔を覗き込むのだった。

## 第21話 迷い人の救い

僕と機くんは肩を抱き、支え合いながら、覚束ない足取りで英子さんの元に向かう。

傷口が閉じていないせいかわ折振り返ると、歩んだ足跡の如く血の跡が残されていた。

道中インセクトウミレスの力が、切れたのだろう。

いつの間に僕も機くんも元の姿に戻っている。

何としても朝を迎えるまでには、彼をモルマスから脱出させたい。到着するとなりふり構っていられず、英子さんの部屋の扉を叩く。

「急に扉が叩かれたから、吃驚しましたよ……その方は？ お二人とも傷だらけですけど」

出てきた彼女は純白の寝間着に着替えており、普段着の体全身を隠す法衣よりも、すらっとして見えた。

成長期だというのに痩せていて心配になる。

一回り年齢が離れた彼女を、兄のような心持ちで凝視する青年に英子は首を傾げている。

早く用を伝えねばと、青年は矢継ぎ早に用を切り出す。

「夜分遅く申し訳ない。いくら仲間といえど節度は必要だよね。でも君にしか頼れなくて。どうかお願いします。この子は誰だとか、事情は聞かないでくれ」

「で、でも明日は王様との謁見が……」

「僕から話を通しておく。直美さんはしっかりしてるから」

彼女を説得すると、快く引き受けてくれた。

僕は度重なる戦闘で、彼女はモルマスの冒険者への治療をし、疲れ果てている。

どうせヴォートウミラの言語を理解し、喋れるのは直美だけ。

王族との謁見も難なくこなすはず。

ハリーは粗暴が過ぎて論外だし、いざとなったら命令できないと危険極まりない。

「ではベッドに」

「ハ、ハイツス」

「治療と失明を司る神ソルよ、汝の力添えによって我に死と再生を、繁栄と衰退を、治療と病を——レフェクティオ」

ベッドに座った機少年の横に腰掛け、英子が呪文を唱えると、棒の先端から金色の魔法陣が浮かんだ。

刹那、燦燦(さんさん)と輝く球体は開いた傷にふわふわと迫り、みるみる裂傷を塞いでいく。

球体の周囲にいると木漏れ日に包まれていると錯覚するほど、仄かに体があたたまる。

「終わりました」

「……ツス」

「ユウさん、どうぞ」

英子と機少年が見つめ合うと少しだけ間を置いて、また喋り出した。

青年にも、すぐに処置が施される。

鮮やかな手際だ。

ここにきてから、相当治療の経験を積んだのだろう。

「もうお二人の怪我は大丈夫そうですが……」

「だ、大丈夫ツスよ！　ありがとうツス！　もういくツスよ！」

少年は年の近い少女への照れ隠しか、早々に退室しようとした。

だがそんな彼を英子は待った！　と静止した。

「この男の子。間違いなくSG8の……敵対組織の子でしょう。こんな時間に血塗れになるほど争った。察せないほど私も馬鹿ではないです。何故助けたんです？」

「ハリーは機くん刃を向けた。その時とつさに体が動いたんだ。答えを頭で出すより早く。だから聞かれても困るな、英子さん」

バレているならば、誤魔化すのは無意味。

訊ねられた青年は、正直な気持ちを吐露した。

すると英子は淡々と口を開く。

「彼らを悪だと思えますか？　生きる為に組織にいるだけ。世間で暮らす人間が徒党を組むのと大差ないですよ」

「僕も迷い人。SG8を否定しても、ウンザリしてヴォートウミラにきた時点で説得力ないさ。ただ僕らの命を奪うのも辞さないのは、到底受け入れられない。戦う理由はないはずだ」

和解の道があれば、僕はそれを目指す。

どれほど困難が待ち受けていようと。

「それに僕は自分を正義だとは微塵も思わない。生きることにはさえずらう、情けない人間だよ。でも悪魔の悪辣さにSG8の凶行。許せないことはあるんだ」

「親からも見放された、私と同世代の子も何人も見てきました。そんな子にとって、ヴォートウミラはきつと救いの場所。ユウさんの命を奪いかけた罪を恨んでも、彼ら自身を恨まないでくれますか？」

真剣な面持ちで英子は問う。

保証はできないが、なるべく血を流さない方法を模索したい。

僕は無言で頷くと、再度話を始めた。

「勸善懲悪の物語なら悪を倒し、溜飲を下げ、ハイ終わりで済むかもしれない。けれど、それでは繰り返す。この子の悪事に至った根本的な原因を取り除くことが、本当の解決だよ」

「……」

「でも最大の理由は臆病だから、かな。彼を助けるか否かさえ、僕は決断できなかった。問題を先送りにして、なあなあにしてる。けど迷わなければ！ 迷わず人に暴力を振るったなら！ その瞬間、人でなくなる気がしたんだ」

「許されない罪もあると思います。失われた命が元に戻ることはありません。この男の子が犯したのは許されない罪。もつと罪深いのは自ら手を下さず、誰かにやってもらおうとする卑怯者です」

普段は緩い発言の多い英子が、珍しく断言した。

SG8ボスに対する嫌悪が滲み出ており、同意すると彼女の眉間に寄る皺が消えていく。

「人は生まれながらにして罪人。咎が1つ2つ増えても、重荷は大して変わらないさ。背負う罪を途中で投げ出さないなら、烏澁がましいけど、僕は手を差し伸べたい」



「ユウさんの理想論は正しい。論理的にも筋が通っていて、人を納得させる力があります。近代的な司法はそう作られた。でも貴方の正しさに、理想論に救われる人なら、この世界に迷い込まなかった。迷い人なりに考えに考えた結果が、SG8の——異世界に留まるのを選んだ人たちの集まりです」

敵対組織に同情的な彼女の言葉の重みに、青年は目を伏せる。

黙り込む機少年も首を激しく上下させ、英子に賛同する。

SG8の抱える闇に僕は何をできるのか。

冷静かつ厳格な物言いに、僕は首筋にナイフを突きつけられた気がした。

「確かに理想を唱えても、どうにもならない。けど理想論は世の中にあつてほしいんだ。だから馬鹿と嘲られても……」

現代社会を見渡せば学歴や貧困、能力による差別は横行している。

否、人種差別や性的少数者などと違い、唯一許された差別だけあつて内容は激化の一途を辿っている。

見下されても大衆は言論の暴力を正当化し、やがて優生思想と拝金主義の社会を形成していくだろう。

そんな吐き気のする現実には抗うには理想論を唱える他ない。

救われる人がいるならば、無意味ではないと、僕が勝手に信じたいのだ。

「ヴォートウミラにも辛いことはたくさんあります。けれど少なくとも私たちを虐げた人間はいないんです」

「逃げれば嘲笑され、いつか傷つけた連中の頭から消えていく。元々、存在しなかったかのように……それでも現代では直接的な復讐がでない以上、手段としては穏当だね」

「現実には居場所がないからこそ、空想の世界で生きる。迷い人の方々も真剣な思いで、ヴォートウミラにやってきたんです……現実に戻ると決めた貴方には理解できないでしょうけど」

少女に睨まれ、青年は口を閉ざす。

彼女は元の世界に戻るつもりで同行しているのでは？

なのに、それ自体を否定する口振りなのは、どうしてだろう。

その時青年は、英子に対し違和感を覚えた。

「世界を支配しているのは昆虫。中でも甲虫は最も種類が多く、多種多様な生き様がある。人間だけ決められた時間に起き、寝て国や社会に尽くす生き方を強制されるのは何でだろう？ 国や社会、学校の在り方に疑問を抱くのは英子さんやSG8だけでなく僕もだよ」

さつき伝えた通り、ただ無益な争いは勘弁してほしいというのが本心。

迷い人の感情に寄り添いつつ、青年は対話していく。

「英子さんは傷を癒やせる。でも癒えない傷もあるよ。言葉の爪痕。自責の拷問。自問の後悔。誰にも見向きもされない傷は、自分自身で治すしかないから。だからこそ難しいし、どうすべきかも僕は結論を出せない。安易な発言を慎む。僕なりの誠意だ」

好調なら気分よく過ごせ、精神的に辛ければ気分も沈む。

心理学では気分一致効果というらしい。

日本では毎年数万人が自死し、米国では絶望死という貧困層の死の低年齢化という問題に直面している。

心が幾分か晴れやかだったなら、最悪の選択は躊躇っただろう。

誰かが何気なく口にした罵倒が、自死の引き金を引いたかもしれない。

自らと共同体への絶望が、人を殺していく。

「迷い人は悩み苦しみ、綺麗事は見抜く感性があります。嘘で塗り固めた人の、都合のいいように動いたりはしません。特に貴方のような人の……」

「僕もポジティブな言葉は嫌いだよ。他人を社会や集団の道具のように扱おうとする意図を感じて。明るいだけの人間には、さほど興味が持てないんだ。僕と一緒にだね」

青年が同調すると、英子は目と口を開く。

しまったとも言わんばかりの彼女の表情に、青年は相好を緩めた。

「……ユウさんは私の生意気な発言も、頭ごなしに否定しないんですね。ごめんなさい」

「英子ちゃんは大人なら無条件に信用できる？ 僕自身そうじゃないから。子供でも尊敬はできるし、大人でも嫌いな人間は嫌いだ。ハハ、ちよつと大人げないかな？ 大人にならないとね。子供の英子ちゃんに嫌われないようにさ」

青年が微笑むと、英子は毒気が抜かれたのだろう。

祐と機の二人に向かって穏やかに笑いかけた。

「異世界の私には人を癒やす力がありますから。現実の私にはない誰かの為になる力が……それで役に立てるなら安いものです」

「生きていけば人は何かしらやる。治癒だけが英子ちゃんの役に立つ手段ではないよ」

「でも人の欲を満たさない人間は、友情すら築けないですよ。人には認められたい、優しくされたい。面倒な感情がありますから」

彼女の言葉には一理ある。

戦闘面では役立たずにも関わらず、直美と一緒にいられるのは、知識や人柄を期待されているから。

貢献できなければ、切り捨てられる。

英子も肌で感じているからこそ、治癒で存在価値を高めるのにこだわるのだ。

「あの、ユウさん」

「どうかした？」

「……私はそこまで強い娘じゃないですから。誰かに縋って護られることでしか生きられません。たとえば人を傷つけ虐げる人たちの隣であっても」

「……そっか。ありがとう、失礼するよ。機くん、いこうか」

「ハ、ハイッス」

救いを求めたヴォートウミラでも、彼女は苦しみを抱えている。

だが解決を急ぐのは悪手。

(いつか話してくれたなら……英子ちゃんの力に)

礼をいうと、二人は退室する。

少年をモルマスから脱出させるべく、歩を進めると、英子に痛い所を突かれたのを思い出す。

理想論は理想でしかなく、理想論で救えない人間はどうするのか。彼女を納得させる理屈を探そうと頭を働かせると、少年は突如青年に耳打ちした。

「おじさん。あの……今からする話は口外しないでもらえるツスカ？」

監視されているか警戒している?!

機の様子から察した青年は合意すると、彼は少年と同様に囁くように喋った。

「心当たりはないツスカ？　俺が弱ったおじさんを襲撃したこととか……」

「つまり内通者がいる？」

「えー、はあ、そう……スね」

聞き返すと、少年は要領を得ない返事をした。

問いただしても視線があちこちに向き、誰が内通者かという肝心な一言を教えるはくれない。

その煮え切らない態度が、かえって発言の信憑性を強めている。直美はそもそも、何故命を狙われている？

SG8と因縁があり、彼らの誰かに個人的な恨みを抱かれたら？　英子は仲間になった経緯が曖昧だ。

僕がハリーに殺されかけた瞬間、偶然にも現場にいたらしいが、それは何故か。

ずっと尾行していたと考えれば辻褄が合う。

妙にSG8に同情的な態度も含め、考えれば考えるほど怪しい。ハリーは元々、SG8に雇われた盗賊の所有する書物から召喚された悪魔。

敵組織に何かを吹き込まれているのは、充分あり得る。

——つまり味方の誰でもスパイの可能性が？　いや、彼は敵対組織の少年。

簡単に信じてしまったいいのか？

様々な思いが頭の中で錯綜し、青年は混乱した。しかし居場所が敵に筒抜けなのは事実。

少年の台詞を嘘と決めつけるには、あまりに判断材料が足りない。

「なんで僕にそんな重要なことを……」

「敵対してた俺にも別け隔てなく接した人に……死んでほしくないって……思っちゃったツス」

衝動的な善意に駆られたようだ。

これがバレたら、彼もただではすまない。

少年が文字通り命懸けで伝えてくれたように、青年も少年の身を案じた。

「……機くん」

「な、なんスか?」

「君の立場が危うくなるのに、危険を顧みず情報提供ありがとう。もし組織に居場所がなくなったりしたら——僕たちの所において」

唾然とした機少年に、さらに青年はまくしたてる。

「勿論敵対していたし、すぐに仲良くは無理だろう。けど打ち解けられるよう、手助けするよ。帰還の方法が見つかったら元の世界に帰るけれど、君は残るか帰るか好きにするといい」

「……考えさせてくださいツス」

体を震わせ、少年は一言だけ返す。

すぐ決断を下せるならば、少年は迷い人になっていない。

彼には彼の生き方がある、無理強いはできなかった。

せめてヴォートウミラで生きていく支えになれば。

青年は彼を送り届けると、少年への思いを胸に、宿へと引き返していくのだった。

## 第22話 悪魔たちの狂宴、悪意の嘲笑

地獄の都にある外壁は金で彩られ、内部にはルビーやサファイアなど、高価な宝石が至る場所に埋めこまれた城。

強欲を司る悪魔マモンと建築家ムルキベルにより建造された、地上のどの城よりも豪華絢爛な万魔殿。

上位の悪魔が棲む、ギリシャ語で「デーモンのすべて」を意味する城に、地獄の三支配者と邪霊六座が一堂に会し、今後の方針について話し合う最中であつた。

「ええい、フルーレティはまた欠席か！ 奴を処分すべきでは?!」

「まあまあ、いいじゃないの。中将殿も疲れたのさ。しばらくは休暇ということだ」

「ル、ルシファー様！ それでは組織は成り立ちません！」

ハット帽を目深に被り、リネンの服に身を包む男性が、端正な顔立ちの神々しい翼を有する金髪の青年に注意した。

棒切れを手にした彼の座る足元には無数の羊が寝転がり、会議が終わるのを待ち侘びていた。

悪魔の名は旅団長サルガタナス。

数多の悪魔を束ねる上級精霊の集団、邪霊六座の内の一柱であつた。

「サルガタナスの言う通り、早急にフルーレティの身柄を捕らえて悪魔裁判にかけるべきだろう。これはルシファーの意志」

ルシファーと瓜二つの面立ちの悪魔が、ルシファーとは正反対の意見述べた。

だが鴉の如く濡れそぼる六枚の黒翼が、ルシファーと彼を全く異なる存在だと物語る。

宰相ルキフグス。

邪霊六座最強の悪魔にして光を避ける者と、その名を轟かせていた。

「そうなのですか、ルシファー様。ルキフグス様のさきほどの発言とは180。意味が異なりますが……」

「うん。俺も人間と一緒に矛盾を抱えた存在ってことで1つよろしく」

ルシファアの意志という部分を否定せず、軽く返事をする。

信じ難いが彼が言うのであれば、真実なのだろう。

唇を尖らせたサルガタナスは、怪訝そうにルキフグスを一瞥する。

「ルシファア様、そろそろ時間ですので号令を」

サタナキアが促すと

「ありがとう、サタナキア」

ルシファアは感謝を述べた後に手を叩き、悪魔に向けて指揮を執る。

「これより定例会議を行う。ネビロス少将、ヴォートウミラで起こった出来事について報告を」

「承知いたしました。では……」

悪魔の指揮官の誕生。

よりによって、その青年が血と魂の契約を結ぶ。

悪魔にとつても前代未聞の事態に、集まった邪霊六座は動揺を隠せない。

ネビロスが報告をしている最中、邪霊たちはざわざわと騒ぎ立てたが、その度にルシファアが

「黙って傾聴するように」

と注意したり

「貴殿らの声で話が入ってこないのだが」

ベルゼブブが割って入る。

それでも止まらぬ会話に都度アスタロトが咳払いをし、黙るよう促した。

噂を耳にはしていたものの、話半分だった。

しかしネビロスが報告したことで、一気に現実味が帯びてくる。

「デモンズ・コマンダーが出現したとは。フルカスからの報告は事実だったようだな。吾輩が直々に鍛えてやろう」

「しかも悪魔と血と魂の契約を結んだと。なかなか愉快的な男が現れましたな。」

「所詮は雑魚悪魔との契約でしょう。すぐに淘汰されるのでは？ 期待外れにならないのを願うばかりだ」

「迷い人ならば人並み以上に戦えるだろう。現にモルマスの怪物を退けたのは事実。彼奴（きやつ）の行く末が楽しみだ」

ネビロスが以上ですと言いつつ、邪霊六座の面々は堰を切ったように思い思いに感想を告げた。

刹那、ルシファーは手を天に掲げる。

「デモンズ・コマンダーの話題はほどほどにしてさ。モルマスへの襲撃についての話をさせてもらいたい。いいかな」

「……！」

話題を変えるためか、普段はいい加減なルシファーはその場を仕切り始めた。

普段の会議ならば、進行を務めるのはベルゼブブ。

どうしても物申したいことがあるのだろう。

邪霊六座の面々は、内心戦々恐々としながら、彼の一言を待つ。

「誰かさんが先走つたらしいねえ。果実を摘むのは実つてからすればいいのに。な、ネビロス少将」

「何故、私に話を振るのです？」

「自由を尊ぶ我々が一枚岩ではないのは、痛いほど知っている。ただこの前の定例会議では『上官からの指示がない場合、手出ししない』という結論で一致したはずだが。聡明な少将殿が、それを忘れたわけではあるまい」

「アモンを向かわせなければ、ヴォートウミラの冒険者共々ユウもやられていた。悪魔にとって甚大な損害となっていたやもしれない。弁明はあるかい、少将殿」

いつになく真剣なルシファーの眼差しに、場が凍りつく。

モルマスに泥の悪魔の軍勢を差し向けたのは、他ならぬ悪魔の仕業だと支配者は考えていた。

悪魔のみの社会を望む、旧い秩序を維持する保守派。

人間も含めた、新たな悪魔の社会を作ろうとする改革派。

どちらも自分なりの考えを持っており、どちらも悪魔社会を、より



良いものにしようとする善意で動いていた。

しかし過激な保守派の存在を、三支配者は危惧していた。

最悪デモンズ・コマンドーを片っ端から殺害して、悪魔と人間の織りなす改革の芽を摘むこともあり得る。

——そして今回、それを実行した者が現れた。

「ルシファア様とベルゼブブ様のおっしゃる通り、私は保守派に属する悪魔。ですが私は今回の件に関与していません。私が望むのは、あくまで悪魔全体の利益と効率ですから」

「その言葉に嘘偽りがないと、サタン様の御身の前で誓えるか」

ベルゼブブは真紅の複眼を向け、彼を威嚇する。

広げた翅に描かれた髑髏の虚ろな瞳は嘘を吐いた瞬間、少将の首を刎ねるのも辞さない構えだ。

緊迫した雰囲気を感じたネビロスが言葉に詰まると、横から大将サタナキアと司令官アガリアレプトが口を挟む。

「それでやられるようなら、悪魔たちを率いるに値しない命だということ。優勝劣敗という世界の理から、デモンズ・コマンドーだけ特別視するわけにもいかん」

「サタナキアの意見は否定しませんが、過激な保守派のやり方には賛同しかねます。貴重なデモンズ・コマンドーを、わざわざ積極的に殺す必要もないでしょう。主導者には厳重な処罰を」

「いや、大将殿と司令官殿の言う通り。蝶よ花よと育てるのも、かといって戦いをさせすぎても駄目。難しいよねえ、扱いがさ」

ルシファアは薄ら笑いを浮かべつつ、話を続ける。

話題が逸れたことに安堵し、ネビロスは溜息をした。

「心配には及びません——悪魔の指揮官の運命は血に染まる。奴は格言通りの道を進むでしょう」

「それは少将殿の明晰な頭脳を生かした未来予測かい。それとも保守派の計画で、そう定められているのかい？」

ルシファアはネビロスに顔を近づけて、探りを入れてくる。

表情こそ笑顔だが、双眸はじっと彼を見据えており、腹の底に別の思惑を隠していて気が抜けない。

「……あまり私の部下を追い詰めないでくれ。ルシファー。確たる証拠がない以上、裁かぬのが道理」

「いたのか、アスタロト。あんまり静かだから会議中に寝たのかと思っただよ」

主人に無礼な発言をしたルシファーに、竜は炎を吐く。

アスタロトが宥めるべく首を撫でると、喉を鳴らし微笑んだ。

「ま、ネビロス殿がやったとは限らないからねえ。この件は一旦保留ということだ」

「なら、先ほどの尋問はいいかい」

「ん、ちよつとからかいたくなつて」

あつけらかなとした態度で、ルシファーは言つてのける。

他の悪魔たちは談笑をしたり、緊張を解き始めるも、当のネビロスはいつそう顔をこわばらせる。

体を揺らし笑う陽気なルシファーに蠅の王が横から手を出すと、金

髪の青年は頭を抱えた。

「つてえ！ 急に何すんだよお、ゼブル」

「ルシファー、そうやって同胞をおちよくるのは貴様の悪癖だ。ネビロス少将。気分を害されたなら、代わりに儂が謝罪しよう。すまなかつた」

「まあ、許してよ。俺もネビロス殿と仲良くしたかつたのさ。？じやないよ」

無邪気で明るい言動に覆われた心中を、察するのが難しい悪魔ルシファー。

サタンに次ぐ魔界のNo.2の凄みに気圧され、ネビロスはすっかり縮こまってしまふ。

「では今後の計画について話していこう。儂の元へ、ヴオートウミラの世界地図を」

「はいはい、実はこんな物作りしました。レッサーデーモンくん、持つてきて〜」

世界地図を広げた矢先、ルシファーは茶髪の男性の駒をモルマスの上に乗せる。

他にも全身傷だらけの斧を手にした男性、翠の瞳が特徴的な剣を携えた少女、法衣を纏う少女を模した模型が、彼の手に握られていた。「……ルシファア様、それは」

「下級悪魔に作らせたんだ。結構いい出来だよなあ、褒めてあげないと。それよりこの二人、少し前は罵りあってたのに友情が芽生えかけてる。信念も価値観もまるで違うのに、こいつら面白いな」

そういうとユウとハリーの駒を、乱雑にぶつけた。

——子供が壊してもいい玩具を扱うかのように。

「さてとアスタロト、あいつらはどこに向かうんだ。未来視を頼むよ」  
「彼らは王国の悪魔討伐依頼を受け、『魔毒竜殲滅作戦』の生き残りである猛者に協力を仰ぐとのこと。それとルシファア、一つ伝えねばいけないことが」

「どうした？」

「……以前青年の未来視を行った時よりも、未来が不明瞭になってしまった。まるで霧がかったかのように」

「マジかよ。悪魔の指揮官様は色々と規格外だな」

アスタロトの未来視は、悪魔が策を講じる際に重要な能力であった。

無論、彼の力に頼らずとも作戦は立てられる。

しかし確実性を重視するならば、利用するに越したことはない。

「どうする、他の悪魔にも未来視を頼むか？」

「いや、聞かないでおこう。興が削がれる。情報収集を怠らず行動を予測して、策を講じるとしよう。悪魔の未来の為に」

ルシファアは口角を吊り上げ、白い歯を覗かせた。

世界地図の上の模型を見下ろす様は、傲慢を司る悪魔に相応しい尊大さであった。

「ユウ、ナオミ、エイコ、ハリー。俺たちにとってお前たちは、掌の上の虫けら同然。生きる為に足掻く姿を、せいぜい楽しませてくれよ。ククク、ハハハ、アーハツハツハ……」

ルシファアが高笑いすると、悪魔もつられて大笑する。

地下深い地獄で発生した巨大な闇の渦が、迷い人らと数奇な運命を

辿る悪魔を飲み込もうとしていた。

## 第23話 道徳の指針、新たな仲間

翌日

「今後の冒険資金として金貨をたんまり貰ったわ。これは武具の調達に充てましょう。王国から直々の依頼、絶対に成功させるわよ！」

「やっぱり直美さんに任せて正解だったね」

「やるなア、嬢ちゃん。こっからオレサマの成り上がりの序章が始まるぜ！」

「おー、直美さん。すごいです〜！」

「上手く王族に取り入ったな、悪魔じみた交渉術だ」

王国へと戻った一行は酒場に集い、酒を嗜み、注文した食べ物に舌鼓を打ちながら談笑する。

テーブルの中央のランタンの灯りに、青年は百物語を連想しながら、四方八方からの視線の恐怖に抗った。

（冒険者が仲間を探す場所らしいけど……騒々しくて苦手だ。人が多すぎる）

心で文句を漏らしつつ、祐は正面の直美に目を向ける。

王族への謁見を済ませた彼女が、成果を見せびらかすように貰った金貨を分配していくと、称賛の言葉を送られる。

アモンは近々パーティーから離脱すると金貨を受け取るのを拒否したが、モルマスは彼が救ったようなもの。

「君にはこれでも足りないくらいだ。受け取ってもらわないと僕の気が済まない」

「……そうか。なら仕方ないな」

青年が伝えると朗らかに笑って、懐に収める。

王族からはモルマスの褒賞と同時に厄介事も押しつけられた。

最近が悪魔が原因とおぼしき被害が発生しており、その怪事件を解決してほしいとのこと。

彼女は王族からの依頼を心底喜んでいたが、責任重大で青年は嬉しさより不安が勝った。

(……失敗したら言い訳ができないな。期待してくれている証拠だけど)

「この依頼が成功したら、報酬と王族とのコネが期待できるわね。実入りがいい依頼、金品、資金援助 e t c。薔薇色の異世界生活が待ってるわ〜!」

満面の笑顔を向ける彼女は、既に成功した先の未来を見据えている。

だが上手くいくだろうか。

ハリー以外の悪魔との交戦は初めてだ。

とはいえ入念な準備と対策を怠らず、冒険に備えるという基本を守れば、大事には至らないだろう。

幸いオカルトが好きで僕らの知識が、悪魔討伐に生きる場面はあるかもしれない。

後ろ向きな性格も作戦の粗が見つけやすいと考えれば、ある意味長所だ。

青年が悪魔について脳を働かせると、直美は唐突に彼に顔を寄せた。

目と鼻の先にある彼女の唇は、先ほど食べていた揚げ物料理で、リップを塗ったかの如く輝いている。

(きゅ、急に何だろう？ 人前で話せないようなこと?)

戸惑いながらも青年は頬を紅に染め、直美の言葉を待つ。

「王族には貴方が悪魔の魂を持つこと。仲間に悪魔がいること。そして私たちが迷い人であることを素直に教えたわ。後から大事になったり、疑われるのは避けたいもの」

「え、それ、バラして大丈夫?!」

「迷い人には皆それぞれ力が与えられる。場所によっては差別される迷い人も冒険者なら歓迎されるわ。王国の人間って現金よね。私も人の事は言えないけど」

彼女の口振りだと、王国内では迷い人であることを隠す必要はなさそうだ。

しかし異世界からの来訪者である僕らが、ヴォートウミラの民から

偏見を持たれているのは事実。

SG8に迷い人について情報収集されれば容易く居場所が特定される以上、なるべく隠すべきなのは間違いない。

「今は実より名を取るつもり。力さえ示せば、実も後からついてくる」  
「悪魔を討伐すれば悪魔に与する人間とは扱われないはず。今は冒険の成功に尽力しよう」

今まで流されてきたが、もう腹を括るしかない。

祐が鼓舞すると、彼女は拳を握り締めて力強く答えた。

「悪魔には階級と序列がある。情報不足で、どれほどの悪魔なのか不明なのが困るな。悪魔次第では荷が重い依頼になりそうだ」  
「どうしましょう。用が済んだら情報収集していく?」

彼女の問いかけに首を振って、青年は返事した。

「いや、依頼人の王族に悪魔について引き続き調査してもらおう。それが国を治める立場の人間の責務と誠意。討伐の依頼に気づいた悪魔との交戦も考えられるし、危険を冒したくない」

「王族を使いパシリか、気分いいなア」

ユウの言葉を聞き、ハリーは奔走する貴族を嘲笑うように膝を叩いた。

悪魔の本質は、彼との契約と冒険で痛いほど知ったつもりだ。

慎重に慎重を重ねて用心せねば。

「悠長にしていたら信用を失いかねない。悪魔が逃げない?」

「悪魔も簡単には逃げられない。別人になれば人間関係や地位を捨て、また一からやり直した。今は王族の情報収集を静観し、期を待とう」

「理には適ってるけれど、実際にはどうなの?」

「基本的に人の世に溶け込む悪魔は、他の人間や築いた地位を最大限利用する。軽率な行動を取る悪魔は案外少ないよ」

アモンはハリーを横目に見遣ると、彼はバツが悪そうに渋い表情を見せた。

悪魔として格上の彼の正論には、粗暴で口答えする性格も鳴りを潜め、借りた猫のように大人しい。

「……蛇の道は蛇。悪魔の道を識るのは同じ悪魔。君らには頼るかもしれないな、ハリー、アモン」

「おう。ただ上層部にしか共有されてねエ情報もあつから、それについてには勘弁な」

青年がハリーに頷くと、白い歯をこぼす。

出会った直後と比べれば、だいぶ丸くなった。

契約で嘘はつけない以上、情報の信頼性はある。

話に一区切りついた所で、青年はあることを提案する。

「いい機会だから仲間を増やすのを検討してみない？ この人数だと流石に厳しい気がして」

「人を増やすと面倒事も増えていく。分け前の問題もあるし、私は少人数組織でも構わないわ」

「少人数だと、もしもの事態に困るよ。予備の冒険者には現地の調査や情報収集の役割を担ってもらったり、やってほしいことはいくらでもある」

「確かに予備の戦力という観点から見ても、多いに越したことはないけど……」

直美は顎を手で触り、神妙な面持ちで青年の意見を汲もうと思案する。

彼女同様、安易に増やすのは青年も同意だった。

「冒険していて困ったことはある？ 足りない部分を補う人材なら同行してもらってもいいんじゃないかな？」

助け船を出すつもりで訊ねてみると

「どうせ加えるなら迷宮に落ちた宝箱の解錠を頼める人材が欲しいわ。いらぬ品々の売却で冒険資金が工面しやすくなるし」

「あたしは魔法使いさんがいいかな、なんて。幽霊さん相手にできる人は必要ですよ」

直美と英子が条件を列挙していく。

具体的な人物像があり、仲間に参加してほしい理由も明確でより冒険が捗るだろう。

青年もうんうんと同意した。



「いいね。困ったら都度仲間にするか雇おう」

「チンタラしてつと、優秀な奴らが他の連中に取られちゃう。いつちようギルドにいつてみねエか？ あそこ、冒険者探しの斡旋もしてるんだろ？」

流石に己の命が懸かる以上、冒険稼業に手を抜くつもりはないようである。

悪魔の一言に促された一行は席を立つと、金を支払い、酒場を後にするのだった。

冒険者ギルドにて

ギルドの出入り口に向かうと、相変わらず火と水が建物の周囲を飛び回る。

直美と英子は羽虫を追い払うみたいに、シツシツと手を振った。

青年は意に介さない二人の逞しさを羨ましく思いながらも、高鳴る胸を深呼吸で整えつつ、青年は足早に駆ける。

(い、いつきても慣れないなあ)

最後にハリーが通り過ぎると、火と水は彼からも遠ざかっていく。

毎回こんな気持ちをしながら、ギルドへ入る羽目にかかるのか。

耐えきれずに

「これはなんなの、皆は怖くないの？」

と聞くと、悪魔が問いに答えた。

「炎のサラマンダー、水のウンディーネ、土のノーム、風のシルフ、雷のグレムリン。属性の元素と縁深い土地には精霊の力が宿ったりするのさ」

「こいつら五大精霊は悪魔を嫌悪してる。ただヴォートウミラの理に反して悪魔にだけ魔法を使わせない……なんてことはねエ。こいつらも悪魔の産み出した魔術を平然と使いやがるしな。ま、お互い様つてヤツだ」

「ふくん。ありがとう、ハリー。ヴォートウミラの見識が広がったよ」  
日本という付喪神のようなものだろうか。

納得した青年が相槌を打つと、一足先に入った直美が掲示板を眺めているのが視界に入った。

今はそれどころではない。

肩に手を置くと、本来の目的を思い出した彼女は、ギルド職員エイプリルの元へ進む。

鍵開け及び魔法の技能を持つ冒険者を探している旨を伝えた所、冒険者毎の道徳の指針（アライメント）を定める診断なるものをやるよう促された。

「同行する人間が増えてしまうと、人間関係の問題がつきまといまます。なので冒険者が計6人になると善悪の均衡を保つよう、道徳の指針を下す必要が生じるわけですよ」

納得した一行が組合の椅子に座ると、エイプリルが暫し待つように言いつけ、奥に入る。

言葉を交わし暇を潰すと、彼女は人数分の器と白い粉、そしてナイフを持って帰ってきた。

「では教えていただきましょうか、『汝の罪』を」

「ずいぶん不吉な名前ね？ ま、まあ、私は怯えてなんかないけど！」

「人は善意や損得だけでなく、罪悪感が行動原理になることもある。故にこの診断は『汝の罪』と呼ばれているのです」

エイプリルは眼鏡を中指で持ち上げ、おでこに乗せる。

普段は柔和な彼女の面様が一気に険しくなり、青年は身構えた。

「……ちなみにカツコつけではなく、眼鏡が曇るのでこうしてます」

「ハハ、大変ですね」

「ええ、数ヶ月おきに1度アライメントの診断を受けてもらう規則で、毎回変わる方もおられるので。『汝の罪』をできる方は限られていて、その度に私に負担が……」

溜息を漏らし、エイプリルが愚痴をこぼす。

ギルド職員と冒険者の関係上、事務的な会話になりがちだ。

けれども負の部分も見せてくれる程度には、親しくなれたかもしれない。

そうこうしている間に彼女は作業に取り掛かる。

器に盛られた謎の粉を匂うと仄かに磯の香りが鼻をつく。

だが粒がほどほどに細かく、塩には見えない。

いったいこれは。

疑問符を浮かべた青年は

「これは？」

エイプリルに問う。

「珊瑚の粉末です。珊瑚は、癩癩に効能のある聖なる霊石なのですよ。」

質問後に、青年はナイフで指を切るように指示された。

鋭い痛みが走るのを我慢し、人差し指を伸ばして一滴の血を垂らす。

青年は器を覗き込むが、特に何も変化は見られない。

首を傾げると

「炎の精霊サラマンダー。魂を映し出す彼（か）の者の血肉によって、罪を曝け出し給え。サンガイス・アルデンティア」

エイプリルが呪文を唱えた瞬間、粉末が瞬時に燃え盛る。

息を吹きかけ鎮火した器には、赤々とした粉が上を向いた矢印のような象形文字らしきものを形作る。

理解の追いつかない青年に畳み掛けるかの如く、彼女は結果を語り出した。

「ユウさん、貴方は混沌にして善の心を持つ冒険者。個人の価値を尊重し、利他の精神で生きる人」

「混沌にして善、それは？」

「自らの良心と善意が生きる羅針盤。個人を尊重し、他者に影響されず、正義を実行できる強き人。法や常識に縛られず、誰かを救済する貴方を、無法者と嫌悪する人々もいるでしょう——けれど貴方にしか救えぬ人がいます。貴方にしか成しえないことが必ずあります。貴方にしか守れない命があります。それを忘れないで下さい」

エイプリルは瞳を見据えて、重ね重ねそう告げた。

いくら自分の意志を貫こうとしようが、人が社会的な動物である以

上、他人にどうしても影響されてしまうもの。

彼女からしてみれば、僕はただの冒険者。

けれど彼女の後押しという言葉で、幾分か強くなれた気がした。

「ありがとうございます。エイプリルさん」

頭を下げた青年に照れ臭そうに微笑むと、すぐハリーのアライメントを占う。

先ほど同様に粉は紅に染まるも、浮かんだ文字はカッターの刃の形のようになり、全く異なる。

「ハリーさん。貴方は混沌にして悪の心を持つ冒険者。個人の楽しさを追求し、利己の精神で生きる人」

「ククク、実にオレサマに相応しい」

「自らの快楽と利益が生きる羅針盤。自らの力と技能を磨き、己の道を歩む強き人。自分勝手に奔放に見える貴方を、嫌う人もいます。けれど荒涼とした大地で最後まで生きるのは、自らの信念と利益に従う貴方のような方」

「聞いたか、ユウ。オレサマが最後に生き残るってよ」

悪魔は僕と望まぬ契約を結んだ。

それでも現状を受け入れ、なんだかんだ楽しそうにしている。

この凶太さこそが彼の強きの所以なのだろう。

ハリーの診断を終えると、直美が器を差し出す。

「ナオミさん。貴方は秩序にして悪の心を持つ冒険者。社会や組織に属し、利己の精神で生きる人」

「はい」

「社会秩序の中で自らの利益を求めのが、生きる羅針盤。組織にいなながらも、自らの利益追求と目的達成を貫く強き人。権力を盾にする貴方をよく思わない人もいます。けれど貴方ほど組織の効率を重視し、利益を与えてくれる人もいません」

「ええ。私と仲間に最大の利益をもたらしてみせます」

青空の彩りの粉と不等号を彷彿とさせる文字を眺め、直美はきっぱり言い切る。

敵にいたら恐ろしいが、味方ならこれほど頼りになる人間もいない

だろう。

悩みはあれど、理想の未来という一点を見据える眼差しに迷いはない。

まるで後退せぬ蜻蛉の如く。

最後の英子は器をエイプリルに手渡すと、そわそわしながら、彼女をまじまじ見つめた。

「エイコさん。貴方は秩序にして中立の心を持つ冒険者。社会や組織に属し、中庸の精神で生きる人」

「……ええと」

「社会秩序を重んじるのが生きる羅針盤。組織の規則と法に則り、自らを高める強き人。法の番人の貴方を融通がきかないと煙たがる人もいるでしょう。けれど貴方ほど善悪に偏らず物事を客観的に判断し、組織に殉ずる人はいません」

「わ、私は日和見なだけで……そんな立派じゃ」

さながら澄んだ海の色合いの粉と、アルファベットのIを模した文字に、英子は眉間を寄せた。

褒められ狼狽える英子を尻目に、エイプリルは自らの仕事に集中していた。

「なるほど」。混沌と秩序を重んじる冒険者が2人づつ。善、中立がそれぞれ1人、悪が2人。中立の冒険者でバランスを保てそうですよ」

エイプリルが独り言を呟く最中、冒険者の組合から聞き馴染みのあの声が届き、ユウはそちらを見遣る。

「あ、モルマスの鈍臭い冒険者！」

「生きてたんだ、よかった」

「あ、あの時の」

すると視界の先にはモルマスに怪物が飛来した時、共に戦った小人族と妖精がいた。

「アンタらも仲間探し？ 奇遇だな」

「うん。自己紹介がまだだったね、僕の名前はユウ。ちなみに君の適正は？」

「俺が盗賊。んでウイヴィが魔法使いだよ。今日は診断の更新にきて」

運命という言葉は嫌いだが、それ以外の文字では言い表わせない偶然だ。

顔見知りの二人の会話を直美と英子は横槍を入れず見守るが、悪魔だけはアシエルとの会話を遮った。

「んだよ、このチビガキ」

「チビっていう方がチビなんだよ！」

「どうみてもオメーがドチビだろうが。脳味噌の中身ねエだろ」

アシエルは舌打ちすると、エイプリルに向き直す。

巻き込まれたくないからか喧嘩を仲裁はせず、黙々と作業していた。

荒くれ者の争いに、細腕の彼女が参加しようものなら、大怪我は免れない。

賢明な判断だろう。

「アシエルさん。貴方は中立にして善の心を持つ冒険者。己の信念に従い、利他の精神で生きる人」

「やっぱ前と一緒か」

「善悪に偏らない良心が生きる羅針盤。どんな形であれ正義を実行する強き人。時には自らの信じる正義に悪さえも利用する貴方を、外道と評する人もいるでしょう。けれど善を成すのに悪党の誹りを受ける覚悟があるのは、貴方しかいません」

粉末の色は変化しないものの、火が収まるとアルファベットのRを象る文字になる。

アシエルは探し求めた盗賊かつ中立の冒険者。

実力も申し分ない。

青年はたまらず誘うと

「ウイヴィと一緒に冒険できるなら考えるよ」

と、返事してくれた。

ハリーは足踏みし苛立っていたが、直美は仲間にするのを了承する。

後は妖精の結果次第だと、青年は彼女たちを凝視し、天へ祈った。  
「ウィツカさん。貴方は真なる中立の心を持つ冒険者。己の信念に従い、利他心と利己心の狭間の精神で生きる人」  
「ふっふっくん」

「何にも縛られず中立的立場を貫くのが生きる羅針盤。自らの道徳と信念に従う強き人。その時々で善にも悪にもなれる貴方を、蝙蝠と揶揄する人もいるでしょう。けれど貴方ほど世界を俯瞰して、客観的に判断を下す人はいません」

無色透明の粉末に、アルファベットのMに似た記号が現れた。

彼女もアシエルと同じく、中立に属する冒険者。

「エイプリルさん、彼ら二人を仲間にして構いませんか？」

「勿論。善悪中立の配分もよく、理想の組み合わせといえますね」

青年の一言にエイプリルは二つ返事で承諾した。

小人族の青年は気恥ずかしそうに頭を掻き、まんざらでもなさそうに苦笑する。

「アシエルくん、よろしく」

「ん、ああ。迷惑かけるだろうけど頼むわ」

「互いの目的の為、共に頑張りましょう」

「よろしくね」

外交的な小人と妖精を一行は早くも歓迎ムードだ。

ハリーはアシエルを睨むが無視して、エイプリルは話を続けた。

「互いに個性と強みは違えど、貴方たちが一丸となれば運命をも覆せるはずです。私の励ましが、皆さんの微力となれば、ギルド職員冥利に尽きます」

貴方にしか救えぬ人がいます。

貴方にしか成しえないことが必ずあります。

貴方にしか守れない命があります。

エイプリルの心遣いを思い出すと、青年の心に優しさが染み渡り、あたたかな気持ちになれた。

彼女の言葉を胸で反芻させ、七人は宿屋へと向かうのだった。

## 第24話 異なるが故の対立、武器に選ばれし者たち

一行は宿をとると、一階の広間に集まっていた。そしてテーブルを挟み向かい合うと、今後の方針について話し合うこととなる。

長椅子には三人しか座れず、アシエルは妖精を膝に乗せて傾聴する姿は実に愛らしい。

煉瓦の壁の四角形に空いた穴から、羊皮紙越しに日の光が差し込む。

ガラス窓は高価で手が届かない店や、王国から離れた農村ではこれが一般的らしい。

酒場なら内部が暗くとも陽気な雰囲気があるものの、宿屋は水を打ったように物静かだ。

場所が場所だけにこそこそと密談する、よからぬことを企む冒険者と思われやしないだろうか。

宿屋に漂う陰鬱な雰囲気には打ち勝とうとしたのか、直美は普段より一段と声を張り上げた。

「では、まず初めに誰をリーダーに据えるか決めましょう。推薦したい人はいる？」

彼女が問うと、一行は悩み出す。

そして直美が青年を見遣ると、視線が一気に彼に集中した。

(……う、き、気持ち悪い。もしかして僕がやれと？ 面倒だな……)

注目を集めた青年は、たまらず視線を下げた。

ハリーは粗暴で性急的で、英子は積極性に欠ける。

アシエルとウィツカは意欲があっても新参者故、言いだしにくい。

消去法的に選ばれたのだろうか、自分自身に適正があるとは思えず、どう断るか悩んでいた刹那

「ユウ、貴方に頼める？」

心の整理ができるより早く、直美は彼にそう告げる。

力強い眼差しは、本心から僕をリーダーに任命したいのが見て取れる。



嘘をついて誤魔化すより、正直に打ち明けた方が心証はいいだろう。

青年は気持ち吐露した。

「自信がなくて務まるかどうか。誰も立候補しないのであれば、仕方ないからやるけれど」

「なら私が務めようかしら。他に立候補する人物はいる？」

彼女は視線を投げかけ、周囲をうかがう。

目を逸らす、うつむくなど反応は様々だが、誰もやりたがる人間はいない。

「今後に関わることなの。真面目にやってくれないかしら？」

彼女の発言通り、誰を首長にするかは重要な決断だろう。

不平を漏らすと呼応するかの如く、口々に意見を言い出した。

「オレサマは嫌だね。ある程度の自由の中で好きにやりてエ」

「俺たちは加入したばかりだし、抵抗があるな。古参の人間が指導につくのが自然じゃないか？」

「私はリーダーって感じじゃないよね。統率力より可愛さで周りを助けちゃう妖精だから」

理由こそ違うものの、みな乗り気ではなかった。

このままいけば、リーダーは彼女。

なし崩し的に任せられそうになったが、直美なら難なくこなすだろう。

ほっと息をつき、青年が惚けると

「お前がなつてくんねエか。嬢ちゃんはうるさそうだからよ」

ハリーが小さく耳打ちした。

直美とは違ってネガティブで、多様な意見をまとめる決断力がない。

少なくとも僕の理想とするリーダー像からは、あまりにかけ離れている。

「……いやいや、向いてないから」

「俺は祐が適任だと思うが。直美より落ち着きがあり、知識に基づいた、冷静に指示を与える。上に立つ者に相応しい素質だろう」

「ありがとう、アモン。モルマスの救世主の君の判断力もすごかったよ」

「……よせよ」

照れ隠しなのか、彼はそっぽを向く。

アモンを見る青年は相好を緩めると、再度直美へと注意を向ける。

「私がリーダーで、ユウが私の補佐でいいかしら?! 意見は尊重するけど、まとめるのに必要と判断したら、独断で最善の案を選ぶわよ!」  
「わかった、現状はそれがよさそうだ。当分はこの方針でいこう。みんなもいいかな?」

訊ねると、やる気のない返事ではしぶしぶ承諾する。

さつさと終わらせてほしいという本音が、態度から漏れていた。

直美と周囲の温度差に、青年はあれやこれや思考を巡らせる。

冒険者は肉休仕事。

休みが足りなければ当然、効率も落ちていく。

まず討伐に関する依頼をこなした後は、5〜7日間の休暇を設け、休息を取らせよう。

余暇が充実してこそ、生産的に冒険者の活動に励めるはず。

組織運営に関する法を考える最中、直美は次の議題を出す。

「金銭の揉め事は禍根を残す。仲間が新たに加入し、人数が増えてきたから決まり事を作りましょう。私は最も活躍した人物に、報酬の1割を貰うルールを定めたけれど異論は?」

彼女らしく現実的な問題について、組織全体の方針を決めたいようだ。

だが成果報酬の制度にも問題はある。

話し合いが長引くのも承知の上で、ただ一人青年が反対の意を示した。

「基準が多数決なら徒党を組んだり媚びへつらいで、成果を上げた振りが上手い人間が評価される。寡黙な仕事人は軽んじられるだろう」  
「人との接し方も評価の軸の1つ。見くびられないように対人関係に時間を費やすか、成果を上げればいいだけでしょう」

話せば話すほど彼女との溝が深まり、築いた信頼に亀裂が生じるの

を感じた。

組織内の政治や内ゲバに無駄な労力を費やすより、対人関係に多少難があっても真面目な人物を優遇した方が全体の利益に寄与する。

仮に黙々と役割をこなす人物が不満を抱いて仲間から抜けたら、大きな損失に繋がるだろう。

目先の損得だけにつられた者より、細く長く利益をもたらす人材の方が計算しやすく、組織にはありがたい。

納得がいかない青年は、さらに直美と言葉を交わしていく。

「仮に君が報酬金の1割を毎回受け取るなら、言い方は悪いけど僕たちは君にずっと搾取されることになるよ」

彼女は唇を噛み、青年の発言への苛立ちと不満を理性で抑えている。

その直美の態度を、祐は立派だと心の中で称賛した。

反対する人間を罵って、自らを正当化するような感情論を振りかざした瞬間、議論の価値は地に墜ちるからだ。

「人は生まれながら平等じゃない。生まれ落ちた場所と金と環境、それでどうなるかおおよそ決まる。君のやろうとすることは恵まれた人間による搾取に他ならないよ」

言い終えた青年が沈黙すると、堰を切ったように、直美の感情が爆発した。

「活躍した人間が多く報酬を受け取るのは当たり前。貴方はそれを否定するの?」

「奪われ続ける者は装備に金銭を回せず、延々と搾取され続ける立場になる。君の冒険にも支障がでるよ」

現代風に例えるなら、これは富の再分配を巡る論争。

一度でも独占を許せば、強者有利の法は覆らない。

だからこそ絶対に譲れないのだ。

「等分で分配すれば、働かない人間も出てくるわ。無能に割く金銭的余裕なんてないのよ」

「無論、搾取が冒険に影響しない程度なら構わない。けれど富が一極集中しても、貧しい者には分け与えられない。再分配されないのが現

実。だからこそ君の案には賛同できないな」

持論を述べると、直美はすかさず反対した。

互いに語気を荒らげはせず、冷徹に案の不備をつく。

さながら真剣で切り合うかの如くやりとりに、周りは気圧されたのか、或いは呆れたのか。

軽々しく口を挟む者はいなかった。

「ルールも精神的に辛いのも、誰でも同じ。これも一種の平等。搾取されるどん底から這い上がってこれない弱い人間なら、私の冒険には必要ないわね」

「都合のいい時だけ利用し、不要になれば切り捨てる。君の考え方はよくわかったよ」

人間は組織を動かす道具というのが、彼女の見解のようだ。

だが人の感情を軽視しすぎだろう。

誰がそんな集団に属し、貢献したいと思うのか。

少なくとも自分は願い下げだ。

「私は個々の能力を活用しているだけ。そして能力の劣ると判断した人間の報酬を削るだけ。嫌なら抜ければいい。貴方の頑迷さには呆れるわ」

「今まで通り、独立独歩（ひとりだけ）で冒険すればいい。それなら報酬を分け合う必要もないよ、直美さん」

頑固だと嘲笑されたように感じ、売り言葉に買い言葉で残酷な言葉を投げかける。

昏い闇が覆い隠し、青年には彼女の表情は読めない。

だが、ふと口にした台詞が彼女を傷つけたと気がつくのに、時間はかからなかった。

「お、おい。口が過ぎるぞ、二人共々」

「……今日はここまでにしませう」

アシエルが恐る恐る口を挟むと直美はそう言い残し、早々と宿屋の2階へと上がっていく。

哀愁が漂う背中には誰にも心を許さず、ただ自らを高めるという意思さえ感じられた。

そこには何者も寄せつけない孤高の存在、氷の叛逆者と畏れられる直美の姿があった。

(彼女が先に僕を馬鹿にしてきた。僕だけが悪者?)

怒りは収まらず、彼女への反発心の灯火も消えない。

とはいえ不快なら、関わりを最小限にすればいいだけの話。

大人気ない対応なのは確かだろう。

青年が自問自答する最中

「謝らないでいいのか？」

小人族の青年が近寄って呟いた。

どうしたらいいものかと答えあぐねる祐に、間髪入れずアシエルはまくしたてる。

「俺は意見を曲げろって言いたいわけじゃない。人それぞれ違うのは当たり前だからな」

「……」

「けどさ、ちょっと喧嘩したくらいで別れたら勿体ないだろう？ 今までは上手くやってこれたのに。気に入らない所だけ数えてたら人なんて関われないうしな」

「わざと怒らせたわけじゃないし、きつとやり直せるよ。ね、ちびアシエル」

「お前、わざとチビつつつただろ！」

罵られた小人は青筋を立て、宿屋を自由に飛び回る妖精を追いかける。

喧嘩をしても固い絆で結ばれた二人を、青年は朗らかに眺める。

(気に入らない所だけ数えてたら人なんて関われない、か。彼の言う通りだ。まずは過ちを認めよう)

青年は直美を追いかけ、一旦深呼吸すると、ゆっくりと部屋の扉を叩く。

「さつきは悪かった。対立はしたけれど、直美さんが嫌いと言ったわけじゃないんだ」

「私だってそう。仲間をよりよい方へ導きたくて」

着飾らない台詞の応酬に、かすかに胸のわだかまりが解きほぐされ

ていく。

互いに一度吐いた言葉が、完全に無になりはしない。

今後の行動如何で評価していくことになるだろう。

無言で待機していると、部屋の扉が開け放たれた。

謝罪への恐怖からか、直美は時折流し目で青年を見遣りつつ、餌を貰う金魚の如く口を動かす。

祐は何も言わず、彼女が切り出すのを待つ。

「喧嘩した後に口先だけの仲直りなんて無意味よ」

「……そうだね」

「だから、その……必要な物資の調達ついでに気分転換でもしましうよ。お互い少しは気分も晴れるだろうから」

「すぐに用意してくるよ！」

彼女から仲直りの機会を設けてくれた。

期待に応えねば。

祐は冒険の際より急ぎで用意し、身支度を整えた。

街中にて

日中の王国は休日の観光地のように、人でごった返していた。

人と人の間を縫うように移動し、冒険の必需品を揃えていく。

「他には何がいるかしら？」

訊ねられた青年は盾を破損し、杖を紛失したのを思い出す。

流石に丸腰では戦えないが切り出せば、何を言われるやら。

「じ、実は武器と防具を失くして……」

「何してくれとんじやい！ 大枚はたいて買ったんやから、おどれの命より大事に戦わんかい！ また私に借金させられたいんか、ワレエ！」

「す、すいません！ すいません！」

「10日で8割やぞ、わかったな！」

「ヒイイイ！ 拝金鬼畜鬼女〜！」

（弱みにつけこんで、トハチとは何という外道。人の心がないのか?!）

妄想の中の直美に怒鳴られ、青年は冷や汗をかく。  
だが、いずれバレること。

観念した青年が白状すると、直美は意外にも穏やかだった。

「ああ、そう。せっかくだから装備屋に寄りましょう」

「え、怒らないの?」

「武器が壊れるのは必要経費。しょうがないことよ。でもモルマスにいた時はあったわよね。誰かと闘った?」

鋭い指摘に青年はたじろぐ。

SG8の少年に襲われた、そして仲間にはパイが紛れているといえ  
ば、直美はまた人を疑い始める。

「実は君と別れてから襲われて、それで王族への謁見ができなかった  
んだ」

「なるほど、災難だったわね。でも正直に話してくれてよかったのに。  
心配だからね」

事実を曖昧に伝えると、彼女は眉尻を下げ、祐の顔を覗き込む。

まったくの嘘を伝えたわけでもないのに、鼓動ははちきれんばかり  
に脈打つ。

そうこうしていると、王国内で名の知れた武器屋に到着した。

どうやら異世界に連れられた人間と共にやってきた品々も取り扱  
う、少々変わった店とのこと。

「よう、いらっしやい。冒険の盟友を吟味していきな」

「えっ、ああ、はい」

店内に入るや否や騎士に出迎えられ、青年はそちらに向かって一礼  
した。

……かと思いきや、木製人形に鎧が着せられただけだった。

カウンターに座る声の主は目をぱちくりさせ、ユウを凝視する。

腐敗した死人の如き肌色の人間や竜人も、店主と同じように青年を  
見つめる。

赤っ恥をかいいた彼は顔を真っ赤にすると、横の直美は口元を隠しつ  
つ微笑む。

ここに長居したくない、さっさと済ませて帰ろう。

意識を屋内の商品に向けると、幻想の世界でしか見られない武器が石壁に掛けられ、所狭しと並べられている。

興味をそそられる空間に心踊らせた青年は、舐め回すように商品を眺めた。

「丈夫そうな銀の盾を手に取り、武器を選ぼうとすると、青年はある杖に目を惹かれる。

ギリシヤ神話の冥界の王ハデスが持つ、二又の槍バイデントに似た見た目の笏で、持ち手部分には二匹の蛇が螺旋を描くように巻きついていた。

「……これは」

「聖闇（しょうあん）の王笏（セプター）……の贗作といわれとる。我々の住む世界とは異なる外界の神の武器とのこと。贗作とはいえ手にした者には、とてつもない力を手に入れちまうようだ。果たして身に余る業を使えるのは幸か不幸か……」

店主は神妙な面持ちで、王笏の大きいなる力を語った。

制御ができない武器というのは、感情にも似ている。

むやみに振りかざせば人を傷つけ、殺すのも容易い。

だが正しく扱えば、傷を癒やす力にもなり得る。

過剰なまでに持ち主を選ぶのは——もしや心ある王笏の良心ではと考えてしまう。

己と釣り合わない人間の身を案じるからこそ、厳しく持ち主を選別するのだ、と。

青年がうつとりと見惚れていると、直美も気になった刀をカウンターに持ってきた。

「この刀は？」

「名刀穠津。島国常世にて勝ち虫と呼ばれる蜻蛉の力を宿した業物。持ち主に刀を扱う技術、水属性の魔術適正、不撓不屈の精神を要求する妖刀。しかし選ばれし者には万物を振じ伏せる不退転の力を得るという」

穠津と呼ばれた刀の刀身の刀文（はもん）は、波打つ水を模したかのような芸術的な焼き入れがされており、それを一目見た直美は生唾



を飲む。

——その仕草一つで欲しいと直接言わずとも、そう望む彼女の声が聞こえた気がした。

鏢に目を凝らすと羽根を広げたトンボみたいに見える、刀鍛冶の職人芸が光っている。

直美は一度天井を見上げ息をつく、平静を装い店主に問う。

「ずいぶん値段が安いけど。何故ですか？」

「聖闇の王笏と名刀穠津は、不適合者をごとく嫌った。そして流れついたのがワシの店なのだ。武器は良き使い手に使われるのが幸福。このフィリウス・ディネ王国に適合する人物が現れればいいが……売れてもすぐにワシの元に帰ってきちまう」

髭をいじる中年はそういうと瞳を細める。

「安さにつられて買う人がいても使いこなせず、すぐに売りにくるのね。店主も処分に困ってるみたい」

「武器が持ち主を選ぶ、ってものかな？」

「聖闇の王笏と名刀穠津。使用者の精神に左右される杖と、力なき人間を認めない妖刀……別の武器にしましょう。無駄遣いになりかねないし」

直美は妖刀のただならぬ力を察知したのか、理性で買わない選択を取ろうとした。

だが上手く扱えれば、ヴォートウミラ脱出の力となってくれるはずだ。

「……確かに失敗したら無駄遣いになるかも。この場で少し試してもいいですか？ もし上手く扱えたら掘り出し物だし」

「それで貴方の気が晴れるなら。でも怪我に気をつけて。依頼に支障がないように」

「心配してくれてありがとう。直美さんも名刀穠津、試してみたら？」  
「うむ、試してみなさい。ワシが相応しいかどうか見定めてしんぜよう」

精神を集中させ、王笏を握り締める。

手に取ったが特に変化はなく、青年はがっくりとうなだれた。

やはり僕のような凡人ではなく、特別な人間にしか反応を示さない武器に違いない。

「……早く王笏の持ち主が現れるといいですね」

「アンタがその持ち主だ。ほら、そこを見てみなさい！」

店主は蛇を指差すと、一方的にユウの腕を掴み、所々抜け落ちた年相応の歯を覗かせた。

かじかんだ皺だらけの手に驚き、青年は愛想笑いで返す他なかった。

言われるがまま見てみると何やら違和感があったが、その小さな変化に気がつくのに、少々の時間を要した。

「あ、蛇の眼が光って……」

「その通り。片方だけでは駄目。二匹の蛇の瞳を同時に輝かせてこそ、王笏の持ち主足りうるのだ」

「私も試していいですか？」

「い、いかん。せめて店の外で……」

店主の静止を振り切って、彼女は妖刀に手を伸ばす。

過去に穉津が店内で被害を被ったのだろうか。

顔を覆い、これから起こるであろう惨事から目を背ける。

しかし妖刀から勢い良く迸った水は、不思議なことに刀身を包むように、

それを見た店主は目を白黒させ、顎の外れた猫のように、しばらく開いた口が塞がらなかった。

「……驚いた。まさか持ち主が同時に現れるとは。これはヴォートウミラ三神のお導きなのだろう。おめでとう」

感慨深げに祐と直美を祝福し、穏やかに微笑む。

親が子の幸福を喜ぶかの如き暖かな眼差しに、二人はほっと胸を撫で下ろす。

仮に選ばれなければという不安から解放され、肩の荷が下りると周囲の冒険者らの視線を、二人はようやく感じ取る。

「選ばれし者たちよ。この世に二つとない業物、大事にしてやってくれい」

「ありがとうございます。こちらこそ、いい買い物できました」  
「妖刀を幻滅させぬよう、これからも精進していきます」

「You beat me to it. Hang in the  
re for me (先越されたな。俺の分まで頑張れよな)」

「I'm jealous. I want to go to the  
hardware store with a girl, too  
(羨ましいね。俺も女の子と武器屋巡りしてみたいぜ)」

冒険者らの野次や冷やかし、励ましに、二人は示し合わせたように  
笑う。

そして勢いよく武器屋を飛び出すと、道ではぐれぬよう互いに手を  
取り合うのだった。

## 第25話 悪魔掃討作戦

あれから数日後、王からの遣いと名乗る男性が現れた。

彼からの情報をまとめると、人が突如として悪魔へと変異する、狂気に陥った冒険者らが殺し合う、冒険者らが不可解な壊疽傷を起こすなどの被害が報告されているようだ。

不可解な事件を悪魔の仕業と断定するのは、どうかと思う。

だがしかし怯える人々の不安を解消するには、悪者が必要なのだろう。

現代社会で無職や障害者が、社会を破滅に導く存在として扱われるようなもの。

数年前に精神疾患を患う男が幼稚な大量殺人を起こしたのが記憶に新しいが、その時も案の定、生産性のない人間の殺戮を肯定する人間が見受けられた。

無職の息子を元事務次官が殺害した時も、衆愚は称賛の嵐だった。老人は自決すべしと宣う経済学者もおり、少くない人間が肯定し擁護した。

犯罪者予備軍や不要とみなした人間を殺す、犯罪者を讃える。

無職を含めた生産性なき人間を殺したり、抹殺を推奨するのはもはや悪の所業ではなく、現代の英雄譚である。

そんな冷血漢たちが自分とは何ら関係ない殺人事件に正義ぶって、善良な一般庶民を演じる姿は実に気色が悪い。

奴らにとって人権とは天から与えられた平等なものではなく、自身のお気持ちで気に入らない人間から簡単に剥奪できるもの。

所詮世間など、身勝手に自己中心的な人間ばかり。

もしこの事件が悪魔ではなく人の仕業ならば、その責任を負うべきは人。

これは悪魔の潔白を証明する可能性すらある、有益な事件だ。

「情報を元に策を練ろう、直美さん」

「いいのかしら。仲間を呼ばないで」

「この前の会議の様子を見るに、きっと乗り気ではないだろうし」

「……確かに。面倒そうにした皆の姿が目には浮かぶわ」

直美とだけ共有した情報が敵対組織S G 8に流れるならば、彼女が敵と繋がっている証拠。

逆に何もなければ、彼女の潔白が証明されるだろう。

内通者を見破るには悟られぬように、じっくり探りを入れていくしかない。

彼女を部屋に案内するや否や、直美は顔をしかめた。

無理もない。

部屋の隅に立て掛けた王笏に、机の上の開きっぱなしの悪魔の辞書。

つい先日購入した品々が、無造作に置かれていたからだ。

とても人様に見せられる部屋ではないが、日々の忙しさについて放置してしまった。

「物が散乱してるじゃない。貴方、部屋の掃除できないタイプの人間でしょう」

「う、うるさいなあ。だったら君の部屋にするかい？」

「……嫌よ。もっと別にいい場所はないの？」

「内容が内容だけに、なるべく内密にしておきたいから。人のいない場所なら開放的な屋外でもいいよ？」

悪魔は人に化け、生活を営む。

つまり街中で話せば、情報漏えいの危険があるということ。

自分なりに考えた結果、自室ならば安全だろうと判断した。

ただ彼女が警戒するのは最もだろう。

出会ったばかりの男と密室で過ごせば、男女の関係を疑われてもしょうがない。

力づくで強姦される危険性をも考慮すれば、2人きりの状況を避けるべきだ。

普段は勝ち気で物怖じしない直美の、借りた猫のように大人しい直美の態度に、どうにも青年までドギマギしてしまう。

彼女の女性らしい一面に、驚きと同時に、何やら胸の中から燃え上がるような昂りが沸いた。

(ま、まあ、僕を男として意識はしてないだろうし)

このままだと魔が差して、普段の自分とは違う行動をしてしまいうだ。

僕は彼女に座るよう促す。

「まあ、適当な所に腰掛けてよ」

「貴方はベッドに座って。私は椅子に座るから」

押し倒される危険を考えれば、当然の反応だろう。

距離を取る彼女を安心させるためにも、青年は指示に従う。

空気を切り替えようとしたのか、わざとらしく咳き込むと、外に漏れない程度の声量で話し始めた。

「では悪魔について議論していきましよう」

「もしかして怖い？ これから先も僕らは悪魔に関わるよ。慣れてもらわないと、今後困るからね」

無駄を嫌う直美が切り出し、すかさずからかうと、直美が睨みつけた。

少しでも雰囲気や和らげようとしたが、逆に火に油を注いだやもしれない。

仕切り直しとでもいうように、矢継ぎ早に彼女はまくしたてる。

「悪魔、霊、魂。現実では存在自体が非科学的でも、ヴォートウミラ大陸に全て実在するのは認めざるを得ないわ」

「君はオカルトを否定するけれど、だからといって大陸の法則と現実とは変わらない。魔法があり、悪魔がいる。人以外の亜人がいて、思いいに暮らしている。現代でも異世界でも、理論と理屈の積み重ねで世界は廻っているんだ。好奇心は世界を解き明かす鍵さ」

ヴォートウミラを訪れてから日は浅いが、彼の認識は変わらない。人や悪魔のみならず魔物と呼ばれる怪物さえも、合理的に生きているのだ。

「直美さんは怖がりだなあ。知らなければいいこともあるけれど、オカルトに関してはいくらでも知識があつていい。不可思議な問題を、対処可能な現実の問題に変換してくれる。知恵は力になる」

「神秘を信じて一銭にもならないわ」

資本主義社会では、金銭に繋がる資格やスキルだけが持て囃されるもの。

彼女の発言自体は至極真つ当だが、含蓄のない人間などつまらない。

無駄で無意味に思えるものに熱中してこそ、人となりができる。

「日本には熱射病に関するひだる神という妖怪がいて、妖怪への対処に熱射病や低血糖への解決策が書かれていたりする。オカルトは知識で病気や神秘を説明できなかった時代の、昔の人なりの英知の結集。馬鹿にせず、学ぶと得るものもあるはずだよ」

「そういう考え方もあるのね。貴方のお陰で見識が深まったわ……ま、まあ、怖くないものから学んでいくなら」

「うん、それがいい。僕も直美さんを見習って、少しは実用的な知識を身につけないとね」

諭すと割とすんなりと、彼女は納得してくれた。

適切な距離感さえ保っていれば、オカルトも有益な知識。

逆にやたらと美化されがちな宗教や哲学も、先鋭化していけば危険な存在となる。

宗教は他宗教を邪教とみなし、ニヒリズムはナチズムと結びつき、虐殺を容易に肯定した。

「心霊や都市伝説好きは、もつとこう……非論理的って偏見が。貴方みたいな合理性を重視した人もいるのね」

「オカルト好きにも二種類いる。幽霊、u f o、u m a、レプティリアンのような非現実的なものまで信じる人。そして知恵、観察、洞察、状況証拠の積み重ねでオカルトを説明する人。ま、僕は前者の人も否定はしない。人に謎が解けるような問題ばかりでもつまらないし」

直美の言葉はかなり無礼だが、科学の発展した現代なら、幽霊を信じる方が少数派だろう。

元々幽霊など存在しないなら、悪魔の証明にしかない。

苦笑を浮かべた青年は、科学の側に立ちながら、オカルトについて熱弁を振るう。

「太陽は何故沈む？ 水面は何故水色？ 雲は何故浮かび、地面に落

ちない？ 昔はわからなかつたことだらけのはず。オカルトについても同じことがいえる。今はまだ不可思議を解く数式が見つからないだけ。遠い未来になんでこんなことに怯えてたんだって、笑い話になるかもね」

「現代人として、あくまで私は合理性と科学的根拠を重視する。けれど解明できない謎があるのを認めないと、それこそ馬鹿な女として見られるから」

オカルトを通して謎を紐解く僕と、学問を信奉する彼女。

スタンスこそ違えど、事実を追求する姿勢は同じだ。

直美に君を馬鹿と思ったことはないとフォローを入れ、青年は話を続けた。

「この前買物した雑踏の中に悪魔がいたと思う？ もしいるなら人を演じ、人として生活できる知性があるということ。討伐は一筋縄ではいかない。悪魔を退治するにせよ、街中で戦闘するのは市民が被害が出てしまう。場所についても、よく考える必要がありそうだよ」

「なるほど」  
直美は机に置かれた羊皮紙に文字を書き記すと、直美は再び青年へと視線を戻し訊ねた。

「王国で地位が高い人間に化けた悪魔だと、こちらからは下手に手出しはできないわね」

「僕が悪魔でもそうするよ。人の社会に紛れて自らの安全を確保しつつ、人の魂を喰らう為に、効率的に人が亡くなる仕組みを作り上げていく。悪魔はおそらく、冒険者と関連する職業についている可能性が高い」

「え、ほ、本当に？もしかして身近な人が悪魔だったり？」

「まあまあ、冷静に」

直美の狼狽えように青年は苦笑いしつつ、落ち着くよう促す。

あくまで推察であり、確定で決まった訳ではない。

それに死にまつわる職業も、何も冒険者だけではないのだ。

「冒険者のみならず、殉職の多い職業や死者と関わる職業には悪魔がいるだろう。例えば医者、葬儀屋、処刑人。自警団や王国の軍に悪魔



が潜んでいてもおかしくない。完全に悪魔を排除するのは無理だ。それに伴う犠牲が多すぎる」

「手当たり次第に悪魔を探すのは悪手。あ、モルマスの宗教家に頼んだら？ 確か貴方が悪魔と疑われていたはずだけど」

「教会の敬虔な修道女に、悪魔と判別するのは僕も経験した。僕も悪魔の魂を宿しているし、口からでまかせではないだろう。ただ彼らには悪魔側も警戒しているはず。協力を仰いだら、姿を隠す可能性も考慮すべきかな」

知恵の回る怪物を始末するのは容易ではない。

彼女なりの名案をバツの悪い表情を浮かべ、青年をねめつける。

意地の悪い指摘かもしれないが、悪魔相手にはいくら警戒しても足りない。

「うーん、これも駄目なの。代案がなければ得策かと思うけど」

「強引な方法では悪魔は出し抜けない。感づかれたら彼らは逃げるか、あるいは本性を露わにし、周りを皆殺しにするか。慎重であるに越したことはないよ。事を急ぎ、最悪の事態を防ぐ為にも」

人からすれば厄介極まりない能力を有した悪魔。

こちらのハリーも人に変身できるが、狡猾で切れ者の悪魔ならば、すぐに看破してしまうだろう。

知恵を回す以上に、五感を研ぎ澄ませなければ。

悪魔特有の雰囲気を見抜く細心の注意が、成功の鍵になる。

とはいえ彼女の思考は安全を第一に優先するならば、採用したい案だ。

「野蛮だけど片っ端から悪魔を排除すれば、解決しそうよね」

「いや、人員を派遣してもらったら露骨すぎて気づかれる。感づかれれば全て無駄になる。ハリーのように突発的な行動を好む悪魔もいれば、計画を練る策略家の悪魔もいる。そして後者の、社会に溶け込んだ悪魔ほど排除しにくく厄介だ」

「……巧妙に正体を隠すなら、街中で人を悪魔に変えるなんて馬鹿な真似しないんじゃ。案外簡単に尻尾を出すかもよ」

「街中で正体がバレても構わないと言いたげな大胆な犯行——率直

に言う勇气和無謀を履き違えた馬鹿な悪魔。或いは実力に裏打ちされた自信がある悪魔。人間への凶暴性と攻撃性を兼ね備えた名の知れた悪魔ならば、僕らに勝ち目はないだろう」

絶望的で悲観的な考えを正直に話した。

現状を認識しないポジティブなど、無意味で有害なもの。

告げられた直美は口を噤むと、再び策を熟考する。

そもそも論として、悪魔の事件が単独犯とは限らない。

この差を埋めるだけの何かが必要だが、鍛錬を積む時間的余裕はない。

となれば、こちらにも実力者に応援を要請するのが最善策になるが。

その判断が吉となるか、凶と出るか。

「だからこそ、しっかりと掃討しないと！」

「人のように懸命に働き、時たま亡くなった魂を喰らう程度なら、殆ど実害はないだろう。問題は現在起こっている悪魔が原因とおぼしき被害が増えていること。そいつらを炙り出して、国王からの依頼をこなすのが課題だね。今回は権力者の協力も得られる。選択肢は豊富だよ」

僕は直美さんに言うと同時に、自分自身にそう言い聞かせる。

不本意とはいえ旅に協力してくれるハリーや、モルマスを救ったアモンのような悪魔もいる。

悪魔が悪だとは一概に言えない。

問題の悪魔だけを確実に始末する手段は現状なさそうだが、野放しにはできない悪党だ。

「人がいる所に悪魔あり。言い方は悪いかもしれないけど、人という餌を撒いておびき寄せるのが得策かもしれない」

「あえて悪魔を誘うのね。自然な形で人材を動員できれば、悪魔も不審だとは感じないかも」

「ね、作戦としては悪くないでしょ。僕ら自身の命を撒き餌にしている」

「独りだけでは、ここまで深く悪魔について考察は不可能だっただろう。」

青年は素直に礼を述べると、議論の終わりを告げるように、彼女は夜の予定について切り出した。

「夜はアシエルたちとアモンの歓迎と送別を一緒にするし、それまではゆっくりしましょう」

「少し寂しくなるな」

「それは本人に言うべきよ。喜ぶでしょう」

直接伝えねば伝わらない思いもあるだろう。

青年はそうだねと返し手を振るが、予想に反して部屋から出ていこうとしない。

「ええと、まだ何か用？」

「せっかく2人のリーダーが揃ったわけだし、方針を改めて決めない？」

「ん、ああ。そうしようか」

いつまでも曖昧のままでは、全体に支障をきたす。

了承しようとした青年に、直美は荷物入れの数枚の羊皮紙を突き出した。

びつしりと書かれた文字には、事細かにルールが記載されており、読む前から思わず溜め息を零しそうになる。

「これが私が率いる皆に最低限守ってほしいことね」

「こ、これで最低限?! 暗くて見えづらいなあ、少し待って」

ランタンの光を頼りに、青年は羊皮紙に目を通した。

……目の滑る長文に、げんなりする。

ゲームアプリの利用規約を見せられているような感覚だ。

あれは読み飛ばして同意すればいいが本人がいる以上、適当に読んだと誤魔化すのは無理だ。

「うくん、流石にこれは同意しかねるな」

「まだまだルールが必要かしら？」

「いや、後できつと不満を漏らすだろうから。最低限だけ決めて、後から追加していった方が合理的かなと」

「確かに議論にまともに参加しなかった癖に、後々ルールに難癖をつけてきそうね。ある程度は穴のあるルールにしておきましょうか。」

面倒だけど」

直美は青年の案を受け入れてもらい、安堵した。

僕自身これを全て覚え厳守するのは、かなり骨が折れる。

「あとハッキリさせておきたいのが金銭についてなんだけど」

「分配については争ったばかりだし、もう少し期間をおいてからの方が……」

「暫くは貴方の案を採用して、等分で様子を見るつもり。命懸けな以上、手を抜く人間も少ないだろうから。でもアイテムやらでどうしてもお金がかかるからね。それについてよ」

「どうやら冒険にかかる諸々の費用に、頭を悩ませているようだ。

必要なものならば、誰か一人に負担させるのは不平等だろう。

「それに関しては等分で天引きしてもいいと思うな。掛かった費用も明記しておけば、仲間も受け入れてくれるだろう」

「うんうん。私と貴方で管理しておけば、間違いは起こらないでしょうしね」

青年に切り返す彼女は、急に相好を綻ばせた。

過去一番の笑顔ではないだろうか？

闇で光を放つエメラルドの双眸に、呆気にとられた彼は

「……すごいニヤニヤしてるけど」

「雑費の名目で色々徴収できそうだと思って。フフ、有意義な冒険になるわね」

「ああ……なるほどね」

何事だろうかと彼は訊ね理由を聞くと、声が漏れた。

抜け目なく自分自身の利益に正直な彼女らしいが、金に感情を左右される性格だという印象が、青年の中でより濃くなっていく。

(……今度お金のことで喧嘩したら、一生恨まれそうだなあ)

言葉にすれば、確実に怒号が飛んできそうさ。

青年は金銭面での文句を、心の中だけで留めるよう決意すると、彼女の退室を暖かく見送るのだった。

## 第26話 出逢いと別れ

夜にて

日が落ちると静寂と闇の世界が訪れた。

客引きの声も疎らになり、都会の喧騒から離れ、読書や瞳を閉じて音楽に聞き入る e t c。

多種多様な自分だけの時間を満喫できる夜は、心休まる一時。

雲がなければ、満天の夜空を見上げるのも一興だろう。

日中の白と水色のコントラストは壁紙を貼ったかの如く、一面が黒に塗り潰されていた。

太陽と月は毎日欠かさず模様替えをする、超一流のクロス職人だ。

だが例外もあり、酒場は昼間と変わらず、陰気な雰囲気破るように騒がしい。

人が多くて苦手だが、正常な人間や根明なら元気を貰える場所だろう。

冒険者にとっては憩いの場や情報収集する所であると同時に、明日への活力を養う宿屋や、万病予防の笑いを提供する病院など、一箇所で様々な役割を担っているように思えた。

肩を抱き合い踊る酒場の荒くれ者を見渡しつつ、そんなことを考えていると、注文した品々が運ばれる。

黒と白のメイドを彷彿とさせるエプロン姿のウェイトレスに、チツプ代わりに銀貨を手渡すよう直美に頼む。

せっかくなのだから盛大に祝いたい。

すると忙しいにも関わらず、彼女は快諾してくれたとのこと。

準備に時間がかかるようなので、それまでは食事に舌鼓を打ちつつ待つとしよう。

妖精の分の酒がなくウェイトレスにそれを告げようとすると、葉の柄をつまんで慎重にテーブルに置いた。

瑞々しい葉についた雨粒のような水滴が、妖精の分の酒とのこと。

「Here, s a lovely fairy drink (これ

が可愛らしい妖精さんのお酒だよ)」

「やくん、可愛いなんて。お姉さんは綺麗だね。街中でいたら声かけちゃうよ」

社交辞令に満面の笑顔を浮かべるウィツカにつられ、青年も微笑む。

これだけ喜んでくれたなら、気を遣った甲斐もあるというもの。

それはそうと、これはいったい何を意味するのか。

興味深い風俗に葉を食い入るように眺めると、妖精は葉の上に覆い被さる。

もしかしたら盗られると思ったのだろうか？

宗教的な意味を紐解けば、妖精と酒、葉との関連性が解明できるやもしれない。

次々と沸く疑問を胸に押し止め、酒の席に話題を振った。

「へえ、妖精にはこんな風にお酒を提供するんだね」

「ああ、妖精独特の文化だな。王国だと他種族の文化を尊重してくれるから、妖精も金払いがよけりや、手厚くもてなしてくれるんだよ」

彼の台詞から察するに他の国では妖精だからといって、特別扱いはされないようだ。

とにかく今は場を盛り上げるのに専念しよう。

それがサブリーダーとしての役割でもある。

青年は容器を握ると

「アシエルくん、ウィツカちゃん、加入おめでとう！これからよろしくお願いします。アモンも最後を楽しんで」

無難に歓迎の挨拶を済ませた。

「えこひいきはしないけど、歓迎するわよ」

「お前ら、いい奴らだな。ありがとう」

「ありがとうね、仲良くして」

仲間たちも彼に続き祝福の言葉をかけ、乾杯しようと利き手を掲げる。

だが一人だけ浮かない表情で、円を囲む仲間たちを鋭い眼差しで睨む悪魔がいた。

「意固地にならないで乾杯しよう。別に2人きりの時まで仲良くしろなんて強制はしないからさ」

「ハリーさん、楽しみましょうよ」

「不仲なのはいいが、俺たちまで巻き込まれるのはゴメンだぞ」

「……クソチビガキ、2人と兄貴に感謝しろよ」

苛立ちつつジョッキをぶつけると、ハリーはぐいっと流し込む。

喉をぐくぐくと鳴らす豪快な飲みっぷりを見てしまうと、皆も影響されたのか。

なみなみと注がれた液体は、たちまち胃袋に収まった。

2杯目を注文した方がいいかと迷うと

「うひー、もうによめにやい……」

情けない声がして、青年は何事かと目線を落とす。

小さな体躯故に誰より早く酔いが回ったのか、ウイツカはテーブルの上に仰向けに寝転ぶと、豚の鳴き声の如きあくびをしながら腹を掻く。

仮にも女の子が人前でしていい格好ではなく、一同は呆れつつ顔を合わせる。

不注意で食器の下敷きになり、潰れてしまわないか心配だ。

「……き、休日のおじさんっぽい仕草だなあ。起きて、ウイツカちゃん」

「ず、ずいぶん下戸なのね。無防備だけど大丈夫？」

「うっせエ酒場で寝ようとするなんて、ナリの割に凶太いな、コイツ」

「言われてるぞ、ウイヴィ。高貴な血筋の妖精とは思えねえぞ」

「いいひやら、みんなにやたのしんれ」

既に見た目だけなら酒に吞まれ、繁華街の路上で寝る現代の人々と大差ない。

無礼講とはいえ、皆の前で恥をかきたくない。

ちびちびと啜るように嗜みながら酒を静かに楽しむと、先ほどのウエイトレスが直美の肩に手を乗せる。

ようやく準備が整ったのだろう。

ウエイトレスは手を叩き、周囲の注目を集めた。

「Flame Spirit Salamander. Sometimes whisper words of love, sometimes transform yourself into a phoenix on the battlefield. (炎の精霊サラマンダー。時に愛の言葉を囁き、戦場では不死鳥と形を変えよ)」

ウエイトレスは詠唱中に虚空を指差し、文字をなぞる。

彼女は息を吸い込む様子からは、呪文の最後の文言を力強く発するという熱意が感じられた。

最高の歓迎をしてやりたい意気込みが伝わり、見ているだけの僕にも思わず熱が入る。

「forma ardentia! (フォルマ・アルデンティア!)」  
唱えた瞬間、炎で描かれた文字が薄暗い酒場でくつきりと浮かび上がっていく。

「Blessings on new beginnings and encounters (新しい門出と出逢いに祝福あれ)」

煌々と燦めいた祝いの一文を見た観衆は、どっと拍手を浴びせた。沸いた冒険者らは次々と銀貨を投げ、彼女の足元には曇天の雲のような塊ができていた。

素晴らしいパフォーマン스에胸の高鳴りを抑えきれず、彼女に近づくこと巾着の金貨をしっかりと握らせる。

「ありがとうございます。お陰で最高の気分仲間を迎えられます！」

「You're welcome. (ど、どういたしまして)」

頬を赤らめた少女を見るや否や、青年は咄嗟に手を離し席につく。接客業故に男慣れしていそうなものだが、魔術を会得するのに必死で、今まで良縁がなかったのだろう。

誰にも認められずとも研鑽を積む姿は、誰であろうと気高く美しい。

(さて皆の様子は?)

酒場の空気に当てられたか、或いは酒が進んだせいかな。



仲間は口数が増えていく。

だがそんななかでアモンは何にも口をつけず、黙って俯いているのに気がついた。

「それだけでいいの、アモン。遠慮しないでいいんだよ」

「ああ、蜂蜜の酒は俺が生きていた時代から存在していた。だから少しだけ、思い入れがあるんだ」

遠い目をしたアモンは、過去を懐かしむように酒を眺める。

多くを語らない彼について、青年はよく知らない。

ただアモンとの冒険は、不思議と居心地よく感じた。

「……もう少し君のことが知りたかったな」

「出会いがあれば別れもある。俺への未練に囚われず、アシエルとウィツカを大事にしてやりな。さて少し夜風に当たってくるよ」

長命のアモンは数え切れない別れをしてきたのだろうと、その一言から伺えた。

裏を返せば、それほど多くの人々と出逢いを繰り返したということ。

人間も長く生きると鈍感になりがちだ。

でもない痛みが多い世界に耐えられないから。

席を後にしたアモンを視線で追うと、彼はどこかに向かって歩み出す。

「……もしやと思い、青年は彼の背へと駆け出す。

「ア、アモン！」

「どうした？」

「この前も時間稼ぎするだけでいいって、いなくなっただろう。だから、また急にどこかにいっちゃいそうだから」

問いかけると悪魔は呆けたように口を開く。

「鋭いな。上から君への不干渉の通達が届いた。短い旅だが楽しませてもらった。次に会うのが地獄にならないようにな。それとある老爺から君にと」

ジュアン元神父からの伝言に、青年は怪訝そうに眉間に皺を寄せた。

初対面の人間に、それほど入れ込む理由がどこに。  
肝心なことに關しては、アモンも知らないとのこと。

再会した際に直接訊ねる他ないだろう。

「後はハリーへの懲罰。本来はアイツに罰則を与えるがために俺がやってきたからな」

「え、アイツが何かやらかした？ 殺人、殺人教唆、強姦、強盗、器物破損。もしかして全部？ ……うくん、やりかねない！」

「……ずいぶん最悪な印象を抱いているようだが違うよ。君がハリーを呼び出した訳ではない契約について、問題が生じた」

盗賊の頭が召喚した悪魔であり、ハリーが勘違いしたせいで僕と契約を結んだのが、事の顛末。

流されるがままに契約してしまったが、それに問題があったのか。

その罰則とやらは痛みを伴うものかもしれない。

背筋にぞくりと寒気が走った青年は、すかさず訊ねた。

「気がつかずにハリーと契約したけど、僕にも罰を？」

「それについては不問とする。だが契約前、及び契約者への正当な理由なき直接的な攻撃は明確な魔界法違反。悪魔の法に基づき、ハリーには処分を下す」

「……処分」

「今までハリーが集めた魂の一部を徴収。具体的にいうと、戦闘能力が落ちると考えてもらえばわかりやすいだろう」

安堵の溜め息を漏らすのも束の間、彼は別の不安に苛まれた。

弱体化が冒険にどれほど影響するかが気掛かりだ。

適当な人間の魂を喰わせれば元通りになるだろうが……邪な考えが脳裏をよぎるも首を振り、頭の中の選択肢から外す。

「アモン、君に出逢えてよかった」

「正直に言うとう君の気持ちに困惑してる。契約以外で人と関われば関わるほど、本来の目的を見失いそうでな。それに俺は悪魔。本質的に君ら人間とは相容れ……」

「僕は悪魔だからって君を嫌ったりしないよ。だって君は教会で説教を一緒に楽しんだ。モルマスの人々を助けてくれた。周りが君を

嫌っても——好きなものにまで嘘はつきたくないんだ！」

アモンの発言を遮り、主張する青年は語気を強める。

悪魔は面食らったのか、頻りに瞬きをしていた。

僕を含めた世間に順応できない人間というのは、とかく周囲から罵倒されがちだ。

けれど同調圧力に従い、流されて嫌うなんて間違っている。

他の人間がどうであろうが、僕が好きなのは好きだ。

僕の好きも嫌いも他人を害さない限り、否定される筋合いはないだろう。

だって無数の好きと嫌いが、僕自身を構成しているのだから。

「……そこまで断言されると照れるな。その筋は」

「あ、これ？ 偶然手に入れた武器なんだよ」

話題を変えようとしたのか、手にした武器を見て、アモンは云う。

おそらく珍しい武器に知的好奇心が刺激されたに違いない。

目を細めた悪魔は

「……別れの前にこれだけは言っておこう」

青年へ向き直りつつ告げた。

「ええと、何を？」

「俺は愛や不和や自在に操る権能も有する。すぐ悪魔に頼ろうとする者も多い。だが君たちは俺に縋らず、意見の対立を解決した」

「……」

「君らが報酬の配分で揉めたのは、どちらも仲間の今後を真剣に考えたからこそ。それを心に留めておけば、空中分解はしないはず」

「一応仲直りはしたけれど、また喧嘩するかもしれない。その時は君の言葉を思い出すよ」

青年は彼の助言を聞き入れた。

いつもは必要最小限の口数の彼が多弁になったのは、それだけ別れが近づいているのだと思うと、一抹の寂しさを覚えてしまう。

「ベルゼブブ様はバアル・ゼブル。アドラメレク様はバアル・アドラメレク。バアルの別称バエル王。バルベリト王はバアル・ベリト。ベルフェゴールはバアル・ペオル。モラクスはバアル・ハモン。かつて

バアルの名を……神々として栄華を極めた悪魔は数多い」

「他にも豊穰神アシウトレトと賛美されたアスタロト大公。かつて双頭の神ヤーヌスと呼ばれたビフロンス。アームは猫神バステトと関係する。俺も以前はアメンとしての神格を持っていた。多くの神々を悪魔へと零落させた、邪悪なる神の僕に俺たちは屈しない」

何の脈絡もなしにアモンは、かつて神々であつた頃の名を語り始める。

だが、きつと意味があつてのこと。

青年は聞き逃さぬよう傾聴に徹した。

「神々に貶められ、人間たちから憎悪や奇異の目を向けられた俺は、君が周囲の偏見にどれだけ苦しみ抜いたか、思うところがある」

アモンに労りの言葉をかけられ、青年の腹の底の中には、ぐつぐつと熱いものが煮え滾っていく。

それは彼が心に抱えてきた、怒りと憎悪の感情であつた。

怒りが噴出しそうになるのをぐつと堪えて、青年は家族との記憶を思い返す。

今頃僕ら迷い人は、どう扱われているのだろう。

事件性のない失踪として処理され、警察も無関心の可能性すらあり得る。

もしそうなら、現代から僕らの救出はお手上げだ。

ヴォートウミラ大陸の人間たちだつて謎の声の主に導かれ、この世界にやってきた……なんて与太話は、誰も信じない。

帰る手段があるのなら、仲間と協力して探さねば。

けれども帰つた所で僕は何をすべきなのか、どう生きるべきなのかさえ、まだ見つけてはいない。

戻つても空白の日常に逆戻りするのみ。

(世間体の悪い息子の厄介払いができて、案外清々しているかもな)  
心のどこかで脱出を諦観する自分にも、彼は気がついていてた。

どう言葉で取り繕おうと無職の自分が、社会にも家庭にも不要な人間であるのには違いない。

ヴォートウミラを終の棲家として生涯を終えるのも、最悪受け入れ

なければ。

幸福感と絶望が緋い交ぜになり、硬い笑顔をした祐を

「——人の誇りを忘れるな。命を狙われようと理想を貫いた。それは簡単なことではなかったはずだ。どんな苦難が待ち受けようと、信念を貫き、覇道を進め。悪魔として誇り高く生きる俺なりの称賛だ」と、激励する。

悪魔は嘘をつき人を騙す存在……だが彼を、彼の善意を、他者への思いやりを、青年は信じたかった。

「短い間だったけどありがとう。君の励ましを糧に自分なりに頑張ってみるよ」

感謝が自然と口をつく。

彼の言う通り、人と悪魔は本来相容れない存在なのだろうが、それでも態度を変えない。

「悪魔は自己の利益の為に人を操り、思いのままに利用するのみ。感謝される筋合いはない。君には帰るべき場所があるだろう。苦難を乗り越えた末に理想の世界へ至るのを願う」

「いっちゃった」

ぽつんと佇む青年が放心したように呟くと、白い吐息を吐き、直美が走り寄ってきた。

「なかなか帰ってこないから探したのよ。もしかしてあの悪魔は帰ったの？ 変わった悪魔だったわね」

「僕も変わり者だよ。だからアモンみたいな悪魔も、受け入れてやりたいんだ」

「そう。ま、それが貴方のいい所よね」

人を利用すると言いながらも最後まで誰も傷つけることなく、去っていく背中を2人は見届けた。

アモンにはアモンの信念と誇りがある。

彼を咎める資格など誰にもない。

道を違えても進んだ道の先で、再び運命の糸が絡み合うのを願い手を振ると、再び酒場へと入っていくのだった。

第27話 占星勇士（アストロ・ブレイバー）と占札勇士（アルカナ・ブレイバー）

王国に以前現れたという魔毒竜が、卵を産み落としていたとの噂が流れた。

民に深い爪痕を残した怪物の復活を危惧し、自発的に揃った冒険者らは、まるで一つの生き物であるかのように、王国近くの草原へと集結する。

今の光景を上空から眺めたら、鰯の群れみたいに見えるだろう。

卵の話は悪魔を討伐するという、本来の目的を隠す嘘だ。

これだけの冒険者がいれば、迂闊には手が出せまい。

しかし悪魔がいるならば、極上の餌場であるのも事実。

おびきよせる条件は整った。

（……悪魔たちがどう出るか。これで全ての悪魔が釣られるのはありえないだろう）

青年は早くも2人で計画した作戦を実行し、成功した後の未来を描く。

悪魔を確実に叩く方法があればいいが、現状は王国外でへと誘い、策を弄するのが得策。

思考を深める青年の隣で

「チカラ ナクナツタ……」

どこかやつれたハリーが、力なく呟いた。

自慢の逆立つ金髪にも艶がなく、魂を奪われた悪影響が顕著に現れているようだ。

「まあ、君に責任があるよ」

「オレサマの力がなくなったら、お前も困るだろう！ オレサマと兄貴、どっちの味方だ、オラ！」

「理知的で配慮できる彼の味方に決まってるだろう。これに懲りたら、少しは周りに優しくしたらどうだ？」

毅然とした対応で接すると、ハリーは不貞腐れたように、地面の草

を念入りに踏みつける。

苛立つのはともかく、人に八つ当たるのは勘弁してほしい。

「本当に真面目な野郎だな、面白くねエゼ……」

「それはそうとハリー、手筈は整っているのかい？」

「ああ、言われた通りにした。報酬が出たら美味しい飯おごれよ」

「ああ、約束する。力に善悪はない。君の力は王国の為に必ず役に立つよ」

悪魔にフォローを入れると、腰に手を当て

「そうだろうな、オレサマは役に立つだろう」

と、豪快に笑い飛ばす。

単純だなと心の中で呆れつつも

(ま、調子に乗らせてもいいな。実際、人間にはできないことをやって貰えるのはありがたいし)

胸は悪魔への感謝で満たされていた。

即座に手が出る、短気で行動派の悪魔。

確証や論拠、推測がなければ動くのを躊躇う、まず頭で考え実行に移す慎重派の人間。

対照的だが、だからこそ互いの至らない部分を補完をしやすい。

「G l a d t o h e a r y o u a r e s a f e . L e t ' s d o o u r b e s t t o s l a y t h e d r a g o n (無事で何より。竜退治、全力を尽くしましょう)」

理解不能な英語が周囲で飛び交うも、初めは僕ではない誰かに向けたものだろうと、仲間たちと交流した。

しかし背中を指先で突かれ、やっと相手が自分だと知り振り返った。

「あ、貴方はあの時の」

するとモルマスの戦闘で折れかけた僕へ、魔法をかけた長髪の男性が、ぎこちなく微笑む。

吊り上げた口角が震え、普段から笑い慣れていないのが、手に取るようにわかる。

額に包帯を巻き、万全の状態ではなさそうだが。

(無事に生きていてくれてよかった)

青年がつかれて笑うと

「I'm with you again. Nice to meet you (またアンタと一緒に。よろしくな)」

共に戦った者やモルマスの酒場で出逢った冒険者など、見知った顔ぶれが次々と青年ににじり寄る。

「よろしくだよ」

「こちらこそよろしく。顔見知りくらいの関係でも、一緒だと心強いな」

「悪運の強い連中だ。今日の冒険でも生き残るだろうな」

希望的観測ではあるが、そうなってほしい。

冒険を無事に終えたら、悪魔の出現を正直に告げよう。

監視の目が強まれば、悪魔も手を出しづらくなり、自然と被害も減少していく。

今は安全に悪魔の討伐をすることを優先せねば。

その後もモルマスの戦友と親交を深めると、ある一箇所に人だけができているのに気がつく。

「魔毒竜に反応した刻印が熱を帯びているウー！ グオオオオオ、し、静まれエツ、俺の右腕！ アスカロン、竜殺しの力を寄越せエ！」

「What's that? (なんだ、あれ)」

「Don't get involved (関わるのはよせ)」

「ど、どこかで聞いた声が……」

突如として甲高い金切り声が鼓膜を震わす。

耳を抑え、冒険者らが群がる中心へと向かうと、以前遭遇した少年が、いわゆる思春期特有の呪いを発症していた。

天然記念物の邪気眼。

現代はもちろん、異世界においても、間違いなくレッドリスト入り確定の希少生物である。

「あ、いつぞやのクソガキじゃねエか」

「フ、また巡り合ってしまったようだな」

外套をたなびかせた黒髪の少年は、芝居がかった口調で、一行に喋



りかけた。

「俺の善き剣は竜の心臓を貫き、必ずや勝利をもたらすだろう。英雄譚の一部になれるのを誇るがいい」

「確か聖ゲオルギウスの武器、だったかしら。何の役に立つかわからない、無駄な知識ばかり蓄えて……」

溜め息を漏らす直美に、青年は苦虫を噛み潰したように渋い顔をする。

無駄な知識、という放言が引つかかって。

現代では架空の武器の知識など、さほど役に立たないのは事実。

しかし一見無駄と切り捨てられたものが、特定の状況下で役立つことは、往々にしてある。

「無駄、か」

「急にどうしたの？」

「知恵というのは枝を伸ばした樹木のようなもの。昆虫を知れば、昆虫の好む植物の知識もついてくる。そしてその植物がどの時期に生えるか、どんな場所で種を残すか。そして今度は植物の育つ土壌を知る。乾燥した場所、湿った土壌……そうして人生をかけて実を実らせたい大樹を育てていく。知識には際限がないよ」

直美が口を挟むも、無視して喋り続ける。

どうしても少年に伝えたい気持ちだが、僕の中にあつた。

「無駄な知識なんてものがあつたとしても、それが分かるのは世界を作ったもうた全能の創造主だけ。人間にできるのは知識に意味があると信じ、学び続けること。僕はそうであつてほしい。だから君も自分の道を信じたらいい。馬鹿にされたとしても」

「……」

少年は掌で顔を覆い隠したまま動かなかつた。

僕の気休めの言葉に、多少でも救われたなら本望だ。

結果のでない努力は努力ではない。

正しい努力。

まるで社会的成功や結果に繋がらない一切を否定するような、軽薄な言葉には心底嫌気がさす。

知識も同様に、それ自体は価値を産み出さないものだ。だが人の殺し方だろうが、知識自体に罪はない。

現に創作や犯罪分析の分野では、世の為に利用されている。つまりところ知識をどう扱うか、人間性の問題だ。

無駄と切り捨てた文化は、社会の成熟さを表すもの。

余白なき社会というのは、人間らしさからかけ離れている。

「う、ううああ……」

青年が語りかけると、少年は体を揺らし鼻を吸った。

泣くほど感動したのだろうか？

だとしても大袈裟な気がするが。

青年が慰めようと距離を詰めると

「ま、まさかお前は賢者ミツシヤではないか?! また会えるなんて! ど、どうして悪魔の力などに手を染めた!」

まさかの裏切った仲間認定に、啞然とした。

白目を剥き、ウバザメのように大口を開けながら。

(ミ、ミツシヤって誰? もしかして僕のことかな。いや、知らないよ!)

「俺の名を忘れたのか! 俺はイグル王国の王子ヒンメル。世話係のミツシヤには、だいぶ世話をかけたな」

肩に手を置く少年から、垂れ流される妄想の洪水。

情報をまとめるとミツシヤは王族の関係者で、長年王子を影に日向に支えた、という設定。

ならば敬語で話すのが、それっぽいだろう。

「だとしたら、どうなさるおつもりで。ヒンメルお坊ちやま。僕の大義と貴方様の理想、決して交わることはない」

「共に魔王を討つと誓ったあの日のことを忘れたというのか、悪魔に誑かされたのかツ! サタンの娘サターニアに!」

一難あつてまた一難、とでも形容すべきか。

新たな妄想が青年の脳味噌を揺さぶる。

少年がちらりと視線を送った先の彼女のこめかみには、猫の尾が如く血管が浮き出し、激しく感情を表現するみたいに揺れ動く。

尋常ではない怒りように、青年は獲物を飲む蝦蟇（ガマガエル）を思い起こさせる不細工な顔で目を細め、竜の逆鱗に触れたのを激しく後悔した。

（は、は、は、般若じゃ、般若がおる！ この男の子、僕に直美さんを巻き込めと！ い、嫌だ！ 絶対怒られる！ やめて、やーめーてーくーれー！）

「お坊ちやまの察しの通り、彼女が僕に力を授け……オウフツ!!!  
……ぼ、暴力反対！」

……もしかしたら赦してもらえるかも。

一縷の望みにかけて勇気を振り絞ると直後、鋭い拳が脇腹を抉る。  
世界で頂点（てっぺん）を獲れる一撃に、青年は崩れ落ちた。

「ちよ、ユウさん?! しつかりしてーっ！」

「お、おつかねえ。大丈夫か。あんまりナオミ、怒らせるなよ」

「待ってて、傷薬塗ったげるから〜」

「……あ、ありがと……ウイツカ……ちや……」

地面に倒れ込むと、視界は歪み、夜の帳が降りたように眼の前が闇に染まる。

死後硬直を起こしたかのように体を痙攣させた青年は、仲間の声を頼りに、なんとか意識を繋ぎ止めた。

妖精の小さな手が患部を優しく撫でるも、痺れにも似た痛みが襲い、言葉にならない呻きが漏れた。

悪ふざけが過ぎた。

「誰がサタンの娘よ！ アンタのくだらないごっこ遊びに巻き込まないでー！」

「……わ、悪ノリしてすみませんでした」

「なんと怖ろしい形相、やはり悪魔は実在したのか……!」

少年は一連のやりとりを見て、納得したように頷く。

しかし彼女の横でもう一人、ヒンメルに怒りを募らせる者がいた。

「テメーの茶番に付き合ったせいで、オレサマまで痛い目見たじゃねエか。どうしてくれんだ、クソガキ」

「ミツシヤと俺の友情に水を差すな、ごころつきA!!!」

「なんでオレサマには固有名詞がねエんだよ。なんかムカつくな、お前！」

横っ腹を擦りつつ獣が唸るかの如く、ハリーは2人よりも格下の扱いに憤慨する。

「貴様は粗暴で粗野なのが取り柄のソーヤ！ 今日日は日課の昆虫踏み潰しはやらないのか？」

「殺す！ 火炙りにした後、四肢を引き裂いて殺す！ 市中を引き摺り回して殺す！」

火に油を注ぐ互いの発言に、少年と悪魔が一触即発の雰囲気を漂わすと

「耳障りだぞ、貴様ら。静かにできないのか」

声色の低い男の声が二人を一喝し、辺りは静寂に包まれた。

威厳に満ちた口調に平伏するかの如く、道を開ける。

青年にはその様子が、まるで王の凱旋を讃えるように映った。

やってきたのは青のローブを纏う男女二人組。

目が合うと男の方は、青年を切れ長の眼で睨み据える。

彼の瞳は、さながら闇で星がきらめくかのように輝きを放つ。

手にはそれぞれ水晶とタロットカードを持ち、屈強な冒険者とは似つかわしくない。

魔術道具と風貌から占い士だと錯覚してしまうが、彼らも冒険者。

「王族からの依頼というから協力をしてやるが……そこいらの冒険者にも劣る実力しかないようだな。先に忠告するが、足手纏いは捨てていく。ソフィ、俺から離れるなよ」

「イーサン、口が過ぎるぞ。貴方たちが雇い主でしたね。実力こそ私たちに劣るようですが、後方支援を頼みました」

厳格で言葉を選ばないイーサンを、笹の葉の形の耳が特徴的な金髪の女性エルフのソフィが窘める。

彼らは権力者を介して雇った、対悪魔の最終兵器。

なんでも竜退治で生き残った猛者とのことで、実力に関しては折り紙つき。

占星勇士（アストロ・ブレイバー）と占札勇士（アルカナ・ブレイ

バー」と呼ばれ、名声を欲しいままにしていた。

「イーサンさん、ソフィさん、今日はありがとうございます」  
「……」

「謝罪の代わりといっってはなんですが、タロットカードで君たちのことを占わせてくれませんか？ いい暇潰しにはなるでしょう」

「よろしくお願いします」

これを機に親睦を深めていこう。

快諾すると、一行は軽く自己紹介を済ませた。

ソフィは二十二枚のカードを掻き混ぜ、両手で持ち

「さあ、この中から君たちの手で1つ選ぶんだ」

と、一行に告げた。

言われるがままカードの1枚へ触れた瞬間、目が合ったソフィに微笑され、彼は取るのを躊躇した。

ババ抜き心理戦をやっているような錯覚を覚えたのだ。

悩んでも仕方ない。

青年は最初に我が物にしようとしたカードへ、手を伸ばし引き抜く。

全員がカードを手にしたのを確認すると、彼女は順番に定められた意味を述べていく。

「祐を表すカードは……世界。正位置なら完成、成功、完璧。逆位置なら未完成、惰性での継続を象徴する札。君は自分の至らない点がよく目につくみたいだ。だがそれは向上心があるからこそ。深く落ち込まない方がいいよ」

「え、はい。ありがとう、ソフィさん」

まるで僕の人生の一片を垣間見たかの如く、ピタリと当てた。

バーナム効果と切り捨てるのは容易いが、決めつけるのはまだ早い。

「直美を表すカードは……皇帝。正位置だと成功や権力、責任感。逆位置だと傲慢さを象徴する札。直美の目標を目指す力は素晴らしい。だが逆位置に心当たりがあるならば周囲と協調した方がいい」「なるべく気をつけようかしら」

組織を率先して束ねる責任感に溢れた、直美らしいカードに、青年は感心しながら説明に耳を傾ける。

皇帝の男性の堅苦しい雰囲気と、生真面目な彼女は瓜二つだ。

しかし舌禍が招く問題にも言及され、結果を重く受け止めたようである。

「ハリーを表すカードは……悪魔。正位置なら墮落、破滅。逆位置なら執着やしがらみからの解放を象徴する札。君はついつい衝動的な行動をしまいがちでは。しかし竜……時に悪魔と称される怪物退治の依頼で、このカードが出るとは不吉な。もしかして君、本当の悪魔かい？」

「クククツ、どうだろうな？ エルフの嬢ちゃん」

本来ならば否定するか、或いは笑ってやり過ぎすか、どちらかだろう。

しかしハリーは含みを持たせた言い回しで、彼女に返事する。

まるで悪魔であることを、人ならざる力を有する存在であることを誇示するかのよう。

「英子を表すカードは……審判。正位置なら復活、祝福、再生。逆位置なら罰、罪の償いを象徴する札。青年との出会いは君の人生で、この上ない幸運。だが後ろ暗いことを隠しているとの暗示がでている。ありのままの君を受け入れてくれる人もいるだろう。無論、罪を償うのならば……だが」

「罪、ですか」

再生、復活は彼女の癒やしの魔法を表すもの。

だとすれば罪とは。

審判の大アルカナを彼女自身が選んだということは、何らかの罪を償うのを彼女自身が望んだということ。

現代でいえば高校生の彼女に、だいそれた悪事は働きそうにないが……。

歯切れの悪い返事には、様々な意味を孕んでいるように思えた。

「アシエルを表すカードは……運命の輪。正位置なら幸運、変化、運命、出会い。逆位置なら悪化、すれ違いを表す札。彼らと仲間になっ

たのは吉兆。だが遠くない未来、君が最も大事にする相手との関係が  
ぎくしゃくするだろう。でも心配しなくていい。運命の輪は廻り続  
ける。不幸も一時的なもの」

「……よかった」

彼の最も大事にする存在との関係の悪化。

家族や友人、恩人の誰かを指した内容を、俯きがちに聴き入る。

とはいえ解決を示唆する一言をソフィから伝えられ、彼は普段の微  
笑みを取り戻す。

「ウィツカを表すカードは……太陽。正位置なら天真爛漫さや無邪気  
さ、栄光。逆位置なら不調、悪化を象徴する札。ヒマワリのように底  
なしに明るい妖精の君は、人知れず人を救う力がある。意識していな  
いから恩着せがましくもない。しかしいつか、心のわだかまりに立ち  
向かう必要があるかもしれない。仲間と乗り越えていくんだ」

「おおっ、すっごくいいね。やっぱり私は、みんなの太陽だよ」

太陽に彫りの深い顔が描かれたタロットに、満面喜悦のウィツカ。  
ただ彼女の底には、人知れぬ魔獣が棲むようだ。

とはいえ今の彼女からは、後ろ暗い過去など微塵も感じられない  
が。

一行はソフィに感謝をしつつ、王国近辺の森へと向かう。

王国の平穏を望む責務を胸に秘め。

## 第28話 己の信念、新たな不和

冒険者一同は細長い木々が立ち並ぶ森へと、足を踏み入れた。

その光景はファンタジーの世界観で幾度も目にした、オークの木に酷似していた。

小説執筆の調べもので知ったが、森に木の実の落ちる季節にはイノブタ、現代の猪に近い生物の飼育に利用していたという。

めいっばい息を吸い込むと、心の臓にまで清涼とした空気が染み渡り、生まれ変わった気分だ。

「カアーツ、カアーツ！」

侵入するとカラスが泣き喚き、森がざわめいた。

僕ら冒険者を歓迎しているのか。

或いは排除しようと、躍起に騒いでいるのか。

死の臭いを嗅ぎつけたのか。

どちらにせよ人間は、ただやりたいようにやるだけ。

探索から数十分が経過した後、当然存在するはずもない卵について、不満の声が続々と漏れ始めた。

「It's inefficient to search the area with a bunch of people (大勢で搜索するのは非効率だ)」

ないものを探そうとしても、見つからないのは当たり前。

ただこうなるのは、あらかじめ予想済みだ。

「これからという僕の言葉を翻訳してくれる？」

「ええ、わかったわ」

「これから幾つかのグループで搜索します。ですが夜間の森での探索は迷う危険がある。なので夕刻には合流し、夜間は共に過ごしましょう」

本当ならば少人数の行動も、避けたくはあった。

常に帯同し、危険を未然に防ぎたい。

悪魔も大勢の冒険者に、執念深く狙われるのは避けたいだろう。

だが策は幾つか用意してある。



悪魔を相手にするには、あまりに細く心許ない命綱だが。

「転移の羽根、これを使って集合してください」

一見ただの白い羽根なのだが、衣服に触れさせると、目的地にひとつ飛びの便利な魔法品。

森にはフィリウス・ディネ王国の管理区域があり、羽根を用い、そこにいくことが可能とのこと。

僕自身の冒険歴は浅いので伝聞だが、冒険者たちからの証言なので、間違いはないだろう。

納得した彼らは青年を案を受け入れると

「I don't want to work with him

(アイツとは一緒に仕事したくねえな)」

イーサンを一瞥した冒険者が吐き捨てた。

計8人づつ四手に別れたが、イーサン、ソフィと同行しようとする人々は現れず

「I knew the rumors were correct  
(やはり噂は正しかったな)」

「The murderer! (殺人鬼が!)」

憎々しげに声を荒げる冒険者の言葉を訳してもらうと、聞くに堪えない悪罵(あくば)が彼を襲った。

イーサンとソフィは魔毒竜の退治で、二人だけ生き残った。

そのせいで、ある噂が立っているのだ。

——彼が名声を独り占めする為に、他の冒険者を殺害したと。

けれど、果たしてそれが真実なのか。

謂われなき中傷まで受け入れる必要などない。

「魔毒竜ではなく、この人が冒険者らを殺した……その発言は訂正してくださいませんか? 皆さん」

不当な攻撃は見ていて気分のいいものではなく、青年はイーサンを庇う。

「Hey, are you defending this guy?  
(おい、コイツを擁護するのか?)」

冒険者らがユウを詰め寄る中

「Will you stop, it's disgraceful! All we have to do is destroy the eggs. No time to argue(やめないか、みつともない! 我々がやるべきは卵の破壊。言い争う暇はない)」

金属で全身を覆う騎士の姿の男性が一喝した。

彼は実力者で、それなりに発言力があるのだろう。

罵詈雑言を浴びせた冒険者たちは、散り散りになっていく。

「どういうつもりだ。貴様。何故庇った、点数稼ぎのつもりか?」

イーサンは燃え立つような赤髪を揺らし、青年に問い詰める。

「イーサン、そんな言い方は……」

「僕は辛辣な態度を取る貴方が嫌いだ。けれど根拠のない言いがかりを看過できるほど大人でもない。誰が中傷されても助けますし、貴方を認めたと勘違いしなくても構いたい」

彼のため、というよりは自らの正義感がそうさせた。

偏見という色眼鏡を通しては、真実は見通せない。

だからこそ信念に従ったまで。

感謝されたいという下心なく、ただエゴを通したのだ。

「……フン、いけすかない男め」

「彼は素直でないから、私から礼をいう。ありがとう、ユウ」

「いいんですよ、では」

ソフィに感謝され、気恥ずかしい青年は仲間と共に歩み出す。

「ええと、はじめまして。お名前は?」

「はい、僧侶のイザベラ・クレアですの。皆さん、よろしくお願いますわ。ヴォートウミラ三神に代わって、魔毒竜の卵へ天誅! ですよ」

「よ、よろしくお願います」

桃色の頭髪の清廉な雰囲気のスターが、僕へはにかむ。

出る所は出て引つ込む所は引つ込むスタイルが、ぴったりくつつく修道服で露わになり、視線のやり場に困った。

肉感溢れる体と余裕に満ちた大人の女性の色香に、胸の高鳴りが止

まらない。

それよりも修道女に魂を見透かされたが、糸を思わせる目には、僕の魂はどう見えるのか。

……普通の人間と同じように映ると信じたいが。

「フハハハ、俺のアスカロンが必ずや悪を討つ！」

「皆様にヴォートウミラ三神の加護あれ〜」

片や剣を天に掲げて、片や髪と鉄球を振り回し、並々ならぬ意欲を見せる。

戦いを避けたがるのも問題だが、ここまで好戦的なのも考えものだろう。

避けられる戦闘で深手を負い、悪魔に狙われでもしたら。

先が思いやられる。

「な、なかなか愉快な人たちだよな、ユウ」

「騒がしい人たちだね」

「おもしれー女……」

横並びの小中大の男たちは僧侶のイザベラに、素直な感想を述べていく。

「ま、足を引っ張らないのであれば、誰でも構わないけど」

直美はそう吐き捨て、森を注視した。

彼女は実利さえ得られればよいようだ。

成果さえあげれば誰でも受け入れるのは、ある意味懐が広いと言い換えもできよう。

「嬢ちゃんの言う通りだな。雑魚はいらねエ。オレらは馴れ合う間柄じゃねエからな」

悪魔の言い方はともかく、内容は一理ある。

それから同行したヒンメル、イザベラを含めた8人で、木々の合間を縫うように進むと、風を切るような音を耳にした。

——次の瞬間！

「あ、痛っ！ え、石ころ？」

何かが頭に当たり地面に視線を落とすと、そこにはピンポン玉サイズの石が。

続けざまに音がしたが、直美には通用しない。

咄嗟に刀を抜き、真つ二つにする。

「誰、姿を見せなさい！」

不意打ちを完全に対処した刹那、葉擦れの音が一段と大きくなった。

何かはわからないが、確実にこちらに敵意を向けたものが潜んでいる！

「魔物だツ！ 気をつけろよ、テメーら！」

ハリーが声を張り上げると同時に、腰に蓑を巻いた緑肌の悪鬼、俗にいうゴブリンが姿を現し、一行を隙間なく取り囲む。

どうやら待ち伏せしていたようだ。

巫人だけあつて狡賢く、悪知恵が働く。

ショートソード、バツクラ、パチンコ。

手に持った武器や防具は様々だが、損傷が激しく劣化していた。

おそらくは冒険者から強奪したか、死体漁りで手に入れたのだろう。

枝から降りた悪鬼は、くの字に折り曲げた脚をバネに一齐に飛びかかった。

「ゴブリンめ、許すまじ！ インセクトウミレス！」

ヒンメルが声高に叫ぶと、背から墮天使の黒翼の如き四枚羽が生え、空高く飛翔する。

「な、何よ、その力は！」

「君もその力を？」

「話は後だ。樹上の魔物は俺が始末する！ ミツシヤは地上を任せただぞ」

「あ、ああ。ありがとう」

確かに彼の言う通りだ。

僕は背中の中の王笏を両手に握り締め、臨戦態勢に入る。

「おお、偉大なるヴォートウミラ三神よ。何故私に地を削る腕を、空飛ぶ翼を、海を渡る鰓（えら）を与えてくださらないのでしょうか。けれど私たちに授け給うた多くを決して忘れてはなりません」

「敬愛するイミタ、シグニフィカ、メタモルフオシスの御名の元に、私の隣人を救うと誓いましょう」

状況を理解しているのだろうか。

イザベラは呑気に神々へと祈る。

それを見た一行が、さっさと戦闘に移るよう囁し立てると

「すいません。メタモルフオシス神の破壊と混沌の力を借り、迅速に排除いたしますわ。オラア、死に晒せ！」

間延びした口調とは想像つかない、殺意を剥き出しにした台詞に、青年は肝を冷やした。

鉄球が地面を掠めると、土が天から降り注ぐ。

抉れた場所には、クレーターを彷彿とさせる巨大な穴ができあがっていた。

実力といい、先ほどの僧侶らしからぬ発言といい、怒らせたら駄目な女性だ。

「二網打尽にするわ！ 水の精霊ウンディーネ。大いなる御力によって、我にニンフの加護を施したまえ——ヌプター！」

魔法を唱え刀で空を切ると、円のゴブリンをたちまち凍てつかせる。

相も変わらず神速の一太刀は、どんな技なのかすら、まともに視認できない。

しかし一瞬ではあるが、彼女の体の隅々を水のボールが覆ったように見えたのは、僕の気のせいだろうか。

地上の悪鬼は全滅させたが

「まだまだいるぞ！ 気を抜くな！」

ヒンメル的叫びと共に、ゴブリンが次々落下してきた。

少年の強襲に受け身も取れなかったのか、仰向けの悪鬼は体を頻りに揺らし、脚をバタバタさせた。

隙だらけの今なら、御しやすい。

「ハハ、小細工をしようが無駄だア！」

寝転ぶゴブリンへ、ハリーが斧を振り下ろす。

すかさず盾をかざすが、巨大な鉄塊はそれを物ともせず、悪鬼の細

腕をあらぬ方向へ、ひしやげさせた。

肉を切らせて骨を断つという諺があるが、破壊者の名を冠した斧は——肉も骨も断つが相応しい。

「知ってるか。猫脚族フェレペスは——音をも殺すんだ」

アシエルは指の間にナイフを挟むや否や、毛むくじやらの足裏で音も立てず、ゴブリンを引き裂く。

猫に引つ搔かれたような、三本線の傷痕が痛々しい。

息も絶え絶えにした悪鬼には、もう抵抗する気力も残されていない。

彼もそれ以上、追い打ちをしなかった。

「ケキヤキヤー」

眼前のゴブリンは背丈に見合わない、人間用のショートソードを、嬉々として振り回す。

それは技というよりも、ただただ子供が玩具の玩具で、遊ぶかのよう映る。

仮にも人型の魔物。

背丈を考えれば、子供に対して暴力を振るうようなものだ。

それを容赦なく殺すのが、普通の冒険者だというなら——僕は生涯普通にはなれないだろう。

王笏の柄で手を強打し、ゴブリンが握った剣を落とすと、すぐさま放り投げた。

「ギャハ、ギャハハ」

やはり数が多い分、気が抜けない。

錆びついたトンカチを手にした悪鬼は、同じ身長のアシエルへ忍び寄る。

弱さを自覚しているが故に、確実に致命傷を与える部位ばかり狙うのが嫌らしい。

生かしておけば仲間が傷つく。

けれど魔物を痛めつけるのは、許されるのか？

暴力と理性がせめぎあった。

「や、やめろー！ アシエルくん、後ろだ！」

青年が注意し、アシエルは振り向きざまに裏拳を喰らわせる。倒れたゴブリンは、陸に打ち上げられた魚が如く跳ねていた。

悪魔は伸びた悪鬼の首根っこを掴むと、木へ投げ飛ばし

「お前にや魔物殺しは無理だろう。後はオレサマがやる」

「もういいだろう。実力差は見せつけた。襲う気もないだろうから」

「つたく、甘ちゃんのせいでオレサマまで殺意が失せてくらあ」

「ギャ、ギャギャ……」

まだ残党がいたのか。

そう思い声の方へと目を凝らすと、悪鬼はどこからともなく出現させた中型犬大の宝箱を置き、一目散に逃走した。

木製で壊せば、中の物は容易に手に入りそうだ。

悪魔が欲望を隠そうともせず近寄ると

「待て、罠があれば解錠の前に外す必要がある。だったよね、アシエルくん」

「よし、俺の出番だな。腕前、見せてやるよ。さっさと中の物をふんだくるぜ」

そういつて宝箱を揺らし、耳をくつつけた。

中身を音で確かめ、罠の目星をつける作業中、お調子者の彼は鳴りをひそめ、経験豊富な冒険者の顔つきに変貌した。

「この地域でメデューサの魔眼はないし、この罠はあれで確定かな」

アシエルはカバンから無色透明の液体が入った瓶を取り出すと、寝かせた宝箱の鍵穴に流し込む。

「いったい、この液体は。」

好奇心が抑えきれず、青年は訊ねた。

「アシエルくん。それは何？」

「ああ、宝箱の罠に施された毒を中和するための液体だ。確かトリカブトの根を水に浸したもので、だったか」

毒で毒を中和する。

この解決は魔術的でもあり、科学的でもある。

現代では錬金術は今日の科学の礎になったのは、周知の事実。

僕はちように魔術と科学の変換期を、観測しているのかもしれない

い。

「これで大丈夫だ。安全の為に数刻の間、待つてくれ」

「ほう、案外やるじゃねエか。チビガキ」

身長に触れると激昂する、癖のある人物だが、盗賊としての技量は確かだ。

同行してもらい正解だった。

一行が束の間の安息に酔いしれる中

「オレらが闘ってる間に呑気に傍観者を気取りやがって。いい気なものだな、妖精さんよオ」

「うぐつ。し、しようがないじゃん！ 私は武器も持てないし、魔法だって使うとヘロヘロになっちやうし！」

ウィツカが何もせずにしたのを、ハリーの気に障ったようだ。

確かに戦闘要員としては計算できず、意見自体はごく自然なものだろう。

悪魔の文句を皮切りに、仲間たちは不満をこぼしだした。

「少数とはいえ組織として行動する以上、何らかの形で役に立つてもらわないと困るわ。周囲に負担がかかるもの」

最も彼女に突き刺さったのは、合理性と組織を重んじた直美の一言であろう。

ハリーのような感情論ではなく、淡々と事実を告げる。

——それはウィツカ自身が、嫌というほど感じていることだ。

「ちよつと冷静になつて。ウィツカちゃんだって、好きで闘えないわけじゃないよ。それに僕だって、あんまり役には……」

「さつきからゴタゴタうるせえ！ 役に立たないのが事実だからなんだ。俺にはウィツカが必要なんだよ。これ以上俺の友達を愚弄するなら、俺はお前らとは一緒に冒険なんかしねえ！」

小人はわなわなと体を震わせ、歯と歯の隙間から荒い息を漏らす。

親友を思い遣る台詞に、妖精は顔を掌で覆い隠すのだった。



## 第29話 魂の救済、それぞれの苦悩

あてどなく変わり映えしない森を彷徨うと、いつしか空は茜色に染まっていた。

昼間見かけたゴブリンはめつきりと見かけなくなり、夜の世界が間近に迫ったのを実感した。

夜目のきかない人間と、夜間の狩りに体を特化させた魔物。

どちらが有利かは、言わずもなだろう。

視力を失った人間が五感が研ぎ澄まされる、というのはよくある話。

普段は聞き逃すであろう、小さな息遣いや靴で地面を踏む音。

普段は意識もしない音が耳に伝わった。

活力のみなぎった昼にはさほど感じない金属の盾と王笏の重量が、ずしりと骨身に響く。

足取りは一步踏み締める度に重くなり、彼は肩で呼吸した。

都度休憩は挟んだが、冒険を始めた時ほどの元気はなく、そろそろ合流すべきかとの考えが鎌首をもたげる。

だが誰一人として切り出さず、青年は悶々としたながら動向を伺うのだった。

「ウィツカちゃん、疲れてない?」

「え、うん、大丈夫」

「ケツ、何もしてねえんだから、たりめエだろ」

「ごめんね、アシエルくん。ハリーは口が悪くてさ」

「……いや、ユウは悪くないさ」

歯切れの悪い返事のウィツカに、ハリーは相も変わらず痛烈な言葉を投げかけていく。

激昂したアシエルをなんとか説得し、同行してもらったが、また起こらないとも限らない。

今後は仲間たちとアシエルの橋渡しをせねば。

そう考えただけで胃痛がした。

しかし彼は仲違いしかけた、直美さんとの仲を取り持つてくれた恩

人だ。

できるかぎり報いたい。

脳内が思考で満たされ、周囲へ気を向けずにいると

「おい、あれはなんだ？」

「ウイスプ、物理的な攻撃は通用しない魔物です！　そして夜に……」

ヒンメルの指先には妖しげに金色の光を放つ球体が、ふわふわと浮かぶ。

魔物の説明をする英子曰く、夕刻では魔物の生態も異なるのとこのと。

実態をもたない魔物では、対処のしようがない。

「ヒビ、ヒイイイ、化け物よおー！」

怖がりの直美は取り乱し、現実逃避しつつうずくまる。

普段の合理的で組織を率いるリーダーシップのある、彼女の面影はない。

「嬢ちゃんのためにも、すぐに消し炭にしてやるよ。インフェルノ……ど、どうなってやがるんだ!？」

掌に紅の魔法陣が輝き……そして炎を呼び出す前に掻き消されていく。

何度試そうとも結果は変わらず、ハリーは次第に苛立ちを露わにした。

よりによって霊体の魔物と相對した場面で、弱体化の悪影響が発覚するとは。

妖精はここが見せ場だと言わんばかりに

「水の精霊ウンディーネ。私の呼び掛けに応じ、氷矢が敵を貫かん。サギツタ・ステイリアー！」

氷の矢が勢いよく放たれ、霊魂へと突き刺さると、魔物は霧散した。

だがしかし無数の霊魂を倒すには威力が足りておらず、再度彼女は魔法を唱えようと掌を突き出し

「……う、うああっ」

「ウイツカ！　馬鹿だな、無理すんな！」

詠唱の直後に小人は広げた掌で、ひらひらと舞い落ちる彼女を優し

く受け止めた。

……無理をしてほしくはないが。

「英子ちゃん、アシエルくん。魔法を使えるか？」

「ごめんなさい、私は回復の魔法しか……」

「すまねえ、無理だ」

物理的な方法で排除できないなら、太刀打ちする手段は限られる。手をこまねいていれば、被害を被る。

冷静でない彼女に代わり

「このまま戦っても勝算はない、退却しよう！」

命令すると、彼らも分が悪いと判断したのだろう。

後退りしつつ、魔物と距離を取った。

ただ一人イザベラを除いて。

「イザベラさん、逃げましょう！」

立ち止まるイザベラに、声を張り上げた。

だが彼女は退くどころか、前進していく。

「貴方たちは私に救いを求め、やってきたのですか？」

「……」

ウイスプはうんうんと頷くように、上下左右に動く。

どうやら人語を解する知性があるのかと。

「ならば私が救済いたしましょう——老いと死の咎を背負う魂。メ

タモルフオシスの慈悲によりて、新たな生命へと導かれよ」

イザベラが首から下げたペンダントを握り締め、手向けの言葉を

ウイスプは消滅し——辺り一面は緑の光に照らされた。

一行は絶えず明滅する蛍の求愛の如き光に見惚れ、呼吸もせずに神秘的な光景を瞳に焼きつけた。

魔物に遭遇し、倒すか逃げるかしか、頭になかった。

だが彼女は意図を読み取り、魂へ救いの手を差し伸べた。

「ハア、慣れませんか？」

緊迫した場面から解放され、イザベラは汗を拭う。

荒い息遣いを整えるように彼女は口をすぼめ、ゆつくりと吸っては吐き、平然を装った。

表情の読みにくい細目だが、見るからに疲労しているのが見て取れる。

「根を詰めすぎたかもしれません。そろそろ休憩にしましょうか」  
「他の冒険者と合流しましょう。君たちもそれでいいかな？」

賛同の意思を確認し、瓶につめた羽根を一枚手に取ると、僕は管理区域へと向かうのだった。

王国の管理区域にて

羽根を使うと急ブレーキを踏んだバスで立っている時のように足元がふらつき——次の瞬間には煉瓦の壁が視界に映った。

一瞬の出来事で困惑したまま振り返ると、背後に姿見が置かれていた。

後ろ脚だけで垂直に立ち上がり、敵を投げ飛ばす、躍動感溢れたカブトムシ。

六角形の巣に鎮座するスズメバチ。

鎌を広げ、威嚇するカマキリ。

獲物を捕らえたトンボ。

数々の昆虫の装飾がなされた至高の逸品に、青年は目を奪われた。

「Thank you for your efforts (お努めごころうさまであります)」

駐在兵が一行に敬礼し、出迎える。

兵に頭を下げて外に繰り出すと焚き火を囲う冒険者たちが胡座をかき、現地で仕入れた肉を焼く。

フライパンの上から漂う芳ばしい匂いに、青年が鼻をひくひくと動かすと

「Don't eat my meat. (俺の肉を喰うなよ)」  
「First come, first served! (早い者勝ちだっつうのー!)」

微笑ましいやりとりが、彼の前に飛び込んだ。

団欒する彼らからは、血生臭い戦闘を生業とする冒険者とは思えない

い。

張り詰めた糸は簡単に切れる。

冒険者として長く活躍できるのは、彼らのようなON、OFFの切り替えの上手い人間なのだろう。

呆けた顔で食事を眺めると、腹の虫が鳴いた。

「……僕たちも食事にしようか」

「賛成だ、腹減って力なんかでねエよ」

枝を拾い火をつけると、野菜のクズを刻んだスープに乾パンを浸し、胃の中に放り込む。

濃い味つけに慣れた現代人には薄味だが、腹の足しにはなった。

ただ必要な栄養を供給するための退屈な食事を済ませ

「これからは自由時間にしよう」

「おい、待てエ。火の始末はどうすんだ。放置はできねエよな」

各自に自由時間を設けることに。

だが悪魔の発言は最もだ。

簡単に勝負をつける方法として、ジャンケンを教えてみると

「クク、お前らまとめて蹂躪してやる。覚悟しろ、雑魚共オ！」

と自信ありげに雄叫びを上げ、そして即座に敗北する。

「ハリー。君、弱すぎだろ」

「普通はあいこが続くものだけれど」

「火の当番、ありがとうございますの〜」

「普段チビガキと、俺を馬鹿にしやがるバチが当たったんだ」

「グヌヌ、ビギナーズラックは存在しねエのか？ お前ら、もっかいやるぞー」

歯噛みする悪魔は再戦を要求するも一行は無視し、思い思いに過ぎし始めた。

どこで暇を潰そうかと青年が首を左右に回すと、こちらに向かってくる影に、彼はふと立ち止まる。

待つと薄暗い闇でぼやけた輪郭がハッキリしてくる——ソフィだ。

一つ結いのお下げにした小麦色の髪が揺らす姿は、馬が尾を振るよ

うであつた。

「ソフィさん、無事だったんですか。お二人でいかれたので気掛かりで」

「あまり見くびらないでほしいな。私も占札勇士と呼ばれる程度には実力もあるんだよ?」

そういう彼女が悪戯っぽく微笑むと、青年はよくよく観察した。だが傷どころか息の乱れもなく、彼女の発言は真実なのだと悟る。

「でもイーサンは私の遙か先をいくけれどね」

「何か御用でしょうか? 直美さんも呼びましようか?」

「いや、用があるのは君にだけだ」

言い切ると、ソフィは間断なく続けた。

「怒つてはいないかい、昼間の無礼を」

「事情があるというのは察しがつくので」

「……君になら話をしてもいいかもしれない。あの日の真実を」

眉尻を下げた憂いを帯びた顔は、彼女のこれからの発言が明るい話題ではないのを物語る。

「あの日?」

「イーサンが英雄の名を欲しいままにした『魔毒竜殲滅戦』。酷い殺戮と略奪、人が人でなくなった場所で私たちは生き残ってしまった……」

彼女の語りかけは終始物静かで、すっとんと腹に落ちた。

王国を窮地に追い込んだ魔毒竜の厄災。

だが彼らは魔物ではなく、人の業に苦しんだのだという。

「私たちエルフと違い、間違い迷うには人の生は短すぎる。だからこそイーサンのように、人は痛みを誤魔化するのだろうね」

双眸に雫を溜め、ソフィは口元を震わせた。

きつと今まで誰にも話さず胸に抱え、生きてきたのだ。

その仕草一つで彼女の絶望が伝わり、青年は口を閉ざす。

「……冒険者が続けるといろいろあるんだ。勿論イーサンにも。君に理解してほしいとは言わないけれど。あれは私とイーサンが乗り越えるべき試練だからね」

「ソフィ、来てくれ」

「あ、呼ばれたから戻るよ。また時間に余裕がある時にでも話をしよう」

「……ええ。僕でよければ、いつでも」

ソフィに別れを告げ、青年は就寝までの話し相手を探し出す。

だが英語は聞き取れず、必然的に相手も限られ退屈だ。

テントに戻るとイザベラは火に頭を垂れ、独り言を抑揚をつけず延々と唱え

「よく飽きもせず、神に祈りやがるな」

ぼやくハリーなど気にも留めず続ける。

三神の信徒である彼女を見守りながら

「イザベラさんは信心深い方ですね」

ふと心の声が漏れると、彼女は青年の方に向き直り、朗らかに微笑む。

「あら、話しかけてくださればよかったですの〜」

「邪魔したら悪いかなど」

「いいんですの〜。ヴォートウミラ三神の教えに、汝が隣人を大切にせよとの文言が書かれておりますもの」

「気になったのですが、モルマスのステンドグラスには、どのような意味が？」

宗教に明るい彼女ならば知っているだろうと訊ねると

「ステンドグラスに描かれたテントウムシをご覧に？ あれは幼虫がメタモルフオシス神による変化を、蛹は幼虫と成虫の間であるシグニフィカ神を、成虫が絶対の不変と安定のイミタ神を、それぞれ表現しておりますの」

「ええ。途中で怪物が襲いかかって、ゆっくり見学できませんでしたが、やっと理解が深まりました」

「信徒の聖地を守っていたら、ありがとうございます〜」

と、お辞儀を繰り返した。

僕だけでなく、あの場にいた冒険者全てへ向けるべき言葉だが、悪い気はしない。

表情を綻ばせた青年の表情は褒めちぎられている内に、自らの善行を照れ臭く、苦笑いへと変わる。

「いや、僕だけにしかできない善ではないですよ」

「混沌にして善良なる貴方には、必ずやご加護がありますわ。万物に進化、即ち変化をもたらす、混沌に属する者たちの守護者メタモルフオシス神の恩恵が」

「も、もういいですから。三神についてご教示願えますか?」

やや強引に話を終わらせ、彼女は青年に三神について語り出す。

「もちろん。万物は秩序、概念、変化を永劫に繰り返し、無限に終わりになき輪廻を形成する。それが三神が人々に科した祝福であり、咎です。元々三神は一柱の神が分かれた姿なのですわ」

別々の三神が元は一柱の神だという考えは、ヒンドゥー教の三神一体を彷彿とさせた。

ヒンドゥー教ではブラフマー、ヴィシヌ、シヴァの3柱は、それぞれ宇宙の創造、維持、破壊という3つの役割を担う。

だがこれらの力は、1柱の神によりもたらされたというのが、トリムールティ説だ。

神の存在を信じるといえば嘘になるが——だが、心のどこかで神に縋ろうとしていた。

だからこそ現代で、僕は宗教の本を読み耽ったのだろう。

心の孤独感を、寄る辺なさを、何かで埋めようとして。

よく物語の主人公は、運命を切り拓くと啖呵を切るものだ。

しかし不幸が立て続けに起こり、前向きになれるほど人は強くない。

「昆虫に関する三神の格言はありますか? 僕の以前住んでいた土地に昆虫の神はいなかったもので」

「ええ、もちろん」

昆虫の宗教とは珍しいと興味本位で質問し、イザベラは一冊の分厚い書を取り出す。

使い古した本は黄ばみ薄汚れていたが、真摯に信仰に生きて彼女の歴史そのもの。



何度か発声し、咳払いをしてから、低いトーンで読み上げていく。「見よ、季節を超え変化を遂げる蟲を。生まれ、老い、逝くものたちを。メタモルフオシス神が変化と死を万物に与えたのだ」

「見よ、完全なる存在に至るまで動かぬ蛹を。まるで真理を追求する哲学の徒のようではないか。無為だと思われる生にも、シグニフィカ神が意味を見出すだろう」

「見よ、枝や枯れ葉になりきる小さなものを。自然と同化し身を守る術を。人々に模倣の叡智を授けたのは、イミタ神の思し召しに他ならぬ」

言い終えたイザベラは満足気に、相好を緩ませる。

昆虫にまつわる神々というと、エジプト神話のケプリが真つ先に浮かぶ。

顔がスカラベの神で地下から糞球を運ぶタマオシコガネの姿が、古代人に太陽の運行を連想させたのだろう。

それからも教義などを聴き入る中で、次第に青年は個人的な問題を相談していた。

「どうしたらいいでしょうか。ウィツカちゃん、戦闘で役に立てないのを気にしているみたいで」

「ええと安易なアドバイスは逆効果でしょうし、難しいですわね」

「アシエルくんにも気持ちよく旅をしてほしいので」

明言を避けつつ、彼女は傾聴に徹した。

誠意に甘え、勢いのまま悩みを打ち明けてみる。

「万物はメタモルフオシス神が定めた生に従い、いいようにも悪いようにも変化する。人間には宿命を制御などできませんわ」

「……」

諦めろと促されているのか。

眉間の皺を刻む青年にも、イザベラは柔らかな態度を崩さない。

「ですが、せめて変わるのなら互いに因縁を残さぬよう行動を起こす。人の不断の努力で、別れもきつとよき思い出になりますの」

「……すいません、アシエルくんの所へいつてきます」

人は生まれた場所も生き方も選べない。

だがどうしたいか、どう在りたいかは選べるはずだ。彼女に進言され、アシエルの元に向かう。

テントの小人はナイフに油を塗り、次なる戦闘に備えており、気がつく

「どうした、寝るのか？ 終わるまでは照明は消せないぞ」と、努めて明るく語りかける。

困ったような愛想笑いに、無理をしているように感じ

「ウィツカちゃんのこと、イザベラさんに相談してたんだ」

「……昼間は悪かったな。ウィヴィのこと、気遣ってくれてありがとうよ。あいつも救われたと思うよ」

己に従って正直に吐露すると作業に取り掛かりつつも、彼はしつかりと青年と視線を絡めた。

「いつもなんだ。俺がいくら頑張っても、俺は認められても、あいつは厄介者扱いされちまう。その度にあいつは……だから、あいつの居場所を俺が探してやりたいんだよ。あいつが笑って過ごせる、心休まる居場所をな」

俯きがちに呟くと、小人はナイフをベルトに収める。

薄い笑みには陰りが見え隠れし、青年は唇を噛み締め

「あの妖精の為に怒れるほど、君には大事な存在なんだね。大事な人が馬鹿にされたら、誰だっていい気はしないよ。僕らとの冒険が嫌なら別れよう」

大きく深呼吸し、別れを切り出す。

ウィツカを傷つける場所ならば、固執しなくてもいい。

最終的な結論を出すのは彼ら自身。

だが肝心の小人は、神妙な面持ちの彼とは対照的にこやかだ。

「薄情だな、俺はもう少し頑張ってみるって決めたんだ。ユウがあいつの味方してくれるしな」

「僕もなるべくウィツカちゃんの良い所を見てもらえるよう、働きかけてみるよ」

アシエルが抜けるのは組織には好ましくない。

仲間たちに妖精が受け入れられるまでは大変だが、これにて一件落

着。

「ちよつとイザベラさんに御礼をしにいくよ」

「俺もついていく」

胸を撫で下ろした青年はアシエルと共に外に出るが、彼女はおらず、火の番をした悪魔に訊ねた。

「ハリー、イザベラさんは？」

「あアん？ 小便しにいくんだとよ」

「……そうか」

ただでさえ女性の一人行動は危険だというのに、夜間に単独行動とは。

男には頼めなくとも同性の直美、英子には同行してもらおうべきなのに。

「探しにいこう、アシエルくん……」

「きやあああー！」

甲高い叫声に仲間のみならず、周囲の冒険者もどよめく。

……彼女にもしものことがあれば。

俊敏に駆ける小人の背中を追い、青年はイザベラの無事を願うのだった。

### 第30話 阿鼻叫喚の夜

悲鳴が鼓膜に響き、青年は驚きのあまり背筋を伸ばす。

他の冒険者も何事かと、近くの仲間と顔を見合わせ、周囲の様子を伺う。

「イザベラさんが心配だ!」

「恩人相手に何かあったら問題だよな」

「困った人には手を差し伸べないとね」

カンテラ片手の大小の青年と、掌に収まるサイズの妖精が、無我夢中で駆ける。

声の方角へ向かうと、闇の中からぬうつと黒づくめの影が現れた。

「あらあらあら、皆さん。ご心配どうも」

「ご無事でしたか。遅いから心配しましたよ。何をしていたんですか?」

「すみません、いろいろありまして」

口元を隠し恥じらう彼女を見て、我ながら失礼だと、僕はそれ以上の追求はしなかった。

ともかくイザベラの無事が確認でき、何よりだ。

良かったと安堵し、胸を撫で下ろすと、青年は口許を固く締めた。

悪魔がいるのだから、迂闊な行動は厳禁。

「女性なんですから、単独行動は危険です。僕では嫌でしょうから、女性の仲間に行きしてもらってください」

「はい、申し訳ありません」

2度としないよう注意するも、おっとりした口調を耳にすると緊張が抜ける。

それと同時に、ほっと溜め息をついた。

彼女にもしものことがあったら……僕は気が気でなかっただろう。

「一緒に帰りましょう」

「……ええ」

こうして安否を確認し、夜は何事もなく更けていく。

就寝には若干早いが、疲れを残しては翌日に堪える。

悪魔の襲撃に備えつつ、その日は早めに床につくのだった。

夜中にて

「……グガアア……」

テントに男四人が川の字で並びつつ寢床に入るも、突如として、青年は意識を覚醒させた。

耳障りないびきに顔を顰め、上体を起こすと、彼は熟睡した悪魔を睨み据える。

寝起きの脳味噌に開いた大口から、スピーカーのような爆音が撒き散らされ、額に手を当てた。

「うるさいな、眠れないじゃないか……しようがないか」

王国には悪魔が蔓延るといふ噂が、嘘のように辺りは静寂に包まれている。

悪魔の寝息で眼が覚めてしまった、夜風にでも当たろう。

刻が過ぎれば、自然に眠れるようになるはずだ。

青年がテントの外に出た刹那

「ギョあああー!」

悲鳴が周囲に響き、完全に睡魔は何処かへと消え去ってしまった。ランタンを手に取り脱兎の如く駆け出すと、声がした方角では、今まさに冒険者たちと悪魔が相対する最中であった。

冒険者は刃を向け、悪魔の方はというと頭を抱え、混乱した様子だ。

「ば、化け物!」

「……ナニガ……ドウ……ナ……」

状況が飲み込めず、彼は静観する。

だが様子がおかしい。

彼らに手を伸ばすと、間髪入れずに剣士の凶刃が、悪魔を切り捨てた。

切り口からは鮮血が流れ——血溜まりには人間がうつ伏せに倒れこむ。

悪魔が人に……否、人が悪魔へ変身させられたとでもいうのか。

「ヒッ！」

振り返った冒険者と視線が合い、青年は無我夢中で逃げ出す。

眼の前の光景ではなく、無抵抗の生物を躊躇せず殺害した、冒険者が恐ろしかったのだ。

その場を走り去ると、そこには冒険者らが微動だにせず、立ち尽くしていた。

いったい何が起きている?!

鼓動が高まり、恐れが心を満たそうとも、青年の瞳は冒険者を捉えて離さない。

「……う、ああ……」

「う、ぐぐう……」

獣の唸りを彷彿とさせる声に、青年は息を殺す。

瞳は虚ろで、心ここにあらずといった様子で——手にした剣で互いを突き刺す。

常軌を逸した行動に、青年は恐怖より先に、頭に疑問符を浮かべた。  
(何がどうなってる。いったい何が……)

人間も動物も殺し合うなら、感情を露にするのが普通の反応だろう。

にも関わらず、何の情動すら沸かずに、互いを殺し合う——まるで操られたように。

意味がわからず逃げ出すと、暗闇の中で何かがもごもごと蠢き、声にならない雄叫びを上げていた。

脚が竦み、恐る恐る擦るよう脚を動かすと

「……help (……助けて)」

テントから這い出て横たわる冒険者を発見し、青年は一目散に駆け寄る。

次から次へと不可解なことが起き、混乱する青年の腕を掴み、男は縫るように身を寄せた。

腕から首元にかけて、淡い炭を思わせる濃淡の黒に覆われている。

昼間の冒険者に、壊疽していた者はいなかった。

そもそもここまで負傷していれば、冒険どころではないだろう。

「……壊疽？ それに悪魔化、操られたような同士討ち。ま、まさか」  
「……Hey, fix me（な、治してくれ）」

「治療できる人を連れて、必ず帰ってきますから」

青年はテントへ戻り、確信した。

間違いない——これらは悪魔の仕業だ。

それも一体どころではなく、複数体。

昼間に悪魔が手出ししなかったのは、冒険者に臆したのではなく——

——疲れ果て寝静まった瞬間を一気に喰らうためだったのだ。

悪魔が人を喰らう理由を突き詰めれば、辻褄が合う。

「起きてくれ、みんな。王国で噂になっていいる悪魔が現れた」

「ああ、わかった。すぐナオミたちにも知らせしてくるよ」

「この程度の危機、帝国軍に祖国を襲われた時に比べれば屁でもないよな。ミツシャー！」

「あ、ああ、そうだね。助かるよ」

そういうと仲間たちは手早く着替え、そそくさと現地へと向かう。

不測の事態にも慣れており、冒険者としての経験が自分とは雲泥の差だと思い知らされる。

もつと経験さえあれば、この状況を上手く乗り切れたろうに。

だが最善でなくとも、不慣れでも、人命がかかればやらざるを得まない。

「手段は何でもいい。とにかく彼らを起こして、この状況を周知させてくれ！」

異常事態になりふり構っていられない。

夜の静寂を破るように声を張り上げた。

必死に呼びかけていると管理区域の中央で、四人の人物が一塊になっっており、危ないと何度も告げた。

だが彼らはまるで意に介さず、嘲笑うばかり。

その意味する解は——たったひとつしかない。

「人間共も一皮剥けば、狂気の塊だな……だからこそ俺らが餌に困らねえんだがよ。ククク、ヒヤヒヤ！」

「人の子如きには理解の及ばぬ、我々の叡智。火占術が今日という絶

好の塵殺日和を選んでくれた」

「アハハハ、愉快愉快ツ！ 星の導きによる、人同士の殺戮ショー！」  
「闘争こそが人を人たらしめる証！ 殺し合え、奪い合え、憎しみ合え！」

人間の姿をした何かは、口を大きく開き、混沌を愉しむ。

血走った視線は青年らへと向けられ、青年の頬を冷や汗が伝った。

——関われば生命がない。

「何がおかしくて笑ってやがる！ もし敵だつてんなら、この場でぶっ潰す！」

狂気じみた笑いにも臆さず、アシエルは啖呵を切る。

すると灯火の薄明かりが映し出す人型の影は、ぐにやぐにやと揺れ動いた。

夜の闇より濃い黒には人ならざる者の悪意が滲み出し、邪悪なる魔の手を際限なく広げようとしている。

「何故だと？」

「そんなものは決まっておろう」

「人の子の愚かさがな……」

「あまりに滑稽で、笑いが止まらないのだよお！」

負の感情を剥き出しにした悪魔に、何も言い返せなかった。

カンテラの薄明りは蛇が如き影を映し出す。

悪魔の象徴にして、悪魔そのもののシンボリズム。

「我らの首元へ刃を突き刺したいのならば、追ってくるがいい！」

「How dare you allow my people t

o…… (よくも俺の仲間を……許さない)」

冒険者が恨み言を吐き、これから激闘が始まる……かと思いきや悪魔たちは、それぞれ闇に紛れた。

拍子抜けしたが、悪魔の目論見は怒りで我を忘れた冒険者を……！

一心不乱に悪魔の背を追う冒険者らへ

「待ってください、悪魔を追うのは愚策だ！ 狙いは僕らの分断！

まずは悪魔を追いかけ、散り散りになった人々と合流を図り、それから悪魔を探しましょう！」



確証はないが僕は仲間や周囲を指揮すべく、声を張り上げた。僕の判断が正しいかはわからない。

だがしかし間違っているとしても、誰かがこの混乱を鎮めなければならぬ。

でなければ、もつと被害がでてしまう。

平静を欠いたら悪魔の思う壺。

青年の呼び止めに、冒険者たちは一人また一人と足を止める。

アシエルに翻訳を頼み、僕は冒険者に言葉を尽くした。

「We, re not cool now. You tell us what to do, we do what we do! (今の俺たちは冷静になれない。アンタが指示してくれ、俺たちは何をすればいい!)」

「まずは負傷した方々の治療を最優先に。もしくは王国へ搬送できますか? 悪魔から逃げられても、森の魔物に襲われる。ここには危険です」

元はといえば、僕が嘘が原因。

この危機を乗り切るのが贖罪の代わりになるのなら、いくらでも手を貸す所存だ。

「It can be transported to the Kingdom via the mirror, but … (鏡を経由して王国に運べるが……)」

「なら至急、運んでくれますか。駐在兵には悪魔に襲撃された旨を伝え、できれば援軍の要請を」

「OK! (わかった!)」

手短かに用件を伝え、自分なりの最善が尽くせたと胸を撫で下ろす。

パニツクになっても明確な目的さえあれば、どれほど絶望が眼の前を覆つても迷いはしないだろう。

「あらく、ご立派ですね。危機的状況でも、皆さんの模範となろうとするなんて」

指示をしていると背後からイザベラが近づき、青年は相好を緩める。

修道女でもある彼女がいれば、悪魔退治は百人力だ。

「イザベラさん、冒険者たちが悪魔に襲われて……戦闘の準備をして  
おいてください」

「あらあら、そうです……かッ！」

細目とにこやかな表情を崩さぬまま、イザベラは鉄球を青年目掛けて振り回す。

危ない——思わず瞳を閉じる。

だが直撃はせず、重い一撃を、月明かりを反射する刀が受け止めていた。

「私の仲間に出すなんて、あなた——イザベラさんではないでしょう」

いきなり直美は何を言っているのだろうか？

ただイザベラが急に襲いかかってきた説明はつかない。

青年からの指示を終わらせ、彼の元に帰ってきた仲間たちは、直美に続けて言い募る。

「プンプン臭いやがるな、俺らと同類の死臭が……」

「……ヒヒ、ヒヤハハハッ！ イザベラ？ それがこの小娘の名だったのか。人にしてはなかなかの使い手だったが、油断した1人の状態なら、殺すのは造作もなかったぞ？」

隠しても仕方がないというように悪魔は正体を露わにし、上半身が半裸の男に、下半身が鹿の後ろ脚の、半人半獣の怪物へ姿を変える。巻き髪に隠れた耳の上からは、湾曲した山羊の角が生え、その姿は半人半獣の神パンを想起させた。

それを見て、やっと彼はイザベラが悪魔の手に落ちたのを悟り

「まさか悲鳴が聞こえた時、入れ替わったのか！ お前、イザベラさんをどこにやった！」

心のままに、感情をぶちまけた。

「ご明察。今頃はあの世にでも逝ったんじゃないか？」

淡々とペンダントを放り捨てられ、金属に黒みがかかった紅が滴り垂れたのを、青年は見逃さない。

死後、時間が経過した血だろう。

何故悪魔は無感情に、あるいは嘲笑いながら、人を殺せるのか。歯と歯の隙間から荒々しく息を漏らし、青年は怒りをこらえ、悪魔を睨む。

「レラジエ、オセ、オリアス、フルカス。ざまあねえな、格下の俺に狩り場の餌を食い尽くされるとは。おい、人間共。光栄に思えよ。このオールド・スクラッチ様の糧になれるんだからよ！」

「おう、ユウ、嬢ちゃん。この悪魔、どうする？」

「……まずはイザベラさんの居場所を吐かせる。処遇を考えるのはそれからだ」

残りの仲間も駆けつけ状況を察すると、オールド・スクラッチへの敵意を抱き、武器を構えた。

人々が悶え苦しむ阿鼻叫喚の夜の中、悪魔だけが人間とは対照的に笑みを湛えていた。

### 第31話 悪魔と王笏

「悪魔を追跡した冒険者が迷っていたら、格好の餌食だ。『アレ』の準備を」

「ようやく出番か、任せときなア」

ハリーを一瞥し指示すると、それを眺めていたスクラッチは口の端をいびつに歪めた。

首を傾げ、人間の機微を理解できないといった様子で。

「今際の際で他人の心配とは、ずいぶん余裕だな。悪魔の指揮官とは、頭のネジの外れた大馬鹿が選ばれるのか？」

「お喋りしているのは、お前も同じだろうが！ もう戦いは始まっているんだぜ！」

小人は叫ぶと猫が爪を立てるが如く、指の間に複数のナイフが挟まれていた。

腕を振りかぶると刃物は消え、次の瞬間には弾丸のように宙を舞う。

「ハッ、その程度じゃ俺様を捉えることは不可能だあ！」

「畜生、ちよこまかしやがって！」

本性を露わにしたオールド・スクラッチは、割れた蹄で地面を蹴り上げ、闇を駆けていく。

アシエルの投げたナイフは悪魔の足跡を縫うように、地面に突き刺さる。

素早い動きと、視界の不明瞭な夜に

「立ち止まってちや俺様に触れることもできないぜ！ ヒヤハハッ」

と、僕たちを嘲る声だけが響き渡った。

人間にとつては著しく不利な状況に、青年は息を細く長く吐き、忙しなく動く鼓動を落ち着かせる。

どうすればいい?!

唐突な戦闘に頭が回らず

「どうするんだ！」

「どうするのよ！」

作戦を急かす叫びが、辺りを木霊した。

コンパスで円を描くのにノートに針を突き刺すように、人も行動には明確な軸がなければ迷う。

悪手を避け、ベターな選択肢を……

「まず攻撃と防御の要になる視界の確保。それができたら、すばしっこい奴を止める方法を探そう！」

「了解したわ」

暗闇で好き放題されるのが、最悪だといえる。

どうにかしてこの2点を遂行し、戦闘を成立させねば……そう考えた矢先、背中に鋭い痛みが走り

「ウグツッ！」

前傾した青年は、そのまま倒れ込む。

まずい！

悪魔の狙いはカンテラの火を消し、さらに形勢を優位に立たせることだ。

地面に這いつくばり身悶える青年が、灯火に手を伸ばすと

「テメーらの思い通りになんぞ、させるわきやねえだろうがっ！ ハハハッ！ いいねえ、楽しいぜ。弱いヤツを一方的にぶちのめすのはよお！」

勢いよく踏み潰され、破片が辺りに飛び散った。

希望の光はいとも簡単に潰え、青年は悔しさのあまり、下唇を強く噛む。

それと同時に倒れたハリーがうつ伏せになった姿に、スクラッチは「面白い体になったなあ、ハリー。脆弱な人の子如きと一体化するのは。雑魚のお前にはお似合いだな。ギャハ、ギャハハッ！」

同胞の悪魔を見下ろし、腹を抑えて嗤うのであった。

「……覚悟しておけよ、ゴミカス。倍返し程度じゃ済まさねエからな！」

「威勢はいいが、俺の足元で寝転がるお前に罵られても、何の説得力もないな！ くたばりなあ、ハリー！」

スクラッチは強靱な蹄のキックが、ハリーを襲う。

「させないわ。下衆に仲間を殺させはしない！」

——刹那、背後に回り込んだナオミは悪魔を袈裟斬りにし、血飛沫が辺り一帯に勢いよく飛び散る。

切っ先からは赤々とした液体が流れ、刃が通ったのを、確かにこの両目で目撃する。

だがしかし彼女の反撃にも、スクラッチに動じた様子はない。

むしろ悪魔の歪んだ欲望は、より一層過激で、悪辣なものへと変貌していく。

「いいぞ、いいぞ、小娘よ！ 簡単に余興が終わってはつまらないからな。蔑み、罵り、犯す。悪魔に力でも知恵でも劣る人の子の使い道は、慰み者としての価値しかないのだ。抵抗できぬまで弱らせ、全てを俺様に捧げるまで。まだまだ愉しませてもらおうぞ！ クククツ！」

冷酷な言動を耳にした彼女は、顔を引き攣らせる。

イザベラにも口に出すのもおぞましい、悪行を働いたに違いない。

(この悪魔、生かしてはおけない!!!)

額に浮かぶ青筋には青年の底知れぬ殺意と、闘争心が如実に現れていた。

彼女の仇を討つ為にも、スクラッチを確実に仕留めにかからねば。

「嬢ちゃん、助かったぜ」

「勘違いしないで。貴方が命を落としたら、彼まで道連れになるんだから」

ハリーの感謝を一蹴し、直美は向き直った。

悪魔は口を尖らせ苛立つが、彼女は関心も寄せず、スクラッチに殺意の眼を向ける。

「アイツ、次はどうして来ると思う？」

「あの悪魔はきつと引き続き、カンテラの破壊をして来るだろう。これが僕たちの生命線だ」

小人が訊ね、青年が答えた。

悪魔の目的は単純明快だ。

先ほどと同様、灯りを消すのが目論見。

防戦一方では不利になる。

しかし攻勢に出るにしても、まずは灯を死守しなければならぬ。「誰か奴を足止めできる能力はあるかい？」

「氷の魔法なら容易いわ。けれど無暗に魔法を唱えれば、みんなも巻き込みかねない」

制御しなければ可能だというが、それでは本末転倒。

だが引きつける策はある——誰かにランタンを持たせ、囿にすればいいのだ。

危険が伴う作戦を、仲間には押しつけられない。

かといって思考を休めず、悪魔の動向にまで注意するのは、かなり骨が折れる。

少なくとも、今の僕には実行不可能な作戦だ。

となれば頼めるのは……

「ハリー、これは君にしか頼めない。やってくれるか？」

「お前の作戦で、気にいらねエアイツの鼻っ柱を折ってやれるのか！」

「ああ、ムカつくあの悪魔に目にも物を見せてやろうぜ！」

問いかけに青年は即答すると、ハリーは不敵に微笑む。

「いい返事だ。オレサマの命、お前に預けたぜ！」

イザベラの仇討ちの闘い、負けられない。

失敗すれば、この戦法は2度は通用しない以上、着実に罠に嵌めていく。

まずは悪魔の気を逸らし、ハリーとナオミの手助けをしよう。

仲間を呼び寄せ策を伝え、ナオミから預かったランタンを

「アシエルくん、君ならそいつからも逃げ切れる！」

小人に投げると、フェンス際まで飛ぶ打球を追う外野手みたいにキャッチし、悪魔に中指を立てた。

今までの会話から察するに、スクラッチは衝動的で、それほど計画性はない。

単純だが煽れば、すぐ乗ってくるだろう。

「身の程も知らず、挑発とは。この餓鬼、よほど殺されたいらしいな」

「へへ、捕まえられるもんならやってみな！」

釣られた獲物も餌を食い尽くせば、針から逃げていく。

ここからが本当の勝負だ。

アシエルと悪魔の後を青年が追うと、軽く動いただけだというのに、息が切れた。

昼間に魔物を倒し、ほぼ休みなしに夜に悪魔との連戦。

疲れが抜けていないようだ。

口には出さずとも、仲間の皆も同じだろう。

(王国で多くの人間を殺した悪魔だっているんだ。こいつだけに手間取っている暇はない。刻が経てば遺体の腐敗が進み、イザベラさんや冒険者の亡骸は……)

ナオミの魔法の時間稼ぎをしつつ、青年の脳裏に様々なことが想起された。

それは相対した悪魔への集中を削ぐには、充分だった。

「ユウ、受け取れ！」

小人の声にハツとして、此方に向かって放たれた物体を見遣る。

だが人間の体というのは、とっさには反応できないらしい。

掌が届かないならば……

(体で止め、悪魔に拾われる前に取るしかない！)

青年の腰を落とし両腕を大きく広げる様は、まるでバスケットのデイフェンスのようだ。

右腕に当たるとランタンは、飛んできた方向へと勢いよく跳ね返り、彼は這うかの如く駆けた。

盗られるわけにはいかない！

やっとの思いで光を手になると、何者かの視線を感じ、ふと顔を上げる。

闇の中で薄明かりがぼんやりと映し出す、頭の横から生えた角の影。

それが悪魔の影だというのに、青年は幾分か時間を要した。

「去ね、悪魔の指揮官」

冷酷な言葉と共に空を切る蹴りが、直撃すれば致命傷は免れない頭へと放たれる。

(まずい、やられる！)



首がへし折られる最悪の結末を思い浮かべ、額には汗が滲む。だが横目で追う一撃は、やけにゆっくりに見えた。

道具を取り出そうにも、防具で身を守ろうにも、対処は間に合わない。

——否、僕には唯一無二の防御手段があるだろう！

状況を打開しようと、思考が走馬灯の過去の如く頭を巡り

「インセクトウミレス！」

「グッ……まるで手応えが……逃げ惑い、己の身を守ることしか考えぬとは。弱者とは惨めなものだ」

唱えた瞬間、青年の体を赤錆色の鎧が覆った。

衝撃は兜越しにも伝わり当たった瞬間、脳が揺さぶられ、視界がぐにやりとぼやけた。

しかしスクラッチの細脚は生まれたての子鹿のように震え、逆に攻撃をしてきた悪魔側にも、ダメージは入ったようだ。

「……ふう、どうした？ 頭のネジが外れた大馬鹿に、いいようにやられてるじゃないか。お前も底が知れる」

息を絶え絶えに漏らしつつ嘲笑い、青年は双眸を輝かせた。

好き放題言わせておけばいい。

この時間稼ぎは、いわば勝利への布石。

「小賢しい……下等生物らしく、早々に餌となればいいものを。貴様らのお遊びにいつまでも付き合う気はない」

「だったらどうする？」

「いいだろう。望み通り貴様らをまとめて始末し、奪い取ってやる。そちらの方が俺様の性にあうのでな」

青筋を浮かべた悪魔が宣言し、呪文を詠唱しだす。

青年はどうすべきか悩むも、すぐさま距離を取った。

「無駄だ。大地の精霊ノーム。壁を覆うが如く、我が敵に巻きつき、捕らえ給え。ウヴァス」

唱え終えるが警戒していた、巨大な火球が出現するような、周囲の敵の一掃目的の魔法ではないようだ。

(何の魔術かは知らないが、不発したのか?)

緊張を解いた青年が攻勢に転じようとする、脚がまるで動かないではないか。

疑問符が頭を埋め尽くし、下半身を見遣ると、地面から生えた蔦が絡みついていていた。

これは?!

「面食らった顔、さては失敗だと侮ったな。下等生物に、魔法1つまともに使えないと思われるとは。まあ、よい。次こそは確実に貴様を殺す」

「クツ……」

逃げようにも逃げられない。

万事休すか……眼を瞑り、青年は最後を受け入れた。

「ハツハツハ、無様だな。抵抗すらせぬとは!」

「オイ、余所見すんなよ。馬鹿悪魔!」

小人が咆哮し、スクラッチが振り返ると、何本かのナイフは弧を描くように飛ぶ。

それを見た悪魔は顎が外れた猫を彷彿とさせる大口を開き、冷笑の轟音を轟かせた。

「眼が悪いのか? その軌道では俺様に命中しないぞ! これから仲間が惨殺されるのを、大人しく眺めるがいい」

「安心しな、最初から狙いはお前じゃねえんだ」

「フン、強がり……」

アシエルが言い切ると同時に、膝上まで巻きついた蔦は足の形を浴うナイフにより、たちまちに切り裂かれる。

前を向き直った悪魔は奥歯を噛み、憎々しげに2人を交互に睨むと、苛立ちを露わにした。

「ありがとう、アシエルくん」

「礼はいいよ、早くランタンをこつちに!」

「よくも俺様をコケにしてくれたなあ! 容赦せんで、更に強力な魔術で……」

スクラッチが敵意を剥き出しにしたのと時を同じくして、火焰の華が管理区域に咲く。

一瞬にして散る様は、花火を思わせた。

事前に打ち合わせたハリリーの準備完了の合図だ。

後はあちらへ誘導すれば、計画は完遂する。

ハリリーへと光を繋ぎ

「これでお前を倒す準備は整った、もう勝機はないぞ」

スクラッチを一瞥すると

「今から貴様らの、仮初の希望を打ち砕いてみせよう」

悪魔は一目散にハリリーの元へと向かった。

後は成功を祈るばかりだ。

健脚で大地を踏み締め、迫るスクラッチは

「落ちこぼれの貴様では俺様には敵うまい！ 矮小な人間に与（くみ）し群れようが、雑魚は雑魚。逆らうだけ無駄だ！ 貴様もあの娘のようになんて殺してやる！」

自信満々に、罵詈雑言を浴びせかける。

けれども決して怯まず、彼はじつと悪魔を見据えていた。

絶対に眼の前の敵を制するのだという、強烈な意志。

（彼の強さはそこにある！）

「ハッ、試してみなければわかんねエだろう！」

そういうとハリリーは空へと舞い上がり

「嬢ちゃん、今だ！」

と、直美に知らせた。

空を飛ぶハリリーの脚を掴もうとスクラッチは跳ね、開いた掌を思いきり伸ばす。

あと数mで触れてしまいそうになった刹那

「水の精霊ウンディーネ。我が声届いたならば汝、海に揺蕩う氷塊を顕現せん。モナス・グラッチャリス」

詠唱をし、彼女は稲津を土を叩くよう振り下ろす。

すると空気中の水分を凍らせ出来上がった氷は、獣の下半身を瞬く間に凍てつかせ、ついに悪魔を捕らえたのだった。

「クッ、小癩な……下等生物の分際で！ 俺様を殺すなら、末代まで貴様らを呪ってくれようぞ！」

「黙れ、オールド・スクラッチ。素直にお前の犯した罪を告白しろ。さもないと……」

じたばたと暴れる悪魔に、青年は手にした王笏をほんの脅しのつもりで、二又の切っ先を突きつけた。

すると悪魔の悲鳴が突如響き、思わずその場にいた者たちは一様に耳を塞いだ。

「ヒッ、そ、それは！　う、あああつ！　やめろおおー！」  
「な、急にどうした？」

悪魔の悲鳴に困惑し、青年までもが口をぽかんと開けた。  
立ち尽くしていたのは彼だけでなく、仲間たちも同様。

スクラッチが絶えず呟く言葉に耳を傾けると

「……なんなんだよ、その笏は。キモチワルイ、キモチワルイ、キモチワルイ……」

王笏に反応した悪魔はそう繰り返し、頭を抱え込む。

偶然手に入れた武器がまるで意志を持つかの如く、持ち主を選ぶとは考えづらい。

アモンも興味関心を示し、どこで入手したのかと、訊ねてきた。

悪魔にとつて脅威、或いは悪魔が惹かれる力が秘められているとでもいうのか。

「悪魔を産み出したのは、そもそもお前たちの癖に……なのに、なのに、なのに！　俺たちを否定するな!!」

「オールド・スクラッチ。これが何か知っているのか？」

その時ばかりはイザベラや冒険者のことなど、頭から消えていた。  
常々感じていた疑問の答えを求め、訊ねると

「これを知っているのか、だと。ハハッ、こいつはお笑いだ。その王笏がどういふものか、気がついていないようだな。知らず知らず神々と我々の闘争に巻き込まれるとは。もうまともには逝けんなあ、貴様は。ククク！」

「どういう意味だ?！」

「敵である貴様に答えてやる義理はない。死後送られる冥府（ハーデース）で、永劫に神を呪うがいい！　悪魔の指揮官よ！」

啖呵を切り、スクラッチは再び敵対心を露わにした。

小馬鹿にしたような態度からは、発言の真贋を見抜くのは不可能だ。

だが口から出任せで、王笏に関心を寄せる偶然が続くのだろうか。

「狂気の満月はまだまだ血が見たいと、仰っておられるぞ。存分に彼女の願いを叶えてみせよう。アヒヤヒヤヒヤヒヤ!!!」

「気でも触れたのかア、クソ野郎」

月を見上げたスクラッチはハリーの悪態にも反応せず、またもや鳶を呼び出す呪文ウヴァスを唱える。

まだ闘いは終わってはいない——青年が王笏の柄を強く握ると、仲間たちも身構えるのであった。